

コーパスに基づく日本語使役文・他動詞文の実態

コーパスに基づく言語学教育研究資料6

グローバルCOEプログラム「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」
東京外国語大学大学院総合国際学研究院
2012



早津恵美子・高京美（著）

<本報告の位置づけ>

本報告「コーパスに基づく日本語使役文・他動詞文の実態」は、東京外国語大学大学院 グローバル COE プログラム「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」（代表：峰岸真琴）における「コーパス言語学班」の研究成果の一部を、「コーパスに基づく言語学教育研究資料 6」としてまとめたものである。同資料の 5 としてまとめた「コーパスに基づく日本語受動文の実態」と、ヴォイス現象の実態の報告という点でいわば対になるものとして企画された。「ヴォイス voice」という文法カテゴリーは、日本語を含む諸言語の言語事実として広く認められているといえるが、その内実（本質と射程）は必ずしも諸言語において同質のものとはいえないようである。また、日本語については、「ヴォイス」というカテゴリーを認めることへの疑義もある。ただその一方で、日本語において、受身や使役、さらには他動詞・自動詞を、広くヴォイスの現象として捉える立場も少なくない。本報告の著者たちは、ヴォイスの本質と射程について論じる力をもっていないが、受身と使役とが一定の共通点と対立点を持ちつつヴォイスの中核をなし、そして受身と自動詞、使役と他動詞とにそれぞれ連続性や近接性があるという、比較的ひろく認められている立場に近い捉え方をしている。そこで、まずは日本語の受身（文）と使役（文）の使用の実態を明らかにすることで、ヴォイスという文法カテゴリーの理解にいくらかでも近づけるのではないかと考え、日本語の受動文と使役文の実態を、それぞれ調査分析することにした。

本報告「コーパスに基づく日本語使役文・他動詞文の実態」は、使役文のほうの実態を、使役文とのある種の類似性が認められる範囲における他動詞文の実態とともに、調査分析し報告するものである。著者である早津と高は、日本語の使役文について、それぞれの立場から考察を続けてきている。その中で二人が共通して関心を寄せてきたこととして、使役動詞と他動詞との構文的・意味的ふるまいには、従来いわれてきている以上に広い範囲の動詞において類似がみとめられるのではないかということであった。従来、「ゼリーを固まらせる」と「ゼリーを固める」のような物の変化の引き起こしを表わす使役動詞と他動詞、「生徒を家に帰らせる」と「生徒を家に帰す」のような人の動きの引き起こしを表わす使役動詞と他動詞とについて、両者に一定の類似性をみとめたうえで相互の違いがしばしば論じられてきた。これは主として、使役動詞の原動詞（上の例では「固まる」「帰る」）と他動詞（「固める」「帰す」）とに形態的な対応関係が存するものを対象とした論考である。私たちはこれらを含んでさらに広く、たとえば「タオルを湿らせる」と「タオルをぬらす」、「赤ん坊にミルクを飲ませる」と「赤ん坊にミルクを与える」のような、使役動詞と他動詞とに形態的な対応関係のないものにも、構文的・意味的な類似がみとめられるものがあるのではないかと考えた。さらにいえば、使役動詞という、動詞に使役の接辞「-(サ)セル」がついた形式は、もちろん文法的な単位としてふるまうものであるが（「生徒に命じて荷物を運ばせる」）、ある種の使役動詞は、むしろ語彙的な単位としての性格を帯び、他動詞の

なす語彙体系を補うものとして働いているのではないかと考え(「生徒に集合場所を知らせる」「ポケットに ナイフを忍ばせる」)、その可能性をさぐる試みを始めていた。それはまだ緒についたばかりの試みであるが、ヴォイスについての上述のような捉え方のひとつの現れではあり、受動文の報告と対をなすかたちで、現段階の報告をすることとした。

受動文のほうの「コーパスに基づく日本語受動文の実態」(志波彩子著、早津恵美子監修)の「本報告の位置づけ」でも述べたように、志波の著になる受動文についての報告は、受動文の、文としての意味・構造的なタイプをかなりの程度明らかにするものとなっている。それに対して本報告「コーパスに基づく日本語使役文・他動詞文の実態」は、他動詞との関係も視野に入れたこともあり、いわば「連語」のレベル(志波のいう「第一のレベル」)の分析であって、「文」の実態の解明にはまだ至っていない。その点で二つは厳密な意味で対になっているとはいえないのだが、両者には、文・連語の性質は単語の「カテゴリーカルな意味」(語彙的な意味のうち文法的な性質に関わる側面)が土台になってできあがっているという捉え方が大きく共通している。このような二つを、「コーパスに基づく言語学教育研究資料」の「5」と「6」として両者をまとめて報告しておくことは、上に述べたヴォイス研究の観点からも一定の意義のあるものではないかと考える。

2012年3月

早津恵美子

目次

0 はじめに	1
0.1 本報告の目的	1
0.2 立場と方法	1
0.2.1 フ格の名詞と使役動詞・他動詞から成る連語	1
0.2.2 奥田靖雄（1968-72）における連語のタイプ	3
0.2.3 本報告におけるフ格の名詞と使役動詞・他動詞から成る連語のタイプ	5
0.3 対象とするデータ	6
0.4 動詞例などの提示の仕方	8
1 物への働きかけ	10
1.1 《変化》	11
1.1（ア）〈植物の内発的变化の助長〉	17
1.1（イ）〈調理〉	18
1.1（ウ）〈振動の引き起こし〉	19
1.1（エ）〈稼働・停止〉	21
1.1（オ）〈目立たせ〉	22
1.1（カ）〈保存〉	23
1.1（キ）〈相互〉	24
1.2 《付着》	27
1.2（ア）〈設置・収容〉	35
1.2（イ）〈放置〉	37
1.3 《除去》	39
1.4 《移動》	42
1.5 《接触》	45
1.5（ア）〈現象おこしへの働きかけ〉	47
1.5（イ）〈使用〉	49
1.6 《生産》	50
2 人への働きかけ	53
2.1 《生理状態の変化》	55
2.1（ア）〈身体の動きや姿勢の変化〉	58
2.1（イ）〈心理状態の反映としての生理変化〉	60
2.2 《心理状態の変化》	61

2. 3	《社会的状態の変化》	66
2. 3 (ア)	〈社会的立場への登用〉	68
2. 3 (イ)	〈社会的相互〉	69
2. 4	《組織への所属》	71
2. 4 (ア)	〈社会的職務への従事〉	73
2. 4 (イ)	〈社会的状況の体験〉	74
2. 5	《組織からの離脱》	75
2. 6	《社会的境遇とかかわる居住》	76
2. 7	《人の空間移動》	78
2. 8	《よびかけ》	82
2. 9	《社会的立場のうみだし》	83
3.	事への働きかけ	85
3. 1	《変容》	86
3. 1 (ア)	〈増減〉	92
3. 1 (イ)	〈事態の展開〉	94
3. 1 (ウ)	〈顕在化〉	97
3. 1 (エ)	〈保持〉	99
3. 1 (オ)	〈事柄間の相互〉	100
3. 2	《転移》	102
3. 2 (ア)	〈心情の付与〉	103
3. 2 (イ)	〈属性の付与〉	105
3. 3	《排除》	105
3. 4	《移行》	107
3. 5	《現出》	109
3. 5 (ア)	〈現象おこし〉	111
3. 5 (イ)	〈生理現象の現出〉	113
3. 5 (ウ)	〈心理現象の現出〉	115
4	物・事と人への働きかけ	118
4. 1	《授与》	119
4. 2	《取得》	122
4. 3	《抽象物の与え》	124
4. 3 (ア)	〈認識内容の与え〉	124
4. 3 (イ)	〈感情の与え〉	128
4. 3 (ウ)	〈任務の与え〉	129
4. 3 (エ)	〈影響の与え〉	131
4. 4	《情報のひきだし》	132

5 使役動詞連語と他動詞連語との分布.....	134
5. 1 三つの働きかけの相互関係	134
5. 2 使役動詞連語と他動詞連語	137
6 おわりに.....	143
参考文献.....	144

0 はじめに

0. 1 本報告の目的

本報告は、ヲ格の名詞と使役動詞・他動詞から成る連語のうち、物や人や事に何らかの変化を生じさせる働きかけを表わすものおよびそれに準ずるものを、意味的・構文的な性質によっていくつかのグループにわけ、各類の連語の要素となる使役動詞・他動詞の語例をあげ、いくつかの語についてそれが使われている実際の文例を示すものである。ヲ格の名詞と他動詞から成る連語（「浮き輪を沈める」「子供を家に帰す」）とヲ格の名詞と使役動詞から成る連語（「浮き輪を沈ませる」「子供を家に帰す」）とについて、その共通性を求めつつ相違性にも重きをおいて、それらにみられる体系性をみいだすための第一歩となることをめざしている。

0. 2 立場と方法

0. 2. 1 ヲ格の名詞と使役動詞・他動詞から成る連語

ヲ格の名詞と使役動詞・他動詞から成る連語がつくりだすグループとはたとえば次のようなものである。(1)は、ヲ格名詞と使役動詞、ヲ格名詞と他動詞とが組み合わさって、具体物の変化を引き起こすことを表わす連語をなしており、(2)は、同じくいずれもが、人の動作を引き起こす連語をなしている。

- (1) -a ゼリーを固まらせる / ゼリーを固める
- b ボートを沈ませる / ボートを沈める
- (2) -a 子供を風呂にはいらせる / 子供を風呂にいれる
- b 学生たちを校庭に集まらせる / 学生たちを校庭に集める

もちろん、使役動詞による連語と他動詞による連語とが全く同じことを表現しているわけではなく両者には違いがあるので、それを明らかにしようとする研究も多くなされてきた¹（藤井正 1971、中西宇一 1975、井上和子 1976、青木玲子 1977、池上嘉彦 1981、伊東光浩 1985、大鹿薫久 1987、井島正博 1988、楊凱榮 1989、定延利之 1991、浅山佳郎 1996、影山太郎 1996、鷺尾龍一 1997、西村義樹 1998、など）。これらでは、必ずしも「連語」という単位を積極的に認めて論じられているわけではないが、使役動詞による表現と他動詞による表現との一定の類似性を認めたうえで、その異質性が探られているといえる。

これらの論考で論じられてきた具体的な使役動詞と他動詞は、形態的な面で次のような類に分けられる。

- (3) -a 生徒を家に帰らせる／帰す
- b 傷口をふさがらせる／ふさぐ
- (4) -a 飼っていた鶏を死なせる／殺す
- b 子供を使いに行かせる／遣る
- (5) -a 娘に浴衣を着させる／着せる
- b 学生に辞書を見させる／見せる

¹ 両者の違いの解明を主たる目的とした論考もあり、他の問題を述べるなかで副次的に触れられているものもある。後者についてはおそらくここに挙げた以外にも多くあると思われる。

(3) は、形態的な対応関係にある自動詞と他動詞において、自動詞の使役と他動詞との間にみられるものであり、他にも、上の(1)の「(ゼリーを) 固まらせる／固める」「(ボートを) 沈ませる／沈める」、(2)の「(風呂に) はいらせる／いれる」「(人を) 集まらせる／集める」や、「(水を) 流れさせる／流す」「(人を車から) おりさせる／おろす」「(子どもを助手席に) 乗らせる／乗せる」「(娘を8時に) 起きさせる／起こす」など比較的多くの対がある。(4) は、自動詞と他動詞とに形態的な対応はないものの、自動詞使役と他動詞との間には意味的・構文的な類似がみとめられるものであり、他には「(手伝いに) 来させる／よこす」などがあげられてきた。(5) は、形態的な対応関係にある他動詞（いわゆる二項他動詞）と三項他動詞において、二項他動詞の使役と三項他動詞との間にみられるものであり、例は多くなく、他には「(水を) 浴びさせる／浴びせる」「(帽子を) かぶらせる／かぶせる」などがあげられてきた。

このように、従来の研究で使役動詞と他動詞との類似性・異質性が議論されてきているのは、(3)や(5)のように、二つの動詞（自動詞と他動詞、他動詞と三項他動詞）の間に形態的な対応関係があるものが主であり、(3)(4)以外の自動詞使役と他動詞、(5)以外の他動詞使役と他動詞とについては論じられることがほとんどなかった²。勿論このことは、研究対象の厳密性という点から当然のことであり、批判したいと考えているわけではない。しかし一方で、自動詞使役と他動詞、他動詞使役と三項他動詞との間の意味的・構文的な類似性を、より広い範囲でみいだすことも可能なのではないかと考える。たとえば次のような例にも、両者の類似性をみとめることができる。

- (6)-a ポケットに ナイフを 忍ばせる／隠す
- b タオルを 湿らせる／ぬらす
- c 新人を重要な仕事に つかせる／抜擢する
- (7)-a 子供たちに戦争の体験を 聞かせる／話す
- b 赤ん坊にミルクを 飲ませる／与える
- c 娘を旧家に 嫁がせる／縁づける
- d 弟子に技術を 覚えさせる／教えこむ
- e 言葉に威厳を もたせる／込める

つまり、使役動詞と他動詞とには、従来いわれていた以上に、意味的・構文的な観点からの類似性をみいだすことが可能なのではないかという問題提起をしたいと思う。そしてまた、このことは、使役動詞すなわち、動詞に「使役」の意味を表わす接辞「-(せ)ぬ」がついた形式の中には、文法的な意味を表わす単位として機能するものだけではなく、何らかのひとまとまりの語彙的意味を表わす語彙的な単位とみなすことができるものがあるのではないかということを探ってみることでもある。語彙的な単位としての使役動詞は、他動詞では表現できない意味を表わす独自の動詞として機能し、他動詞の体系、ヲ格名詞と他動詞から成る連語の体系を豊かにしているのではないか、ということを考えてみようとするわけである³。

もちろん、使役動詞の表現する事態はかなり幅のあるものであり、すべての使役動詞を語彙的な単位とみなすことはできないのは当然である。たとえば次のような使役文における使

² 中西宇一（1975）では、「語る、捧げる、贈る、乞う、祈る、名づける」や「預ける、頼む、知らず、見せる、負わす」などの他動詞による文と三項他動詞による使役文との異同が論じられている。

³ 早津恵美子（1998b）では「知らせる」と「きかせる」について、早津（2000a）では「もたせる」について、語彙的単位としての性質と文法的単位としての性質について考察した。

役動詞は、やはり文法的な単位であって語彙的な単位とはみなせず、したがって意味的・構文的にそれに類似する他動詞をみいだすことはできない（これについては、5章で改めて述べる）。

- (8) 先輩が後輩に命じて荷物を運ばせる（／数えさせる／片づけさせる）。
- (9) 母親が子供にいつけて、食器を洗わせる（／並べさせる／しまわせる）。
- (10) 先生が生徒たちに作文を書かせる（／読みあげさせる／直させる）。
- (11) 部長が部下に資料を集めさせる（／調べさせる／コピーさせる）。
- (12) 教師が学生に卒論のテーマを決めさせる（／考えさせる／見つけさせる）。

このような、人の他動的な意志動作を引き起こす事態は、いわば使役らしい使役の事態であり、文法的な単位としての使役動詞を述語とする文でしか表現できず、これらに類似する他動詞をみいだすことは難しい。しかしその一方で、物や人や事に何らかの変化を引き起こす事態（主として、物や事の動きや変化あるいは人の無意志的な動きの引き起こし）については、上で述べたように、その表現に際して使役動詞と他動詞とが類似の機能を果たすことができ、そういった使役動詞は語彙的な単位とみなすことが可能ではないかと思われる。

そこで本報告では、物や人や事に何らかの変化（物理的変化・動作の生起・状態の生起、など）を生じさせることを表わす連語およびそれに準じる連語を考察の対象とし、他動詞を要素とする連語のみでなく使役動詞を要素とする連語も積極的にとりあげて、それらの連語を意味的・構文的な性質によっていくつかのグループに分けることにする。このようにすることによって、ヲ格名詞と使役動詞から成る連語が表現しうる連語的意味の範囲と、ヲ格名詞と他動詞から成る連語が表現しうるそれとの、分布や偏りをみいだすことができ、日本語の他動詞体系において、語彙的な単位としての使役動詞がどのような役割を果たしているかも明らかにできるものと思われる。

0. 2. 2 奥田靖雄（1968-72）における連語のタイプ

—ヲ格の名詞と動詞から成る連語—

奥田靖雄（1968-72[1983]）「ヲ格の名詞と動詞とのくみあわせ」では、ヲ格の名詞と動詞から成る多様な連語を、構造的なタイプの特徴にもとづいてグループに分け、それらの類のパラディグマティックな体系性が考察されている。ヲ格の名詞と動詞から成る連語がまず大きく、「対象的なむすびつき」をなすもの（主として他動詞との組み合わせ）と「状況的なむすびつき」をなすもの（主として自動詞との組み合わせ）のふたつのグループに大きく分けられ、前者については、ヲ格の名詞のカテゴリカルな意味（人か物か事か）によってさらに3類に分けられている。それぞれの類の構造的な特徴を説明することはここでは省き、各類の連語の例のみ示しておく。

第一章 対象へのはたらきかけ

第一節 物にたいするはたらきかけ

- (a) もようがえ 「布をはさみで半分に切る」「針金を手でまげる」
- (b) とりつけ 「封筒に切手をはる」「本をカバンにいれる」
- (c) とりはずし 「溶液から不純物をとりのぞく」「竹串から肉団子をはずす」
- (d) うつしかえ 「野菜を店から家まで運ぶ」「パソコンを教室にもってくる」
- (e) ふれあい 「両手でこどもの頭をなでる」「チョークで黒板をたたく」

(f) 結果的 「残り毛糸でセーターを編む」「軽井沢に別荘を建てる」

第二節 人にたいするはたらきかけ

- (a) 生理的な状態変化 「親を疲れさせる」「子供を泣かせる」
- (b) 空間的な位置変化 「女中を家から仲町へ走らせる」「男を家へ帰らせる」
- (c) 心理的な状態変化 「父をおこらせる」「彼女をいらいらさせる」
- (d) 社会的な状態変化 「先生をやめさせる」「長男をむこにもらう」
- (e) よびかけ 「部下をせきたてる」「友だちをそそのかす」

第三節 事にたいするはたらきかけ

- (a) 変化のむすびつき 「ボートの揺れをしずめる」「労働者の生活を安定させる」
- (b) 出現のむすびつき 「家庭をつくる」「生活に変調にきたす」

第二章 所有のむすびつき

- (a) やりもらい 「知人に金をかす」「友達にノートをかりる」
- (b) ものもち 「金をためる」「財布をなくす」

第三章 心理的なかわり

第一節 認識のむすびつき

- (a) 感性的なむすびつき 「天井をみつめる」「子供をにらみつける」「火事をながめる」
「鐘の音を聞く」「においをかぐ」「手紙をよむ」
- (b) 知的なむすびつき 「作業の難しさを考える」「子供の将来を思う」
- (c) 発見のむすびつき 「椅子の下にナイフを発見する」「彼の表情に悲しみをみる」

第二節 通達のむすびつき

「係員に住所を知らせる」「監督から話をきく」

第三節 態度のむすびつき

- (a) 感情的な態度のむすびつき 「人を憎む」「蛇をおそれる」「雷をこわがる」
- (b) 知的な態度のむすびつき 「二人を共犯者とみなす」「雲を煙とまちがえる」
- (c) 表現的な態度のむすびつき 「子供をほめる」「学生の遅刻をしかる」

第四節 モーダルな態度のむすびつき

- (a) 要求的なむすびつき 「会社に賃上げを要求する」「父に許しをこう」
- (b) 意志的なむすびつき 「毒殺をくわだてる」「復讐をたくらむ」「結婚を決意する」

第五節 内容規定的なむすびつき

- (a) 体験の内容規定 「寂しさを感じる」「反感をおぼえる」「生活に不満を感じる」
- (b) 思考の内容規定 「解決策を考える」「方針をきめる」
- (c) 通達の内容規定 「冗談をいう」「日本語を話す」「名前を書く」

第四章 状況的なむすびつき

- (a) 空間的なむすびつき 「坂道を歩く」「トンネルを通る」「岸をはなれる」
- (b) 状況的なむすびつき 「霧の中を急ぐ」「人ごみの中をあるく」
- (c) 時間的なむすびつき 「夏休みを遊びくらす」「震災後を生きる」
- (d) 時間＝量的なむすびつき 「数時間をもがき苦しむ」「二時間をたちつくす」
- (e) 空間＝量的なむすびつき 「わずかな距離を歩く」「一里の道程を行く」

挙例にうかがえるように、この「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」においても、ヲ格の名詞とくみあわさる「動詞」として、「第二節 人にたいするはたらきかけ」では、いわゆる他動詞だけでなく使役動詞（奥田では「自動詞の使役のかたち」（p.45 ほか）とされている）も積極的にあげられている（「疲れさせる、泣かせる」「走らせる、帰らせる」「おこらせる、

いらいらさせる」「やめさせる」)。「人にたいするはたらきかけ」に限って使役動詞があげられていることには重要な意味があるのだが、本報告では先に述べたような立場にたって、他の連語グループについても使役動詞を対象にして考えることにする。

0. 2. 3 本報告におけるヲ格の名詞と使役動詞・他動詞から成る連語のタイプ

本報告は、ヲ格の名詞と使役動詞との組み合わせがそれぞれの語彙の意味を土台としてどのような文法的な意味で結びついて連語をなしているのか、個々の連語の結びつきはどのようなタイプに一般化できるのか、そしてどのような連語のグループをとりだすことができるのかということを明らかにし、ヲ格の名詞と使役動詞から成る連語の類が、ヲ格の名詞と他動詞から成る連語の類と、意味・構文的にどのような張り合い関係をなしているのかについて、使役動詞連語のほうから探っていくのが目的である。したがって、奥田(1968-72[1983])の分析に多くを学んで分析をすすめるものの、奥田(同)でとりだされている連語のグループのすべてをとりあげるというわけではない。

本報告でとりあげる連語タイプの範囲について、自動詞派生の使役動詞と他動詞派生の使役動詞にわけて述べる。自動詞派生の使役動詞は、ごく一部の例外はあるものの、対象に働きかけてその変化を引き起こすことを表わす。したがって、ヲ格の名詞と使役動詞とから成る連語の性質は、奥田(同)の連語グループのうち、「第一章 対象へのはたらきかけ」にあたる連語の性質とかなり重なるところがある。奥田(同)においても、第一章のうち「第二節 人にたいするはたらきかけ」では、ヲ格の人名詞と使役動詞とから成る連語が中心的な位置を占めている(「親を疲れさせる」「男を家へ帰らせる」「父をいらだたせる」「先生をやめさせる」)。また、「第三節 事にたいするはたらきかけ」においても、「(a) 変化のむすびつき」のほうには使役動詞を要素とするものがあげられている(「労働者の生活を安定させる」「政府の勢力を減退させる」)。「第一節 物にたいするはたらきかけ」では使役動詞を要素とする連語はあげられていないが、先に 0.2.1 節で、例(1)「ゼリーを固まらせる」と「ゼリーを固める」などをあげて述べたように、ある種の使役動詞連語は他動詞連語と近い性質をもっていると思われる。上にも述べたが、自動詞派生の使役動詞は対象に働きかけてその変化を引き起こすことを表わすものが大部分であるので、ヲ格の名詞と自動詞派生の使役動詞とから成る連語は、奥田(同)における「第一章 対象へのはたらきかけ」の連語グループに相当するものがほとんどである。そしてこれは、本報告でとりあげる連語グループの大きな部分を占める。

一方、他動詞派生の使役動詞のほうは、その典型的なものは「子供にいつけて食器を洗わせる」「後輩に命じて荷物を運ばせる」「部下を叱って資料を作りなおさせる」等に代表されるような、相手の意志に訴えてその人の意志的な動作を引き起こすという事態を表現するものである。これらの使役動詞は、先に 0.2.1 節で例(8)~(12)をあげて述べたように、文法的な単位としての「V-(物)ル」であって語彙的単位とはみなしにくい。したがって、他動詞派生の使役動詞の多くは連語の要素となるものではない。ただし本報告では、次のような他動詞使役は連語の要素となりうるものとしてとりあげることにする。すなわち、奥田(同)における「第二章 所有のむすびつき」のうちの「(a) やりもらい」、および「第三章 心理的なかわり」のうちの「第二節 通達のむすびつき」の連語に相当する組み合わせをつくりうる使役動詞である。それはたとえば、前者については、「係官に金を渡す」「兄からラケットをもらう」という他動詞連語に相当するものとして「係官に金を握らせる」「兄からラケットを譲らせる」のようなものをとりあげ、後者については、「選手に作戦を伝える」「友達に感

想を聞く」に相当するものとして「選手に作戦を把握させる」「友達に感想を言わせる」をとりあげることである。これらの連語は、相手との間で物や情報のやりとりをすることを表わしており、物や情報の在りかが変わるとともにそれに連動して人の性質も、物や情報の所有者になったりそうでなくなったりという変化が生じるという点で、物・事と人の両方に働きかけることを表わす連語のグループだと考えて考察の対象にする。

奥田（同）であげられているこれら以外の連語グループについて確認しておく。すなわち、「第二章 所有のむすびつき」のうちの「(b) ものもち」の連語、「第三章 心理的なかわり」のうちの「第一節 認識のむすびつき」「第三節 態度のむすびつき」「第四節 モーダルな態度のむすびつき」「第五節 内容規定的なむすびつき」、および「第四章 状況的なむすびつき」であるが、これらの連語タイプは、本報告ではとりあげない。これらの連語は、前節にあげた奥田（同）の連語例からも伺えるように、対象の変化を引き起こすことを表わすものではない⁴。したがって、この類の連語は名詞と他動詞との組み合わせからなりたっていて、使役動詞はその体系にはいりこまない。

このようなことから、本報告では、奥田（1968-73）の連語のタイプのうち、「第一章 対象へのはたらきかけ」の全体と「第二章 所有のむすびつき」のうちの「(a) やりもらい」、および「第三章 心理的なかわり」のうちの「第二節 通達のむすびつき」を中心にして連語のタイプを取り出す。そしてそれに加えて、本報告なりに、すなわち使役動詞も積極的に連語の要素と考える立場にたつことから、使役動詞を要素とする小さな（特殊な）連語類を適宜たてながら（ある連語グループの下位類として小さくたてるにとどまるものの）、他動詞連語と使役動詞連語との張り合い関係をみいだせるように考察を進めていく。

0. 3 対象とするデータ

(ア) 資料の性質

本報告において分析の対象としたデータは、電子化された資料から収集したものと紙媒体の書籍から手作業で収集したものである。

まず、電子化資料としては、①『CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊』、②『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ モニター公開データ 2009 年度版）、および、③『CD-朝日新聞 2006 データ集』（『朝日新聞記事データ集』）を使用した。

①は、新潮社から出版された新潮文庫の一部を電子化し、CD-ROM に収めたものであり、時代別に（明治の作品、大正の作品、昭和戦前の作品、昭和戦後の作品）検索することができる。本報告では、翻訳作品を除いた昭和戦後（1945 年以降）の作品を対象として用例を収集した。

②は、国立国語研究所が 2006 年から 2010 年にかけて構築した大規模な日本語研究用の書き言葉コーパスであり、本報告では 2009 年度に公開された「モニター公開データ」を使って用例を収集した。「モニター公開データ」には、次の量の言語データが収録されている⁵。

書籍：約 3,000 万語（10,423 サンプル）

白書：約 480 万語（1,500 サンプル）

ヤフー知恵袋：約 520 万語（1,500 サンプル）

⁴ 「第四章 状況的なむすびつき」に属する連語をつくる動詞は基本的に自動詞である。

⁵ この資料の詳細に関しては、以下の国立国語研究所のホームページを参考にした。

国会会議録：約 490 万語（159 サンプル）

本報告では、これらのうち、書籍データのみを対象として用例を収集した。

③は、朝日新聞社の 2006 年 1 月から 12 月までの記事のうち、154,731 本の記事を収録したものである⁶。

一方、紙媒体の書籍から手作業で収集したものは、1900 年～2008 年のもの（主として 1945 年以降）であり、45 の文学作品（小説 42 作品、随筆・エッセイ 3 作品からの用例である。ただし、これらの手作業による資料からは使役動詞文のみを収集しており、本報告においても使役動詞文の例のみをあげている。作品一覧は次のとおりである。

浅田次郎 1997『地下鉄に乗って』講談社文庫 1999 発行所収／石坂洋次郎 1947『青い山脈』新潮文庫 1994 発行所収／江國香織 2003『号泣する準備はできていた』新潮社 2006 新潮文庫発行所収／井坂幸太郎 2002『重力ピエロ』新潮文庫 2005 発行所収／遠藤周作 1958 年『海と毒薬』2004 年新潮文庫発行所収／小川洋子 2003『博士の愛した数式』新潮社／奥田英朗 2008『空中ブランコ』文春文庫／荻原浩 2004『僕たちの戦争』2006 双葉文庫／乙一 2000『夏と花火と私の死体』集英社文庫発行所収（「夏と花火と私の死体」／「優子」）／角田光代 2002『空中庭園』文春文庫／金城一紀 2000『GO』講談社文庫 2003 発行所収／桐野夏生 1999『柔らかな頬（上）』文春文庫 2004 発行所収／幸田文 1956『流れる』新潮文庫 1995 発行所収／幸田文 1956～57『おとうと』新潮文庫 1993 発行所収／小林多喜二 1953『蟹工船・党生活者』（蟹工船 1928、党生活者 1932）新潮文庫／佐多稲子 1940『素足の娘』新潮文庫 1988 発行所収／重松清 2000『ビタミン F』新潮文庫／芝木好子 1969『花霞』集英社文庫 1990 発行所収／司馬遼太郎 1968『坂の上の雲（一）』文春文庫 1999 発行所収／寿岳文章 1983『寿岳文章集』弥生書房／曾野綾子 2007『貧困の光景』新潮文庫 2009 発行所収／高野和明 2001『13 階段』講談社 2004 講談社文庫発行所収／太宰治 1947『斜陽』新潮文庫 1990 発行所収／津村節子 1980『重い歳月』新潮文庫 1985 発行所収／中里恒子 1959『鎖』中公文庫 1978 発行所収／中野重治 1954『むらざも』文芸文庫 1989 発行所収／夏目漱石 1909『それから』岩波文庫 1989 発行所収／乃南アサ 2004『しゃぼん玉』朝日新聞社 2008 新潮文庫発行所収／帯木蓬生 1994『閉鎖病棟』新潮社 1997 新潮文庫発行所収／羽仁もと子 1965『おさなごを発見せよ』婦人之友社／東野圭吾 1999『白夜行』集英社文庫／東野圭吾 2001『手紙』2006 年文春文庫発行所収／東野圭吾 2004『さまよう刃』角川文庫 2008 発行所収／松本清張 1980『黒革の手帖（上）』新潮文庫 1983 年発行所収／三崎亜記 2000『となり町戦争』集英社文庫 2006 年発行所収／三島由紀夫 1954『潮騒』新潮文庫 1996 発行所収／三島由紀夫 1960『宴のあと』新潮文庫 1989 発行所収／宮尾登美子 1980『鬼龍院花子の生涯』文芸文庫 1985 発行所収／宮部みゆき 1992『火車』新潮文庫 1998 年発行所収／茂木俊彦 1990『障害児と教育』岩波新書／山崎豊子 1965『白い巨塔（一）』新潮社／山田桂子 1986『「待ち」の子育て』農山漁村文化協会／山本文緒 1993『きっと君は泣く』角川文庫 1997 年発行所収／横山秀雄 2002『半落ち』講談社文庫 2005 発行所収／吉本ばなな 1988『キッチン』福武書店

http://www.ninjal.ac.jp/kotonoha/ex_8.html

⁶ <http://www.asahi.com/information/cd/gakujutsu1.html> を参考にした。

(イ) 抽出方法

上にあげた資料から、それぞれの使役動詞、他動詞の使われている用例を抽出していった。電子化資料に関しては、文字列検索によって用例を検出した。たとえば、使役動詞の「帰らせる」、他動詞の「帰す」の例を文字列検索によって検出する場合、次のような正規表現を用いて検索することで、すべての活用を含んだそれぞれの文が得られる。

「帰らせる」：「帰らせ」、「かえらせ」

「帰す」：「帰[さしすせそ]」、「かえ[さしすせそ]」

一方、手作業による資料に関しては、上にあげた文学作品から全例収集した使役動詞文の中から該当する使役動詞の用例を選んでいった。

3つの電子化資料と手作業による用例、それぞれにおける用例の比重については、それほど考慮していないが、基本的に、まず、『CD-ROM 版新潮文庫の100冊』、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ モニター公開データ 2009 年度版）の電子化資料と手作業による資料の文学作品から用例を抽出し、それから、新聞データである『CD・朝日新聞 2006 データ集』を補助的に用いた。

本来ならば、『動詞例』としてあげてある動詞すべてを検索し、該当する文を抽出すべきであるが、すべての動詞を検索することはできなかった。ただ、使役動詞と他動詞に該当する語種に偏りがないように配慮しながら、いくつかの動詞を任意に選んで検索した。また、本報告にあげている動詞のうち、対象とした資料について検索したものの該当する例が見られないものがあった。そのようなものに関しては動詞の後ろに「@」印を付した。

0. 4 動詞例などの提示の仕方

それぞれの類における他動詞・使役動詞の語例は、語構成および語種の点から次のように分け、各類の中では原則として五十音順に例示した。1章以降では、使役動詞と他動詞を別々に分けて語例をあげるが、ここでは1例ずつを横に並べて示す。

	使役動詞	他動詞
(1) {単純動詞}	ex. 「帰らせる」	「こわす」
(2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}		
・ {動詞＋動詞}	ex. 「すいこませる」	「たたきわる」
・ {名詞＋動詞}	ex. 「泡立たせる」	「傷つける」
(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}		
(3-1) {名詞相当＋サセル／スル}		
・ {漢語＋サセル／スル}	ex. 「回転させる」	「破壊する」
・ {外来語＋サセル／スル}	ex. 「スライドさせる」	「カットする」
・ {和語＋サセル／スル}	ex. 「先走りさせる」	「差し入れする」
(3-2) {副詞相当＋サセル／スル}		
・ {形容詞連用形＋サセル／スル}	ex. 「楽しくさせる」	「冷たくする」
・ {形容動詞連用形＋サセル／スル}	ex. 「簡素にさせる」	「親切にする」
・ {副詞（擬音語・擬態語含む）＋サセル／スル}		
	ex. 「ぐらぐらさせる」	「バタバタする」
(3-3) {その他}	ex. 「転じさせる」	「配する」
(4) {複合動詞に準ずるもの}	ex. 「言ってきかせる」	「もってくる」

この分類についていくつか補足説明をする。

- ・「単純動詞」には、「たぐる」「はしよる」「になう」など、もともとは複合的なものであっても現代語の感覚では構成が不透明で単純語であるようにとらえられるものも含む。
- ・語末が「-asu」の形のもの（「帰らす、泣かす、ふくらます、湿らす」など）は、自動詞の使役なのか他動詞なのか判断がむずかしいことがある。これらについては、次の a のように、「-aseru」の形が成り立ってほぼ同じ意味を表わすものについては、使役動詞とし、b 類のようにそれができないものは他動詞とする。

a 帰らす／帰らせる、泣かす／泣かせる、言わす／言わせる

b ふくらます／*ふくらませる、湿らす／*湿らせる、荒らす／*荒らせる

また、本報告で用いた符号・線・略号はそれぞれ次のことを表わしている。

・「Vi-サセル」：自動詞使役

「Vt-サセル」：他動詞使役

「Vt」：他動詞

「V」：Vi-サセル・Vt-サセル・Vt をまとめて示す

・動詞例に付した「@」：対象とした資料中に文例が見られなかった動詞

1 物への働きかけ

以下本報告では、物や人や事に何らかの変化を生じさせるような働きかけを表わす連語を大きく次の4類に分け、それぞれについて、構成要素の性質および連語的な意味によっていくつかに下位類にわけて述べていく。

物への働きかけ（具体物の状態変化の引き起こし）

人への働きかけ（人の動作や状態変化の引き起こし）

事への働きかけ（抽象的な事柄の状態変化の引き起こし）

物・事と人への働きかけ（人と人との間での物や情報のやりとりの引き起こし）

まずこの章では、物への働きかけの連語についてみていく。奥田靖雄（1968-72[1983]）では、第一章「対象へのはたらきかけ」の第一節「物にたいするはたらきかけ」において、具体物を表わすヲ格の名詞と他動詞との組み合わせから成る連語が、「もようがえ」「とりつけ」「とりはずし」「うつしかえ」「ふれあい」「結果的」という6類に分けられている。それぞれについて、連語の構造（名詞の格、名詞・動詞のカテゴリカルな意味、名詞・動詞の關係的な意味）と連語の例をあげると次のようである。

●奥田（1968-72[1983]）における「物にたいするはたらきかけ」を表わす連語のタイプ

《もようがえ》 N[物]-ヲ (N[物]-デ) (〜く／〜に) Vt[状態変化]

〈対象〉 〈手段〉 〈結果の状態〉 〈物の状態を変える〉

布を はさみで 半分に 切る 針金を 手で 丸く まげる

ミルクを 60度に あたためる ズボンを 真っ黒に 汚す

《とりつけ》 N[物]-ヲ N[物]-ニ Vt[付着]

〈対象〉 〈付着先〉 〈物を他の物にとりつける〉

封筒に 切手を はる／はりつける 本を カバンに いれる

リュックを (肩に) かつぐ (冷えた足に) 靴下を はく

《とりはずし》 N[物]-カラ／ノ N[物]-ヲ Vt[除去]

〈除去元〉 〈対象〉 〈物を他の物からとりはずす〉

溶液から 不純物を とりのぞく 竹串から 肉団子を はずす

壁の ポスターを はがす 黒板の 字を 消す

《うつしかえ》 N[物]-ヲ (N[空間]-カラ) N[空間]-ニ／へマデ Vt[移動]

〈対象〉 〈移動前の場所〉 〈移動後の場所〉 〈物のある場所から別の場所に移す〉

野菜を 千葉から 東京まで 運ぶ パソコンを 教室に もってくる

机を 窓の近くに／窓際に 移す ラジカセを 後輩のところへ もっていく

《ふれあい》 (N[物]-デ) N[物]-ヲ Vt[接触]

〈手段〉 〈接触物〉 〈物をさわる〉

両手で こどもの頭を なでる チョークで 黒板を たたく

(片手で) バットを にぎる (指で) ナッツを つまむ

《結果的》 (N[物]-デ／カラ) N[物]-ヲ Vt[生産]

〈原料〉 〈生産物〉 〈物をつくりだす〉

(N[空間]-ニ) N[物]-ヲ Vt[生産]

〈出現する場所〉 〈生産物〉 〈物のある場所につくりだす〉

残り毛糸で セーターを 編む
軽井沢に 別荘を 建てる

新鮮な卵で オムレツを つくる
山に トンネルを 掘る

本報告でも、この奥田（1968-72[1983]）の分類を参考にし、各類の名称はかえるものの、物の変化の引き起こしを表わす連語を同じく6類に分ける。ただし、《変化》《付着》《接触》については、ヲ格名詞や動詞のカテゴリカルな意味、ヲ格名詞と動詞から成る連語を広げる要素としての名詞の格とカテゴリカルな意味などを考慮し、さらにいくつかの下位類を設けることにする。

●本報告における「物への働きかけ」を表わす連語のタイプ

- 《変化》<N[物]-ヲ V[変化]> : 湯を 沸騰させる // わかす
《付着》<N[物]-ヲ N[物]-ニ V[付着]> : 刀を 懷に 忍ばせる // 隠す
《除去》<(N[物]-カラ/ノ) N[物]-ヲ V[除去]>
: 管から 水を あふれさせる // こぼす
《移動》<N[物]-ヲ N[場所]-カラ N[場所]-ニ/へ/マデ V[移動]>
: 気球を 空に あがらせる // あげる
《接触》<N[物]-ヲ V[接触]> : ドアを たたく
《生産》<N[物]-ヲ (N[場所]-ニ) V[生産]>
: 家のまわりに 柵を めぐらせる // つくる

1. 1 《変化》 <N[物]-ヲ V[変化]>

この類の連語は、具体的な物を表わす名詞と物の種々な変化を引き起こす具体的な動作を表わす動詞とからなり、物に対して物理的な働きかけをして、その形・大きさ・色・温度・向きなどを変化させることを表わす。

【Vi 使役連語】「ビーチボールを ふくらませる」「牛乳を 沸騰させる」「着物を 変色させる」「建築物を 崩落させる」「車輪を 回転させる」

【他動詞連語】「犬小屋を こわす」「牛乳を あたためる」「着物を 染める」「建物を こわす」「棒を 回す」

使役動詞にも他動詞にもこの類の連語をつくるものは多い。他動詞には和語動詞がかなりあり、そのうち単純動詞には、形態的に対をなす自動詞をもつ他動詞（「こわす：こわれる」「ひやす：ひえる」「まげる：まがる」）が多い（下の動詞例では括弧内に自動詞を示した）。和語の複合動詞には、前要素が《接触》の連語をつくる動詞で後要素が《変化》の連語をつくる動詞であるという組み合わせのものがかなりある（「たたきつぶす」「押したおす」「持ち上げる」）。この後要素の動詞は有対他動詞が多いが、複合動詞としては有対他動詞のものは多くない（「ひっくりかえす：ひっくりかえる」vs.「たたきつぶす：*たたきつぶれる」「押したおす：*押したおれる」）。後にみる《生産》類の動詞は、「なおす」を後要素として複合動詞をつくると《変化》類の動詞となつて、物の変化の引き起こしを表わす（「箱をつくりなおす」）。

《動詞例（自動詞派生の使役動詞）》

(1) {単純動詞}

明るませる、うるませる、輝かせる、(肉の表面を) 固まらせる、(包丁を) 傾かせる、
(パンを) かびさせる、(雪を) くぼませる、(桜花が空を) 曇らせる、(姿を) くらませる、
黒ずませる、くゆらせる、(雨が木々を) 煙らせる、(豆腐を) 凍らせる、(涙が襟を)
こわばらせる、(兵器を) 錆びさせる、しとらせる、(肉を) しませる、(ガーゼを) 湿
らせる、(液を) すきとおらせる、(水を) たぎらせる、(暑さが人体を) だらけさせる、
(風が枝を) たわませる、(粉雪が道を) 滲ませる、鈍らせる、粘らせる、(袖山の折目
をぴんと) 張らせる、(風が帆を) はらませる、(床を) 光らせる、(紅茶の葉を) ひらか
せる、(風船を／紙袋を／袂を) ふくらませる、(木や石を) へこませる、(ロープを) 弱
らせる

(2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}

(人形の首を) 仰向かせる、(人形の首を) うつ向かせる、けばだたせる、煮えたぎらせ
る、煮立たせる、(布地を) ひきつらせる、(鉄線を) 燃え上がらせる

【一つかせる】 (ケーキの生地を) 落ちつかせる、(野菜を) こげつかせる、(袂を)
ゴロつかせる、ゴワつかせる、(水を) ばちやつかせる、べとつかせる

(3) サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+サセル}

(土いじりがひびを) 悪化させる、(草を／パルプを) 乾燥させる、(プラグを) 逆転さ
せる、凝固させる、凝縮させる、(寒さが我々の肉体を) 緊縮させる、硬直させる、(建
物を) 荒廃させる、混濁させる、(爆弾を) 炸裂させる、弛緩させる、(酸性の土を) 中
和させる、(船を) 転覆させる、(軍隊が民家を) 倒壊させる、(溶液を) 凍結させる、
破裂させる、(ペダルを) 反転させる、(牛乳を) 沸騰させる、(風が煙を雲に) 変化させ
る、(図を) 変形させる、(ローム層を) 変質させる、(胡瓜を) 変色させる、膨張させる、
(建築物を) 崩落させる、(水銀を) 冷却させる

【口化させる】 液化させる、気化させる、硬化させる、酸化させる、弱化させる、鈍
化させる、軟化させる、乳化させる、劣化させる

(3-2) {副詞相当+サセル}（この類では、主として {擬音語+サセル}）

(引出しを) ガタガタさせる、(戸を) ガタピシさせる、(鍵を) ガチャガチャさせる、
(格子戸を) ゴトゴトさせる // サラサラさせる、(紐を) だらりとさせる、フンワリさ
せる

(3-3) {その他}

(眼鏡の形をもとに) 復させる

《動詞例（他動詞）》

(1) {単純動詞}

(顔を) 赤らめる（：赤らむ）、あける（：あく）、あたためる（：あたたまる：あたたかい）、
洗う、荒らす（：荒れる）、うすめる（：うすまる：うすい）、潤す（：潤う）、折る（：折れる）、
変える（：かわる）、かためる（：かたまる：かたい）、傾ける（：傾く）、乾かす（：乾く）、(喉
を／声を) 哽らす（：哽れる）、刻む、きよめる（：きよまる：きよい）、(紙を) 切る（：切
れる）、くずす（：くずれる）、砕く（：砕ける）、くねらす（：くねる）、くぼめる（：くぼまる）

／くぼむ)、(炭を)消す(：消える)、削る、澆す、(土を)こねる、肥やす(：肥える)、壊す(：壊れる)、裂く(：裂ける)、さばく⁷、冷ます(：冷める)、縛る、(筆を)湿らす(：湿る)、絞る、閉める(：閉まる)、(腹を)すかす(：すく)、(肩を)すくめる(：すくむ)、すぼめる(：すぼまる／すぼむ)、澄ます(：澄む)、せばめる(：せばまる：せまい)、染める(：染まる)、逸らす(：逸れる)、反らす(：反る)、揃える(：揃う)、倒す(：倒れる)、耕す、たたむ、裁つ、矯める、たわめる(：たわむ)、ちぎる(：ちぎれる)、縮める(：縮まる／縮む)、縮らす(：縮れる)、ちらかす(：ちらかる)、つぶす(：つぶれる)、つぼめる(：つぼまる／つぼむ)、つよめる(：つよまる：つよい)、とかす(：とける)、とがらす(：とがる)、とける(：どく)、研ぐ、閉じる・閉ざす(：閉じる)、(車を)止める(：止まる)、なおす(：なおる)、濁らす(：濁る)、縫う、ぬらす(：ぬれる)、ねじる、(粘土を)練る、伸ばす(：伸びる)、はしよる、(声を)ひそめる、(スイッチを)ひねる、冷やす(：冷える)、ひらく(：ひらく)、広げる(：広がる：広い)、(屋根を)葺く、ふくらす(：ふくれる)、ふくらます(：ふくらむ)、ふさぐ(：ふさがる)、伏せる、ふやかす(：ふやける)、震わす(：震える)、へこます(：へこむ)、ぼかす(：ぼける)、ほぐす(：ほぐれる)、(柿を)干す、ほそめる(：ほそまる：ほそい)、ほどく(：ほどける)、ぼやかす(：ぼやける)、ほる、まくる(：まくれる)、曲げる(：曲げる)、まるめる(：まるまる：まるい)、みがく、乱す(：乱れる)、むしばむ、結ぶ、めくる(：めくれる)、焼く(：焼ける)、破る(：破れる)、結う、ゆがめる(：ゆばむ)、ゆるめる(：ゆるまる／ゆるむ：ゆるい)、よごす(：よごれる)、分ける、割る(：割れる) // 食う、食べる、飲む // 殺す

(2) {複合動詞(複合動詞のうち後項が「する」以外のもの)}

- ・打ち砕く、打ち壊す、打ち割る、押し切る、押し倒す、押しつぶす、押し広げる、折り返す、折り曲げる、かみ切る、かみくだく、切り刻む、切り殺す、切り倒す、食い荒らす、蹴り倒す、蹴り破る、住み荒らす、すりつぶす、たたき壊す、たたきつぶす、たたき割る、突き崩す、突き倒す、突き破る、とりこわす、なぎ倒す、殴り殺す、(髪を)なでつける、握りつぶす、ねじ曲げる(：ねじ曲がる)、練り固める、張り倒す、引き裂く、引き倒す、引きちぎる(：引きちぎれる)、引きのばす、ひっくりかえす(：ひっくりかえる)、冷し固める、ひん曲げる(：ひん曲がる)、踏み荒らす、踏み固める、踏みつぶす、へし折る(：へし折れる)

【一なおす】 たてなおす、作りなおす、縫いなおす、塗りなおす、結いなおす

- ・泡立てる(：泡立つ)、色どる、角立てる、傷つける(：傷つく)、縁どる

(3) {サ変動詞(複合動詞のうち後項が「する」であるもの)}

(3-1) {名詞相当+スル}

圧搾する、圧縮する、延長する、汚染する、改築する、解凍する、拡大する、希釈する、修繕する、修築する、修理する、縮小する、浸食する、増強する、濃縮する、破壊する、爆砕する、爆破する、破砕する、漂白する、粉碎する、補強する、冷却する、冷凍する

【一化する】 強化する、浄化する

【VNする⇔NをV】(二字漢語の前要素が動詞的な意味) 加熱する、砕氷する、消毒する // 整形する、染色する

⁷ 和語の他動詞のなかには、この「さばく」のほか「けがす」「打ちのめす」「押しきる」も、現代語では物理的変化の引き起こしにはあまり用いられなくなっている。

(3-2) {副詞相当＋スル}

- ・大きくする、小さくする、太くする、細くする // 四角くする、丸くする // 固くする、やわらかくする // 長くする、短くする // 高くする、低くする、平たくする // 狭くする、広くする // 浅くする、深くする // 重くする、軽くする // 厚くする、薄くする、濃くする // 明るくする、暗くする // きつくする、ゆるくする // 強くする、弱くする // 温かくする、熱くする、冷たくする、ぬるくする // 鋭くする、鈍くする // 汚くする // 赤くする、黒くする、白くする、etc. // 高くする、安くする // ひどくする、よくする、悪くする
- ・油状にする、鋭利にする、円形にする、きれいにする、柔軟にする、まっすぐにする、まん丸にする // 逆にする、さかさまにする、反対にする
- ・かさかさにする、ぎざぎざにする、すべすべにする、ねばねばにする、ぼさぼさにする
- ・二等分する、(幅を) 倍にする、(ケーキを) 半分にする

(3-3) {その他}

屈する

他動詞の例のうち、(3-2) {副詞相当＋スル} の下位である「{形容詞連用形＋スル} のもの(「冷たくする」など)」については次のような点が注意される。それらは、物をその形容詞の表わす状態に変化させる働きかけを表わすが、同じ形容詞から派生した他動詞のあるものとそうでないものがある。

あたたかい→ あたたかくする、あたためる

つめたい → つめたくする、*つめためる

そして両方がある場合には、{形容詞連用形＋スル} のほうの意味の多義性にかかわって、両者がほぼ同じ意味で用いられるものと、他動詞は用いられないものがある。

広い→ (視野を) 広くする ≡ 広める、(道幅を) 広くする ≠ 広める

濃い→ (濃度を) 薄くする ≡ 薄める、(厚さを) 薄くする ≠ 薄める

高い→ (評価を) 高くする ≡ 高める、(塔を) 高くする ≠ 高める

したがって、ある種の{形容詞連用形＋スル}は、形態面では分析的な形式であるものの、一個の他動詞に相当する単位として、語彙の体系の中での重要な働きを担っているといえる⁸。

また、他動詞のなかには、この《変化》の連語とともに、後述する他の連語としても用いられるものがある。

- ・《変化》と《生産》いずれにも用いられるもの。

「地面をほる：穴をほる」「髪をゆう：高島田をゆう」「帯をむすぶ：お太鼓をむすぶ」

- ・《変化》と《付着》いずれにも用いられるもの。

「魚をカラカラに干す：洗濯物を竿に干す」「食器をまっすぐ並べる：食器をテーブルに並べる」「壁をまっ赤に塗る：壁にペンキを塗る」

⁸ 奥田靖雄(1960 [1983]、1968-72 [1983])において、[人にたいするはたらきかけ]のうちの《心理的な状態変化》と、[事にたいするはたらきかけ]のうちの《変化のむすびつき》においてでは、このような{形容詞連用形＋スル}に相当する例がふつうの他動詞とともにいくつか挙げられている。ただし、[物にたいするはたらきかけ]においては挙げられていない。

- ・《変化》でもあり《除去》的でもあるもの。

「雑巾／レモンをしぼる：水を／果汁をしぼる」「シャツをあらう：汚れをあらう」
「タオルをゆすぐ：洗剤をゆすぐ」「洗濯物をすすぐ：溶液をすすぐ」

〔文例（自動詞使役）〕

和語の自動詞からの使役動詞の例もかなりある。

- ・「タカちゃんの誕生日さあ、今年どうする？」ふたたび唾で指を湿らせページをめくり
絵里子は言う。（空中庭園）
- ・それに応じ、いくつかの案があらわれた。なかには、酒の冷凍を試みたものもあった。
日本酒を低温にし、水分だけ凍らせて除くのである。（人民は弱し官吏は強し）
- ・彼は、部屋の仕切りの帳を頭突きで何度もへこませた。（翔べ麒麟：BCCWJ）
- ・第二船台は、闇の中にほんのり明るんでみえる。残業をしている灯が、棕櫚スダレを
明るませているのだ。（戦艦武蔵）
- ・いくら声を出しても、どこから返事が聞かれるわけでもない。ただ、自分の吐き出し
た息が、ガラス窓をぼんやりと白く曇らせるだけだった。（しゃぼん玉）
- ・淡いクリーム色の画面の上半分に、濃い朱色の雲が、朱肉を滲ませた綿をキャンパス
に叩きつけたような形で散らばっている。（砂の上の植物群）
- ・焼き上がったら網にのせてアルミ箔をかぶせてしばらく保温し、肉汁を落ち着かせる。
（人気のおかず 260：BCCWJ）

一方、漢語サ変の自動詞からの使役動詞の例も少なくない。

- ・交感神経は血管を締め、副交感神経は血管を弛緩させる。（体を温め免疫力を高めれば、
病気は治る！：BCCWJ）
- ・漢方でも山の芋の根を乾燥させたものを「山薬」と呼んで、滋養強壮に用いられてい
ます。（世界一の長寿食：BCCWJ）
- ・報国挺身隊員というのは、広島市街の防火準備で家屋強制疎開の労役を勤めるため、
県内の各郡から徴用した青年で組織され、……この人たちは民家を倒壊させるのが任
務であった。（黒い雨）
- ・周囲の山から流れ落ちる水は鉄分を含んで茶色に染まり、それが光線のぐあいで湖の
色を無気味に変化させる。（ブンとフン）
- ・そのため、漬けものに使う食塩が、精製塩よりも粗製塩が好まれるのも、粗製塩中に
カルシウムやマグネシウムなどの苦汁（にがり）成分が存在しているからである。こ
れら苦汁成分は、原料野菜類を硬化させ、漬けものとしての品質の向上に関与してい
る。（食品加工活用術：BCCWJ）

次の例は、物の向きの変化である。

- ・「この無線機の場合、もし家の電気を切られたとしても、このプラグを逆転させるだけ
で電池使用のモードに切り替わるんです」（鴉よ闇へ翔べ：BCCWJ）
- ・腕時計を見て、秀丸さんが車椅子から降りかけていた。車椅子にストッパーをかけて
固定し、ペダルを反転させる。（閉鎖病棟：BCCWJ）

〔文例（他動詞）〕

他動詞のほうも和語動詞の例が豊かである。

- ・信子が包みを開けると、内部から紅白の小さい菱餅が二個出て来た。（あすなろ物語）

- ・「ところで、わたしたちはいつここを引き上げるの?」、すみれが流し台で食器を洗いながらたずねた。(スプートニクの恋人)
- ・以前は、回りに建物があり教会も倉庫となっていたが、建物を壊して回りを広場にすすきりさせた。(遙かなる北京の風：BCCWJ)
- ・鮎太と留吉は磯へ降りて行った。川の中の石を次々に飛び移って行って、一カ所だけ膝から下を濡らして浅瀬を横切ると、向う岸へと渡った。(あすなる物語)
- ・賢は彼女が落ち着いていることだけを目の隅で確認し、オフィスの社員とパイロットとで早速地図を広げて、どこから捜すか検討を始めた。(上と外)
- ・「焼くんだよ。門番がね」と老人はかさかさした大きな手をコーヒー・カップで暖めながらそう答えた。(世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド)
- ・四人はダンボールを折り曲げて紙布団をつくり、車座になって再びポーカール勝負を開始した。(新橋烏森口青春篇)
- ・ぼくは量のうえに坐りこんで汚い千円札をゆっくりと引き裂いた。(聖少女)
- ・オルガンの修理では、すべて分解したうえで、壊れた部品を最初から作り直して音が出るようにし、塗装をやり直して完成する。(asa2006.txt(888125))
- ・卵白を泡立てて最後の方でグラニュー糖を入れ、フワッとさせる。(asa2006.txt(750419))

もちろん漢語サ変動詞の例もあるが、やはり文体的にややあらたまった感じがするものとなる。

- ・ブルックスはここで革ジャンや革ベストを修理する店を出していた。(ザ・スーパー・バッド・デュード：BCCWJ)
- ・吹雪の合間に外に出て、水を作る雪の塊をこしらえたり、テントやトイレの風避けの雪のブロックを補強した。(風の地平：BCCWJ)
- ・しかしですよ、わたしの実験では、レトルトの中で水銀を加熱していると、赤い灰になり、ガラス鐘の空気が減ります(実験大好き！化学はおもしろい：BCCWJ)

次の例は、{形容詞連用形＋スル}{形容動詞連用形＋スル}の例である。

- ・透明なプラスチック一点張りだったのを、赤、青などカラフルにしたのも当世風だし、角を丸くして、持った掌が痛くないように工夫してある。(読むクスリ：BCCWJ)
- ・冬の山で汚れた食器をきれいにするのに、正憲は僅かの湯を食器に入れて箸の先で擦って洗い、最後に紙で拭き取ることにしている。(風の地平：BCCWJ)
- ・十個のパンの援助があり、それを求める被災者が二十人いるとする。この場合、パンを全部半分にして全員に配るのか、子どもや老人を優先にするのか、(大震災市長は何ができるのか：BCCWJ)

自動詞使役連語と同様に、他動詞連語のほうにも、物の向きの変化を表わすものがある。

- ・さらに、うっかりボトルを倒しても、ラムネの瓶を逆さまにしたらビー玉が栓をするのと同様に、中のボールがストッパーになってワインが流れ出すのを防いでくれる。(asa2006.txt(565248))

以上が《変化》を表わす連語である、以下には、《変化》のひとつの下位類ではあるが、典型的なそれとはやや異なる性質がみられるものを、いくつかに分けて示しておく。

1. 1 (ア)〈植物の内発的变化の助長〉

<N[物(植物)]-ヲ V[変化]>

【Vi使役連語】「甘柿を 木で 色づかせる」「幹を 太らせる」「卵を 孵化させる」

【他動詞連語】「花を 枯らす」「雑草を はやす」「卵を かえす」

《変化》の下位の一類として、植物に働きかけてその変化を引き起こすことを表わす連語を別にたてておく。植物にはそれ自身に成長・変化の力が内在しており、それらの変化は完全には人の力で制御しにくく、変化を引き起こすといっても内発的な変化や内在力の発揮を促すということではしかない。したがって、使役動詞であれ他動詞であれ、働きかけといっても、それらを“助ける・助長する”とでもいうかたちである。これはまた、自然出現的な事態を生じさせるという点で放置的ともいえる。なお、「実をならせる」「枯れ木に花を咲かせる」という連語は、ヲ格名詞の表わすものが結果的な対象であるので、後述する《生産》の類である。この類の連語をつくるのは、他動詞よりも自動詞使役のほうが多い。

《動詞例(自動詞派生の使役動詞)》

(1) {単純動詞}

(柿を) 熟ませる、(トマトを畑で) 熟れさせる、(蘭を) 枯れさせる、(根を) 腐らせる、(草木を) 茂らせる、熟させる、(草木を) 萎えさせる、(一面に麦を) 生えさせる、(つるを) 這わせる、(根を) ひからびさせる、(パン種を) ふくらませる、(幹を) 太らせる、(果実を) 実らせる

(2) {複合動詞(複合動詞のうち後項が「する」以外のもの)}

(甘柿を) 色づかせる、芽吹かせる

(3) {サ変動詞(複合動詞のうち後項が「する」であるもの)}

(3-1) {名詞相当+サセル}

(カーネーションを一斉に) 開花させる、(草を) 生育させる、(農作物を) 成長させる、(草を／パン種を／イースト菌を) 醗酵させる、(植物を／雑草を) 繁茂させる、(卵を) 孵化させる、腐敗させる、(樹木を) 密生させる

《動詞例(他動詞)》

(1) {単純動詞}

(卵を) かえす(：かえる)、(草木を) 枯らす(：枯れる)、(雑草を) はやす(：はえる)

(3) {サ変動詞(複合動詞のうち後項が「する」であるもの)}

(3-1) {名詞相当+スル}

栽培する、培養する

【文例(自動詞使役)】

- ・ 今年较去年のようにはいきまへんやろなあ。倉に米のびっしり詰ってるとこは去年の飢饉で減ってる筈ですよってになあ。それにこの雨は米を腐らせるばかりやのうて、川も荒すし、流行病を跳梁させてますがや。(華岡青洲の妻)
- ・ 「農業はコメづくりだ」と収量の多い秋田の農家を訪ね歩いてたとき、80年の冷害にぶつかった。壊滅的な被害の中で穂を実らせた田んぼがいくつかある。機械化から

- 取り残された高齢者が昔ながらの稲作をしていた。(asa2006.txt(910743))
- ・庭の柿の木が昔と変わらず実を色づかせているのが、かえって寂しさをかきたてる。
(リビング)
 - ・センターの金沢光主任研究員は「水草を繁茂させる、生活用水を浄化するなど、何か対策を取らないと、近い将来に絶滅する恐れがある」と心配している。
(asa2006.txt(744192))
 - ・例えばブドウを発酵させてワインを作るという作業。(市民のための「遺伝子問題」入門：BCCWJ)
 - ・朝早く、庄吉さんと浅二郎さんがボストンバッグをさげた旅姿で来て、三人共同で鯉の子を孵化させる池をつくる気はないかと重松に云った。(黒い雨)

【文例（他動詞）】

- ・汗水たらしして働いた結果より、ペンペン草を生やして遊ばせておいたほうが、ずっと利益になったというわけだ。(第三の経済危機)
- ・(父親の相斌さんは)面の中では一番の大地主で、広い畑には朝鮮人参を栽培していた。
(妻たちの強制連行：BCCWJ)

1. 1 (イ)〈調理〉

<N[物(食材)]-ヲ V[調理]>

【Vi 使役連語】「ほうれん草を パリッとさせる」

【他動詞連語】「野菜を 炒める」「豆を 煎る」

《変化》の下位類として、食材に熱を加えたり味付けをしたりして調理することを表わす連語をたてておく。調理することによって食材に何らかの変化が生じるのが普通なので《変化》類のひとつと考えてよいだろう。ただしこの類の連語は他動詞から成り立つものがほとんどであり、使役動詞によるものは「オノマトペ+させる」の形のもの（「しんなりさせる」など）しかない。また、他動詞のなかには、(単純動詞であっても)対応する自動詞をもたないものがある（「炒める、煎る、煎じる、炊く」など）。これらの動作もふつう食材の変化を伴うものではあるが、動詞の意味としては必ずしも物の変化が生じることを含意していないのかもしれない。

《動詞例（自動詞派生の使役動詞）》

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-2) {副詞相当+サセル}

シャキッとさせる、しんなりさせる、トロリとさせる、パリッとさせる

《動詞例（他動詞）》

(1) {単純動詞}

(肉を油で) 揚げる (：揚がる)、炒める、(豆を) 煎る、こがす (：こげる)、煎じる、炊く、(魚を) 煮る (：煮える)、(芋を) ふかす、焙じる、むす、むらす (：むれる)、ゆがく、茹でる (：ゆだる)

(2) {複合動詞 (複合動詞のうち後項が「する」以外のもの)}

煮返す、煮込む、煮しめる、煮詰める (：煮詰まる)、煮含める

(3) {サ変動詞 (複合動詞のうち後項が「する」であるもの)}

(3-2) {副詞相当+スル}

甘くする、甘ったるくする、おいしくする、辛くする、こうばしくする、塩辛くする、しょっぱくする、すっぱくする、苦くする、まずくする、水っぽくする

〔文例 (自動詞使役)〕

- ・全体に味がついたところで、水溶き葛粉を静かに回し入れてとろりとさせる。(つきち田村の日本料理厳選 300 レシピ事典：BCCWJ)
- ・キャベツは細いせん切りにして冷水にさらし、パリッとさせます。(成人病(生活習慣病)の献立 1600～1700 キロカロリー：BCCWJ)
- ・あとはきのこ類と、塩でしんなりさせたきゅうりとごま油で炒めて醤油味でいただいたり。(うおつか式生活哲学入門：BCCWJ)

〔文例 (他動詞)〕

- ・道の途中のラーメン屋から、野菜を炒めているらしい、油のはぜる音が聞こえてきた。(一瞬の夏)
- ・家へ出入りする『左翼芸術』同人のために月八斗 (約百二十キロ) の米を炊いて食べさせていた。(文人暴食：BCCWJ)
- ・熱湯に塩とサラダ油各適量を加えてさやいんげんとレタスをゆで、しっかり水気をきって器に盛る。(人気のおかず 260：BCCWJ)
- ・原料は、氷蜜という一種の砂糖だった。氷蜜どころかろくに砂糖もできない日本ではこの菓子は珍貴そのものというほかない。製法は、氷蜜を煮詰め、どろどろにしたものにうどん粉を加え、罌粟一粒を包み、さらにかきまわしながら煮あげると次第にふくれてきて、そとがわにいくつものツノがはえてくる。そういう菓子である。(国盗り物語・斎藤道三)
- ・我が家では「いなりずし」の油揚げをたくさん煮る。ザラメ砂糖を多く入れ甘くする。(asa2006.txt(9851))

調理することによって、その食材に化学的な変化を引き起こすこともあり、そういう変化を引き起こす物質や現象が原因的な主体が文の主語になることがある。

- ・針塚農産で漬け物を造る人は女性が中心だ。「元気のいい女性が持っている乳酸菌が、さらに漬け物を美味しくする」という針塚さん。漬け物は家庭でも造れると、その造り方を紹介した本も出版している。(食の墮落を救え！：BCCWJ)

1. 1 (ウ)〈振動の引き起こし〉

＜N[物]-ヲ V[振動の引き起こし]>

〔Vi 使役連語〕「紙を ひらひらさせる」「芒を なびかせる」

〔他動詞連語〕「コマを まわす」「葉を そよがす」

物の振動や回転を生じさせることを表わす動詞とヲ格の具体名詞との組み合わせは、物を

静的な状態から動的な状態に変えるという意味で変化の引き起こしといえるが、振動することとその物になにかの変化が残存するわけではない。このことから、《変化》の下位類として別にたてた。

他動詞による連語よりも自動詞使役の連語のほうが豊かである。

《動詞例（自動詞派生の使役動詞）》

(1) {単純動詞}

(影をスクリーンに) 踊らせる、(風が炎を) おののかせる、(廊下を／レールを) きしませる、(風が梢を) そよめかす、(芒を) なびかせる、(梢を) 震わせる、(剣を) 舞わせる、(焰が影を) ゆらめかせる、(大気を) ゆるがせる、(風が帆桁を) わななかせる
// (エンジンを) うならせる、(木の葉を) ざわめかせる

(2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}

(風が和紙を) 波うたせる、はためかせる、(紙を) ひらつかせる

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+サセル}

- ・(プロペラを／車軸を) 回転させる、(蛙の心臓を) 鼓動させる、(セメントを) 震動させる、(棒を) 反回転させる
- ・(櫓を) 一回りさせる

(3-2) {副詞相当+サセル}

(下駄を) かたかたさせる、ばたばたさせる、(洗濯物を／紙きれを) ひらひらさせる、(糸を) ふらふらさせる、(ひもを) ぶらぶらさせる

これらのうち、「(エンジンを) うならせる」「(木の葉を) ざわめかせる」「レールをきしませる」は、単に振動が生じるだけでなく、それによって音が生じることがあり、その点で後述する〈現象おこしへの働きかけ〉に近い。

《動詞例（他動詞）》

(1) {単純動詞}

(水が小砂利を) ころがす（：ころがる）、(風が梢を) そよがす（：そよぐ）、(独楽を) 回す（：回る）、(枝を) ゆさぶる、ゆする、ゆらす（：ゆれる）

(2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}

振り回す、揺り動かす

〔文例（自動詞使役）〕

- ・風が旗をなびかせた。(城：BCCWJ)
- ・エンジンの唸りが耳をつんざき、震動は骨まで震わせた。(僕たちの戦争)
- ・朝な夕な、ひぐらしが群がって鳴いた。夜には、早雲山から吹きおろしてくる突風が杉の梢をゆるがせて山津波にも似た音を立てた。(楡家の人びと)
- ・しかし僕らは犬を見おろすかわりに狭い谷間をおおう空を見上げた。そこを信じられないほど巨きい飛行機が凄まじい速さで通りすぎたのだ。空気を波うたせ響きでみたく激しい音が短い間僕らをひたした。(飼育)
- ・すべての客が金を置き終えたのを見てから、ディーラーが、数字の刻まれた円盤を回

転させる。(若き数学者のアメリカ)

- ・装置は、モーターとクランク機構を使って重りを振動させる簡単なもの。
(asa2006.txt(1473173))

- ・彼は途中で読むのを止め、額を白くして私をにらんだ。そして、私の鼻さきへ袋をひらひらさせながらいった。(驢馬)

次の例は、音を生じさせるという変化である。

- ・一礼すると志方は仁王のように立ち上り、階段をさしませて二階へ上った。(花埋み)
- ・そんなことを胸のうちに呟きながら、わたしはその下駄を拾い、落ちている人形を拾い、そして、麦畑のなかで、頭を垂れた麦の穂をざわめかせながら、子供の尻を叩き、ゆさぶり、踊るようにくるくるとまわっている母親を、道ばたに立って黙ってみていました。(團欒)

〔文例 (他動詞)〕

- ・竹は五月の凋落の季節に当って黄ばんでいた。梢のほうをそよがす風が、枯葉を密集した藪の只中に降らせているのに、…… (金閣寺)
- ・私は五十ドル余りの金をすべてチップに換えた。そして、右手に二、三枚のチップを持ち、それをもてあそびながら、ゲームの始まるのを待った。ディーラーはつまらなそうに回転盤をまわし、無造作に球を投げ入れた。(一瞬の夏)
- ・風が雨戸をゆさぶった。(忘れ得ぬ翼：BCCWJ)
- ・僕は草原の傾斜の下で義肢を抱えて立ったまま待ちうけていた。すでに夜だった。草原の高みの子供らの声だけが、濃さをまして殆ど不透明な暗い空気の膜を揺り動かした。(飼育)

1. 1 (エ)〈稼働・停止〉

＜N[物 (機械)]-ヲ V[稼働・停止]>

〔Vi 使役連語〕「機械を 稼働させる」「パソコンを 休ませる」

〔他動詞連語〕「機械を動かす」「クレーンを とめる」

ヲ格名詞が機械のようにそれ自身が何らかの力を発揮できるものであり、動詞がその稼働や停止を表わすものであるとき、その連語は機械等が機能するようにあるいは止まるよに働きかけることを表わす。もっぱら〈稼働・停止〉の連語をつくるという和語の他動詞はなく、「エンジンを かける」「テレビをつける」などは後述する《付着》タイプの動詞が、「クレーンヲ動かす」は《移動》タイプの動詞が、それぞれ二格 (やカラ格等) の名詞と組み合わせらず、転用によって慣用的に〈稼働・停止〉の連語となっている。

《動詞例 (自動詞派生の使役動詞)》

(1) {単純動詞}

(諸器官を) 働かせる、(エンジンを／帆を) 休ませる

(3) {サ変動詞 (複合動詞のうち後項が「する」以外のもの)}

(3-1) {名詞相当+サセル}

- ・(機械を) 稼働させる、休止させる、(機械を) 作動させる

- ・(テープレコーダーを) スタートさせる
- ・(エンジン) フル回転させる、フル稼働させる

《動詞例(他動詞)》

(1) {単純動詞}

(クーラーを) 動かす(：動く)、(エンジンを) かける(：かかる)、(テレビを) つける(：つく)、(ベルトコンベアーを) とめる(：とまる)

(3) {サ変動詞(複合動詞のうち後項が「する」以外のもの)}

(3-1) {名詞相当+サセル}

停止する

〔文例(自動詞使役)〕

- ・三が日には金融機関を互いに結ぶネットワークシステムを休ませるため、原則として他行のキャッシュカードは利用できない。(asa2006.txt(2552810))
- ・彼女は呉式二型五号射出機をフル稼働させ、単翼機である零式水偵を撃ち出したのだ。(空母艦隊血風録)
- ・紀子も家事の合間にはたいていテレビを作動させ、煎餅などをかじりながら見入っていることが多い。(僕たちの戦争)
- ・私たち三人の客は、何度か車をスタートさせようと試みた。(風に吹かれて)
- ・(私は) 窓を開け放ち、布団と枕を庭に干し、掃除機をフル回転させた。(博士の恋した数式)

〔文例(他動詞)〕

- ・「……つまりひとつの発信機を動かしているあいだ、もう一方のを充電させておくの。そうすればもう怖いものはないわ。時間のことを心配する必要もなくなるし」(世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド)
- ・僕は部屋に戻ってTVをつけ、しばらく一人でワインを飲んでいた。(ダンス・ダンス・ダンス：BCCWJ)
- ・今度の日曜日に少年院を訪ねてみようかしら、と厚子はアイロンをとめると顔をあげ、壁を見た。日曜日までにはまだ四日あった。(冬の旅)

1. 1 (オ)〈目立たせ〉

<N[物]-ヲ V[目立たせ]>

【Vi 使役連語】「衣装を 目立たせる」「(明かりが) 傷痕を 浮き立たせる」

「(夕闇が) 木々を ほんのりさせる」

【他動詞連語】「衣装を 目立つようにする」

この類の連語をつくる動詞として、使役動詞はあるが他動詞としては独立のものがなく、「～ようにする」という合成的な形のものが他動詞連語をつくっている。その点で使役動詞連語に特有の連語である。

《動詞例（自動詞派生の使役動詞）》

(1) {単純動詞}

(ポケットからハンカチを) のぞかせる

(2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}

- ・(光が 人々の姿を／家並を／植え込みを) 浮かび上がらせる、(明かりが傷痕を) 浮き立たせる、(衣装を) ひきたたせる
- ・(日差しが道の凹凸を) 際立たせる、(衣装／ポケットの膨らみを) 目立たせる

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-2) {副詞相当＋サセル}

くっきりさせる@、はっきりさせる@、ほんのりさせる@

《動詞例（他動詞）》

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-2) {副詞相当＋スル}

際立つようにする、映えるようにする、引き立つようにする、目立つようにする

〔文例（自動詞使役）〕

- ・和尚は首に白絹布の護襟をまき、黒の被布をきて、どこかの回向の帰りとみえ、裾から紫衣の襷をのぞかせていた。(雁の寺)
- ・淡い月の光が、夜霧にぬれた砲身をにぶく浮びあがらせていた。(コンスタンティノープルの陥落)
- ・銀座の光と影が切絵のように白い建物を浮き立たせていた。(地下鉄に乗って)
- ・大手化粧品会社から招いたアドバイザーを講師に、「目元だけを目立たせず、全体のバランスを考えて自然な印象を持たせる」「血色がよく健康的に見える色づかいが重要」などの心構えを聞きながら、社会人らしいメイク術を学んだ。
(asa2006.txt(1243004))

〔文例（他動詞）〕

- ・次週よりシーズン企画を2台にする計画。その際に陳列位置を変更し、本来売るべき品を目立つようにする。(商売の「計画・実施・検証」：BCCWJ)

1. 1 (力)〈保存〉

<N[物]-ヲ V[保存]>

【Vi 使役連語】「野菜を もたせる」「机を 長持ちさせる」

【他動詞連語】「茶道具を 保存する」

物の変化をくいとめる、変化しないようにするという働きかけを、消極的な意味で変化の引き起こしとみなし、《変化》の下位にこの類をたてる。ただし、この〈保存〉を表わす連語はわずかである。

《動詞例（自動詞派生の使役動詞）》

(1) {単純動詞}

(ペーコンを) もたせる@

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの}

(3-1) {名詞相当+サセル}

(スノコを) 長持ちさせる

《動詞例（他動詞）》

(1) {単純動詞}

保つ

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの}

(3-1) {名詞相当+スル}

維持する、保持する、(財産を) 保全する、保存する

(4) {複合動詞に準ずるもの}

とっておく

cf. いわゆる V-テオク形のうちこの「とっておく」は単純語的であり、〈保存〉の連語をつくる動詞と考えられる。そのほかに「入れておく、しまっておく、ためておく」などの V-テオク形もこれに準ずるものとしてはたらく。

〔文例（自動詞使役）〕

- ・日本から電気製品を持ってくる場合、変圧器を使用しなくても日本の電気製品は使えます。ただし、製品を長持ちさせ、安全に利用するには、やはり変圧器を利用した方が無難です。(サンパウロ/リオデジャネイロに暮らす)

〔文例（他動詞）〕

- ・医療費は、家族のために払ったものも含まれるので、とりあえずすべての領収書をとっておいて、年間で10万円を超えるようなときには、必ず税務署などに相談するようにしましょう。(おいしい定年後の年金・保険・税金マニュアル：BCCWJ)
- ・自分の処分した本が、ちゃんとハトロン紙か何かかぶせて、書店に並んでいるのは複雑な感じである。当時、私は本を買うと必ず紙カバーとか、帯とかを大切に保存しておいたものだ。(風に吹かれて)
- ・マラッカ、ジャカルタ、マカッサルなどの都市の中の地元地域は何世紀もその樹木、鶏、高床式住居を維持してきたのである。(大航海時代の東南アジア：BCCWJ)
- ・とにかく私はいつもズボンのポケットにかなりの量の小銭をためておくように心懸けている。(世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド)

1. 1 (キ) 〈相互〉

＜N[物]ーヲ (N[物]ート) V[相互]>

〔Vi 使役連語〕「二本の旗を 交叉させる」「辺と辺を 接合させる」

「直線を 波線と からませる」

【他動詞連語】「両手を あわせる」「薪を 束ねる」「腕を くむ」

「着物を 食料と とりかえる」「机といすを くっつける」

これは、物そのものの物理的状态に変化が生じるわけではなく、二つまたはそれ以上のものがまとまるようにしたり、二つのものをとりかえたりするという変化であり、対象相互的な働きかけである。構造の特徴として、<N[物]・ヲ V[相互]> における「N[物]・ヲ」は、複数の物を表わす名詞であるか（「両手をあわせる」）、「N[物]・トN[物]・ト」というまとまりであることである（「右手と左手をあわせる」）。かりに「手をあわせる」であってもこのときの「手」は複数であることが前提である。また、ト格名詞で広げた <N[物]・ヲ N[物]・ト V[相互]> という構造をとることもできる（「直線を波線と交わらせる」）。

動詞には《付着》の連語もつくるものがあるが（「垣根に朝顔のつるをからませる」）、一方で、もっぱら対象相互的な変化を表わすものもある（「（腕を）くむ」）。また、他動詞のうち(1) {単純動詞} は、いずれも、(2)の {複合動詞} の前要素になりうる。なお、「あわせる」は形態的には「あ+（サ）セル」であるが独立の他動詞とみなされる。この「あわせる」と「かえる」を後要素とする複合動詞がかなりある。そして、全体として、使役動詞よりも他動詞のほうが豊かである。

《動詞例（自動詞派生の使役動詞）》

(1) {単純動詞}

絡ませる、かわらせる、交わらせる

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+サセル}

- ・（二つの文字を）逆転させる、交叉させる、交差させる、交替させる、接合させる、直交させる@、反転させる（～する）
- ・クロスさせる（～する）@

《動詞例（他動詞）》

(1) {単純動詞}

あえる、あわせる（：あう）、（荷物を）からげる、（古雑誌を）くくる、くむ、しばる、（薪を／新聞紙を）束ねる、束(ツ)ねる、つなぐ（：つながる）、まぜる（：まざる）、まとめる（：まとまる）、結ぶ

(2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}

くっつける（：くつつく）、（種々のくだものを）とりまぜる

【一あわせる】 かき合わせる、かみ合わせる、絡みあわせる、くみあわせる、すりあわせる、つなぎあわせる、縫いあわせる、練り合わせる、貼りあわせる、まぜあわせる、結び合わせる

【一かえる】 入れ換える、置き換える、掛け換える、（遣伝子を）組み換える、（書類を）差しかえる、すげかえる、付け替える、つなぎかえる、取りかえる、引き換える

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+スル}

- ・交換する、混合する、調合する、調剤する、調葉する

- ・チェンジする、ブレンドする、ミックスする

(3-2) {副詞相当+スル}

- ・あべこべにする、裏表にする、逆にする、ごたまぜにする、さかさにする、反対にする
- ・一緒にする、組にする、セットにする、対にする、ひとつにする、ひとまとまりにする
- ・グループにする

〔文例（自動詞使役）〕

次の文例のうち、最初の例はヲ格名詞の複数性が明らかなものであり、次の例は「N・トN-ヲ」の形である。

- ・ダーシーは両手の指を絡ませ、ひねった。(マクレガー家の物語：BCCWJ)
- ・今の憲法では各議院の3分の2以上の賛成で発議され、国民投票で2分の1以上の賛成を獲得しなければならない。しかし「議員が3分の2、国民が2分の1はおかしい。過半数で国民の意思とは言えない」と異論が出て、3分の2と2分の1を逆転させる案にした。(asa2006.txt(576974))

次の例はト格名詞で広げられた構造である。

- ・(コートの男は) そしてふわりと、視線を店内におよがせ、僕の視線と交差させた。(となり町戦争)

次の2例にもヲ格名詞の複数性が含意されている。

- ・梢のほうをそよがす風が、枯葉を密集した藪の只中に降らせているのに、根方はそれと関わりがないかのように、奥の奥まで太い節を乱雑に交叉させて静まっていた。(金閣寺)
- ・どれも写真はキズが入っていて、ひどく「雨が降った」それに所々切れているのを接合させたらしく、人の動きがギクシャクした。(蟹工船)

〔文例（他動詞）〕

まず、次の例ではヲ格名詞が複数の物であることが明らかである。

- ・16年前の結婚披露宴で、5本の白いカラーの花を長いままりボンでくくってブーケにした。(asa2006.txt(1056191))
- ・誰かが、彼のことを、メビウスの輪のようだと評したことがある。メビウスの輪とは、一度ひねった紙テープの両端をまるく貼り合わせたもので、つまり裏も表もない空間のことだ。(砂の女)

次の例にも、ヲ格名詞が複数の物であることはうかがえる。

- ・二人は、名刺を交換しただけで、人間らしい言葉は一言も交わさなかったのである。(慈悲海岸：BCCWJ)
- ・僕は手袋をとってストーヴの前に行き、指先をあたためた。門番は細く割った薪を束ねて倉庫に放りこみ、裏口のドアを閉めて斧を壁に戻した。(世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド)
- ・ビートルズの「ア・ハード・デイズ・ナイト」がはじまった。カウンターの中で、いましがたテープを入れ換えたらしい店のマスターが、ハンカチで鼻のあたりをこすっているのが見えた。(新橋烏森口青春篇)

次の例では、二つの物名詞をト格でつなげたものが全体としてヲ格をとっている（「N・ト N・ヲ」）。

- ・私は本を受けとって、そこにある図版を見た。シンテトケラスは小型の馬と鹿を一緒にしたような動物で、額に牛のような二本の角を持ち、鼻先にY字形に先端がわかれた長い角を持っていた。（世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド）
- ・10月3日からは、日本古来の固有種と欧州系品種のブドウをブレンドした「登美の詩」を新発売する。（asa2006.txt(1781949)）

なお次の例は、ヲ格名詞と動詞との組み合わせがト格名詞で広げられた構造である。

- ・蒸しウニを裏ごしし、卵黄と混ぜ合わせ、アワビと和える。（先附）
- ・「おめえの売り方が悪いからだ。兵隊は最後の一本の芋は、煙草と取り替えるもんだ」（野火）

そして次の例は、《生産》的でもある。すなわち、この例におけるヲ格名詞「荷物を」「菓を」はそれぞれ、いくつかの「所持品」を「まとめる」ことによって出来上がるのが「荷物」であり、何種類かの「菓草」などを「調合する」ことによって出来上がるのが「菓」だと考えられるからである。

- ・満ちたりた下山だった。彼は口笛を吹きながら、夏沢鉱泉へ引きかえすと、いそいで荷物をまとめた。（孤高の人）
- ・「気丈な婆でう。危険があっても僕の手術を受けて死ぬのならええと、向うの方が熱心なのや。僕も初めてのことやから慎重の上にも慎重を期したいと思うて、手術にかかる先に脚気を直すように菓を調合した。（華岡青洲の妻）

1. 2 《付着》

＜N[物]-ヲ N[物]-ニ V[付着]> （含 身体部位への付着）

物への付着や挿入を表わす動詞とヲ格の物名詞との組み合わせは、その物が付着する第二の対象、その物がそこに内在するようになる第二の対象を表わす二格の物名詞で広げられて、物がある物に付着したり、ある物の中に入り込んだりすることを表わす連語をつくる。第二の対象となる具体物の表面への付着と内部への挿入があるが、以下ではとくに分けずに例を挙げる。

【Vi 使役連語】「ビニールを パックに 付着させる」「野菜を 湯に くぐらせる」

「病原菌を 軀に 巢喰わせる」

「タバコの匂いを 髪のにかに こもらせる」「蔦を 竹に からませる」

「花を 雪に 埋もれさせる」

【Vt 使役連語】「壁に 銃を もたせる」「机の足に 新聞紙を かませる」

「ガーゼに 消毒液を 含ませる」「新聞紙に 油を 吸わせる」

「子供の手に バットを 握らせる」「弟の足に 靴を はかせる」

「病人の口に 菓を 含ませる」「相手の頭に 一発 くらわせる」

【他動詞連語】「杯に 酒を 満たす」「箱に 本を 詰める」「壁に 額を かける」

「餅に きな粉を まぶす」「隙間に 新聞紙を はさむ」

「子供の手に バットを わたす」「弟の肩に スキーを のせる(のつける)」

この類の連語が表わす働きかけは、それによって、二格名詞、ヲ格名詞で表現されている

いずれの物にも変化が生じる。たとえば「杯に 酒を 満たす」は、「杯が 酒で 満ちる」ことでもあり、「杯に 酒が 満ちる」ことでもある。すべての連語にこのような対応があるわけではないが、ヲ格名詞だけでなく付着先・挿入先にも影響が及ぶのはどの連語にも共通している。

このこととも関わるが、意志動詞からの使役動詞であっても人の無意志的な動きを表現することがある。たとえば「握る、(靴を) はく、(水を口に) 含む」は意志動詞であるが、それらからの使役動詞が人名詞や身体部位名詞の二格と組み合わさった連語(「子供の手に飴を握らせる」「子供に靴をはかせる」「病人の口に水を含ませる」)は、意志的な動作の引き起こしとはいえ、「人」は意志をもった動作の主体というよりも、物の付着先という性質を帯びる。

《動詞例(自動詞派生の使役動詞)》

(1) {単純動詞}

(汚れを雑巾に) 移らせる、(花を雪に) 埋もれさせる、(蔓を竹に) からませる、(シーツをベッドの下に／野菜を熱湯に) くぐらせる、(器具を水の中に) 沈ませる、(コロン水を湯槽に／女の頬に酒／水滴を) したたらせる、(懷に刀を) 忍ばせる、添わせる、(蠅を手に) たからせる、つかえさせる、伝わせる、(ご飯を喉に) つまらせる、(玄関先に雪を) 積もらせる、(肩に粉雪を) 止まらせる、なじませる、(新しい灯心を古い灯心に) 並ばせる、(クッキーの生地をテーブルの上に) はずませる、(財布に写真を) ひそませる、(ローソクの芯にマッチを) 触れさせる、まつわらせる、(野菜に煮汁を) まわらせる

(2) {複合動詞(複合動詞のうち後項が「する」以外のもの)}

しみわたらせる@、(軀に病菌を) 巣くわせる@、(懷に鯉節を) 突っ張らせる@

【**一つかせる**】 絡みつかせる、(足に血を) こびりつかせる、(磁石に針を) 吸いつかせる、とけこませる、(賽銭箱に呼び錢を) パラつかせる、張りつかせる

【**一こませる**】 (鍬先を地面に／馬銜を体に) 食い込ませる、(ガーゼに消毒液を)

しみこませる、(スプを唇の間に／板の隙間に紙幣を) 滑り込ませる、(血を心臓に) 流れ込ませる、紛れ込ませる、割り込ませる

(3) {サ変動詞(複合動詞のうち後項が「する」であるもの)}

(3-1) {名詞相当+サセル}

吸着させる、固着させる、(車を壁に) 接触させる、(船を岸壁に) 接着させる、(粉を指先に) 付着させる、(白粉を肌に) 密着させる、(唾を相手の顔に) 命中させる

(3-2) {副詞相当+サセル}

ぴったりさせる@

《動詞例(他動詞派生の使役動詞)》

この類の他動詞は再帰的な動作を表わす他動詞がほとんどであり、その他動詞自体は《付着》の連語の要素となりうる動詞である。そうでないものはごくわずかである。

(1) {単純動詞}

- ・(弟の肩にスキーを) かつがせる、(妹の頭に帽子を) かぶらせる、(机の足に新聞紙を) かませる、(馬の背に草を) しょわせる、(赤ん坊の口にミルクを／布に水を) 吸わせる、(妹の背にリュックを) 背負わせる、(夫の手に赤ん坊を) 抱かせる、(溺れ

ている人の手にロープを)つかませる、(子供の手にはバットを)握らせる、(子供の足に下駄を)はかせる、(赤ん坊の手には手袋を)はめさせる、(馬の口に轡を／帆に風を)はらませる、(病人の口に水を／ガーゼに消毒液を)含ませる、(子供の手には菓子をもたせる⁹

- ・(相手の全身にパンチを)浴びさせる、(敵の背中に深手を／敵の胸に傷を)負わせる
- ・(相手の頭にげんこつを／パンチを／一撃を)食らわせる、(夫の脇腹に肘鉄砲を)食わせる

(2) {複合動詞 (複合動詞のうち後項が「する」以外のもの)}

(ガーゼに膿を)吸いとらせる

(3) {サ変動詞 (複合動詞のうち後項が「する」であるもの)}

(3-1) {名詞相当+サセル}

(スポイドに液を／掃除機に埃を)吸収させる、収容させる

《動詞例 (他動詞)》

(1) {単純動詞}

- ・あしらう、(柱に体重を／壁に背を)あずける、あてがう、あてる (：あたる)、浴びせる¹⁰、(びんに花を)活ける、入れる、(目に涙を)うかべる (：うかぶ)、うずめる (：うすまる)、うめる (：うまる)、おく、掲げる、隠す (：隠れる)、かける (：かかる)、重ねる (：重なる)、飾る、かぶせる、着せる、(ストーブに薪を)くべる、(桶に水を)くむ、加える (：加わる)、(弾丸を)込める、(軒先に提灯を)さげる (：さがる)、刺す (刺さる)、(ネギを冷水に)さらす、(畑に畠を)しかける、敷く、(灯心の先を油に)します、(筆に水を)湿す (：？湿る)、湿らす (：湿る)、(腰にベルトを)しめる (：しめる)、据える、(鼻緒を)すげる、添える (：添う)、そそぐ、備える、たぐる、ちりばめる、(弓に矢を)つがえる、つぐ、つける (：つく)、包む、(機械にコードを)つなぐ (：つなげる)、(車に荷物を)積む、(管に脱脂綿を)つめる (：つまる)、吊るす (：吊る)、(針に糸を)とおす (：とおる)、とかす (：とく)、ぬる、のせる (：のる)、はさむ (：はさまる)、はめる (：はまる)、はる (貼・張)、浸す (：浸る)、ぶつける (：ぶつかる)、(メッキを)ほどこす、(はたけに種を)まく、(糸巻に糸を)巻く、混ぜる (：混ぜる)、(身に)まとう、まぶす、(コップに酒を)満たす (：満ちる)、(皿に料理を)盛る、(茶碗にご飯を)よそう // (布団を日に)あてる (：あたる)、近づける (：近づく)¹¹、向ける (：向く)

- ・[身体部位に ～を Vt] に限るもの¹²

浴びる、(背に荷を)負う、(刀を腰に)帯びる、おぶう、(本を脇に)かかえる、かつ

⁹ 「もたせる」は、形態的には、「もつ」から派生した使役動詞だが、《付着》的な意味を表わすものとしてはもはや他動詞としての独立性が高い。

「壁に銃を／椅子に背を もたせる (もたせかける)」

ただこの意味では現代では「もたせかける」を使うほうが普通かもしれない。早津 (2000a) 参照。

¹⁰ 「浴びせる、かぶせる、着せる」は、それぞれ「浴びる、かぶる、着る」という他動詞と形態的に対応している。前者は、主語である人の自身への働きかけ、後者は他者へ働きかけである。

¹¹ この「(布団を日に)あてる、向ける、近づける」は、二つの物同士が触れ合うことがなく、その点では付着でも挿入でもないが、似たものとみなしてこの類にいれておく。

¹² 「～に」「～を」いずれかが、その文の主語であるものの身体部位に限られるものを別に挙げた。これらはいずれも無対他動詞である。そしてこの類は、使役動詞の例はほとんどない。

ぐ、かぶる、(着物を)着る、(キセルを)くわえる、しょう、(荷を肩に)になう、(くつを)はく、(口に水を)含む、(軍服を身に)まとう

・[身体部位を ～に Vt]に限るもの

(物陰に身を)ひそめる(：ひそむ)

(2) {複合動詞 (複合動詞のうち後項が「する」以外のもの)}

押し当てる、書き添える、けちらす、刺し通す、据え置く、たくしあげる(?)、たぐり寄せる、突き刺す(：突き刺さる)、突き出す(：突き出る)、突き立てる、突き通す、(髪を)なであげる(?)、張り出す、引っ込める // 投げ出す、ほうり出す (この2つは《除去》でもある)

[一つける] 押しつける、飾りつける、絡みつける(：絡みつく)、切りつける、括りつける、しばりつける、据えつける、たたきつける、作りつける、(書類に表紙を)とじつける、とりつける、(髪にポマードを)なでつける、縫いつける、貼りつける(：貼りつく)、(板にペンキを)吹きつける、巻きつける、結びつける、盛りつける

[一こむ] (釘を)打ち込む、押し込む、折り込む、刻みこむ、切り込む、組み込む、くわえ込む、差しこむ、しよいこむ、吸い込む、すり込む、背負いこむ、注ぎ込む、たくしこむ、畳み込む、突っ込む、包みこむ、積み込む、とかし込む、(洗濯物を)取り込む、流し込む、投げ込む、縫いこむ、(ポケットに新聞紙を)ねじこむ、挟み込む、はめ込む、引き込む、(空気を)吹き込む、ほうりこむ、巻きこむ、持ちこむ、盛り込む

[一いれる] (穴に)落とし入れる、組み入れる、繰り入れる、吸い入れる、注ぎ入れる、とかし入れる、流し入れる、投げ入れる、引き入れる、混ぜ入れる

[一かける] 浴びせかける、(下駄を)つかかける、投げかける、(コートを)ひっかける、(息を)ふきかける、ぶっかける、(塩を)ふりかける

これらの例にうかがえるように、複合動詞には前要素が《変化》、後要素が《付着》の動詞という構成であるものが多く、とくに後要素が「つける、こむ、いれる、かける」であるものが多い。要素となる動詞には有対他動詞も多いのだが、できあがった複合動詞には有対他動詞は少ない。

(3) {サ変動詞 (複合動詞のうち後項が「する」であるもの)}

(3-1) {名詞相当+スル}

掲示する、固定する、混入する、(火薬を薬莢に)充填する、接続する、設置する、接着する、装着する、(ピストルに弾を)装填する、挿入する、装備する、注射する、注入する、点火する、添加する、添付する、投函する、搭載する、投入する、導入する、納入する、付置する、包装する(?)、保存する、満載する

(3-3) {その他}

配する

なお、次のような特徴のあるものが、上の種類にまたがって存在するので、ここにまとめて挙げておく。

・[～を NV (VN) (に)する≡～を Nに V]

<「蜜柑を箱詰めする≡蜜柑を箱に詰める」>

蔵入れする@、箱詰め(に)する // 点眼する、入棺する、納棺する // 串刺しにする、横付けにする // 粕漬けにする、酢漬けにする、糠漬けにする、味噌漬けにする

- ・[～を ～に NVする⇔～を ～に Nで V]
糊づけする、ハンダづけする
- ・[～に VN(を)・する・～に Nを V]
出店する、出品する、注水する、注油する、納品する、輸血する // 当て布をする、さし歯をする、そえ木をする、接ぎ木をする、詰め物をする
- ・[～を NV⇔Nに ～を V] (「荷物を背負う⇔荷物を背に負う」)
背負う (cf. 荷物を両肩に背負う)
- ・“書く” ことに関するもの。 cf. 《生産》ともいえる。
書き入れる、書き写す、書き込む、書き添える、書きとめる、書き残す // 記載する、記入する、記名する、記録する、掲載する、連載する

〔文例（自動詞使役）〕

文例を、二格名詞の性質によって分けて提示する。まず、次の例は、主語である人が、ある物を自身の身体部位や所持物に付着させたり通したりすることを表わしている。

- ・「栄養豊富、滋味強壮」の力士は豹のパンツをつけ、革のサンダルをはき、手にボケット猿をとまらせて野外劇場の舞台を歩いた。(巨人と玩具)
- ・かれはアシュレイを押し出し、かたくなな頬に涙のつぶをこびりつかせた弟がアシュレイをたすけ起すために体を屈めるまゝにドアを再び閉ざした。(戦いの今日)
- ・ルートはいつでも手渡せるよう、黄色いリボンを飾った江夏の野球カードを、そつとポケットに忍ばせた。(博士の恋した数式)
- ・だが、信介はそのバッグの中に、彼女が本を滑り込ませるのを見てはいない。(青春の門：BCCWJ)
- ・シャンプーをよく洗い流した髪にリンスをくぐらせ、洗い流す。(おうちでエステ！：BCCWJ)

一方次の例は、主語である人が、自身の身体部位を他の物に付着させることを表わしている。

- ・「おい、上げるんだ！」石の中にでもめり込ませそうな力をこめて、十本の指を、こぶだらけのローブにからみつかせ、あらんかぎりの声をふりしぼるのだ。(砂の女)

次の例は、物を他の物に付着させることを表わしている。

- ・テーブルに視線を戻すと、白いテーブル・クロスに、誰かが滴らせてしまったらしいシチューが一滴、ポツリとついていた。(一瞬の夏)
- ・本間は思い浮かべた。彼女が床に掃除機をかけているところを。ボロ布にしみ込ませたガソリンで、換気扇の羽根を拭いているところを。(火車)
- ・ガラス板の下部に光源を備え、原板とデュープフィルムをガラス板上に密着させてふたを閉じ、タイマー露光を行う。(放射線写真学：BCCWJ)
- ・当時、天野容疑者が担当の弁護士以外との接触や連絡を禁じられていたにもかかわらず、刑務官は組関係者への指示や知人への伝言を記した手紙を、別の収容者の手紙に紛れ込ませるなどして投函（とうかん）したとされている。(asa2006.txt(1637746))
- ・「全てそちらの指示通りにした」 亜矢子の返答に、弦間は苦々しい顔で携帯をマイクに接触させ、亜矢子の声が、スピーカーから再度流れ出した。(そして粛清の扉を：BCCWJ)

〔文例（他動詞使役）〕

他動詞使役のほうも、文例を二格名詞の性質によって分けて提示する。まず、次の例は、主語である人が、ある物を他者に付着させることを表わしている。

- ・「私だって親です。どこのお母さんとも変わらない母親です。あの子にランドセルを背負わせて、一回だけでもいい、学校というところの門をくぐらせてみたかった。たとえ一日だって、このことを思わなかった日など、ないのです。」（障害児と教育）
- ・レースのハンカチで目を押さえて、改札のところでちかちゃんは私に雄一の泊まる宿の地図と電話のメモをくしゃつとにぎらせた。（キッチン）

次のように、他者の身体部位や身につけている物への付着であることを「人ノ N 二」の形で明示的に表わしているものもある。

- ・若者は予科練の手に小遣いを握らせ、逃げろというふうに背中を押した。（地下鉄に乗って）
- ・「できたわよ」と草履を少年の足にはかせると、みち子はきょとんと立ちつくす少年の掌を祈るように握りしめた。（地下鉄に乗って）
- ・そのそばで、リヤカーに氷積んだ男、シャツシャツと氷を鋸でひき、その削りカス拾って、節子の唇にふくませる。（火垂るの墓）
- ・かあちゃんは、背中の中をうまいぐあいにまえへだきかかえると、リンゴちゃんの背中へしよわせた。（長崎源之助全集：BCCWJ）
- ・おれはからかい半分に、先生のズボンにキャハンををはかせたんだが、先生はそのキャハンを巻きつけたまま、一生懸命に、おれのために走りまわってくれたのだ。（路傍の石）

次の例は、「口」と「手」への付着の働きかけが、一方は他動詞で他方は使役動詞で表わされている。

- ・影山はモルヒネを二錠ミョンの口に押しこみ、尻ポケットから取出して蓋を外したスキットルをミョンの左手に持たせる。（暴力租界：BCCWJ）

以上の例は人の身体部位のからむ付着である。この類の使役動詞の原動詞は意志動詞であるが、「人ニ N ヲ V[付着]」であれ「人ノ N ニ N ヲ V[付着]」であれ、上にあげたような文においては二格名詞で表わされている人の意志性はきわめて希薄である。

さて次の例は、物を他の物に付着させることを表わしている。

- ・サンドイッチにはバターを塗るのがあたり前になっていますが、それはただ単においしくいただくためだけでなく、中にはさむ素材の水気をパンに吸わせないためです。（死ぬまで元気！あなたの寿命は食事で延ばせる：BCCWJ）
- ・それを布の上から軽く抑え、布に汗か膿を吸いとらせるより他にどうすることも出来ないのだ。（黒い雨）
- ・こすると、しみを広げることになるので、ティッシュペーパーやハンカチに吸収させるか、あて布をして叩いてしみを落とすなどの応急処置をする。（新・家政学概論：BCCWJ）
- ・化粧水を含ませたコットンを頬にあてながら、陽子は訊いた。（ビタミン F）

〔文例（他動詞）〕

他動詞の文例も、まず次の例は、主語である人が、自身の身体部位や身につけているものへ何かを付着させることを表わしている。

- ・山口の机の上にスーツケースが置かれ豊がヘッドホンを両耳にあてがう。(グリーンボール：BCCWJ)
- ・そのまま受話器を耳に押し当てていると、河野さんはいきなり笑いだした。(やわらかい扉：BCCWJ)
- ・十四、五人の子供たちは、すぐそれぞれ家へ戻って行ったが、みんな首に襟巻を巻きつけ、腰に手拭いをつけ、途中で切れる心配のない藁草履を履いて、又話所集って来た。(あすなろ物語)
- ・そばによってみると、おかしなことには、水島はルーンジをしていないので、その代りに大きなバナナの葉を腰に巻いています。(ビルマの堅琴)
- ・金属バットを肩にかついだ和志が通りかかると、下級生が「こんにちは」と挨拶する。(口笛吹いて：BCCWJ)
- ・何もかも私が招いたのです。その罰を、自分はこの十年間にわたって受けつけて来たのだ、そう思わずにはいられない気持ちになって、私は自分でも気づかないくらい多量のウィスキーを喉に流し込んで行きました。(錦繡)
- ・五千円札をズボンのポケットに押し込んで、ぼくはなんだかすこし落着かない気持ちになっていた。(新橋烏森口青春篇)

次の最初の例は、主語である人の、他者への付着、それ以降の例は他者の身体部位への付着である。

- ・老母は、官界から実業界へはいった亡夫の遺産で、充分暮しが立ち、三人の嫁に、ときどき着物を作って 着せるのを楽しみにしていた。(鎖)
- ・三田さんは、恵さんの手に二万円を渡しバスに乗り込んだ。(命を救え！愛と友情のドラマ：BCCWJ)
- ・祐太は道に落ちた雑巾を拾って、それを再度、相手の顔にぶつけ、遅れて駆けつけた乱人が相手の一人に前蹴り攻撃を加えた。(夕焼け学校：BCCWJ)
- ・ふいにあたしは眠りたいとおもいました。パパとの長い旅行、瀬戸内海の島をめぐる旅行で少し疲れていたのです。パパの胸に頭をおしつけてそのことを知らせようと思いました。(聖少女)
- ・影山はモルヒネを二錠ミョンの口に押しこみ、押しこみ、尻ポケットから取出して蓋を外したスキttlをミョンの左手に持たせる。(暴力租界：BCCWJ)

次の例は、上のような類ではない、物への付着を表わしている。

- ・自分の部屋と、夫の住居と、別の男のアパートと、三つの鍵を一つのキイ・ホルダーにつけておくのが、もともと間違ったことなのであろう。(安西篤子・山本道子・岩橋邦枝・木崎さと子：BCCWJ)
- ・そこで、エプロンをはずして、そばの木のえだにつるしました。(おかあさんになったつもり：BCCWJ)
- ・夜はまだすっかり明けきってはいない。しかし仕々に人が群れている。異様に殺気立った雰囲気はひしひしとこちらにまで伝わってくる。人々は手に手に竹槍も持ち、抜身の大刀を地に突き刺している者もある。(楡家の人びと)
- ・私は電話をきり、あき缶をごみ箱に投げ入れた。(きらきらひかる：BCCWJ)
- ・本店で一番人気があるのは、串刺しにして焼いたホタテ貝に、黄色く色づけしたレモングラスソースを添えたもの。(asa2006.txt(2528261))
- ・通勤や出張などで車を使うときは、助手席のドアなどに「子どもの安全見守ります」

などと記載した磁石のステッカーを掲示するという。(asa2006.txt(64284))

- ・滝の奥には人が一人やっと通れるほどの大きさの洞窟があり、それをまっすぐ進むとつきあたりに鉄の扉がついていた。男は雨合羽のポケットから小型計算器のようなものをとりだし、それを扉のスリットに挿入してしばらく操作していたが、扉はやがて音もなく内側に開いた。(世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド)
- ・群馬県桐生市のキノコ種菌メーカー・森産業によると、国内で流通する生シイタケは、おがくずのかたまりに栄養分を添加した菌床で栽培されたものが多いという。(asa2006.txt(348646))
- ・きせるにたばこをつめる手をとめて、六さんはあらためて信夫の顔を見た。信夫は、きょう結納をいれることを思い微笑した。(塩狩峠)
- ・ロープに背をあずけた内藤は、ほとんどすべてのパンチをグローブでカバーし、頃合を見て堀畑の体を両手で突き放した。(一瞬の夏)
- ・庄九郎は鞍から降り、馬をそばの柿の木につないだ。(国盗り物語・斎藤道三)
- ・久子はふっと溜息をつき、刑事の顔をながめ、しばしだんまりのまま見合っていたが、刑事は閉口して、まだ手にしていた写真の束を机にたたきつけると、戸をあけて廊下に待機していたらしい婦人警官を呼びこむ。(死児を育てる)
- ・キャベツは細いせん切りにして冷水にさらし、パリッとさせます。(成人病(生活習慣病)の献立 1600～1700 キロカロリー：BCCWJ)
- ・私たちのすぐ後から、逆探知装置を電話機に設置するため警察の人達がやって来て、いろいろと説明を始めましたが、私はただ、上の空で聞いていました。(淳：BCCWJ)

次の例における二格名詞は、物とはいえ場所性も強い物であり、そういった物への付着は、次に述べる〈設置・収容〉に近くなる

- ・新九郎はその肘に第二の矢を射て、木立ちに半身をひそめて言った。(義の旗風：BCCWJ)
- ・07 年から大量定年を迎える「団塊の世代」の男性向けに遊び場所を提供しようと、玩具・ゲーム大手バンダイナムコホールディングスは来春、模型づくりや陶芸を楽しむ新しいタイプの娯楽施設「玄創工房」(仮称)を横浜市に出店する。(asa2006.txt(583665))
- ・湯船に湯を満たし、いつもより時間をかけて浸かっていた。(情事：BCCWJ)

この《付着》類の他動詞のうちのいくつかは、《変化》の連語もつくる。たとえば、次の左側は《付着》、右側は《変化》である。

《付着》

《変化》

「かざる」：部屋に 花を飾る / 部屋を 花で 飾る
「ぬる」：壁に ペンキをぬる / 壁を ペンキで ぬる
「しめる」：腰に ベルトをしめる / 腰を ベルトで しめる
「満たす」：杯に 酒を満たす / 杯を 酒で 満たす

同様なことが、使役動詞の場合にもわずかが見られる。

「つまらせる」：喉に ご飯をつまらせる / 喉を ご飯で つまらせる
「突っ張らせる」：懷に 鯉節を突っ張らせる / 懷を 鯉節で 突っ張らせる

1. 2 (ア)〈設置・収容〉

＜N[場所]-ニ N[物]-ヲ V[付着]＞

大きくは《付着》にまとめられるが、ニ格名詞が場所名詞（組織性をもつものも含む）である連語は、ヲ格名詞が表わす具体物をその場所に存在するようにすることをより明確に表現する。

【Vi 使役連語】「島全体に 樹木を 密生させる」「芝生の間に 小道を うねらせる」

【Vt 使役連語】「施設に 病人を 収容させる」

【他動詞連語】「図書館に 本を 備えつける」「博物館に 出土品を 収蔵する」

＜動詞例（他動詞派生の使役動詞）＞

(1) {単純動詞}

納めさせる、たくわえさせる、ためさせる

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+サセル}

格納させる、吸収させる、収蔵させる、（施設に怪我人を）収容させる、所蔵させる、蓄積させる、貯蔵させる、備蓄させる、保管させる、保存させる

＜動詞例（自動詞派生の使役動詞）＞

(1) {単純動詞}

（芝生の間に道を）うねらせる@、（低い地に黒い煙を）みなぎらせる

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+サセル}

（懷に二つの谷を）発達させる、（島全体に樹木を）密生させる

＜動詞例（他動詞）＞

(1) {単純動詞}

いただく、（頂上に雪を）いただく、浮かべる（：浮かぶ）、納める、しつらえる、しまう、据えおく、備える、（倉庫に食料を）たくわえる、たてる

(2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}

備えつける

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+スル}

安置する、格納する、収蔵する、収納する、収容する、常設する、常置する、積載する、設営する、設置する、増設する、貯蔵する、定置する、導入する、配置する、備蓄する、敷設する、保管する、保存する

この類の連語におけるニ格名詞は、物が存在するようになる場所を表わすのではあるが、そのニ格名詞が組織性も有するものである場合には、物を所有する主体という意味合いももつようになり、「N[場所(組織)]-ニ N[物]-ヲ V[付着]」とも「N[場所(組織)]-ガ N[物]-ヲ V[付着]」ともいえるようになることがある。

「施設に 病人を 収容させる」と「施設が 病人を 収容する」
「図書館に 車いすを 備えつける」と「図書館が 車いすを 備えつける」
「博物館に 出土品を 収蔵する」と「博物館が 出土品を 収蔵する」

〔文例（他動詞使役）〕

- ・あの行助少年を家庭裁判所に送り、そこから身柄を少年鑑別所に収容させる、と思うと、彼はなんとも割りきれない感情になっていた。（冬の旅）

〔文例（自動詞使役）〕

- ・日本では聖なる空間は、同時に俗なる遊興の場を周辺に発達させていく。（世界の都市の物語：BCCWJ）
- ・まだ愛好家も少なく、人気はいまひとつの山野草ですが、株全体が分枝して細い葉をたくさんつけます。葉や茎には銀白色の絹毛を密生させ、シルバーリーフプランツの代表的な種類の一つです。（asa2006.txt(1110410)）

〔文例（他動詞）〕

- ・公演のための台本作りから練習や当日の公演に至るまで、前述のサブタマンダラ劇団出身のフリーランスの役者から指導を受け、練習場にはガムランを一セット備えた隣村の芸能好きの老人の家が開放されていた。（国民文化が生れる時：BCCWJ）
- ・内藤は試合の日まで何度か体重を計る必要があったが、ホテルにはプールに備えてある簡便なヘルスメーターしかなかった。（一瞬の夏）
- ・院長室に保管している彼等の身上調書をのぞいてみよう。（冬の旅）
- ・また、柵囲い道路に挟まれた空間には、連続した屋敷割りが認められ、掘立柱建物に井戸を配置する居住空間として活発に利用されたことが明らかである。（中世の michi を探る：BCCWJ）
- ・契約者の住所、氏名、保険の種類を1件1枚に記入し、束にして金庫に保管していた。（asa2006.txt(264938)）
- ・彼のひろい肩幅のうしろには、雪をいただいた金閣がかがやき、洗われたように青い冬空が潤んでいた。（金閣寺）※「屋根に雪をいただく」

次の例は、上述した「N[場所/組織]・ガ N[物]・ヲ V[付着]」という構文をとっているものである。

- ・製作技術の保護団体として、青森市沖館の「みちのく北方漁船博物館」を事務局とする保存会が選ばれた。同館は各地から収集したムダマハギなどを保存している。（asa2006.txt(126717)）
- ・1964年に日本IBMからシステム360シリーズと呼ばれるコンピュータシステムが発表され、翌1965年に東海銀行が第1号機を導入した。（商学通論：BCCWJ）
- ・爆発の様子を伝えた地元テレビ局「チャンネルズ」は、ナイジェリア赤十字が「50人の遺体を収容した」としている。（asa2006.txt(912721)）

ところで、「たくわえる」は、奥田（1968-72[1983]）では「第二章 所有のむすびつき」のうちの「(b) ものもち」の連語をなす動詞とされているものだが、二格の場所名詞と組み合わせあって〈設置・収容〉の連語をつくっている。

- ・サンスケ氏は下宿の部屋に一月分の食料をたくわえ、一か月は外出しなくてもすむように準備をした上で、身体中の毛を一本のこらず、カミソリでそり落してしまったのである。(ブンとフン)
- ・これらの小屋で共通していることは、入口に杉や檜の枯葉や青草を蓄えていることであつた。(黒い雨)

1. 2 (イ)〈放置〉

＜N[物]-ヲ N[自然現象]-ニ V[自然現象＞

ヲ格の物名詞と自然現象を表わす動詞との組み合わせは、自然現象を表わすニ格の名詞で広げられて、物をその自然現象にさらすことを表現する。自動詞使役、他動詞使役、他動詞いずれにもこの連語構造がみられる。

【Vi 使役連語】「幅広な葉を 風に そよがせる」「髪を 風に なびかせる」

「冬の日に 前窓を 反射させる」

【Vt 使役連語】「雨に 全身を うたせる」「微風に 髪を 吹かせる」

「清流の響きに 耳を なぶらせる」

【他動詞連語】「雨に 全身を ぬらす」「野菜を 寒風に さらす」「北風に 身をさらす」

これらのニ格名詞は、文法的な意味が動作の対象というよりも状況的な性質もっており、そのことは語順とも関係している。ニ格名詞は状況的なものである場合ほど、ニ格名詞がヲ格名詞に先行する「～に ～をV」という語順になりやすいように思われる（「雨に全身をうたせる」「北風に身をさらす」）。

《動詞例（自動詞派生の使役動詞）》

(1) {単純動詞}

(葉を風に) そよがせる、(そよ風に髪を) とかせる、(春の風におかっぱ髪をうしろに) とばせる(?), (髪を風に) なびかせる、(車体をネオンに) 光らせる

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+サセル}

(冬の日に前窓を) 反射させる

《動詞例（他動詞派生の使役動詞）》

(1) {単純動詞}

(波に足を) 洗わせる、(雨に頬を／夜露に髪を／波に木々を) 打たせる、(雨にサンゴを) たたかせる、(月光に頬を) 照らさせる、(空気に頬を／清流の響きに耳を) なぶらせる、(風に髪を) 吹かせる

《動詞例（他動詞）》

(1) {単純動詞}

- ・(寒風に肌を／北風に身を) さらす、(破ったノートを風に) 散らす(：散る)、(短い髪を風に) 乱す(：乱れる)

- ・(雨に全身を)ぬらす(:ぬれる)
- (3) {サ変動詞(複合動詞のうち後項が「する」であるもの)}
- (3-1) {名詞相当+スル}
- 放置する@
- (3-2) {副詞相当+スル}
- [～を NVにする⇔～を Nに V]
- 雨晒しにする、寒晒しにする、野晒しにする

〔文例(自動詞使役)〕

- ・「おまえたちはいい。それよりも、城を守れ」そう告げて、それぞれに、竹切れや棒切れを持たせ、その先に金紙や銀紙などをちらつかせた。あるいは金扇、銀扇などを結び合わせて、キラキラと陽光に光らせた。(小説毛利元就：BCCWJ)
 - ・冬日に前窓を反射させながら迫ってくる自動車の流れ……(宴のあと)
- 次の「なびかえる」「そよがせる」は、「1.1 (ウ)〈振動の引き起こし〉」と関係がある。「マントを風になびかせる」「葉を風にそよがせる」は、<N[物]-ヲ N[自然現象]-ニ V[自然現象]>という(放置)の連語だが、「(風が)マントをなびかせる」「(風に)葉をそよがせる」という連語は〈振動の引き起こし〉となる。
- ・西欧の人々にとって、ローマ帝国最後の皇帝は、紅の大マントを風になびかせながら、白馬を駆って、天空の彼方に永遠に去ってしまったのであろう。(コンスタンティノープルの陥落)
 - ・ポプラが高々とそびえ、きれいな黄色の葉を風にそよがせている。(黒白の旅路：BCCWJ)

〔文例(他動詞使役)〕

- ・はじめは、はしゃいで、裸を雨にうたせたりしていたおまえも、ついに追いつめられて、泣きだしてしまった。(砂の女)
- ・文字通り彼らは、じぶんのいのちを削って生きる。厳寒でも裸足で、腫物のつぶれたきたない背中を、雨に洗わせて走る。(上海読本：BCCWJ)
- ・いつものように濃紺の布を頭に巻き、余った布端を風になぶらせ、落ち着きはらっている。(海賊モア船長の憂鬱：BCCWJ)
- ・志乃は、あつい日なかに、私にさえ無縁の街を右に左にひきまわされて、けれども、風に乱された髪の毛が汗の額や頬にはりついているちいさな顔を、無邪気に風になぶらせていた。(忍ぶ川)

上の例の二格名詞は「雨」「風」という動きのある自然現象であるが、次の例では「光」である。

- ・石を手に取り、光に反射させながら石の表面に浮かび上がる万華鏡のような輝きをながめてください。(恋するクリスタル：BCCWJ)

〔文例(他動詞)〕

- ・つよい日ざしと海風に顔をさらしたまま、もうごまつぶほどにしか見えない人のすがたとともに、岬の村を心の中にしみこませるように、いつまでも目をはなさなかった。(二十四の瞳)

- ・私以外にも、雨の舗道を走っている人たちが大勢いた。雨に髪や衣服を濡らしながら、しかし男も女もどこか愉しそうな、嬉々とした声をあげていた。(一瞬の夏)
- ・私は、風に素足をさらして、……歩いたが、(素足の娘)
- ・岩陰から、イガの長身が現れた。今日は覆面を取り払い、赤アザの顔を陽にさらしている。(遙かな武田騎馬隊：BCCWJ)
- ・{私は} 窓をあけて北風に身をさらした。(金閣寺)
- ・私はルーズリーフの手帳を取り出して数ページを破り、びりびりにちぎって風に散らす。(北帰行)
- ・ケネディは、……短い髪を風に乱していた。(アメリカと私)
- ・化野は古くより、身元のわからない死者を運んで野ざらしにする地区だからだ。(猿飛佐助：BCCWJ)

これらの連語が文の中で用いられるときの特徴として、「～を」が身体部位や物の部位である場合、この類の動詞は、「人／物が ～に ～を Vして、……スル」という複文の従属節に使われることがしばしばあり、主節で表現される事態の付帯状況を示すものとなる(「少女たちが長い髪を風になびかせて颯爽と歩いている」「タクシーが冬の日に前窓を反射させながら走り去る」「二人はそよ風に髪をとかせてたたずんでいた」「人々は雨に全身をぬらして立ちつくしていた」)。上の例のなかにもそのような構造のものがある。

1. 3 《除去》

＜(N[物]-カラ／ノ) N[物]-ヲ V[除去]>

何かに付着したりその一部になっていたりする物を、それからとりはずすことを表わすのが《除去》の連語である。とりはずしを表わす動詞とヲ格の物名詞との組み合わせは、その物がもと付着していた対象をカラ格やノ格で表現することができる。他動詞は豊かであるが、使役動詞はあまり多くない。

【Vi 使役連語】「風呂桶から 水を あふれさせる」「目から 涙を ほとばしらせる」
「風呂桶の水を あふれさせる」

【他動詞連語】「壁から 賞状を はずす」「溶液から 不純物を 取り除く」
「壁の賞状を はずす」「田の稲を 刈る」「レモンの汁を 絞る」

《動詞例(自動詞派生の使役動詞)》

(1) {単純動詞}

(風呂桶から水を) あふれさせる、(肌から汚れを) 浮き上がらせる、なくならせる、(目から涙を) ほとばしらせる

(3) {サ変動詞(複合動詞のうち後項が「する」であるもの)}

(3-1) {名詞相当+サセル}

(水分を) 蒸散させる、(アルコールを) 蒸発させる

《動詞例（他動詞）》

(1) {単純動詞}

えぐる、(化粧を) 落とす(：落ちる)、刈る、こぼす(：こぼれる)、すすぐ、ちぎる(：ちぎれる)、(芽を) つむ、(水分を) とばす、とる、(ビールの栓を) ぬく、脱ぐ(：脱げる)、のける(：のく)、除く、(庭の落ち葉を) 掃く、はぐ(：はげる)、はずす、はなす(：はなれる)、(洋服の埃を) はらう、(額の汗を) 拭く、(皮を) むく(：むける)、むしる、もぐ(：もげる)

(2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}

- ・おしのける、切り抜く、切り離す、切り払う、くり抜く、取り去る、とりのける、とりのぞく、とりはらう、払いのける、ひきちぎる、ひきぬく、ひきはぐ、ひきはなす、ひきしる、ひきぬく、振り落とす、振り払う、もぎはなす、焼き払う

【一だす】(この語群は、後述する《移動》的でもある)

えぐりだす、押し出す、(水を) かきだす、かつぎだす、切り出す、蹴り出す、絞り出す、吸い出す、積み出す、つり出す、取り出す、投げ出す、掃きだす、吐き出す、運び出す、引きずり出す、引っ張りだす、ほうりだす、掘り出す、持ち出す

【一とる】 えぐりとる、刈りとる、切りとる、こすりとる、こそげとる、しぼりとる、抱きとる、ちぎりとる、つみとる、ぬきとる、はぎとる、ふきとる、むしりとる、もぎとる

【一おとす】 洗いおとす、かきおとす、切りおとす、剃りおとす

【一はずす】 おしはずす、とりはずす、ひきはずす

二つの動詞から成るこれらの複合動詞は、前要素が《接触》や《変化》、後要素が《除去》の連語をつくる動詞であるものが多く、とくに後要素が「だす、とる、おとす」のものが目立つ。意味的には、“前要素が表わす動作を行うことによって、後要素が表わす変化を引き起こす”ことを表わしている。

- ・間引く

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+スル}

一掃する、駆除する、除去する、切除する、貸出する、摘出する、排出する、発掘する、搬出する

(3-1') 二字漢語から成るサ変動詞には、二つの要素の一方が物(N)を、他方が取り除きの動作(V)を表わすものがある。

- ・[～を NV (VN) する ⇐ ～を Nから V]

蔵出しする、出庫する

(「商品を蔵出しする ⇐ 商品を蔵から出す」「品を出庫する ⇐ 品を庫から出す」)

- ・[～を NV (VN) する = ～のNを V]

水切りする、水抜きする、雪掻きする // 除湿する、除雪する、脱臭する、脱色する、脱水する、排気する、排水する、抜糸する、抜歯する、放水する、(消毒する(?))

(「野菜を水切りする ⇐ 野菜の水を切る」「道路を除雪する ⇐ 道路の雪を除く」)

- ・[～から VN する ⇐ ～のNを V]

採血する、搾乳する、搾油する、脱脂する

(「患者から採血する ⇐ 患者の血をとる」「若い牝牛から搾乳する ⇐ 牝牛の血をとる」)

(3-2) {副詞相当＋スル}

根こそぎにする

〔文例（自動詞使役）〕

- ・「そんなにおっしゃられると、こちらはもう……ほんとうに先生から助からぬ命を頂戴いたしました」と云い、両眼から涙を溢れさせた。(白い巨塔(一))
- ・マダムが、ふき取り用クレンジング化粧水「クレンジングエクスプレス」(300ml 1575円)を読者35人に。洗浄成分が毛穴の奥のメイクや汚れを吸着し、肌から浮き上がらせて落とすという。(asa2006.txt(1544449))
- ・可決された惑星の定義では、自分の軌道の近くから、他の天体をなくならせてしまっていることが条件の一つ。冥王星は周囲に似たような氷の星が無数にあるため、この条件を満たさなかった。(asa2006.txt(2549752))
- ・偶然安定した気圧の下に、太陽が平均した熱を海面に注ぎ、絶えず一定量の水蒸気を蒸発させる以上、一定の位置に、同形の雲を生じるのになんの不思議はなかった。(野火)

〔文例（他動詞）〕

- ・各種の病原細菌が発見されるにつれ、それらの菌の作る毒素の研究も盛んになり、細菌培養液から細菌を取り除く濾過の方法が開発され濾過液の毒性の研究がなされた。
(21世紀生命科学・バイオテクノロジー最前線：BCCWJ)
- ・私は背広から一枚ずつメモを取り外していった。(博士の愛した数式：BCCWJ)
- ・僕は仰向けになったままタオルを顔の上からはずして老人に訊ねてみた。(世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド)
- ・阿片相場の波に乗って数倍のもうけをあげ、あとで仕入値だけを追徴されるのとはわけがちがう。星の社をつぶすのが目的だ。星のからだから肉を大量に切り取り、力を弱め、倒そうとしているとしか思えない。(人民は弱し官吏は強し)
- ・そこから三ツヶ谷山の登り口まではほぼ平坦だった。シールがめくれかえって役に立たなかった。彼はシールを取り除いた。(孤高の人)
- ・自分にはすでに勤め人としてやっていく意思がないのではないか。いや、意思というよりもあの病気が自分のそんな能力を根こそぎにってしまったのではないか。(薄曇りの肖像：BCCWJ)
- ・裏手へまわる。菊のすがれている素朴な小庭がある。高いところにしつらえた水槽がある。夏のあいだ水泳からかえった客が、体についた砂を洗いおとすためのシャワーがその水槽から下っている。(金閣寺)
- ・「日本では、そういったヌード写真の一部分には、たいてい特殊インクが塗られていて、そのインクをどうやって除去するかが、男たちの間での大問題なのだ。……」(若き数学者のアメリカ)

次の「採血する」「水抜きする」は、先に動詞例の(3)で示した[～から VN する⇐ ～の N を V]にあたる例である。

- ・ヘギョンさんから採血した政府は、めぐみさんのへその緒や母早紀江さんのDNAと照合、めぐみさんの娘と証明された。(asa2006.txt(1264770))
- ・小さく切った大根、ニラ、セリ、タマネギ、ニンニクなどに、だし汁と唐辛子の粉末

を加えた上で、あらかじめ水抜きした白菜に詰め込み、たるの中に積んでいく。
(asa2006.txt(2374656))

この《除去》類の他動詞のうちのいくつかは、《変化》の連語もつくる。たとえば、次の左側は《除去》、右側は《変化》である¹³。

《除去》 《変化》

「掃く」： 庭の落ち葉を 掃く / 庭を 掃く

「刈る」： 田の稲を 刈る / 田を 刈る

「洗う」： 雑巾の汚れを 洗う / 雑巾を 洗う

「絞る」： レモンの汁を 絞る / レモンを しぼる

一方使役動詞のほうは、このような性質をもつものはほとんどない。

「あふれさせる」： 風呂から 水を あふれさせる / 風呂を あふれさせる
なお、このような二重の性質は、先述の《付着》にもみられたものである。

1. 4 《移動》

<N[物]-ヲ N[場所]-カラ N[場所]-ニ／ヘ／マデ V[移動]>

物の存在場所を変える働きかけを表わす動詞とヲ格の物名詞との組み合わせは、元の存在場所を表わすカラ格の名詞や、移動後の存在場所を表わすニ格・ヘ格・マデ格の場所名詞で広げられて、物の移動を引き起こす働きかけを表わす《移動》の連語をつくる。

【Vi 使役連語】「砂箱を 玄関から 勝手口に 移動させる」「気球を 空に あがらせる」

「雪煙を 空に 舞い上がらせる」

【他動詞連語】「野菜を 千葉から 東京まで 運ぶ」「荷物を 棚に あげる」

先に述べてきた《付着》《除去》とこの《移動》との関係について簡単にみておく。基本的には、前者は二つの物の間の関係であって一方が他方に付着するようになったり、一方が他方から取り除かれたりすることを表わすのに対して、後者は、ある物がある場所から他の場所へ存在場所をかえることである。

「切手を 葉書に 貼る」「綿に 消毒液を しみこませる」《付着》

「切手を 葉書から はがす」「りんごの皮を むく」《除去》

「机を 教室から 外に 出す」「気球を 空に 上がらせる」《移動》

ただし、実際には、カラ格・ニ格などの名詞を物とみなすか場所とみなすかがわかりにくいものも少なくない。

「コーヒーに 砂糖を 入れる」と「金庫に 荷物を 入れる」

「溶液から 不純物を とりのぞく」と「ホームから ゴミ箱を とりのぞく」

¹³ 他に次のようなものがある。「(汚れを／首を) ぬぐう」「(ほこりを／服を) はらう」「(汗を／額を) 拭く」

《動詞例（自動詞派生の使役動詞）》

(1) {単純動詞}

(気球を空に) 上がらせる、(蜜柑を) 転がらせる、(茄子を鍋底に) 沈ませる、(箱櫃を／担架を) 滑らせる

(2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}

(池の魚を) 浮き上がらせる、(ステージを) 迫り出させる、(木を) 跳ね上がらせる、(落ち葉を) 舞い立たせる

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+サセル}

- ・(網を) 移動させる、上下させる、沈殿させる、浮上させる
- ・スライドさせる

《動詞例（他動詞）》

(1) {単純動詞}

上げる（：上がる）、集める（：集まる）、移す（：移る）、送る、おつことす（：おっこちる）、落とす（：落ちる）、おろす（：おりる）、沈める（：沈む）、(駒を) 進める（：進む）、ずらす（：ずれる）、出す（：出る）、届ける（：届く）、投げる、運ぶ、ほうる、(隣家に回覧板) まわす（：まわる）、戻す（：戻る）、寄せる（：寄る）

(2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}

送り込む、送り届ける、投げ降ろす、ぶんなげる、放りなげる、持ち帰る、持ち運ぶ

【一あげる】 おしあげる、蹴りあげる、掬い上げる、だきあげる、つまみあげる、つりあげる、投げ上げる、ひきあげる、ひろいあげる、ほうりあげる、まきあげる、まくりあげる、もちあげる（：もちあがる）

【一だす】 おしだす、かつぎだす、とりだす、なげだす、はきだす、ひっぱりだす、ほうりだす、もちだす

【一よせる】 吸い寄せる、手繰り寄せる、取り寄せる、引き寄せる

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+スル}

- ・移築する、移動する（Vi としても）、運搬する、回漕する、空輸する、持参する、送付する、放出する、放流する

【口送する】 移送する、運送する、直送する、転送する、配送する、発送する、搬送する、搬入する、返送する、別送する、密送する、郵送する、輸送する、陸送する

【VNする】 出荷する、送金する、送水する、送電する、送風する

- ・【双方向への動き】 上げ下ろしする、出し入れする

(4) {複合動詞に準ずるもの}

もっていく、もってくる、もってかえる、もってもどる

「もって～」以外に、

「おして～」「抱えて～」「かついで～」「くわえて～」「しょって～」「背負って～」「だいて～」「つないで～」「積んで～」「とって～」「ひいて～」なども同様¹⁴。

¹⁴ 「Vテ」形として前要素になるのは、“身体の一部に物を付着・挿入する動作や物への接触”

〔文例（自動詞使役）〕

- ・最近、僕のうちでは毎日夜食後の行事として、泉水の一角に張板を載せ、これに日常の食器、釜、その他の用具を置いて、いざ空襲というときには、片手で板の一端を持ちあげて、全部の器具を一度に水のなかへ沈ませる仕掛けにしておいた。（黒い雨）
- ・（象は）鼻がとどかない。すると鼻で、蜜柑の向うの壁に息を吹きつけて、その返し風で蜜柑を手まえへころがらせ、（むらぎも）
- ・猪口艦長は、注排水作業の続行を命じるとともに左舷にある重量物をすべて右舷に移動させることを指令した。（戦艦武蔵）
- ・縦約30センチ、横約20センチ、厚さ6・5センチ。中身が飛び出ないように、外側と内側のふたを違う方向にスライドさせて開ける仕組みになっている。（asa2006.txt(1858432)）
- ・首を切り落されて放されたとたんに、鶏がぱ一つとまい立つのです。あたりに綿毛を舞い立たせながら、はばたいて、ふわふわと飛んでゆくのです。（ビルマの堅琴）

〔文例（他動詞）〕

次の例は、対象の元の存在場所を表わすカグラ格名詞で広げられている。

- ・その二種類のボール紙は、アイスクリームの容器をつくる材料であつた。それを妻は、三日にいちど、……路地の奥から、大きな風呂敷包みにしてはこんでくるのである。（帰郷）
- ・逸郎は闇の砂糖を各地から集めて、……汁粉ぜんざいをよくつくり、これが辰郎のクラスメートにうけた。（ブアボーイ）
- ・竹本和太郎は、机上の箱から葉巻を取り出し、セロファンを剥ぎ取った。（秘拳水滸伝：BCCWJ）
- ・これをむかえうつ態勢も一応はできていた。金を惜しまずに最良の実験用器具をそろえたし、手にはいる限りの文献も外国から取り寄せてあつた。（人民は弱し官吏は強し）
- ・八郎潟町の八郎湖で藻類のアオコが大量発生した問題で、県は15日、上小阿仁村にある萩形ダムから緊急放流した。（asa2006.txt(1616627)）

次の例は、対象の新たな存在場所を表わす二格・ヘ格・マデ格の名詞で広げられている。

「～に」

- ・彼女は私には目もくれずにロッカーの扉のひとつを開け、その中から黒くつるつるしたものを抱えるようにしてとりだし、テーブルの上に運んだ。（世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド）
- ・葉の触れ合う優しい音と自分の立てる僅かな足音に耳を傾けながら、澄んだ空気を肺に送り込む。（境界線上の人々：BCCWJ）
- ・中部電力は25日、定期検査中の浜岡原発（御前崎市）3号機で、作業ミスから微量の放射能を含んだ水約7トンを23日に放水路から海に放出したと発表した。（asa2006.txt(1902262)）
- ・保税倉庫に阿片を搬入するのは合法とみとめる。（人民は弱し官吏は強し）

を表わす動詞、後要素となるのは“移動動作”を表わす動詞である。

- ・紅茶をいれ、母の分のバナナを皿にのせ、その間に煮上ったラーメンを井に入れて、食堂のテーブルに持って来ると、太郎は、「お茶だよ。ちっとは休みなよ」と言った。(太郎物語・高校編)
- ・徳川御三家のひとつが明治の初期に建てた書庫をこちらに移築して建てられたレストランホテル。篠山栄子は週末をここで過ごすのが常であった。(私が変わればまわりも変わる：BCCWJ)

「～へ」

- ・おりょう婆さんは、その姪の学費を、毎月郵便局から六里隔たった港町へ送金していたので、この事は村では誰一人知らないものはなく、これが村に於けるおりょう婆さんの悪評をより決定的なものにしていた。(あすなろ物語)
- ・経理局長の武井大助が、呉まで出張して来たのに、風邪で熱を出し、「大和」へ来られなくなったので、山本はこの時右の袋を呉へ届け、武井に託して東京へ持ち帰ってもらい、海軍省の金庫に保管を依頼したのであった。(山本五十六)
- ・星は製品を実際に使ってもらうべく、東京帝大医学部の青山内科へと持参した。(人民は弱し官吏は強し)
- ・「明日は朝、西瓜を取って農協へ出荷し、どことどの畑の草、削る」と前の晩いったことは、日が暮れようとも終るまではやめず、毎日のように泥足のまま頭上で九時のサイレンを聞きつつ晩飯を取る、こんな生活は、綾子にはもう息も絶え絶えとばかりに思われるのであった。(仁淀川：BCCWJ)

「～マデ」

- ・俺たちは車を近くのガソリンスタンドまで押して行き、整備士は一時間も点検しないうちに、トランスミッションがイカレているから修理には時間がかかると言った。(Go now：BCCWJ)

次の例では、移動の方向・到着点が「～に向かって」で表わされている。

- ・弘長三年（一二六三）八月二十七日には、暴風雨のため九州から鎌倉に向かって年貢を運送する途上であった船六十一艘が、伊豆沖で消息を絶ったという記録が『吾妻鏡』に載せられている。(北条時宗小百科：BCCWJ)

なお、次のように、場所を表わす名詞と共起していないが移動を表わすものもある。

- ・声も出せないし頭も動かないリベザルに秋は目もくれず、中指で眼鏡を押し上げ溜め息を吐く。(黄色い目をした猫の幸せ：BCCWJ)

1. 5 《接触》

<N[物]-ヲ V[接触]>

物に対して物理的に力を加える具体的な働きかけであっても、その物の変化を引き起こすことなく接触にとどまることがある。それを表わすのはもっぱら他動詞連語であり、使役動詞連語では表わせない。

【他動詞連語】「ドアを たたく」「机を 押す」「廊下を みがく」「枝を つつく」

《動詞例（他動詞）》

(1) {単純動詞}

いじる、受ける、打つ、押さえる、押す、抱える、かく、かじる、かすめる、かむ、く

すぐる、蹴る、こする、こづく、刺す(：刺さる)、さする、さわる、抱く、たたく、つかまえる(：つかまる)、つかむ、つく、つつく、つねる、とる、なぐる、なでる、なめる、握る、ぬぐう、はたく、(埃を)はらう、(横っ面を)はる、引く、(ガラスを)ひっかく、ふく、ぶつ、踏む、ふれる、もつ、もむ

cf.「しめる、ぬる」は、《接触》的でも《変化》的でもある。

(2) {複合動詞 (複合動詞のうち後項が「する」以外のもの)}

- ・おさえつける、かき回す(？)、かきむしる、小突きまわす、小突く、つつく、殴りつける、殴り飛ばす、なでまわす、にぎりしめる、はりとばす、ひっかく、ひつつかむ、ひっぱたく、引っ張る、ぶんなぐる
- ・鞭打つ

(3) {サ変動詞 (複合動詞のうち後項が「する」であるもの)}

(3-1) {名詞相当+スル}

愛撫する、一撃する、殴打する、強打する、打擲する、直撃する

(3-2) {副詞相当+スル}

袋だたきにする、滅多打ちにする

〔文例 (他動詞)〕

- ・熱で赤くなったこしき炬を鉄棒で軽く叩いて、もろい所はないか確かめ、組頭にも注意を促した。(国銅：BCCWJ)
- ・膝の上に載せた小さなバッグの取っ手につけたキーホルダーをいじりながら、わたしは、わたしたちのことをぼんやり考えていた。(失はれる物語：BCCWJ)
- ・逃亡の意志などは今更、毛頭なかったが、ただ気をまぎらわすために戸を両手で押しみると、門は外側からしっかりとしめられて、びくとも動かない。(沈黙 9.txt(59))
- ・熱はしゃがみ、戸の下についている金具を触った。(陸蟹たちの行進：BCCWJ)
- ・「一カ月に一回、鍵をあずかっている家の七十歳の主婦が、風を入れ掃除に来るそうです。しかし、庭を掃いて、廊下を拭くだけで、部屋には入らないそうです」(京都・金沢殺人事件：BCCWJ)
- ・母屋のトタン屋根は雨漏りに備えて青いシートでおおわれている有様だし、離れの方の平屋は床が落ちかかって畳を踏むたびにミシミシと鳴る。(小さなさかな屋奮戦記：BCCWJ)
- ・原稿を書き上げたらすぐに右手にボールペン、左手に受話器を握りしめ、東京への国際電話のダイヤルを回すのだ。(ニュースの職人：BCCWJ)

ヲ格名詞が人や動物あるいはその身体部位を表わす名詞であるものも、《接触》類の動詞と組み合わせた連語では、物としての身体への接触を表わすのでこの類である

- ・子供が他人に迷惑をかけると、押入れにほうりこみ、ご飯も与えぬという親がいた。有無を言わせず、頬をひっぱたく親もいた。(ムツゴロウの動物交際術：BCCWJ)
- ・声を出さないように葵は片手で口を押さえた。(対岸の彼女：BCCWJ)
- ・逃げ込む学生を自警団と称する一団が角材で袋だたきをしているのを見た。(asa2006.txt(113068))
- ・大きな硬い雨粒が小石のように全身を打つ。(海辺のカフカ：BCCWJ)
- ・調べでは、18日午後10時50分ごろ、2人が外出先から戻ると、家の中で待ち伏せしていた4人ほどの集団が金属製のパイプのような物でいきなり襲いかかり、2人

の全身を殴打したという。(asa2006.txt(1854643))

- ・白人の若い娘が、まるでかしくようにわたしの体を愛撫している。(晴れた日には鏡をわすれて：BCCWJ)
- ・俺は玲子の肩を押さえつけた。(なで肩の狐：BCCWJ)
- ・質流れの電気製品や時計などを専門に売の店の前を、女装した男がアフロヘアーをかきむしりながら通りすぎていくのが見えた。(新橋烏森口青春篇)

この類の動詞の表わす物への働きかけは、上に述べたように、その物の変化を必ずしも含意するわけではない。しかし、その接触が結果的に物の変化を引き起こすこともある。したがってこれらの動詞は、たとえば次のような複文構造の使役文・変化他動詞文における従属節述語として用いられ、接触の結果として生じる変化が主節に表わされる。

「ドアを たたいて へこませる／こわす」

「机を 押して 窓際に 移動させる／移す」

「廊下を みがいて 光らせる／ぴかぴかにする」

「雪を つついて くぼませる」

また、この類の他動詞は、複合動詞の形成（前要素と後要素との意味的な関係）においても特徴がある。すなわち、《接触》の動詞が前要素となり、《変化》《付着》《除去》《移動》の動詞が後要素となる複合動詞「V₁+V₂」を作るものがかなりあり、V₁が働きかけの様態を、V₂が働きかけの結果として生じた変化を表わすものが多い。“V₁してV₂に至らせる”という意味的な関係である。

《接触》+《変化》 ⇒《変化》 : たたきこわす、おしつぶす

《接触》+《付着》 ⇒《付着》 : 縫いつける、突きとおす

《接触》+《除去》 ⇒《除去》 : はらい落とす、こすり取る

《接触》+《物の移動》 ⇒《物の移動》 : 蹴り上げる、投げ降ろす

ただし、《接触》の動詞が前要素となったものであっても、“V₁してV₂に至らせる”といった意味ではないものもある。

「うちすえる、殴りつける、殴り飛ばす、なでまわす、はりとばす」など

これらの複合動詞は、後要素の実質的な意味は稀薄になっていて、前要素の表わす動作の意味を強めたり何らかの特徴づけたりするものとなっている。

一方、《接触》の動詞が後要素となった複合動詞はそれほど多くない。わずかに次のようなものがあるが、ここでの前要素は、後要素の意味の強めや弱めを表わす接頭辞的なものである。

「小突く、ひっかく、ひつつかむ、ひっぱたく、ぶったたく、ぶんなぐる」など

1. 5 (ア)〈現象おこしへの働きかけ〉

〈N[物(音源等)]-ヲ V[接触]>

【他動詞連語】「プザーを おす」「琴を ひく」

《接触》を表わす動詞が、楽器や鐘など音を出すことを機能とする物を表わすヲ格名詞と組み合わせると(「太鼓をたたく」「ギターをひく」「鐘をつく」)、接触の結果として音が発せ

られることを表わす。これは現実の事態としては「音をたてる」のような〈現象おこし〉(後述)と似た事態を表わすことになることから、《接触》の下位類として〈現象おこしへの働きかけ〉をたてる。また、接触や摩擦によって香りをつくりだすことを表わす「香木をこする」もこの類にまとめておく。

〈現象おこし〉である「音をたてる」などとは違って、ヲ格名詞は具体的な物であり、《接触》や《付着》を表わす動詞が二次的に〈現象おこしへの働きかけ〉になっている。つまり、「太鼓をたたく」「ピアノをひく」「笛をふく」(《接触》)のように楽器に対して働きかけることによって結果として音が発せられたり、「香水をつける」(《付着》)によって結果として香りが発せられたりするのである。

《動詞例(他動詞)》

(1) {単純動詞}

(ブザーを) 押す、(香木を) こする、(机を) たたく、(鐘を) つく、(大正琴を) つまびく、(砲声が空を) どよめかす(：どよめく)、(鐘を) ならす(：なる)、(ガラスを) ひっかく // (練り香を) こする、(香木を) たたく (香水を) つける

[楽器に関するもの(ヲ格名詞が楽器)]

(鼓を) うつ、(琴を) 奏でる、(太鼓を) たたく、(琵琶を) 弾じる、(大正琴を) つまびく、(琴を/ピアノを) ひく、(笛を) ふく

(2) {複合動詞(複合動詞のうち後項が「する」以外のもの)}

(ギターを) 掻き鳴らす、(床を) 踏みならす // (香水を) ふりかける、(香水を) ふりまく

(3) {サ変動詞(複合動詞のうち後項が「する」であるもの)}

(3-1) {名詞相当+スル}

[楽器に関するもの(ヲ格名詞が楽器)]

(楽器を) 演奏する、(太鼓を) 乱打する

[文例(他動詞)]

- ・十一時ごろ、彼はアパートに行き、インターフォンを押した。(殺人買います:BCCWJ)
- ・アサヒ書店の社長はガラスを爪でひっかくような声の持主だが、テーブルの向うの人影はわりと低い、いい声でいった。(ブンとフン)
- ・彼は、縁の床板を踏みならしながらさげんだ。(驢馬)
- ・このベルを押す時の山岸大蔵の表情は、その他の時とはまるで違って生き活きとして
いる。(あすなろ物語)
- ・二、三日前のバイトの帰り、星の下ネオンのまたたく街を救急車がけたたましくサイ
レンを鳴らして南の方へ消えていった。(二十歳の原点)

ヲ格名詞が楽器であるものとして次のような例がある。

- ・義経が笛を奏で、静が舞い、後白河が今様を歌った。(天馬、翔ける:BCCWJ)
- ・毎日ピアノを弾き、将来ピアニストをめざしている生徒もいます。(中学生の勉強法:
BCCWJ)
- ・白木は神田にある酒屋の次男坊として生まれ、幼少の時から神田明神のお祭りで山車
の太鼓を叩いていた。(東京 Jazz:BCCWJ)

- ・噴水のある聖シュルピス広場は、更に賑やかで、俄仕立てのステージで半玄人ふうの楽士がエレキをかき鳴らすと、行列踊りが噴水を取り囲み、酔った若造が、次々と溜水に飛び込んで行く。(佐川君からの手紙：BCCWJ)
- ・「歌って踊って楽器を演奏してバラエティで笑わせてドラマで泣かせる。(女王様と私) 次の例は、香水によって香りをつくりだすものである。
- ・基一郎は病的なまでの執念を見せて、最後に大切な髭を仕立てあげる。非の打ちどころないまでに、優雅に、かつ威厳を保たせて、その先をびんとはねあげる。それから、ややほっとした安堵の気持を抱きながらスプレーで香水をふりかける。こうして自信にみち、活力にみち、調子がよく愛想がよい楡基一郎院長ができあがるのである。(楡家の人びと)

1. 5 (イ)〈使用〉

<N[物]-ヲ (N[目的]-ニ) V[使用]>

【他動詞連語】「赤ペンを 採点に 使う」「通学に 自転車を 用いる」
「機械を 利用する」

物に対して具体的に働きかけその物によって何らかの目的的な動作を行うことを表わす動詞「使う、用いる、利用する」は、ヲ格の物名詞と組み合わせ、その物を何らかの動作のために機能させること表わす。その物に変化を生じさせるわけではない点で《接触》のひとつである。やはり、使役動詞にはなじまない。

〈使用〉類の動詞が表わす動作は具体的に特定の動作ではなく意味的にやや抽象的一般的である。連語の構造は基本的に「物を V[使用]」であるが、「赤ペンを採点に使う」「車を通勤に用いる」「蜜柑箱を机として使う」のように、使用目的や使途を表わす二格の名詞や「Nとして」の形と組み合わせることのできる動詞もある。

≪動詞例(他動詞)≫

(1) {単純動詞}

あつかう、あやつる、使う、用いる

(3) {サ変動詞(複合動詞のうち後項が「する」であるもの)}

(3-1) {名詞相当+スル}

使用する、操作する、利用する

【文例(他動詞)】

- ・おはるは、鐘ヶ淵の渦の中へ出てもたくみに筈をあやつり、難なく大川へ入った。(剣客商売・女武芸者)
- ・いや第一、めずらしいというよりも、この時代、これほど合戦で、騎士・歩卒が槍を用いながら、そのあつかいは、個々の器用力量にまかせられているだけで、芸にはなっていない。(国盗り物語・斎藤道三)
- ・ずいぶんと神経をこめ、美学的基準を越えぬように、わざわざ定規を用いて、実に細く優雅な赤線を心魂を傾けるようにして引いた。(楡家の人びと)
- ・馬場の駅で平岡先生をみると、あわてて先まわりするために地下鉄をつかうことにし

て東西線にかけおりる。(マンガ青春記)

次の例では使用の目的が二格名詞で表わされている。

- ・灯油を燃料に使い、電気とお湯を作り出す家庭用の燃料電池が、青森市の新築住宅に据え付けられた。(asa2006.txt(1506985))
- ・「私は日本で最初にコカイン製造に成功しました。それをさらに完全なものにするため、台湾でコカの栽培を試み、それにも成功いたしました。少し前に、私の社でそれを原料に使用したいからと、内地への移入を申請いたしました」(人民は弱し官吏は強し)

次の3つの例では、「～として」の形で用途が表わされている。

- ・臼と竪杵は、酒造具ではなく、農具として扱うべきだという意見もあるが、(下駄：BCCWJ)
- ・関東都督府はロシア時代にホテルであった建物を庁舎として使用した。(日本植民地探訪：BCCWJ)
- ・これは、市販のテキストブックを教材として利用し、テスト問題をeラーニングで実施するやり方で、理解度の進捗状況を把握できる。(eラーニング：BCCWJ)
- ・塔の下で太砲を操作するトルコ兵の姿はよく見えても、石弓の的にするには遠すぎる。(コンスタンティノープルの陥落)

1. 6 《生産》

<N[物]-ヲ (N[場所]-ニ) V[生産]>

【Vi 使役連語】「家のまわりに 柵を めぐらせる」「花を 咲かせる」

【他動詞連語】「雑炊をつくる」「湯を わかす」「軽井沢に 別荘を たてる」

物をつくりだすことを表わす動詞と具体物を表わす名詞との組み合わせは《生産》の連語をつくる。作りだされる具体物がどこかに出現することを意味する動詞の場合、出現場所を表わす二格の場所名詞で広げられる。

物への物理的な働きかけを表わす連語のうち、《変化》《付着》《除去》《移動》には有対他動詞がかなりあるのだが、この《生産》は無対他動詞がほとんどである。また漢語サ変の他動詞には、「造」「建」「築」「作」「成」「醸」「産」「製」の漢字を含むものが多い。

他の連語タイプとの関係としては、まず、物がある場所に作りだすような働きかけである場合には、上述のように二格の場所名詞とも組み合わせるその二格名詞はヲ格名詞の表わすものが存在するようになる場所を表わすので、《設置・収容》に近くなる(「庭に花壇をつくる」)。また、二格の人名詞で広げられた「恋人にセーターを編む」「孫に浴衣を縫う」「友達に手紙をかく」という連語になると、その二格名詞は物をおくる相手というニュアンスを帯び、臨時的ではあるが《授与》に近くなる。「編んでやる」「縫ってやる」になると、やりもらい性が一層はっきりする。

この《生産》グループの連語をつくる動詞は他動詞がほとんどであり、使役動詞は下の動詞例にうかがえるようにごくわずかである。このうち、「赤い花を咲かせる¹⁵⁾」や「実をなら

¹⁵⁾ 大鹿薫久(1986-87)は、「父は毎年菊の花を咲かせています」という使役文について、「……「咲かせる」は使役の意志とそれに応ずる意志性的動作という構造を失って全体として主語「父」

せる」は現実の事態としては〈植物の内発的变化の助長〉（「つぼみを大きく咲かせる」「トマトを熟させる」）に近いが、〈植物の内発的变化の助長〉ではヲ格名詞が働きかけの対象であるのに対して、〈生産〉のヲ格名詞は結果として生じる物である点が異なっている。

《動詞例（自動詞派生の使役動詞）》

(1) {単純動詞}

（花を）咲かせる、（実を）ならせる、（柵を）めぐらせる、（蛆を）わかせる

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+サセル}

（城を／家を）完成させる

《動詞例（他動詞）》

(1) {単純動詞}

編む、（穴／トンネルを）うがつ、（そばを）うつ[換喩的転用か?]、（子どもを）産む、（布を）織る、（手紙を／絵を）かく、（酒を）醸す、築く、（櫓を）組む、こさえる、こしらえる、（和紙を）すく、炊く、建てる（：建つ）、（餅を）つく、作る、（タクワンを）漬ける（：漬かる）、（糸を）つむぐ、（縄を）なう、煮る、縫う、（仏像を）彫る、（穴を）掘る、設ける、（銀杏返しを）結う、（和歌を）よむ、（湯を）沸かす（：沸く）、（川に橋を）渡す

(2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}

（干支の絵を）あぶりだす、（子どもを）産み落とす、組み立てる、（花模様を）染めだす、（紋を）染め抜く、つくりだす、（顔にニキビを）吹き出す

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+スル}

急造する、建設する、建造する、建築する、再建する、作成する、試作する、出産する、醸造する、新築する、製作する、制作する、生産する、製造する、造営する、築造する、铸造する、縫製する、乱造する // 建立する、普請する

【VNする⇔NをV】

製塩する、製紙する、製糸する、製図する、製本する、造船する、造幣する、築城する（動詞としてはあまり使われないものもある。）

〔文例（自動詞使役）〕

- ・もう随分年老いてしまったと思っていた庭のミモザアカシアの木が、ことしも、黄色い微細な花をいっぱい咲かせました。（錦繡）
- ・この住まいはどことなく物見櫓を思わせる、堀をめぐらせた一軒家の中にあっただがも

の意志に呼応するような単なる意志的動作「咲かせる」として把握される。それはちょうど、「父は毎年菊の花を作っています」等と原則的には選ぶところのない構造をもっている」（1986:93-94、下線は本報告の筆者）とし、「（爺さんが）花を咲かせる」をはじめ、「（梅雨前線が山間部に）雨を降らせる」「卵をくさらせる」「カビを生えさせる」などについても「使役の意味構造を持っている」とは言い難く、むしろこれらは使役形をもって他動詞文の中に解消していると考えられる」（1986:95、下線は本報告の筆者）としている。

っと正確に言うならば、その二階にあった。(残酷な女たち：BCCWJ)

〔文例（他動詞）〕

- ・そして、その日の夕食は、料理の本のレシピなど化学実験の手順のようなものだ、と言いながら、ともかく機嫌の悪い父がサーモンスターキを作った。(男がいてもいなくても：BCCWJ)
- ・その二種類のボール紙は、アイスクリームの容器をつくる材料であった。それを妻は、……窓ぎわにちいさな飯台をすえて、その上でせっせと容器を組み立てた。(帰郷)
- ・灯油を燃料に使い、電気とお湯を作り出す家庭用の燃料電池が、青森市の新築住宅に据え付けられた。(asa2006.txt(1506985))
- ・自分が倒れたら、半分は社員たちに、半分は債権者たちに提供するよう、書類も作成してあった。(人民は弱し官吏は強し)
- ・とんぼが姿を消して、朝夕に肌寒さを覚え始めた宝暦十三年十月七日に、おふみは長男を出産した。(あかね空：BCCWJ)
- ・とにかく黒島は、例年十一月乃至十二月に行われる海軍大学校での図上演習を九月に繰り上げ、その時特別室を設けてこの案を検討してほしいと要望し、一課長の富岡は、それだけは考慮すると約束した。(山本五十六)

次の例は、ヲ格名詞で表わされている物がある場所に生じることを表わしており、その場所がニ格の場所名詞で表わされることがある。

- ・吉本興業の先代、吉本せいさんがこの地に演芸場を設けたことから始まり、「天満で芸を認められたら一人前」といわれていた(天神さんの商店街：BCCWJ)
- ・この計画は上流に洪水調節を主目的としたダムを建設し、中流部の出雲市では斐伊川の水流を、本川中流左岸の来原付近から新たに放水路を開削して分流し、……(鄙の論理：BCCWJ)

2 人への働きかけ

この章では、「人への働きかけ」の連語について述べる¹⁶。「物への働きかけ」と同様、まず奥田靖雄（1968-72[1983]）での分類をみでみる。第一章「対象へのはたらきかけ」の第二節が「人にたいするはたらきかけ」である。人を表わすヲ格の名詞と動詞との組み合わせから成る連語が、「生理的な状態変化」「空間的な位置変化」「心理的な状態変化」「社会的な状態変化」「よびかけ」という 5 類に分けられている。これらの連語と「物にたいするはたらきかけ」の連語とで大きく異なる点の一つは、連語をなりたせている動詞（奥田でいう「かざられ動詞」）として奥田（同）であげられているものの形態論的な性質が両者で大きくことになっている点である。すなわち、「物にたいするはたらきかけ」では、6 つの類いづれにおいても、ふつうの他動詞が例としてあげられているのに対して、「人にたいするはたらきかけ」の連語のほうはそうではない。「よびかけ」類としてあがっているのはすべて他動詞なのだが、「生理的な状態変化」「空間的な位置変化」「心理的な状態変化」の連語をつくる動詞はほとんどが「自動詞の使役のかたち」であり、「社会的な状態変化」の連語でも「自動詞の使役のかたち」と他動詞とがともにあがっている。奥田はこれにかかわることとして「（人へのはたらきかけを表わす連語において）かざられ動詞は人間の生理=心理的な、社会的な状態変化をさししめしている。と同時に、こうした状態変化に人間をひきずりこむことを、かざられ動詞はその他動=使役性で表現している。実際、人にたいするはたらきかけをあらわす連語は、大部分が自動詞とついになっている他動詞、自動詞の使役のかたちによってつくられている¹⁷。」（奥田 1968-72[1983:44]、下線は本報告の筆者）と述べている。実際の挙例をみると、「自動詞とついになっている他動詞」よりも「自動詞の使役のかたち」がはるかに多く、こちらが大部分をしめている。このことは、物への働きかけと人への働きかけとが、質として大きく異なるからだろう。つまり、奥田（同：44）のいうように、「人へのはたらきかけは、対象（人間）をしげきして、それに一定の変化をよびおこすという動詞の他動=使役性のうちに一般化されている」のであり、したがって「かざられ動詞は人間の生理=心理的な、社会的な状態変化をさししめしていても、そうさせる人間へのはたらきかけは他動=使役性のなかに一般的に表現し、その具体的なすがたについてはなんらかたらない」のである。自動詞が「生理的な状態変化」「心理的な状態変化」「社会的な状態変化」を表わしていて、それに「-（サ）ル」がついた「V-（サ）ル」の形は、それらの状態変化とそれを引き起こす働きかけの一般性とを表現する形式だということである。

奥田（同）の「人にたいするはたらきかけ」の 6 類のそれぞれについて、連語の構造（名詞の格、名詞・動詞のカテゴリカルな意味、名詞・動詞の関係的な意味）と連語の例をあげると次のようである。ただし、奥田（1968-72[1983:44]）には、名詞・動詞のカテゴリカルな意味や連語のなかでの関係的な意味が明瞭に書かれていないところもあり、また、各タイ

¹⁶ ここでいう「人」は、「意志的な行為主体」「思考・認識の主体」「生理的・心理的・社会的状態変化の主体」などである。したがって、「兄を ながる」「子供を 写真にとる」などの「人」はそういった意味での「人」ではない。早津(2008)参照。

¹⁷ 奥田（1968-72[1983:46]）では、この類の連語をつくる「かざられ動詞」について、「ほとんどが自動詞の使役のかたちである」とされているだけで、語彙的な意味（カテゴリカルな意味）については明確には述べられていない。ただ元の自動詞「おどる、さわぐ」などについて「生理的な肉体運動あるいは状態」をしめしているとしているようである。

プの下位の類が必ずしも明白に分けて示されていないところもある。全体として本報告の著者の責任でまとめなおしたものである。

●奥田（1968-72[1983]）における「人にたいするはたきかけ」を表わす連語のタイプ

《生理的な状態変化》 N[人]-ヲ Vi-サル [人の生理的な変化]

〈対象〉 〈人を生理的な運動や状態にひきこむ〉

親を 疲れさせる 父を 若がえらせる 子供を 泣かせる

《空間的な位置変化》

N[人]-ヲ (N[空間]-カラ) N[空間]-ニ/へ/マデ Vi-サル/Vt [人の空間的な移動]

〈対象〉 〈移動前の場所〉 〈移動後の場所〉 〈人がある場所から他の場所に移す〉

女中を 家から 仲町へ 走らせる 男を 家へ 帰らせる

二人を 座敷へ 入れる 客を 書斎に 通す

《心理的な状態変化》 N[人]-ヲ Vi-サル [人の心理における変化]

〈対象〉 〈人の心理的な状態変化を引き起こす〉

父を いらだたせる 書生さんを うらやましがらせる

彼女を いらいらさせる 親を 心配させる 人を 驚かす

《社会的な状態変化》

N[人]-ヲ Vi-サル/Vt

〈対象〉 〈社会的な状態を変化させたり新しい人間関係のなかにひきこむ〉

先生を やめさせる 娘を とつがせる

新人を 入閣させる 女性を 束縛する

N[人]-ヲ N[身分・職業]-ニ Vi-サル/Vt

〈対象〉 〈新しくそなわった社会的な状態・位置〉 〈人を社会的な身分や職業につける〉

外国人を 家庭教師に やとう 新人を 社長の秘書に 抜擢する

長男を むこに もらう 息子を 軍人に する

N[人]-ヲ N[人・組織]-ニ/へ/ト Vi-サル/Vt

〈対象〉 〈相手や仲間〉 〈人の他者とのかわりをかえる〉

娘を 同僚に ひきあわせる 船員を 漁夫と にらみあわせる

息子を 英語塾に あずける

N[人]-ヲ N[社会的な状態]-ニ/カラ Vi-サル/Vt

〈対象〉 〈社会的な状態〉 〈人の社会的な状態をかえる〉

恋人を つらい立場に ひきずりこむ 彼を 委員長の地位から たたきおとす

《よびかけ》

N[人]-ヲ Vt[言葉などによる働きかけ]

〈対象〉 〈人がある動作へと刺激する活動〉

部下を せきたてる 友だちを そそのかす 人を 釣りに さそう

本報告では、この奥田（1968-72[1983]）の分類を参考にしつつ、人の変化の引き起こしを表わす連語を9類に分け、自動詞使役と他動詞とを積極的にとりあげて検討する。

●本報告における「人への働きかけ」を表わす連語のタイプ

《生理状態の変化》

<N[人]-ヲ V[生理変化]> : 幼児を眠らせる // 寝かす

《心理状態の変化》

<N[人]-ヲ V[心理変化]> : 先生をおこらせる // おどろかす

《社会的状態の変化》

<N[人]-ヲ V[社会的状態変化]> : 子供を働かせる // 育てる

《組織への所属》

<N[人]-ヲ N[組織]-ニ V[社会的所属]> : 息子を大学に通わせる // やる

《組織からの離脱》

<N[人]-ヲ N[組織・職務]-カラ V[離脱]>
: 彼を 仲間から 孤立させる // ひきはなす

《社会的境遇とかかわる居住》

<N[人]-ヲ N[場所]-ニ V[居住]> : 人を屋敷にこもらせる // 幽閉する

《人の空間移動》

<N[人]-ヲ N[場所]-カラ N[場所]-ニ／へ／マデ V[移動]>
: こどもを 安全な場所に逃げさせる // 移す

《よびかけ》

<N[人]-ヲ V[動作誘導的態度]> : 部下を ϕ // いましめる

《社会的立場のうみだし》

<N[人(社会的立場)]-ヲ V[登用]> : 秘書を ϕ // やとう

2. 1 《生理状態の変化》

<N[人]-ヲ V[生理変化]>

ヲ格の人名詞と生理変化を表わす自動詞から派生した使役動詞との組み合わせ、および、ヲ格の人名詞と生理状態に変化をきたすことを表わす他動詞との組み合わせは、人の生理的な状態の変化を引き起こすことを表わす連語となる。

【Vi 使役連語】「選手を 疲れさせる」「幼児を 失明させる」

【他動詞連語】「子供を 寝かす」「選手を 鍛える」

《動詞例（自動詞派生の使役動詞）》

(1) {単純動詞}

あばれさせる、慰ませる、飢えさせる、うならせる、くたびれさせる、死なせる、疲れさせる、眠らせる、孕ませる、太らせる、へたばらせる、休ませる、酔わせる、弱らせる

(2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}

めざめさせる、若返らせる

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+サセル}

感染させる、気絶させる、休息させる、休養させる、骨折させる、失神させる、失明さ

せる、出血させる、衰弱させる、赤面させる、全快させる、墮胎させる、窒息させる、
発熱させる、負傷させる、分娩させる、流産させる、療養させる

(3-2) {副詞相当+サセル}

くたりとさせる、ぐったりさせる、くらくらさせる、ふっくらさせる、まんじりともさ
せない

《動詞例（他動詞）》

(1) {単純動詞}

生かす（：生きる）、起こす（：起きる）、きたえる、殺す、育てる（：育つ）、（子守唄を歌
って）寝かす（：寝る）

(2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}

撃ち殺す、絞め殺す、なぐり殺す、寝かしつける

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+スル}

銃殺する、毒殺する、扼殺する

(3-3) {その他}

（耳を）聾する

人の生理状態の変化を引き起こすことを表わす連語をつくる他動詞はそれほど多くなく、
生理変化を表わす自動詞からの使役動詞のほうが豊かである。他動詞には「殺す」のバリエ
ーションともいえる「撃ち殺す、絞め殺す、なぐり殺す」「銃殺する、毒殺する、扼殺する」
があるのが特徴である。

なお、他動詞の例として「きたえる」「育てる」を挙げたが、単に生理的な状態変化の引き
起こしを表わすだけでなく、もう少し社会的な精神面での変化も表わすことが多く、「生理・
社会的な状態変化」とでもいえるようなものである。

次の使役動詞は、人名詞のヲ格とではなく、身体部位などを表わす名詞のヲ格と組み合わ
さるものだが、全体としては人の生理的状态に変化を引き起こすことを表現するものであ
る。

（目を）くらませる、（息を）つまらせる、（顔を）ほてらせる、（力を）よみがえらせる、
（顔を／表情を）強張らせる、（顔を）上気させる、（神経を）麻痺させる

〔文例（自動詞使役）〕

- ・記憶は定かではなかったが私も、大体の粗筋は覚えていた。「地獄変」の屏風絵を描く
ために、娘を死なせてしまった画家の話だ。（重力ピエロ）
- ・その短く不安な待機が僕らを限りなく疲れさせた。（飼育）
- ・伊藤被告は「（酒井さん）を 気絶させようとしただけで、殺す意志はなかった」と殺意
を否認し、量刑不当と訴えた。（asa2006.txt(2403120)）
- ・光太郎は智恵子を連れて東北各地の温泉を回るが、悪化する一方だった。34年には
母や妹セツの一家が移り住んでいた千葉県・九十九里海岸近くの別荘で智恵子を療養
させる。（asa2006.txt(962506)）

次の例は、身体部位を表わす名詞のヲ格と生理変化を表わす自動詞からの使役動詞との組
み合わせである。

- ・「お譲ちゃんのほうはたしか、最近いなくなった子供さんと友達だったのかな……？」
(中略) 弥生ちゃんは顔を暗く、強張らせて頷く。(夏と花火と私の死体)
- ・ビールが紹興酒に変わり、裕樹をのぞく四人が揃って頬を上気させたころ、唐突に食事が終わった。(号泣する準備はできていた)
- ・無意識に畳に爪をたて、また次には指先までを死んだようにぐったりさせながら、彼女は長いこと突っ伏していた。(楡家の人びと)

〔文例（他動詞）〕

- ・警察などあてにならない。彼女の安全のために、この男を生かしておくことはできなかった。(鬼刻：BCCWJ)
- ・煙草売場で、トキが居眠りしていた。{トキを} 起こして、志乃をよばせた。トキは私のただならぬ様子に一驚して、飛ぶように奥へ入っていった。(忍ぶ川)
- ・九時か九時半ぐらいには幼児や小学校低学年の子は寝かせましょう。(AD/HD・LDの発達と保育・教育：BCCWJ)
- ・「わが兄弟たちよ、こいつを殺したのはわたしです。(ブンとフン)
- ・「教官を殴り殺してやろうと考えたことがあるか？」(冬の旅)
- ・亡くなった礼助の母親は、夫を毒殺し、黒崎家を零落させた守口丈太夫を死ぬまで恨んでいたが、礼助はあるときから取り返しのつかぬ過去のことは忘れて前だけを見つめるようになった。(蔓の端々：BCCWJ)

先に触れた「きたえる」「育てる」の例もあげておく。

- ・京都の建仁寺に、若い雛僧を修行させる群玉林という禅塾がありました。ここに十五、六歳の釈宗演さんが入っていた。その塾頭さんが鬼のように厳しく若い修行者を鍛えた。(洗心：BCCWJ)
- ・ここにも、若い人がいる。ほとんど聞いたことのない駅から、頬を赤くした彼等が乗り込んでくるのを見たとき、私の胸にはそこで農業を営み、子供を育て、ひっそりとたくましく生きている人々の姿が浮かび、軽い興奮を呼び起こした。(こんな女と暮らしてみたい：BCCWJ)

人以外の生き物への働きかけを表わす次のような連語がある。

「猫をしつける」「犬を飼い馴らす」「象を訓練する、馬を調教する」

これらは、単にその生き物の生理状態の変化というよりも、上で「きたえる」「育てる」について述べたのと似て、もう少し社会的な面での変化を表わしていて、「生理・社会的な状態変化」といえそうなのである。これらの連語における生き物はある程度意志なり思考力なりをもつものと捉えられている¹⁸。なお、このような、生き物を表わすヲ格名詞と他動詞との組み合わせから成る連語に相当する使役動詞連語はなさそうであり、もっぱら他動詞連語が表現している事態である。

¹⁸ その点で、同じく生き物を表わすヲ格名詞と組み合わせる「飼う」「飼育する」「養豚する、養鶏する、養蚕する、養蜂する、養殖する」「放牧する、牧畜する、牧羊する」などと異なっている。これらの生き物は、意志をもった存在とは扱わず、「盆栽を育てる」「花を栽培する」などと同じく生命力はあるものの「物」と扱えばよさそうである。

2. 1 (ア)〈身体の動きや姿勢の変化〉

＜N[人]-ヲ V[身体運動]>

自動詞のうち人の意志動作を表わすものは類として多くないが、身体の動きや姿勢の変化を表わすもの（「走る、すわる」）は、そのひとつの類である¹⁹。そのような自動詞からの使役動詞は、人に命じたり勧めたりして、その意志にもとづく動きを表現することももちろんできる（「太郎に命じて走らせる」「丁寧にすすめて花子をそこに座らせる」）。次の「仰向かせる」の例には、直前に「横になってもらいましょうか」という文があることからはっきりそれが伺えるし、「坐らせる」「並ばせる」の例もおそらく意志動作の引き起こしである。

・「じゃあ、この上に横になってもらいましょうか」長椅子の上に{患者を}仰向かせ、腹部を触診して、肝臓、胃の工合を調べてから、血圧計のマンシェットを右腕に巻いて血圧を測定すると、一八〇ミリあった。（白い巨塔(一)）

・森田がジムの横の応接間に大戸を坐らせ、私についての説明をしはじめた。（一瞬の夏）

・慰霊碑の前にチュウさんと敬吾さんを並ばせて、昭八ちゃんが写真を撮る。（閉鎖病棟）
しかし一方で、次の例「立ち上がらせる」のように、物理的直接的に力を加えて姿勢の変化を引き起こしているものもある。後ろにつづく他動詞「引きずり出して」は後述の《人の空間移動》の例だが、そのことがよりはっきりと現れている。

・黒人兵が急に喚きたて、僕の肩を掴んで{僕を}立ち上らせると地下倉の中央まで引きずり出して、僕を明りとりの方の向うの大人たちの眼にさらした。（飼育）

このように、人の意志性が希薄になった状態での姿勢の変化の引き起こしや身体運動の引き起こしを表わす連語を、《生理状態の変化》の下位に〈身体の動きや姿勢の変化〉としてたててことにする。

【Vi 使役連語】「幼児を 歩かせる」「病人を 仰向かせる」

【他動詞連語】「病人を ベッドに 横たえる」「転んだ人を 抱き起こす」

＜動詞例（自動詞派生の使役動詞）＞

(1) {単純動詞}

遊ばせる、歩かせる、泳がせる、屈ませる、（椅子に）かけさせる、しゃがませる、坐らせる、（廊下に）立たせる、だまらせる、（高く）飛ばせる、並ばせる、走らせる、這わせる

(2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}

- ・仰向かせる、腰掛けさせる、立ち上がらせる、寝ころばせる
- ・横たわらせる

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+サセル}

仰臥させる、起立させる、行進させる、逆立ちさせる、正座させる、整列させる、全力疾走させる、沈黙させる

¹⁹ 身体を動かすことが身体を移動させることにつながるがあるので、この類の動詞のいくつかは《人の空間移動》をも表現することができる。

(3-2) {副詞相当＋サセル}

- ・じっとさせる
- ・仰向けにさせる@、うつ伏せにさせる@、うつむきにさせる@、中腰にさせる

《動詞例（他動詞派生の使役動詞）》

(1) {単純動詞}

(ベッドに) 寝かす

(2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}

- ・抱き起こす
- ・(病人を) 横たえる（：横たわる）

このグループの連語をなすのは主として自動詞使役であり他動詞はそれほど多くない。そして先に述べたように、その使役動詞は意志動詞派生のものであるが、この類のものと考えてるのは使役文のなかで動作主の意志性が希薄になっているものである。

他動詞の例として「横たえる」「抱き起こす」をあげたが、「病人をベッドに横たえる」「転んだ人を抱き起こす」というのは人をいわば物扱いしているといえるかもしれない。ただ、「横たえる」「抱き起こす」という動詞は、物名詞とは組み合わせにくく、「？荷物を床に横たえる」「？倒れた看板を抱き起こす」は不自然な表現である。その点で、「たおす」「乗せる」などと異なる（「相手を／電柱を 倒す」「子供／荷物を トラックに乗せる」）。そうだとすると、「横たえる」「抱き起こす」を使うのは、対象を「人」とみなしてのことだといえそうである。

〔文例（自動詞使役）〕

- ・ぼくは小さい時から、ふじ子の足がかわいそうで、何よりも先にふじ子のことをしてやりたかった。菓子をもらってもふじ子にたくさんやりたくなる。外を歩いても、ふじ子には道のいい所を歩かせたくなる。(塩狩峠)
- ・(山口は) 飛行場にまで精神注入棒を持ち出し、いきなり 全員を整列させて 尻を殴りつける。(僕たちの戦争)
- ・たった一つははっきりしていることは、どうしても先生はあるけないということだった。あれこれ相談の結果、船で中町までつれていくことになった。…(略)… 男先生はついていくことになり、おなご先生をおんぶして船にのった。すわらせたり、おぶったり、ねかせたりするたびに、おなご先生のがまんした口から思わずうなり声が出た。(二十四の瞳)

次の例は、自動詞使役と他動詞が前後に使われているが、対象（人）への働きかけが物理的実質的である点は同じであり、自動詞使役で表わされているほうも、使役対象（＝動作主体）の意志によるものではなくなっている。

- ・彼らは病人でも老人でもかまうことなく 歩かせ、倒れればその場で切り殺し、欠損を埋めるために畑へかけだして 百姓をひっぱってきた。(流亡記)
- ・白や、薔薇色や、薄紫の、紗のように透き徹るそれらの衣に包まれた彼女の姿は、一箇の生きた大輪の花のように美しく、「こうして御覧、ああして御覧」と云いながら、私は彼女を抱き起きたり、倒したり、腰かけさせたり、歩かせたりして、何時間でも眺めていました。(痴人の愛)

〔文例（他動詞）〕

- ・ ブンはたたみの上にたおれているフン先生を抱き起こした。（ブンとフン）
- ・ 若者は柵本を寢床へ横たえ、枕元の土瓶から薬湯を口へふくみ、これを口うつしに柵本へのませた。（剣客商売・剣の誓約）
- ・ 気を失っている女性を寝かしたソファの傍に座っているホームズである。（三毛猫ホームズの幽霊クラブ：BCCWJ）

他動詞「並べる」はふつうヲ格の人名詞とは組み合わせられないが、次の例では「数人を並べて」と表現していて、この類の他動詞に準ずるものとなっている。

- ・ アメリカの刑事ドラマなどでは、人相の似通った数人を並べて正面、横向き、後ろ姿を目撃者に見せ、その中に犯人がいるかどうか確認させるシーンがよく出てくる。（冤罪の構図：BCCWJ）

2. 1（イ）〈心理状態の反映としての生理変化〉

<N[人]-ヲ V[心理的生理変化]>

人の心理状態の反映としてそれが生理的状态の変化となって現れるものを、『生理状態の変化』の下位の一類としてとりあげる。

「泣く」「笑う」などは、その人の心理状態が生理状態に反映したものとしての生理的な状態変化である。「心の中で泣いている／笑っている」と言うこともできるが、本来的には、心理状態が表情や声など外面に現れたものが「泣く」や「笑う」である。このような、外面にあらわれる心理的な状態変化の引き起こしは、「先生を笑わせる」「子供を泣かせる」のように使役動詞連語によっては表現できるが、これに相当する他動詞はなさそうである。

【Vi 使役連語】「客を 笑わせる」「子供を 泣かせる」

次のような使役動詞がある。ヲ格名詞として「顔、胸」など身体部位を表わす語をとるものも含めた。

《動詞例（自動詞派生の使役動詞）》

(1) {単純動詞}

さわがせる、泣かせる、どならせる、ほほえませる、むずからせる、笑わせる

(2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}

- ・ 泣きやませる（無意志？）@、にやつかせる@、吹き出させる@
- ・ 涙ぐませる

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+サセル}

- ・ 苦笑させる、号泣させる、（顔を）紅潮させる、爆笑させる
- ・ 大笑いさせる、にが笑いさせる

(3-2) {副詞相当+サセル}

- ・ （足を）ガタガタさせる、（胸を）ドキドキさせる、にっこりさせる、もじもじさせる

〔文例（自動詞使役）〕

- ・弟の宏はきょう剣戟ごっこをして、組合長の息子の頭を刀で擲って泣かせたのである。
（潮騒）
- ・（院長先生は）明るい性格で、声が太く、小さな冗談を云っては看護婦たちを笑わせます。（黒革の手帖（上））
- ・快活らしい白い啞の群れの舞踏―それは見る人を涙ぐませる。（小さき者へ；生れ出
ずる悩み：BCCWJ）
- ・山本が艇内の小室へ入ると、緊張で頬を紅潮させているチャージの若い中尉の号令で、
長官艇はすぐ棧橋を離れた。（山本五十六）
- ・また一方、自分は、下男や下女たちを洋室に集めて、下男のひとりに減茶苦茶にピア
ノのキイをたたかせ、（田舎ではありましたが、その家には、たいていのものが、そろ
っていました）自分はその出鱈目の曲に合せて、インデヤンの踊りを踊って見せて、
皆を大笑いさせました。（人間失格）
- ・或る時、鎌倉で、呉須赤絵の見事な大皿を見付けて買った。私の初めての買物で、呉
須赤絵がどうこういう知識もあろう筈はなく、ただ胸をドキドキさせて持ち還り、東
京で青山に話すと、図柄や値段を聞いただけで、馬鹿と言った。（真贋）

2. 2 《心理状態の変化》 ＜N[人]-ヲ V[心理変化]>

ヲ格の人名詞と心理状態の変化の引き起こしを表わす動詞との組み合わせは、人に何らかの影響を与えて、その人にある心理状態にひきこむことを表わす。

【Vi 使役連語】「先生を おこらせる」「先輩を いらだたせる」「親を 安心させる」

「妻を 嬉しがらせる」「観客を がっかりさせる」

【他動詞連語】「子供を 苦しめる」「敵を 脅かす」「友達を 勇気づける」

《生理状態の変化》の連語と同じく、このタイプでも他動詞はそれほど多くなく、心理状態を表わす自動詞からの使役動詞が多くあって《心理状態の変化》を表わす動詞群を豊かにし、その中核をしめている²⁰。この連語をつくる他動詞のなかに漢語サ変動詞がほとんどないことが、他の連語と異なるこの類の連語の特徴である。

この類の連語をつくる動詞には、「驚かせる」と「驚かす」、「悲しませる」と「悲します」のように、原動詞（「驚く」「悲しむ」）から派生した下一段活用の使役動詞と五段活用の使役動詞がいずれもごく普通に用いられ意味の違いもほとんど認められないものがある。これらについては、「驚かす」「悲します」のほうを他動詞とする立場もあるが（辞書の品詞表示にもしばしばこの立場がみられる）、本報告ではいずれも使役動詞とみなした。

人名詞ではなく、「心」「気持ち」など、いわば精神部位を表わす名詞のヲ格もこの類の連語の要素として人名詞に準ずるものと考えられる（「若者の心をひきつける」「生徒の気持ち

²⁰ この特徴については、奥田（1968-72[1983]）にももちろん指摘があるが、野田尚史（1991[1995:206]）にも指摘がある。

をかりたてる」)²¹。「さいなむ」「くらます」などは、人名詞のヲ格と組み合わせることがなく、常に精神部位や身体部位と組み合わせるが（「友人の心をさいなむ／*友人をさいなむ」「先生の目をくらます／*先生をくらます」）、「〈人〉の〈精神部位・身体部位〉を V」全体で人の心理変化の引き起こしを表わすものはこの類の連語とみなすことができる。

心理変化の引き起こしの中には、「突然大声を出してみんなを驚かせる」のように、一時的な心理変化を表わすものもあるが、「家族をしあわせにする」「恋人を不幸にする」「友人を立ち直らせる」「政治犯を転向させる」のように社会的なあり方にもかかわる心理状態の変化の引き起こしもある。これらは意味的には《心理・社会的な変化》ということもできる。また、「飽きさせる」「驚かせる」といった使役動詞は、心理の向う対象を表わす二格の名詞で広げられることがあり（「子供を勉強に飽きさせる」「人を物音に驚かせる」）、そういったことのない「いばらせる」「ひねくれさせる」などとその点では異なる。

次のような使役動詞、他動詞が心理的な状態変化の引き起こしを表わす連語をつくる。

《動詞例（自動詞派生の使役動詞）》

(1) {単純動詞}

- ・飽きさせる、倦ませる、慌てさせる、いきどおらせる、いばらせる、(あつと)言わせる、うちとけさせる、うなずかせる、怒らせる、驚かせる、おののかせる、おびえさせる、悲しませる、(心を)曇らせる、苦しませる、狂わせる、困らせる、(心を)騒がせる、白けさせる、猛らせる、たじろがせる、楽しませる、ときめかせる、とまどわせる、萎えさせる、嘆かせる、和ませる、悩ませる、鈍らせる、(心を)はずませる、ひがませる、(寂しさに)浸らせる、ひねくれさせる、へこませる(やつつける)、惚れさせる、参らせる、(気を)まぎれさせる、まごつかせる、惑わせる、迷わせる、滅入らせる、(心をも)えたたせる、安らがせる、安んじさせる、喜ばせる、わきたたせる、わずらわせる

- ・(気持ちを)高ぶらせる

【一がらせる】 嫌がらせる、羨ましがらせる、うれしがらせる、おかしがらせる、面白がらせる、気の毒がらせる、寂しがらせる、はかながらせる、菌痒がらせる

(2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}

- ・苛立たせる、いらつかせる、怖気づかせる、恐れ入らせる、落ち込ませる、おどりがらせる、気づかせる、傷つかせる、悔い改めさせる、ふるいたたせる
- ・面食らわせる

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+サセル}

- ・安心させる、萎縮させる、畏怖させる、感激させる、感心させる、感動させる、嬉戯させる、恐縮させる、驚嘆させる、仰天させる、驚倒させる、恐怖させる、緊張させる、警戒させる、硬化させる、興奮させる、高揚させる、昏倒させる、混乱させる、困惑させる、失望させる、執着させる、震駭させる、心配させる、心服させる、絶望させる、戦慄させる、増長させる、退屈させる、躊躇させる、陶醉させる、瞠目させ

²¹ 早津恵美子(2011)では、心理変化の引き起こしを表現する使役文には、「人ヲ Vi-(サ)セル」という型だけでなく「人ノ側面ヲ Vi-(サ)セル」型のものが少なくないこと、そして、後者には独自の機能があることについて述べられている。

る、動揺させる、当惑させる、納得させる、熱狂させる、反発させる、悲嘆させる、憤激させる、閉口させる、没頭させる、満足させる、油断させる、落胆させる、立腹させる、狼狽させる、惑乱させる

・先走りさせる、背伸びさせる(心理)、拍子抜けさせる、胸騒ぎさせる

(3-2) {副詞相当+サセル}

- ・いきいきさせる、いらいらさせる、うっとりさせる、うんざりさせる、がっかりさせる、くさくささせる、こせこせさせる、しっくりさせる、しみじみさせる、じめじめさせる、せかせかさせる、そわそわさせる、たじたじさせる、どきどきさせる、どぎまぎさせる、はらはらさせる、びっくりさせる、ムシャクシャさせる、やきもきさせる、わくわくさせる
- ・愕然とさせる、ぎょっとさせる、混沌とさせる、ぞっとさせる、はっとさせる、びくっとさせる、冷やっとさせる、ほっとさせる

《動詞例（他動詞）》

(1) {単純動詞}

- ・おびやかす（：おびえる）、苦しめる（：苦しむ）、じらす（：じれる）、なごめる（：なごむ）
- ・あざむく、いじめる、ごまかす、（心を）さいなむ、だます、ばかす、はげます

(2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}

いいくるめる、いためつける、うちのめす、（気持ちを）かきたてる、くどきおとす、説き伏せる、なだめる、（心を）ひきたてる、（心を）ひきつける、やりこめる

【一づける】 元気づける、力づける、勇気づける

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+スル}

激励する、鼓舞する

(3-2) {副詞相当+スル}

- ・狂おしくする@、苦しくする@、わびしくする@
- ・いこじにする、大胆にする、卑屈にする、不安にする、みじめにする、夢中にする、愉快にする

〔文例（自動詞使役）〕

- ・修道院付属の小さな診療所では、現地の看護師さんが爪の間に直に殺虫剤をぶっ掛けていて私たちを驚かせたが、これが一番効くというのである。（貧困の光景）
- ・結婚式におくれることは花子を悲しませることになるのだと思った。（孤高の人）
- ・普通に本当のことを言っているだけなのに、美和はくすくすと笑った。わずかに肩をすくめて、うつむきがちに笑うだけで、翔人は何ともいえない暖かい気落ちになった。良かった。彼女は笑っている。彼女を楽しませている。（しゃぼん玉）
- ・自分たちのかたわらに、何喰わぬ顔をして、一人の未来の犯人が火鉢に手をさしのべていることに、少しも気づかぬ彼らが私を喜ばせた。（金閣寺）
- ・小林先生が分教場にかよいだしたころの生徒は、わざと一列横隊になっておじぎをしたり、芋女つ、とさけんだり、あながあくほど見つめたり、にやにやわらいをしたりと、いろんな方法で新米の先生をいやがらせたものだった。（二十四の瞳）
- ・この部屋を、何度自分は訪れたことだろう。いく度訪れても、ふじ子は一度として不

きげんであったことはない。この分なら打ち明けても大丈夫かも知れないと、強いて心をふるいたせながら、信夫はふじ子の枕もとにすわった。(塩狩峠)

- ・その口早な快活な話しぶりが、昨夜すでに私を怖気づかせていた。(金閣寺)

漢語サ変動詞からの使役動詞も多くある。

- ・入学当初から、私が柏木に注目したのは、いわれのないことではない。彼の不具が私を安心させた。(金閣寺)
- ・…という教え方は、ときとしてかえって子供を失望させるもとになります。(おさなごを発見せよ)
- ・知らないもの、想像のできないもの、この先おそらく知ることができないであろうもの、は、いつも私を困惑させるのだ。(号泣する準備はできていた)
- ・こうした時に出来るだけ下手に出ることが相手を満足させることであったから財前は、何時もと打って変わった慇懃さで頭を下げた。(白い巨塔(一))

次の例は、擬態語などに「サセル」がついたものである。

- ・水嵩(かさ)が増して危ないという記事は、折角まちもうけた娘達をガッカリさせた。(家)
- ・喜助はそれまでに、あの人形を完成させておいて、玉枝をびっくりさせてやろうと思った。(越前竹人形)
- ・無一文で何の力もなく、人生の負債だけを背負ったような自分が、一転して上流階級に紛れ込む——その想像は彼をわくわくさせるのだった。(手紙)
- ・赤い祝電の山の中に、灰色の弔電がなかったことが私をほっとさせた。(風に吹かれて)
- ・千頭さんは、そこで、ちょっと太郎をうっとりさせるような、弱々しい表情を見せた。(太郎物語・大学編)

次の例は、心理的といってもいくらか認識面のかかわるものである。

- ・「でも、大人をうなずかせるアフォリズムってむずかしいのよ。麗奈さんの読者は十代だから、却って類型が好まれるんじゃないかしら」(空中ブランコ)
- ・幕末、幕府がはじめて長崎において海軍伝習所をつくり、オランダ人教師によって海軍士官を養成したとき、昼めしどきになると生徒たちは甲板上にめいめい鍋と七輪をもちだし、ばたばた火をおこして煮たきし、オランダ人を閉口させたという。(坂の上の雲 (一))

〔文例 (他動詞)〕

- ・同じジェノヴァ人でも、ガラタのジェノヴァ居留区の代官ロメリーノにとつての陥落後の日々は、不安と無力感が交互に彼を苦しめる、まさに地獄の日々になった。(コンスタンティノーブルの陥落)
- ・「ナリスさまはあのようなおからだですから、どうしても…バルコニーに出て将兵たちに手をふったり、元気づけたりということがお出来になりません。(後略)」(劫火：BCCWJ)
- ・柏木のこの思いがけぬ失望は、私を心から愉快にした。(金閣寺)
- ・「まあいいだろう。おれんとこのマー坊をいためつけてくれたのは、こいつかい」(青春の門：BCCWJ)

他動詞連語のほうでは、認識面にかかわるものが多くなる。

- ・敵をあざむかんがためには、まず味方をあざむけ、と信長はいった。(魔天忍法帖：

BCCWJ)

- ・大井は、そんな明子に、保険勧誘員として客を口説き落とそうとしているのと同じ姿を感じ取った。(恋人よ：BCCWJ)
- ・ただ、自ら大声を張りあげて直接兵士を鼓舞した父と同じ趣向を持たなかったマホメッド二世は、太鼓を鳴らして兵を集めるまでは同じでも、大声を張りあげるのは、部下の武将の一人にまかせたのである。(コンスタンティノープルの陥落)
- ・塚本信夫の緊急入院は極秘にされた。塚本事務所は派の動揺を防ぐため、自派の幹部たちをごまかしてまでひた隠しに隠そうとした。(悠々たる打算：BCCWJ)
- ・道の向こうから金子の夫人と子供たちが近づいてきた。駅前で昼食をとってきた帰りだという。試合では頑張って、と口ぐちに内藤を励ました。ありがとうございます。内藤は夫人にそう言い、子供たちに向かって優しく笑いかけた。(一瞬の夏)

次の例では、人の心理変化に伴う行動面の変化をむしろ表現している。

- ・やはり前に日中に逢っていることが、震を大胆にしているようである。(ひとひらの雪：BCCWJ)

この節のはじめに述べたように、他動詞は使役動詞に比べて少ないのだが、{単純動詞}には、形態的に対応する自動詞をもつものが多い。そうでないものは、上の動詞例の二番目の類(「あざむく、ごまかす」など)のように、感情というよりも理知的な心情あるいは認識にかかわるものが多い。複合動詞のうちでも「いいくるめる、くどきおとす、説き伏せる」「力づける」などはそうである。これらの動詞はシテ形をとって、次のような複文構造の使役文の従属節として用いられることがある。

「人を Vt シテ V-サセル」

「母親をあざむいて金を送らせる」「委員を説き伏せて賛成させる」「人を力づけてもうひとばんばりさせる」「娘を説き伏せて嫁がせる」

これは、相手の感情あるいは心情に訴えかけてその人を動作にかりたてて行わせる事態の表現である。2.9 節の《社会的立場のうみだし》において、その類の動詞も複文構造の使役文の従属節述語となって「機織女を抱えて布を織らせる」「兵士を雇って警戒にあたらせる」のような文をつくることに触れるが、そちらでは、相手のある社会的立場にすえて、その立場としての動作を引き起こすという事態の表現となる。

ところで、《動詞例(他動詞)》のうちの、(3-2) {副詞相当+スル} の下位である {形容詞連用形+スル} の形の動詞については次のような特徴がある。まず、形容詞「苦しい」に対しては同根の感情動詞「苦しめる」や使役動詞「苦しませる」があるが、「侘しい」「狂おしい」などには「*侘びしめる」「*侘びませる」などがなく、それを補うものとして {形容詞連用形+スル} が働いている。また、{形容詞連用形+スル} のなかには、{形容詞連用形+スル} を用いても {形容詞連用形+サセル} を用いてもほぼ同じ意味が表わせるものがある。

「一人暮らしが 太郎を わびしくする／わびしくさせる」

「いこじにする、みじめにする、愉快にする、夢中にする、卑屈にする、大胆にする」などもそうである。

なお、上で、自動詞から派生した使役動詞としてあげたものの中には、原動詞が「～ヲ V」という連語でも使われるものがあり、その点では他動詞的である。たとえば次のような動詞群がそうであるが、中でも接尾辞「-ガル」のついた動詞からの使役動詞(「-ガラセル」)はほとんどが「～ヲ V」という連語でも用いられる。

「おこる、悲しむ、楽しむ、嘆く、ひがむ、喜ぶ // 嫌がる、うらやましがる、うれしがる、おかしがる、面白がる、気の毒がる、寂しがる、はかながる、齒痒がる // 感激する、恐縮する、警戒する、心配する、納得する」

この類の中には、《心理・社会的な変化》とでもいえそうなものもある。

「しあわせにする、幸福にする、不幸にする、立ち直らせる、転向させる」

2. 3 《社会的状態の変化》

<N[人]-ヲ V[社会的状態変化]>

人は社会のなかで暮らしているので社会の他の構成員との関わり、社会や組織そのものとの関係のなかに常に存在する。そして、人のおかれている社会的な状態、人にそなわっている社会的性質や立場や役割は、他からの影響によって変化させられることがしばしばある。

「富む、降参する」のような社会的な状態を表わす自動詞から派生した使役動詞および、社会的状態変化をもたらすことを表わす他動詞は、ヲ格の人名詞と組み合わせさせて《社会的状態の変化》の連語をつくり、人に働きかけてその社会的な状態に変化をもたらすことを表わす。

この類の連語は、先にみた《生理状態の変化》や《心理状態の変化》と比べて、自動詞使役動詞も他動詞もあり多くない。また漢語動詞が多いこともこの類の特徴である。

使役動詞をつくる自動詞の中には、その動きの実現を希望したり意図したりすることのできるものがある。「入学したい」「就職しよう」などの形態が可能なことにうかがえる。しかし、こういった自動詞の表わす動きや変化は社会的な関係のなかで成立するものであるから、本人の意志だけではかなえることができず、社会（その構成員）や他者（相手）からの許し・誘い・導き・受け入れなどがないと成就できない動き・変化である。人の身体運動（「すわる、泳ぐ」）や物理的な移動（「行く、帰る」）がその人の意志によって一応成就することのできるものである点と異なる点である。

【Vi 使役連語】「国民を 富ませる」「大統領を 失脚させる」「敵を 降参させる」

【他動詞連語】「敵を やっつける」「兄を 打ち負かす」「娘を 勘当する」

《動詞例（自動詞派生の使役動詞）》

(1) {単純動詞}

つまづかせる、富ませる、働かせる、辞めさせる

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+サセル}

- ・隠居させる、合格させる、降参させる、辞職させる、失脚させる、失踪させる、出世させる、進歩させる、成功させる、生活させる、墮落させる、団結させる、反動化させる、落伍させる、落第させる
- ・ひとりだちさせる

《動詞例（他動詞）》

(1) {単純動詞}

しつける、（新入社員を）育てる（：育つ）、負かす（：負ける）、やぶる（：やぶれる）

(2) {複合動詞 (複合動詞のうち後項が「する」以外のもの)}

うちまかす、めあわす、もりたてる、やっつける // (犬を) 飼い慣らす

(3) {サ変動詞 (複合動詞のうち後項が「する」であるもの)}

(3-1) {名詞相当+スル}

- ・解雇する、解任する、解放する、鶴首する、勘当する、更迭する、買収する、罷免する、免職する、離縁する // 育成する、保育する、養育する // (馬を) 調教する

(3-2) {副詞相当+スル}

- ・幸福にする、しあわせにする

〔文例 (自動詞使役)〕

- ・久政は凡庸で、浅井家の侍たちは不平をいだき、ついに久政に迫って隠居させ、久政の子長政を立てた。(国盗り物語・織田信長)
- ・「早く大臣を失脚させて、誰であろうとも、伊勢のことに触るものはこのとおりだぞと、長くとどめを刺そうとするものだ」(斬人斬馬剣)
- ・基一郎は確信していた。その確信、その自負が彼という男を今日まで盛りあげ成功させてきたのだった。(楡家の人びと)
- ・彼は半年ほど前の一九七三年春に、六年間勤務したコロラド大学を解雇された。理由は簡単だった。彼はあまりにも多くの学生を落第させてしまったのである。(若き数学者のアメリカ)
- ・「さっきの電話でうかがいましたが、ママさんはその女をやめさせてしまわれたんですって?」(黒革の手帖 (上))
- ・悪質な取立て屋がやってきて、払えないなら、債務者の妻や娘を風俗営業で働かせろと脅した—という例など、枚挙のいとまもない、という。(火車)

〔文例 (他動詞)〕

- ・兄の茂兵衛は、水戸家の扶持を頂戴している自分の妹が、そういう不身持をしては、と怒り、妹を勘当したきりであるのであった。(水戸黄門：BCCWJ)
- ・しかし、新婚早々の妻を離縁してまで、愛人だった悦子を妻にする気持ちもない。(野望候補者：BCCWJ)
- ・次郎吉の六はあれ以来ずっとねをひそめていた。彼も外出の仕事には当てられなかったが、どんなときでも栄二には近よらず、棒の両端が合わないように、いつも遠くはなれていようとした。——いつか才次をやっつけたとき、胸がすっとしたと呼びかけた男があった。(さぶ)
- ・最近では、学校へ入る段階で親が十分にしつけていない子供を、学校が引き受けざるを得ない状況になっているのでしょうか。(誰が教育を滅ぼしたか：BCCWJ)
- ・パパドポリスでもなんでもいい、この自分を愛してくれ、自分たちを家族—幸せな家族—にしてくれるこの人に、今までにないあたたかいものを感じました。そしてこの人はお母さんを幸せにしてくれるのです。(エンジェルとお母さんの結婚：BCCWJ)

2. 3 (ア)〈社会的立場への登用〉

<N[人]-ヲ N[社会的立場]-ニ V[登用]>

人をある社会的立場に登用することを表わす他動詞とヲ格の人名詞との組み合わせは、〈社会的立場への登用〉を表わす連語をつくる。人がある社会的な立場にたったり、社会的な役割を担ったりするようにする働きかけである。自動詞使役動詞の連語はほとんどないようである。「ならせる」によるものが考えられなくはないが(「学生を家庭教師にならせる」)、あまり自然な言い方ではない。連語の例としてあげた「後釜にすわらせる」という言い方も調査した資料のなかには見られなかった。

他動詞から成る連語は、変化したあとの社会的立場や役割を表わす二格名詞で広げられることが少なくない。これは、物に対する働きかけのうちの《変化》の連語が、変化後の状態を表わす二格の名詞や形容詞の連用形、副詞などで広げられる(「紙を半分に切る」「布を赤く染める」「箱をぺしゃんこにすぶす)のと似ているようにも思われる。しかし、上で述べたように自動詞使役連語がほとんどないということは、《変化》と〈社会的立場への登用〉との違いもうかがわせる。すなわち、《変化》の場合には、ヲ格名詞の表わす物は、その状態が二格名詞で表わされる状態にかわってしまい、元の状態をとどめてはいない。それに比べて〈社会的立場への登用〉のほうは、その人の立場が変わるとはいえ、それは社会的な立場がいわば加わるだけでありその人の元のあり方が変わってしまうというわけではないということなのだろう。

【Vi 使役連語】「身内を 後釜に すわらせる」

【他動詞連語】「女性を 大使に 任命する」「学生を 家庭教師に やとう」

《動詞例 (自動詞派生の使役動詞) 》

(1) {単純動詞}

(後釜に) すわらせる@

(3) {サ変動詞 (複合動詞のうち後項が「する」であるもの)}

(3-1) {名詞相当+スル}

奉仕させる

《動詞例 (他動詞) 》

(1) {単純動詞}

(アメリカ人を秘書に) 抱える、(娘を嫁に) だす (: での)、(兵士を捕虜に/元気な娘を嫁に) とる、(臨時職員に) 雇う

(2) {複合動詞 (複合動詞のうち後項が「する」以外のもの)}

(運転手に) 召しかかえる、(秘書に) 雇い入れる、

(3) {サ変動詞 (複合動詞のうち後項が「する」であるもの)}

(3-1) {名詞相当+スル}

- ・ (先発投手に) 起用する、(顧問弁護士に) 雇用する、(男性を保育士に) 採用する、(山田氏を議長に) 選出する、(女性を委員に) 選任する、徴用する、(近所の人をエクストラに) 動員する、登用する、(書記に) 任命する、(部長に) 任用する、(若手を委員長に) 抜擢する

- ・(幼稚園児を主役に)スカウトする

〔文例(自動詞使役)〕

- ・そればかりか、以後二人が文を交わすことを禁じ、祥子を伊勢神宮に齋宮として奉仕させることに決してしまわれた。(神々に告ぐ：BCCWJ)

〔文例(他動詞)〕

次の例では、人が登用される立場が二格名詞で表わされている。

- ・於継は云う通り老先の短い躰だろうが、加恵には幼い小弁がいた。もし加恵に万一のことがあったときには、小弁を嫁に出すまでの世話は、誰がするというのだ。小弁の将来を思うと加恵は躰の芯が震えてくる。(華岡青洲の妻)
- ・三人の限界を見透かしたように、中曽根は七月二十二日、第三次中曽根内閣の組閣で宮沢を大蔵大臣に起用し内閣に取り込んだ。(梶山静六死に顔に笑みをたたえて：BCCWJ)
- ・光秀はこれらをそれぞれ侍大将格に起用し、とくに四王天又兵衛を重用した。(国盗り物語・織田信長)
- ・下級官吏にはすべてその土地の出身者を採用したが、指導者級の人間はみんな中央から派遣され、たえず更迭して彼ら自身の力がその土地に蓄積されないような仕組みになっていた。(流亡記)
- ・市民集会は、このタルクィニウスを、圧倒的多数で王に選出した。(ローマは一日にして成らず：BCCWJ)
- ・星組では冒険がしたいと考え、当時まだ研一生だった峰さを理、寿ひずる、高汐巴のために一場面を作り、さらに新人公演にも主役に抜擢したいと提案した。(宝塚、わがタカラヅカ：BCCWJ)
- ・「大胆な提案だが、民間から優秀な方を特別職にスカウトする場合、大手企業の役員と見合うかどうか。私なら検討の余地はあるが」(asa2006.txt(729035))

もちろん、上の例のように新たな立場が必ずしも明示的に表わされているわけではなく、次のような例もある。

- ・社長であるWさんは、十六年前に『第二の人生は自分の力で切り開きたい』とこの店をオープンさせたというが、その後人手不足になったため、定年退職したかつての部下たちをスカウトして、現在の態勢になったそうだ。(茂太さんの子離れ夫婦の幸福学：BCCWJ)
- ・彼は有能な人材を登用して、享保の改革を強力に推進した。(天下の落胤：BCCWJ)

2. 3 (イ)〈社会的相互〉

＜N[人]-ヲ (N[人]- ト／カラ／ニ) V[社会的相互関係]>

人と人との社会的な関係の変化を表わす動詞とヲ格の人名詞との組み合わせは、ト格、あるいは二格・カラ格の人名詞で広げられて、人と人との社会的な関係に変化を引き起こすことを表わす連語となる。ト格・二格・カラ格の人名詞は関係の相手や仲間を表わす。また、この連語をつくる動詞は、複数の人を表わす名詞のヲ格と組み合わせさせて、二人(あるいはそれ以上)の間の関係に変化をもたらすことを表わす連語もつくる。他動詞連語もあるが、

自動詞使役連語のほうが多い。この点は、「1. 1 (キ) 〈相互〉」において他動詞のほうが豊かだったのとは異なっている。

【Vi 使役連語】「二人を 別れさせる」「兄を 弟と 争わせる」「子供を 親から 離れさせる」

【他動詞連語】「二人を ひきはなす」「作家を 編集者と 結びつける」

「娘子を 恋人から ひきさく」

《動詞例（自動詞派生の使役動詞）》

(1) {単純動詞}

〔～と〕争わせる、戦わせる // 〔～と／から〕別れさせる

(2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}

〔～と／に〕ひきあわせる、めぐりあわせる

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+サセル}

- ・〔～と〕関係させる、結婚させる、喧嘩させる、絶縁させる、対決させる、対立させる、同居させる、同棲させる、別居させる // 〔～と／から〕離反させる
- ・仲たがいさせる、仲直りさせる

《動詞例（他動詞）》

(2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}

〔～と／に〕結びつける（：結びつく）、めあわす // 〔～と／から〕ひきさく、ひきはなす

(3-2) {副詞相当+サセル}

〔～と〕一緒にする

【文例（自動詞使役）】

まず、ヲ格名詞が複数の人を表わすものとして次のような例がある。

- ・このように、豊太郎とエリスには、出会いの日から二人を別れさせる時間が迫まっていたという二重構造になっているのだ。（舞姫：BCCWJ）
- ・その手紙には、敗戦の責任はスルタン自らにあると書いてあり、兵の多くは真の回教徒ではなく欲に眼のくらんでの参戦だから、彼らを戦わせるには戦利品で釣るしかない、と説いてあった。（コンスタンティノーブルの陥落）
- ・「彼」と別れたくない気持が、あるいは「彼」が七瀬と別れたくない気持が、会話の内容にはまったく関係なく、二人をいつまでも一緒にさせていたのだ。（エディプスの恋人）
- ・双子の姉妹が、離婚した両親を再び仲直りさせようと奮闘する。（asa2006.txt(865525)）

次の例は二つの人名詞をト格でつなげたものが全体としてヲ格名詞となっている。

- ・次郎は久本と社長の塚田を会わせるのは好ましくないと前から思っていた。（幕府の埋蔵金：BCCWJ）
- ・私はふいに、自分の祐之介に対する悪だくみ…エマの妊娠を利用して祐之介と渉を別れさせるため、エマにあの秘密を教えずにいるという私の計画…が、渉にはとくに

わかっていたのではないかと思った。(無伴奏：BCCWJ)

- ・クンツェは「遠藤の小説で興味をかき立てられたのは、市民の一人のM・Aと王妃を対決させるというアイデアでした」と話す。(asa2006.txt(2049130))

次の例は、ヲ格の人名詞と、ト格・ニ格の人名詞との組み合わせである。

- ・「永野君、おれはねえ、いまは鉄道屋で一生終わるつもりでいるよ。ふじ子をいい男と結婚させて、おれもおれにちょうど似合った女と結婚して、子供の五、六人も育てて、……」(塩狩峠)
- ・自分の妻を女中だとして考えていない息子を、妻と同居させるわけにはいかなかったのである。(冬の旅)
- ・項梁は、項羽を召平にひきあわせるべく、南方の戦線に使いを出した。(項羽と劉邦：BCCWJ)

〔文例（他動詞）〕

他動詞のほうも、ヲ格名詞が複数の人を表わす例がある。

- ・原島久三はハットの鎌田と仲が良かった。二人とも年齢に近い、ということもあったのだろうが、森川トオルが編集長をしている業界新聞に対して、原島も鎌田も会社の仕事としては二軍、三軍的な位置にある、ということがなんとなく二人を気分的に結びつけている、というようなところがあるようだった。(新橋烏森口青春篇)

次の例は、ヲ格の人名詞と、ト格・カラ格の人名詞との組み合わせである。

- ・やがて舞子は、絵理香を弟の哲次と結びつけ、その成長ぶりを見守ることにした。(若妻の秘めごと：BCCWJ)
- ・危険だと判別できた段階で迅速に子どもを親から引き離すことができていると、この子どもたちは助かったのだ。(日本の危機：BCCWJ)
- ・灰原先輩は電卓を片手に悲鳴みたいな声を上げると、俺を部長や司の側から引き離し、部屋の中央辺りへと連れて行った。(こんな上司に騙されて：BCCWJ)

2. 4 《組織への所属》

<N[人]-ヲ N[組織]-ニ V[社会的所属]>

人がどこかに所属することを表わす自動詞から派生した使役動詞およびそれに相当する他動詞がヲ格の人名詞との組み合わせり、さらに組織名詞のニ格で広げられた連語は、人をある組織に所属させるようにする働きかけを表わす。これを《組織への所属》とする。動詞はそれほど多くはないが、他動詞よりも自動詞派生の使役動詞のほうが豊かである。また、和語動詞はそれほど多くなく漢語動詞が多いのが特徴である。

【Vi 使役連語】「息子を 大学に 通わせる」「息子を 商社に 勤めさせる」

「娘を 旧家に 嫁がせる」

【他動詞連語】「部下を ライバル会社に 送りこむ」「娘を 旧家に 縁づける」

《動詞例（自動詞派生の使役動詞）》

(1) {単純動詞}

通わせる、勤めさせる、嫁がせる

(3) {サ変動詞 (複合動詞のうち後項が「する」であるもの)}

(3-1) {名詞相当+サセル}

- ・加入させる、勤務させる、就職させる、出向させる、出頭させる、進学させる、通学させる、通勤させる、転勤させる、転校させる、転出させる、赴任させる、留学させる

【入口サセル】 入園させる、入会させる、入閣させる、入学させる、入社させる、入信させる、入隊させる、入党させる、入部させる

- ・弟子入りさせる

《動詞例 (他動詞)》

(1) {単純動詞}

(大学に) 入れる (: 入る)

(2) {複合動詞 (複合動詞のうち後項が「する」以外のもの)}

受け入れる、縁づける (“嫁がせる”) (: 縁づく)、(社員をライバル会社に) 送り込む、誘い入れる、ひきとる

〔文例 (自動詞使役)〕

- ・その金は妹の一人娘である冴子をその町の女学校に通わせる学費であった。(あすなろ物語)
- ・したがって、今日、親が子供たちを一流大学に進学させたいと願うのは、とどのつまりは、終身雇用と年功賃金が保証されている官公庁や大手企業に就職させるためなのである。(デール・カーネギーに学ぶ7つの生きる力：BCCWJ)
- ・イギリスでは急増する校内暴力やいじめのため、各小中学校に「いじめ対策室」をそなえ、専任の相談員を置き、いじめた子を他校へ転校させるなど、さまざまな対策を講じてきた。(日本人はなぜいつも「申し訳ない」と思うのか：BCCWJ)
- ・屋外広告の会社を経営していた父親は息子に規律をたたきこもうとして、陸軍士官学校に入学させた。(アメリカの文化：BCCWJ)
- ・「行動将校一同は大臣官邸で自刃して罪をお詫びし、下士以下は原隊に復帰させる」(山本五十六)
- ・相撲好きで、70年代には相撲部屋にトンガ出身の若者を弟子入りさせたほか、最近では、ラグビー選手を来日させてきた。(asa2006.txt(1794068))

〔文例 (他動詞)〕

- ・その後ケンタッキー工場の設立が決まり、堤工場がモデル工場になり、アメリカの現地で採用された研修生を職場に受け入れ、必死になってみんなで作業工程のマニュアルをつくった。(トヨタを知るということ：BCCWJ)
- ・そのうち、姪 (古典中国語ではふつう「姪」は「甥」と同意) の某が、この狂人が叔父だと気づき、自分の家に引き取って世話をしたので、病気は快方に向かった。(中国の隠者：BCCWJ)

2. 4 (ア)〈社会的職務への従事〉

〈N[人]-ヲ N[職務]-ニ V[従事]>

人が何かに従事することを表わす自動詞から派生した使役動詞および人の雇用などを表わす他動詞とヲ格の人名詞との組み合わせは、職務を表わすニ格の名詞で広げられて、社会的な職務に従事することを引き起こす働きかけを表わす。ただしこの類の他動詞は多くない。

【Vi 使役連語】「部下を 新しい仕事に 従事させる」

【他動詞連語】「新人を 危険な任務に つける」

〈動詞例（自動詞派生の使役動詞）〉

(1) {単純動詞}

(任に) あたらせる、応じさせる、関わらせる、従わせる、そむかせる、添わせる、(任務に) つかせる、はべらせる

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+サセル}

- ・ 結集させる、参加させる、参与させる、従事させる、就任させる、入内させる、出演させる、出席させる、昇格させる、昇進させる、昇任させる、当選させる、便乗させる、復帰させる、復職させる
- ・ 仲間入りさせる

〈動詞例（他動詞）〉

(1) {単純動詞}

(任に) つける（：つく）

(2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}

とりたてる、ひきこむ

〔文例（自動詞使役）〕

- ・ さらに、公認会計士または監査法人である者を株主総会において会計監査人として選任し、会計監査にあたらせなければならない。（会社法：BCCWJ）
- ・ 海軍兵科将校の教育は、兵学校を卒業して遠洋航海をすませ、{生徒たちを} しばらく艦隊の実務につかせると、そのあと、海軍砲術学校とか、航海学校、水雷学校、通信学校など、各術科学校に入れて再教育をする。（山本五十六）
- ・ 理一はこの日の夜、築地の料亭でひらかれる電機業界の会合に出席することになっていたが、彼はかわりの者を出席させ、夕方早目に帰宅した。（冬の旅）

〔文例（他動詞）〕

- ・ 伊沢総督は着任するとまもなく、同郷の後輩である後藤和佐治という無名の一判事を抜擢し、台湾高等法院検察官長という要職につけた。（人民は弱し官吏は強し）

2. 4 (イ)〈社会的状況の体験〉

<N[人]-ヲ N[状況]-ニ V[体験]>

人がある状況を体験したり遭遇したりすることを表わす自動詞から派生した使役動詞やそれに相当する他動詞とヲ格の人名詞との組み合わせは、体験したり遭遇したりする状況を表わすニ格の名詞で広げられて〈社会的状況の体験〉を表わす連語をつくる。「物への働きかけ」の「1. 2 (イ)〈放置〉」に相当すると思われる。この連語に類する他動詞連語はあまりない。

【Vi 使役連語】「子供を 新しい環境に 慣れさせる」「友人を つらい目に あわせる」

【他動詞連語】「新入社員を 職場に 慣らす」

≪動詞例（自動詞派生の使役動詞）≫

(1) {単純動詞}

(つらい目に) あわせる、慣れさせる

(2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}

のしあがらせる

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+サセル}

習熟させる、順応させる、前進させる、直面させる、適応させる、同化させる、熱中させる

≪動詞例（他動詞）≫

(1) {単純動詞}

(子供を危険に) さらす、慣らす（：慣れる）@

(2) {複合動詞}（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}

まきこむ

〔文例（自動詞使役）〕

- ・大阪市の蓮美幼児学園は入園前の子どもを対象にした「リトル・キンダー」を開いている。子どもを徐々に集団の場に慣れさせたくても、安心して遊ばせる場がないという声を受けて97年に始めた。(asa2006.txt(457039))
- ・……私は自分の暗黒の感情に直面した。鶴川がこんな追いつめるような質問で以て、私をそれに直面させたのだ。(金閣寺)
- ・しかったり、体罰をくわえることが、それほど不自然でない秩序が家のなかにあり、その秩序が子どもに、秩序を自然なものとしてうけとらせ、秩序に適応させたのである。(「明治的支配」と市民思想：BCCWJ)

なお、「ひどい目／つらい目／悲しい目 にあわせる」という慣用的な表現がある。

- ・「(前略)(あの子が敦也に)一緒にやらなきゃひどい目に遭わせるって敦也を脅したんですよ。敦也は仕方なく付き合ってたんです」(さまよう刃)

〔文例（他動詞使役）〕

- ・政府部内でも議論はあったようですが、おもてにできた結果としては、防災対策に政府はほとんど無策で、住民を大きな危険にさらしたままだったのです。（高木仁三郎 著作集：BCCWJ）
- ・「帰りたいっていうのを帰さずに、自分のペースに巻き込んでやって、ものにするのが女たらしってもんなのよ」（女社長に乾杯！）

2. 5 《組織からの離脱》

＜N[人]-ヲ N[組織・職務]-カラ V[離脱]>

人が属していたところから離れることを表わす自動詞および人の解雇などを表わす他動詞とヲ格の人名詞との組み合わせは、組織や職務を表わすカラ格の名詞で広げられて、社会的なある環境にある人をそれらから離れさせることを表わす。使役動詞も他動詞もそれほど多くない。使役動詞は漢語動詞派生のものが中心であるのに対して、他動詞には和語動詞もある。

【Vi 使役連語】「推進派を まわりから 孤立させる」「課長を 監査から はずれさせる」

【他動詞連語】「反対派を グループから 追放する」「彼を 主役から はずす」

《動詞例（自動詞派生の使役動詞）》

(1) {単純動詞}

はなれさせる、引かせる

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+サセル}

- ・引退させる、（推進派をまわりから）孤立させる、辞任させる、（親会社から）独立させる、離脱させる

【転□サセル】 転学させる、転向させる、転出させる、転職させる、転任させる

【退□サセル】 退院させる、退学させる、退職させる、退陣させる

- ・ひとりだちさせる

《動詞例（他動詞）》

(1) {単純動詞}

はずす（：はずれる）

(2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}

おいだす、救い出す、ひきずりおろす、（対抗チームから）ひきぬく

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+スル}

追放する

〔文例（自動詞使役）〕

- ・すでに麻呂は六十九歳、年に比して老いこみが甚しく、右大臣の職責を果しかねている。正二位を与えられるのを花道として、現実の政治から離れさせたらどうか、と穂

積は言ったのである。(永井路子歴史小説全集：BCCWJ)

- ・「まずね、相手のその人、親戚から孤立させる作戦から立てるんですよ」って言って、しばらく復讐のための作戦会議をやった。(志ある子に育てるにはどうしたらいいか：BCCWJ)
- ・「(中略) おばあちゃん、泣きながら『帰りたい、帰りたい』って言うんだって。だから退院させようかって言ってたんだけど」(きっと君は泣く)

〔文例 (他動詞)〕

- ・鞍谷はそこで光秀を讒訴し、できれば国外へ追放しようと考えた。將軍の連絡官ともいべき光秀さえ朝倉家から追い出せば、自然、足利義秋も居心地がわるくなって、越後の上杉家あたりへでも流れてゆくだろう。(国盗り物語・織田信長)
- ・パキスタンやアフガニスタンやオマーンからやってきた移民のように、可哀想な外国人はみな、家族どころか親族一同を不幸な国から救い出し、イギリスに呼び寄せて何かなんでも英国パスポートを取得したがるものと思っているらしい。(イギリス人は「理想」がお好き：BCCWJ)
- ・報告を受けたKGB議長セミチャストヌイは、ブレジネフにことの詳細を報告すると同時に、もしこれを利用すればフルシチョフを書記長の座から引きずりおろせるとアドヴァイス。(国際情報 just now：BCCWJ)
- ・{ソニーは} 昨年末には、iPodシリーズを大ヒットさせているライバルの米アップルコンピュータから有力技術者を引き抜き、ソフトウェア開発全体の責任者にしたばかり。(asa2006.txt(122843))

上の文例は和語動詞であった。次の例は漢語動詞である。

- ・バイキンといって金沢さんのことをバカにしたり、お友だちに悪口をいったりしました。金沢さんをクラスから追放しようと最初にいったのもわたしです。(ハッピーバースデー：BCCWJ)
- ・彼は諸都市の腐敗しきった旧支配者を官庁から容赦なく追放して首都から新人を派遣し、旧官僚たちがどれほど自分がその地方の実力者であり、地理と風俗に通じて有能であるかを証明して利権にありつこうとしても許さなかった。(流亡記)

2. 6 《社会的境遇とかかわる居住》

<N[人]-ヲ N[場所]-ニ V[居住]>

人がどこかに存在しつづけることを表わす自動詞からの使役動詞は、ヲ格の人名詞と組み合わせ、さらに場所を表わすニ格の名詞で広げられて、人がある場所に存在する状態を引き起こすことを表わす連語をつくる。単なる一時的な存在の惹起だけでなく、何らかの社会的境遇に関わるような居住、人をどこかに居させることを社会的な関わりの中で特徴づけるような事態が表現される。他動詞は、留置を表わすものがこの類の連語をつくるが数は少なく、自動詞からの使役動詞による連語のほうが多い。

【Vi 使役連語】「子供を 部屋に こもらせる」

【他動詞連語】「儒者を 屋敷に 幽閉する」

《動詞例（自動詞派生の使役動詞）》

(1) {単純動詞}

(病室に) いさせる、こもらせる、住まわせる、とどまらせる、(別室に) 控えさせる、待たせる

(2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}

居すわらせる、(田舎に／新居に) 落ちつかせる、(店に) 住み込ませる、(自室に) とじこもらせる、(故郷に) ふみとどまらせる

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+サセル}

- ・ 移住させる、永住させる、寄寓させる、寄宿させる、居住させる、居留させる、寄留させる、下宿させる、宿泊させる、待機させる、滞在させる、塾居させる、駐屯させる、定住させる、逗留させる、入居させる、入植させる、留守居させる
- ・ 仮住まいさせる、寝泊まりさせる

《動詞例（他動詞）》

(1) {単純動詞}

かくまう

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+スル}

幽閉する

(3-2) {副詞相当+スル}

(ホテルに) 缶詰にする

〔文例（自動詞使役）〕

- ・ 「なるほど、河西を待合室に待たせた理由はそれでわかった。(点と線)
- ・ 17世紀のフランスで優れた芸術家をローマに滞在させた「ローマ賞」がA I Rの起源だとも言われる。(asa2006.txt(1662499))
- ・ 信秀は名古屋城の客となり、家来は城下の武家屋敷に逗留させた。(国盗り物語・斎藤道三)
- ・ 昔から、日本の田舎では夫を亡くした寡婦を海辺の村に移住させる習慣があった。貧しかった当時でも、海に近い村では、貝を掘ったり、魚を加工したりする仕事は沢山あって、女手一つでも何とか食っていったからである。(私の海彦山彦：BCCWJ)
- ・ 吟子は彼女等を自由に二階の空部屋に住ませた。(花埋み)
- ・ 彼女は娘の頃から、母親と一緒に、ミュンヘンに入りかわり立ちかわり訪れてくる日本人留学生の世話をしてくて、今では六十に手が届く年齢になっていた。戦争中をのぞき、日本人だけを下宿させた。(楡家の人びと)

〔文例（他動詞）〕

- ・ 「ろくでなし」のジュジュは、たまたま、この殺人犯、バルビエ（アンリ・ヴィダル）を地下にかくまうハメになり、「友人」づき合いをするようになるのだが、(映画この心のときめき：BCCWJ)
- ・ 「切支丹屋敷に、長助、はるという夫婦者がいて、雑用を足しておる。この二人が、

屋敷に幽閉してあるあの異人シドッチより、切支丹の洗礼を受けていたことが判明したのだ」(市塵：BCCWJ)

- ・彼女の母親を中国から呼び寄せて取材し、ユン・チアンを自分の別荘に九ヵ月間も缶詰にして原稿を書かせた。(ザ・エージェント：BCCWJ)

2. 7 《人の空間移動》

＜N[人]-ヲ N[場所]-カラ N[場所]-ニ／ヘ／マデ V[移動]>

先に「2.1 (ア)〈身体の動きや姿勢の変化〉」でも述べたが、日本語の自動詞は無意志動詞がほとんどであり意志動詞は少ない。意志動作を表わせる自動詞は類として限られており、人の空間的な移動を表わすものと身体運動・姿勢変化を表わすものにほぼ限られている。人の空間移動を表わす他動詞、および自動詞派生の使役動詞は、ヲ格の人名詞と組み合わせり、さらに、場所を表わすカラ格あるいは、ニ格・ヘ格・マデ格の名詞で広げられて、《人の空間移動》を表わす連語をつくる。その人を移動させた後に何かを行わせるという目的がはっきりしている働きかけの場合には、目的たる活動を表わす名詞のニ格と組み合わせることがある。使役動詞も他動詞も豊富である。

【Vi 使役連語】「生徒を 家に 帰らせる」「機動隊を 構内に 入らせる」
「子供を 使いに 行かせる」「秘書を 連絡に 来させる」
「息子を 駅まで 歩かせる」「秘書を 取引先へ 出向かせる」
「兵士を 前進させる」「弟子を 外出させる」

【他動詞連語】「生徒を 家に 帰す」「機動隊を 構内に 入れる」
「子供を 安全な場所に にがす」
「医者を 被災地に 派遣する」「特使を 現地に 派遣する」
「秘書を 連絡に よこす」「子供を 使いに やる」

《動詞例（自動詞派生の使役動詞）》

(1) {単純動詞}

(二階に) 上がらせる、(講堂に) 集まらせる、歩かせる、行かせる、至らせる、伺わせる、(現場に) おもむかせる、帰らせる、越えさせる、来させる、さがらせる、去らせる、しりぞかせる、(前へ) 進ませる、(パリへ) 発たせる、散らせる、出かけさせる、出させる、通らせる、どかせる、逃げさせる、のがれさせる、登らせる、(蔵に) はいらせる、走らせる、這わせる、離れさせる、(後ろへ) ひかせる、(大阪へ) 向かわせる、戻らせる

(2) {複合動詞 (複合動詞のうち後項が「する」以外のもの)}

- ・歩みよらせる、行き過ぎさせる、押しかけさせる、落ちのびさせる、(住民を危険地域から) 立ちのかせる、出向かせる、通り過ぎさせる、引き上げさせる、ひきかえさせる、引越させる、(足を) 踏み入れさせる、もぐり込ませる
- ・旅立たせる@、近づかせる、近寄らせる、遠ざからせる // 家出させる@

(3) {サ変動詞 (複合動詞のうち後項が「する」であるもの)}

(3-1) {名詞相当+サセル}

- ・移住させる、移動させる、移民させる、迂回させる、外出させる、帰郷させる、帰国

させる、帰宅させる、結集させる、行進させる、後退させる、集合させる、出張させる、出発させる、上陸させる、植民させる、随行させる、接近させる、前進させる、潜入させる、疎開させる、退却させる、退散させる、直進させる、撤退させる、転居させる、転出させる、転宅させる、転地させる、転入させる、同行させる、登頂させる、逃亡させる、突進させる、避難させる、留学させる // 往復させる、散歩させる・足踏みさせる、後ずさりさせる@、後戻りさせる@

《動詞例（他動詞）》

(1) {単純動詞}

(二階に) あげる (: あがる)、(講堂に) 集める (: 集まる)、入れる (: はいる)、送る、(客を地下に) 降ろす (: 降りる)、帰す (: 帰る)、(都会へ) 出す (: 出る)、通す (: 通る)、(安全な場所に) にがす (: にげる)、のがす (: のがれる)、(会場に) 導く、戻す (: 戻る)、やる、よこす

(2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}

追いつ返す、追い払う、連れ帰る、引きずりおろす、呼び集める、呼びつける

【一入れる】 誘い入れる、請じ入れる、招き入れる、迎え入れる、呼び入れる

【一こむ】 送り込む、誘い込む、連れ込む、呼び込む

【一出す】 追い出す、おびき出す、誘い出す、連れ出す、ひきずり出す、呼び出す

【一戻す】 連れ戻す、呼び戻す

【一寄せる】 おびき寄せる、招き寄せる、呼び寄せる

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+スル}

召還する、召集する、招集する、招致する、招聘する、先導する、徴兵する、徴用する、動員する、派遣する、派兵する、誘導する

(4) {複合動詞に準ずるもの}

【連れて一】 連れて行く、連れて来る、連れて帰る

その他、【おぶって一】【抱えて一】【抱いて一】【背負って一】なども同様。

〔文例（自動詞使役と他動詞）〕

次の文例には、自動詞使役と他動詞が使われていて移動が表現されており、いずれも到着点を表わすへ格の場所名詞が共起している。

- ・ルーマニアの良いところは、御幣を畏れずいうならば、どんなに優秀な者でも、僻地へ送りこみ、長いこと教育にあたらせる。子供にとってはありがたいことである。……ひどく交通の不便な村へ トランシルヴァニアの出身者を赴任させても、給料面でよい意味で手心を加えることをしない。(ルーマニアの小さな村から)

なお、この例の他動詞連語「(教員を) 僻地へ送り込み」と次の自動詞使役連語「(技師を) 佐世保に赴かせて」は従属節述語であり、主節には、移動した先で行わせる動作が述べられている。

〔文例（自動詞使役）〕

次の2例はいずれも到着点を表わす二格・へ格の場所名詞が共起している。

- ・榊原は、早速鈴木技師を佐世保に赴かせて、男を連れてこさせた。(戦艦武蔵)

- ・「広島の子供の話が、私を現場に向かわせたのかもしれない」(asa2006.txt(734352))
- ・女兒が通う小学校は、5年生の全家庭に、川に近づかないよう電話で伝えた。22日に堰付近の浅瀬で娘と魚釣りをしていた母親は「堰付近は流れが速く、危険だと感じていた。子どもだけで危険な場所に近づかせないようにしたい」と話した。(asa2006.txt(1660388))
- ・福山で下車。湯田村に疎開させている妻子に会い、入隊の服装に改める。(黒い雨)
- ・伊良部は今日の出来事を話した。談判の場に伊良部を同行させたこと、そこで神経症のやくざに出会ったこと、それを見たら不意に心が軽くなったこと。(空中ブランコ)
- ・いつもより敵機の数も多かったから、病院でも患者のうち歩ける者は歩かせ、それが出来ぬ者は担架に乗せて地下室に避難させた。(海と毒薬)
- ・「とやかく言っても母上はそなたを離したくないのだ。病が一旦小康を得ているとはいえ、またいつぶり返さぬとも限らぬ。その細い体一つで東京へ行かせる気にはなれぬのも無理はない。(花埋み)
- ・そのために、佐山は、静江を神崎の所へ潜り込ませたのだ。(悪の華：BCCWJ)

次の例では、場所名詞は現れていない。最初の例には、「あやまりに」という移動先での動作が表わされており、二番目の例にも主節において「射撃を開始させた」という移動先での動作が述べられている。

- ・よく三堀母子に言いふくめて、二人だけであやまりに出向かせた方がよかったかもしれないと、信夫は悔やんだ。(塩狩峠)
- ・信長は兵を部署し、ただちに鉄砲隊、弓隊を前進させて、射撃を開始させた。(国盗り物語・織田信長)
- ・逆に、主人の喜兵衛は、妻や使用人を交替で外出させ、花火見物を許しているので店は手薄である。(一橋隠密帳：BCCWJ)
- ・警戒区域にして、強制的に住民を立ち退かせたとして、もし何も起きなかったらもちろん、それがもっとも喜ばしいことですが一法律では避難者の財産や生活に支障が出ても、それを補償する条項はありません。(復興の「教訓」：BCCWJ)

〔文例（他動詞）〕

他動詞のほうも、到着点を表わす二格・へ格・マデ格の場所名詞が共起しているものが多い。

- ・そのうえで中国政府は、二〇〇五年までに月に人を送り込むという宇宙開発計画を発表したのである。(アフガン暗黒回廊：BCCWJ)
- ・彼の父信行が実兄である信長に対して二度に渡って謀反に及んだとはいえ、信長は病と偽り信行を城におびき寄せ、彼を刺客に襲わせた。(女の刃：BCCWJ)
- ・Desireに着くと、シバさんは待ってましたとばかりに私たちを奥の部屋に連れて行き、デスクから一枚の紙を取り出した。(蛇にピアス：BCCWJ)
- ・しかし、それに先がけ一八八八年、当時中国洋務派の李鴻章は軍事上の目的で、学生を日本に留学させようと考え、実際に一五名を日本に派遣した。(現代中国人の日本留学：BCCWJ)
- ・薫平は朝子に会えた嬉しさで一瞬すべてを忘れて心からの笑顔で朝子を部屋に招き入れようとした。(ヴァンサンカン・結婚：BCCWJ)

ここまでの例は移動後の場所が二格で表わされていたが、次の例ではへ格・マデ格で表わされている。

- ・半鐘をならして、谷間のすべての人々を、谷を見おろす中腹にある父親の家の前へ招集する。(不意の唾)
- ・ノタラスの家族で生きのびたのは、包囲のはじまるずっと前に財産を持たせてヴェネツィアへ逃がしてあった、娘一人だけだった。(コンスタンティノープルの陥落)
- ・身体にはどこにも怪我をしていないが、長井頼子は衰弱が激しいので、ひとまず黒平村の診療所で手当てをしてから、柿の木村へ連れ戻すことにした。(野性の証明：BCCWJ)
- ・当時の草平はすでに妻があり、子や妻を郷里へ帰して別の女性と同棲していた。(今は幻吉原のものがたり：BCCWJ)
- ・翌朝、鮎太は勉強を早く打ち切って家を出ると、留吉と幸夫の二人を伊豆屋へ偵察に派遣した。(あすなる物語)〔ここの「伊豆屋」は場所名詞扱い〕
- ・黒人兵が急に喚きたて、僕の肩を掴んで立ち上らせると地下倉の中央まで {僕を} 引きずり出して、僕を明りとりの方の向うの大人たちの眼にさらした。(飼育)

次の例は、それまで存在していた場所（それが出発点になる）を表わすカラ格名詞と共に起している。

- ・彼等は四国を狙っています。彼等はわれわれ狸族を四国から追ひ払って、かわりにここを狐の王土にしようと思んでいます。(腹鼓記：BCCWJ)
- ・くそ、俺を脅して部屋からおびき出すつもりだな。(チェーンレター：BCCWJ)
- ・彼は諸都市の腐敗しきった旧支配者を官庁から容赦なく追放して首都から新人を派遣し、旧官僚たちがどれほど自分がその地方の実力者であり、地理と風俗に通じて有能であるかを証明して利権にありつこうとしても許さなかった。(流亡記)
- ・たとえば、南アメリカのペルーでは、一八四五年に奴隷制が廃止されてから、海岸の大農園や、グアノ採掘地での労働力不足に悩み、移民法を設定して、ヨーロッパ各地から移民を招致したが、いずれもうまく行かず、ブラックバーダーの手を経て、中国から労働者を入れ始めた。(太平洋)
- ・そのときの新聞は、実に活き活きとしていたし、各新聞社も、全国から支局の記者まで動員して、この事件に相当な人数の記者を投入した。(新聞記者という仕事：BCCWJ)
- ・ものかげにかくれていたピサロたちは、騎馬を先頭に飛びだすと、皇帝のみこしめがけて、まっしぐらにつきすすみ、おどろきあわてるインカの兵士たちをけちらし、皇帝をみこしから引きずりおろしました。(インカのミイラは黄金を見たか：BCCWJ)

次の例では、場所名詞は現れていない。最初の例には、「手つだいに」という移動先での動作が表わされている。

- ・近所のかかりつけの医者と呼ばひ、ひどい頭痛を訴えて、……。医者を忽々に追いかえずと、かづは腹心の女中を除いて、小女二人を引越の手つだいに出した。(宴のあと)
- ・旅籠屋を出た柴垣は、ちかくの旅籠屋に分散して泊まっていた五人の仲間を集めた。(妖剣おぼろ返し：BCCWJ)
- ・タクシーは、道が一方通行ということで、ホテルの反対側で私たちを降ろした。(一瞬の夏)

- ・商工会としては人を増やし客を呼び込むためには企業誘致しかない。(国策の行方：BCCWJ)
- ・山本は、珍しく大声を出して、彼らを追い返したそうである。(山本五十六)

他動詞のうち和語の単純動詞は自動詞と対になっているものが多い。それらでは、他動詞による連語と、それと対をなす自動詞から派生した使役動詞による連語とが、かなり近い事態を表現する(先に「0. 2. 1 節」で例(3)として「帰す」と「帰らせる」を例にして少し述べたことである)。

「子供を 二階に あげる／あがらせる」

「客を 部屋に とおす／とおらせる」

両者の違いを、使役主体が動作主体(この例では「子供」「客」)の意志を尊重するか 否かといった点に求めようとする論考もあるが、必ずしもそういった違いを反映しているわけではない。たとえば次の例で「出す」が使われているが動作主体(「娘」)の意志を尊重していないわけではない。

- ・辰子は、娘が愉しむことに反対しなかった。学生たちとスキーにゆくのもよろこんで出したし、(花霞)

他動詞の和語複合動詞は後項要素に特徴があり、[－入れる][－こむ][－だす][－寄せる][－戻す]などが多い。このうち[－こむ]以外は、他動詞でかつ有対他動詞である。また[－こむ]は現代語では独立の語としては使われない。

2. 8 《よびかけ》

<N[人]-ヲ V[動作誘導的態度]>

これは、相手に主として言語的に働きかけてある動作を誘導するような態度を表わす動詞とヲ格の人名詞とが組み合わさる連語である。この類の連語をつくるのはもっぱら他動詞であり使役動詞はみられない。

【他動詞連語】「友達を パーティーに さそう」「早くしなさいと 子供を せきたてる」

《動詞例(他動詞)》

(1) {単純動詞}

あおる、うながす、おしえる、おだてる、くどく、けしかける、さそう、そそのかす、たのむ、まねく、よぶ

(2) {複合動詞(複合動詞のうち後項が「する」以外のもの)}

せきたてる

【文例(他動詞)】

- ・「実際に当たってみなければ何とも言えないけど、柳とマネージャーの間がうまくいってないと聞いているんで、そこがつけ目かもしれないな。柳を少し煽って、オプションをひとつ自分に貰えとたきつければ、案外のってくるかもしれないな」(一瞬の夏)
- ・ほんとうに、隊長がちかごろすることは分らないことが多いのです。古参兵はこれを

見て、困ったようなにがい顔をして、なるべくそれを部下の者に見せないようにと、われわれをうながしてこの建物を出ました。(ビルマの堅琴)

- ・私はまだコーヒーを呑んでいるエディをせきたてるようにしてイソップを出た。移籍の契約も、できる時に早く済ませておかないとどんなことが起きるかわからない、と不安になってきたからだ。(一瞬の夏)
- ・このとき病床にあった佐吉は喜一郎を呼んで、そのお金で自動車の研究をはじめなさい、といいました。(世界にかがやいた日本の科学者たち：BCCWJ)

上に述べたように、この類の連語をつくるのはもっぱら他動詞であるが、この類の他動詞が、相手にある動作を誘導するような態度を表わすものであることから、次のような点で使役文との関わりはある。すなわち、この類の動詞が連用形(シテ形・シ形)をとって従属節になり、主節述語が使役動詞である複文をしばしばつくることである。

- ・観行院は軀も顔も硬直したように動かず、やがて長橋を促して宸翰の朗読を続けさせた。(和宮様御留：BCCWJ)
- ・黒田孝高はペドロ・ゴメス神父を豊前の妙見城に招いて義統に引きあわせた。(王の挽歌：BCCWJ)
- ・「自分は信長公の御恩をこうむることふかく高く、海山ともたとえきれぬほどである。されば追善のために髪を切る」と言い、その場で児小姓をよび、髻を切らせた。(国盗り物語・織田信長)
- ・調べでは、横山容疑者は昨年7月下旬、下越地区の中学3年の女子生徒(当時15)を新潟市内のファッションヘルス店で働くように誘い、同年11月初旬、客相手にわけつな行為をさせた疑い。(asa2006.txt(388137))

また次の文のように、相手に引き起こす動作を「～ヨウニ」「～ショウト」などの引用節や、意向形で表現するものもある。

- ・「いい匂いね。飲んでいかない」予定通り、七瀬は沖を誘った。(エディプスの恋人)
- ・子どものいない正夫はこの妊娠をひどく喜び、どうしても産んでほしいと懇請して、心配する貴子に「結婚しよう」と強引に口説いたという。(弁護士む～みんの解決！女の一大事：BCCWJ)

2. 9 《社会的立場のうみだし》 ＜N[人(社会的立場)]-ヲ V[登用]>

先に「2. 3 《社会的状態の変化》」の下位類としてあげた〈社会的立場への登用〉を表わす他動詞のなかには、立場としての人を表わすヲ格名詞と組み合わせ、ある社会的立場をうみだすことを表わす連語をつくるものがある。

【他動詞連語】「公設秘書を 雇う」「特命大使を 任命する」「顧問弁護士を雇用する」
「専用の運転手を 抱える」「料理係を 召しかかえる」

この《社会的立場のうみだし》の連語を〈社会的立場への登用〉の連語と合わせて示すと次のような関係になっている。

《社会的立場のうみだし》 〈社会的立場への登用〉

「大使を 任命する」 ⇔ 「女性を 大使に 任命する」

「家庭教師を やとう」 ⇔ 「学生を 家庭教師として やとう」

この関係は、物に対する働きかけにおける《生産》と《変化》との関係に似ている。

《生産》

《変化》

「かゆを たく」 ⇔ 「新米を かゆに たく」

「ステーキを やく」 ⇔ 「松阪牛を ステーキに やく」

そして、《生産》の連語をつくりうるのは他動詞がほとんどで、使役動詞による連語が少なかったのと似て、《社会的立場のうみだし》の連語をつくりうるのは他動詞だけで、使役動詞はこのような連語をつくれないうのである。

《動詞例（他動詞）》

(1) {単純動詞}

(用心棒を) おく、(運転手を) 抱える、(警備員を) 頼む、雇う

(2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}

(コックを) 召しかかえる、(執事を) やといいれる

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+スル}

(弁護士を) 雇用する、(大使を) 任命する

〔文例（他動詞）〕

- ・友人は案内人を頼み、谷川で山女を釣りに出かけたが、まったく釣れない。(江戸の遊歩術：BCCWJ)
- ・なるほど信盛はその癖があった。信長が領地をふやしてやっても、侍を召し抱えない。抱えと、その分だけ信盛の減収になるからである。(国盗り物語・織田信長)
- ・農業経営の大規模化を進めるため、大仙市は専門の指導員を雇用了。(asa2006.txt(1004309))
- ・昨日は雨で、私たちは日本に行く密航船を探すために支那人町を訪れました。とにかく一隻の船を求め、船長や水夫を雇い入れねばなりません。(沈黙)
- ・「しかしな、これが何千人の従業員を抱える大企業ならともかく、尾島産業程度の会社では、そう付きっきりであれこれ指示するわけにはいかん」(女社長に乾杯！)

なお、この《社会的立場のうみだし》の連語も、動詞が連用形(シテ形・シ形)をとって、複文構造の使役文(および、シテモラウ文)の従属節に用いられることがある。主節ではその社会的立場において行わせる動作が表わされている。

- ・商品の配達先として、実体のない会社の事務所を秋田市内に借り、臨時の事務員を雇って電話番号などをさせていた。(asa2006.txt(2121293))
- ・そうかといって、職人を頼んで洋服の仕事をさせておる、これも信用ならんでしょ。(「文芸春秋」にみる昭和史：BCCWJ)
- ・腕のきいた浪人たちを雇いいれ、又五郎をまもらせ、又五郎が逃げ隠れするための費用もあたえた。(剣客小説集：BCCWJ)
- ・文書担当の人に頼んで、角二の丈夫な封筒をとっておいてもらう。(「超」整理法：BCCWJ)

3. 事への働きかけ

この章では、「事への働きかけ」の連語について述べる。「事」を表わすヲ格の名詞と動詞（使役動詞と他動詞）との組み合わせであるが、ここで「事」というのは、やや漠然としていて、物（具体物）でも人でもないものをごくおおざっぱにさしている。物や人の側面²²としての「事」（動き、状態、特徴、関係など：下の(a)）、自然現象などの「事」（下の(b)）、社会現象や概念などをはじめとする抽象的な「事」（下の(c)）など多様である。これらを同じように扱ってよいかどうかには疑問も残るが、ここではまとめておく。

- (a) 「教室の雰囲気を和ませる」「社員の生活水準を向上させる」
「車軸の回転を速める」「川の流れを変える」「人の悲しみを和らげる」
- (b) 「伝染病を地域に蔓延させる」「雨を降らせる」「雷鳴を轟かせる」
「火をおこす」「高熱を出す」
- (c) 「日本社会を旧弊から脱却させる」「キリスト教をアジアに伝播させる」
「民主主義体制を確立する」「思想を世間に広める」

本報告での考察にはいる前に、「物への働きかけ」「人への働きかけ」と同様、奥田靖雄（1968-72[1983]）での捉え方をみてみる。第一章「対象へのはたらきかけ」の第三節が「事にたいするはたらきかけ」である。そこでは、この類の連語が「変化のむすびつき」と「出現のむすびつき」という 2 類に分けられている。「変化のむすびつき」は、具体的な物や人に対して直接的あるいは間接的にはたらきかけ、それを媒介にしてそれらの側面としての「うごき、状態、特徴、あるいは関係」に変化を引き起こすことを表わす連語（「車軸の回転を早める」）であり、「出現のむすびつき」は、側面としてのうごきや状態などが、所有者である物や人に出現することを表わす連語（「人に不幸をもたらす」）である。両者は、それぞれの連語を広げる要素に特徴があり、「変化のむすびつき」では、ヲ格名詞（物や人の側面）の「所有者」をしめすノ格の名詞で広げられることが多く、「出現のむすびつき」では、ヲ格名詞の示す動きや状態のあらわれてくる場所を表わすニ格の名詞で広げられることが多い。

●奥田（1968-72[1983]）における「事にたいするはたらきかけ」を表わす連語のタイプ

《変化のむすびつき》

(N[物・人・事]-ノ) N[事[側面]]-ヲ Vt[変化]

〈対象[側面]ノ所有者〉 〈対象〉 〈物や人の側面における変化〉

川の 流れを	せきとめる	歯車の 回転を	はやめる
国民の 抵抗を	つよめる	組合員の 団結を	よわめる

《出現のむすびつき》

N[事[側面]]-ヲ N[抽象]-ニ Vt[出現]

〈対象〉 〈対象[側面]ノ出現場所〉 〈物や人のある側面の出現〉

生活機能に	麻痺状態を	惹起する	教育に	安定を	もたらす
混乱を	国民のうえに	引き起こす	人民の間に	感動を	よびおこす

²² ここでいう「側面」は、奥田（1968-72[1983:63]）で、奥田のいう「事にたいするはたらきかけ」を表わす連語をなすヲ格名詞の特徴として、「物や人を具体的にしめしてはおらず、その側面としての動き、状態、特徴、関係をさししめしている」とされているときの「側面」である。

この紹介にうかがえるように、奥田靖雄（1968-72[1983]）で「事にたいするはたらきかけ」とされている連語は、ヲ格の名詞が、物や人の「側面」としての動き、状態、特徴、関係などを表わしているもの、つまり上の (a) 類の「事」である連語である。(b) 類の自然現象、(c) 類の社会現象や概念などを表わすヲ格名詞と動詞との組み合わせから成る連語は、奥田（同）の「事にたいするはたらきかけ」においては扱われていない。その理由は明らかでないが、自然現象・社会現象・抽象概念などの変化を引き起こすことを表わす他動詞があまり多くないということなのかもしれない。一方、これらの変化の引き起こしを表わす使役動詞は少なくないと考える。そこで本報告では、上の (b) 類、(c) 類のような「事」を表わす名詞もとあげて、それらと動詞とから成る連語を広く対象とする。

このようなことから、以下では、奥田（1968-72[1983]）の分類も参考にしつつ、また、本報告で先に述べた「物への働きかけ」を表わす連語のタイプをも勘案し、広く「事」の変化の引き起こしを表わす連語を大きく 5 類に分けて検討する。

●本報告における「事への働きかけ」を表わす連語のタイプ

- 《変容》<N[事]-ヲ V[変容]> : 国家を安定させる // 速度を早める
 《転移》<N[抽象]-ヲ (N[抽象]-ニ) V[転移]>
 : 判断に 私情を 介入させる // 思想を 世間に 広める
 《排除》<(N[事]-カラ／ノ) N[事]-ヲ V[排除]>
 : 文学科を 文理学部から 独立させる // 調査内容から 矛盾を とりのぞく
 《移行》<N[事]-ヲ N[場所]-カラ N[場所]-ニ／へ V[移行]>
 : 日本社会を 旧弊から 脱却させる // 審理を 総会の場に うつす
 《現出》<N[事]-ヲ (N[場所]-ニ) V[現出]>
 : 歪みを 生じさせる // 社内に 調査委員会を 設ける

3. 1 《変容》

<N[事]-ヲ V[変容]>

この類は「物への働きかけ」における《変化》に相当する。使役動詞も他動詞も豊富である。

- 【Vi 使役連語】「雰囲気をしらませる」「国家秩序を安定させる」「工業を発展させる」
 「戦意を衰えさせる」「権威を失墜させる」「新しいゲームをはやらせる」
 【他動詞連語】「速度をはやめる」「動揺を静める」「組織を再編成する」
 「教えをひろめる」

事への働きかけを表わす動詞には漢語サ変動詞がかなりある。またそのサ変動詞は自他が安定しないこともしばしばあり（人によってあるいは文脈によって判断がゆれる、等）、そのためあって「～サセル」が「～スル」とほぼ同じように使われるものがある²³。

²³ 受身「～ラレル」と「～スル」の間にも同様なことがある。

・その法案は、賛成多数で〔可決された／可決した〕。

- ・括弧の中に適切な助詞を入れて、文を「完成させなさい／完成しなさい」。
- ・陸軍は南方地域に部隊を「展開させた／展開した」。
- ・子供のときからの夢を「実現させる／実現する」ために音楽学校にすすんだ。

《動詞例（自動詞派生の使役動詞）²⁴》

(1) {単純動詞}

（青春の思い出を）明るませる、（活力を／徳目を）衰えさせる、（先行きを）曇らせる、（調子を／判断を／生態系を）狂わせる、（病を）こうじさせる、（教室の空気を）凍らせる、（事態を）こじらせる、（商店街を）寂れさせる、（気持ちを）しずませる、（雰囲気／往来を）白ませる、（運動を窮地に）立たせる、（思いを）募らせる、（不満を）積もらせる、（雰囲気／信念を）なごませる、（制度を日本に）なじませる、（才能を）眠らせる、（刺繍模様を）流行らせる、（アイデアを）ふくらませる、（権威主義を）滅びさせる、（繁栄を／信念を）揺るがせる

(2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}

- ・（旧習を）砕けちらせる、（商家の基礎を）ぐらつかせる、（若い芽を）伸び上がらせる
- ・（自然を）秩序立たせる

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+サセル}

（経済を／生活を／国際秩序を）安定させる、（生活を／事態を／交通事情を）一変させる、（階級差を）解消させる [=する]、（共同体を）解体させる [=する]、（敵軍を／伝統を）壊滅させる、（王政を）瓦解させる、（形勢を／ヒエラルキーを／指定関係を）逆転させる、（力を）共同させる、（客観性を）欠落させる、向上させる、（事態を）好転させる、（都を／人心を）荒廃させる、（政局を／正義を／イメージを）混乱させる、（緊張を）弛緩させる、（権威を）失墜させる、（一種族を）死滅させる、（勢力を）弱化させる、（生活を／現在を）充実させる、（戦力を）縮小させる、（学校を）昇格させる、（毒気を／政治的自立を）消滅させる、（体力を）衰弱させる、衰退させる、（民族を）衰亡させる、（小説を）生育させる、（害虫を）絶滅させる、（敵軍を）全滅させる、（依頼心を）増長させる、（宗教を）墮落させる、（家を）断絶させる、（援助を）中止させる、（活動を）鎮静させる、（産業を）沈滞させる、（持久力を）低下させる、（表現を）定着させる、（民主化を／指令を）徹底させる、（差異を差別に）転化させる、（対日政策を）転換させる、（政府を）転覆させる、（思考様式を／制度を／都市を／技術を）発達させる、（社会を／工業を／学問を／事件を／事業を／会社を／図書館を／母校を／関係を／能力を／思索を）発展させる、（種族を）繁栄させる、（商売を／店を）繁盛させる、（経済を）逼迫させる、（思い出を）風化させる、（日本を）復興させる、（事態を）紛糾させる、（連帯を）分裂させる、（環境を／生活を／自然を／鼓動を／イメージを）変化させる、（実直さを／生活スタイルを）変質させる、（儒教世界を）変貌させる、（意味を）変容させ

-
- ・彼の小説には捕虜としての体験がおおしく「反映されている／反映している」。
 - ・南北が「統一される／統一する」のが待たれる。

²⁴ 物への働きかけにおける《変化》に用いられる使役動詞の単なる比喩的な用法にとどまっていると思われる次のようなものは、この類としては挙げなかった。

「死はすべてを凝固させる」「炸裂する爆弾が表現されない意味を黒ずませる」「笛音があたりをけばだたせる」「凶器が世界を凍りつかせる」「笑いの爆発が全世界をひきつらせる」

る、(封建制度を／伝統的生活を)崩壊させる、(沿岸人民を)亡滅させる、(旧家を／貴族を)没落させる、(感覚を／内閣制を／交通機能を)麻痺させる

〔一化させる〕 (立憲政治を)形骸化させる、硬直化させる // 悪化させる、激化させる、深化させる、俗化させる

(3-2) {副詞相当+サセル}

- ・すっきり(と)させる@
- ・混沌とさせる@、(秩序を)整然とさせる@

(3-3) {その他}

(静けさを騒がしさに)転じさせる

ここで (1) {単純動詞} としたものには、語末が「-seru」で一段活用である形だけでなく「-asu」で五段活用としても用いられるものが多くあり(「くるわせる(kuruwaseru)／くるわす(kuruwasu)」)、それらは形態的に、次に示す他動詞のうちの (1) {単純動詞} の三番目に挙げた対応の類と同じとなる。

《動詞例 (他動詞)》

(1) {単純動詞}

- ・〔他動詞 ～e-ru : 自動詞 ～a-ru 〕

改める (：改まる)、おさめる (：おさまる)、(制度を)かえる、(計画を)かためる (：かたまる：かたい)、静める (：静まる：静かだ)、(範囲を)狭める (：狭まる：狭い)、高める (：高まる：高い)、縮める (：縮まる)、強める (：強まる：強い)、早める (：早まる：早い)、(視野を)広げる (：広がる：広い)、広める (：広まる：広い)、深める (：深まる：深い)、まとめる (：まとまる)、休める (：休まる)、ゆるめる (：ゆるまる：ゆるむ：ゆるい)、(攻撃の勢いを)弱める (：弱まる：弱い)

- ・〔他動詞 ～e-ru : 自動詞 ～u 〕

あらだてる (：あらだつ)、いためる (：いたむ)、整える (：整う)、和らげる (：柔らぐ)、ゆがめる (：ゆがむ)

- ・〔他動詞 ～as-u : 自動詞 ～u 〕

動かす (：動く)、そらす (：そる)、減らす (：減る)、揺るがす (：揺るぐ)

- ・〔他動詞 ～as-u : 自動詞 ～e-ru 〕

こじらす (：こじれる)、そらす (：それる)、絶やす (：絶える)、増やす (：増える)、ぼかす (：ぼける)

- ・その他

失う、おかす、けがす (：けがれる)、くつがえす (：くつがえる)、妨げる、正す、(差別を)なくす、減ぼす (：減びる)、増す (：増す)、乱す (：乱れる)

(2) {複合動詞 (複合動詞のうち後項が「する」以外のもの)}

うちきる、攻め減ぼす、(計画を)立て直す、(判定を)ひっくりかえす (：ひっくりかえる)

(3) {サ変動詞 (複合動詞のうち後項が「する」であるもの)}

(3-1) {名詞相当+スル}

- ・圧迫する(?)、一新する、改革する、(クラブを)解散する、(不平等を)解消する、改正する、改善する、革新する、拡大する、拡張する、緩和する、軽減する、根絶する、

刷新する、修正する、制圧する、制限する、清算する、是正する、全廃する、(戦意を)喪失する、阻害する、阻止する、束縛する、(委員会を)存置する、打開する、打倒する、打破する、弾圧する、調節する、訂正する、撤廃する、(財産を)蕩尽する、統制する、(雑誌を)廃刊する、(お茶屋を)廃業する、廃止する、破壊する、変更する、妨害する、撲滅する、抑圧する

【～化する】 画一化する、簡略化する、均一化する、具体化する、合理化する、組織化する、単純化する、都会化する、複雑化する、民主化する // 電化する、純化する、美化する

・手直しする

(3-2) {副詞相当+スル}

- ・多くする、(罪を)重くする、(衝撃を)軽くする、少なくする、(範囲を)狭くする[≡狭める]、(影響を)小さくする、(粘着力を)強くする[≡強める]、なくする(なくす)、(目標を)低くする、(信頼を)深くする[≡深める]、難しくする、やさしくする、ややこしくする、(競争力を)弱くする[≡弱める]
- ・～がたくする、～づらくする、～にくくする、～やすくする
(理解しがたくする、わかりづらくする、進めにくくする、続けやすくする、etc.)
- ・一樣にする、簡潔にする、簡素にする、簡単にする、簡略にする、均一にする、緊密にする、柔軟にする、単純にする、単調にする、根絶やしにする、廃校にする、複雑にする、面倒にする、憂鬱にする
- ・なごやかにする、はなやかにする、目茶苦茶にする、豊かにする
- ・ごちゃごちゃにする、ばらばらにする

(3-3) {その他}

廃する、没する

この《動詞例(他動詞)》の(1){単純動詞}には、形態的に対応する自動詞のあるものが多く(「改めるー改まる」)、形容詞との対応のあるものもある(「遅めるー遅い」「静めるー静かだ」など)²⁵。

また、物への働きかけの《変化》の場合と同様、(3-2){副詞相当+スル}の下位である{形容詞連用形+スル}{形容動詞連用形+スル}の形で他動詞的に働くものがかなりある²⁶。そしてこの{形容詞/形容動詞連用形+スル}は次のような特徴がある。

(a) 同じ形容詞から派生した他動詞があるものとそうでないものがある。

「(範囲を)狭くする≡狭める」「(目標を)低くする≠低める」

(b) {形容詞/形容動詞連用形+スル}と{形容詞/形容動詞連用形+サセル}との意味の違いがあまりないものもある。

²⁵ 奥田(1968-72[1983:64])で、この稿の(1){単純動詞}の一番目の動詞グループにあたるものについて次のように述べられている。

「形容詞起源のもの、あるいは語根が形容詞と共通のものがおおいだろう。この事実は、状態あるいは特徴における変化をしめすという、かざられ動詞の語彙的な意味の性格をあきらかにしてくれる。」

²⁶ 奥田((1968-72[1983:65])は、本報告で{形容詞連用形+スル}{形容詞/形容動詞連用形+スル}としている形式について、「この合成述語的なくみあわせは形容詞の他動詞化とみてよいだろう。」としている。

「楽しくする≒楽しくさせる」「(学生を)夢中にする≒夢中にさせる」「(子供たちを)元気にする≒元気にさせる」

また、{形容動詞連用形+スル}のうち、漢語的な形容動詞による「～にする」には、「～にする」と「～化する」がかなり似た意味となるものがある。

「簡素にする≒簡素化する」「簡略にする≒簡略化する」「均一にする≒均一化する」「緊密にする≒緊密化する」「単純にする≒単純化する」「複雑にする≒複雑化する」

〔文例（自動詞使役）〕

- ・想像した以上に、長い谷間だった。深いばかりでなく、幅も広がった。おまけに、幾層ものうねりが、その底でややこしく交錯し、それが判断を狂わせてしまったのだろう。(砂の女)
- ・{博士は} 食事の場をできるだけ和ませようと努めているのが伝わってきた。(博士の恋した数式)
- ・ソフトバンクモバイルのシステム障害は、携帯電話の番号持ち運び制の出ばなをくじき、制度への信頼性を揺るがせかねない事態を招いた。(asa2006.txt(2151367))
- ・だから、この一撃は、硬直し乾涸らびたあらゆる体系をぐらつかせる一撃でもある。

(カミの現象学：BCCWJ)

ここまでは和語動詞の例であり、以下は漢語動詞の例である。

- ・当時、僧になって課税を逃れようとする人民が多く、国家財政を安定させるためにも授戒の制度を確立する必要があった。(梅原猛、日本仏教をゆく：BCCWJ)
- ・1960年代の高度経済成長期における急速な産業化、さらにそれによって生じた都市化は、われわれの暮らしを一変させた。(高齢化と少子社会：BCCWJ)
- ・「三堀君、全くぼくは生意気だったね。身のほども知らずに、何とか君の心の生活を向上させたいなんて考えていたんだ。(塩狩峠)
- ・看板を見た犯人あるいはその仲間が、捜査を混乱させる目的で偽情報を通報してくることも考えられる。(さまよう刃)
- ・「…私は、今まで何百人もの人に喫煙を中止させることに成功しました。…」(プライベートドクターを持つということ：BCCWJ)
- ・作戦科長の栗本と非常召集訓練を繰り返し、怒鳴り声をあげ、各分隊ごとに規律と秩序維持を徹底させ、集合遅延者や作業態度のよくない分隊には罰則を与えていた。(蒼海の盾：BCCWJ)
- ・嗜好きの村人を憚る尤もな理由が、こうして何でもない偶然の出会いを変化させてしまった。(潮騒)
- ・何の下心もなく書いた台本だったが、劇が病気を悪化させたとすれば恐ろしいことだ。(閉鎖病棟)
- ・戦争は人間の判断力を麻痺させてしまう。(黒い雨)
- ・したがって大戦後の資本主義諸国は、アメリカをのぞき、つねに異常に高い失業率を解消させえずに、過剰資本の処理に悩まされることになった。(日本経済の神話と現実：BCCWJ)
- ・しかし、いずれもが、本質的な問題を隠したまま事件を風化させるための目くらまし、との批判の声があがった。(壊滅日本：BCCWJ)

- ・タイ軍部によるクーデターは、タクシン政権を崩壊させるとともに与党タイ愛国党を機能停止に追い込んだ。(asa2006.txt(1872437))
- ・プラスであれば、このままそのプラスを増やすことを目指すのがいい。マイナスであれば、なんとかプラスに転じさせる努力が必要である。(さおだけ屋はなぜ潰れないのか? : BCCWJ)

〔文例（他動詞）〕

- ・「いいえ、現実には医療を与えるより、その人の周りの環境を改めた方がはるかにいいといった場合が沢山あります。その方がずっと手っ取り早いのです」(花埋み)
- ・日々の生活の中での新たな体験は、子どもの関心や探索意欲を高め、そこで得られた喜びや感動や発見を、自分に共感してくれる保育者や友だちに一心に伝えようとし、一緒に体験したいと望むようになります。(21世紀型保育のススめ : BCCWJ)
- ・既に設計室には彼を除いては誰もいなかった。彼はテーブルの上を片づけ、あすの朝の準備を整えてから、机を離れた。(孤高の人)
- ・そうした部隊構成員の変化には、当時の身分秩序を揺るがしかねない危険性が予感されたからである。(よみがえる中国の兵法 : BCCWJ)
- ・私が『ルージーン』をこの前読んだのは大学生のときで、十五年前の話だった。十五年たって、腹に包帯を巻きつけられてこの本を読んでもみると、私は以前よりは主人公のルージーンに対して好意的な気持を抱けるようになっていっていることに気づいた。人は自らの欠点を正すことはできないのだ。(世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド)
- ・けれども、別段私にも、傾いた家計を一気に立てなおすほどのいい才覚があるわけではなく、そんな気休めをいっている尻から、暮らしは日々窮迫してゆくばかりだった。竣工期日というものは、造船業者として絶対に守らなければならない条件なのだ。(帰郷)

ここまでは和語動詞の例であり、次は漢語動詞の例である。

- ・道三は美濃で支配権を拡大してゆくにつれて、問題の子も成人した。(国盗り物語・織田信長)
- ・金正日は、事態を劇的に打開するどころか、自ら墓穴を掘った形で、日朝交渉は新たな膠着状態に落ち込んだ。(次の世界が見えた : BCCWJ)
- ・渡辺建造主任や古賀副主任は、第一・二号艦建造計画が立案された頃から、大型艦の充実をはかるよりは航空兵力の強化をはかるべきだ、という意見が海軍部内に擡頭しはじめていたことを知っていた。しかし、世界の趨勢は、巨艦巨砲主義に貫かれていて、日本海軍もためらうことなく第一・二号艦の建造計画を具体化したのだ。(戦艦武蔵)

次は、{副詞相当＋スル}の形で他動詞として使われているものである。かなり豊富である。

- ・被害者としては、その被害が大きいほど、加害者の責任を重くしてほしいと考えるでしょう。(泣き寝入りしないための交通事故をめぐる法律知識 : BCCWJ)
- ・この春木屋の予備校生がひきこもりの性格で、泊まり客と、まったく接触がなかったことが、事態をややこしくしました。(クレヨン王国道草物語 : BCCWJ)
- ・上りの省線電車が、僕の目のすぐ下を、烈しくスパークしながら構内にはいつて来た。千枝子はこの電車に乗って帰るだろう。ベルが鳴り終り、車掌の合図と共に、電車は

- 動き出し、次第に速度を早くして視野から遠ざかって行った。(草の花・第二の手帳)
- ・この複雑な現実¹に直面した場合、個人は、なるべく疑問を持たないようにして生活を単純にするしかない。(女の身体、男の視線：BCCWJ)
 - ・代表チームの中での都並の一つの役割は、チーム全体の雰囲気をなごやかにするいわばムードメーカーだった。(狂気の左サイドバック：BCCWJ)
 - ・そして太郎はそう思う時、自分が骨の髄まで、「光栄ある一般大衆」の一人だなあ、と思うのであった。なぜならそのようにして、絶えず現実からいささかの逃避をすること、原因と結果の筋道を、ともすればごちゃごちゃにしようとすること、それこそまさに、優しい庶民の感覚なのだと思うからであった。(太郎物語・高校編)

次の例は、続いてきた関係や制度などをなくしてしまう働きかけを表わすものである。

- ・また、たとえこれまでの夫婦関係を清算して乗り換えたとしても、それによって当人は本当の満足に到達することがなく、必ずまた同じことを繰り返すようになる。(中年男性論：BCCWJ)
- ・TBSでも、93年から映画の枠を廃し、主にテレビドラマを中心に、映画も加えた編成にしている。(asa2006.txt(917647))
- ・検察側は「被害者一家を根絶やしにし、金銭欲のおもむくまま生命を奪った史上まれにみる犯行」として、両被告に死刑を求刑した。(asa2006.txt(855196))
- ・原因は予算上のことだと思われるが、現に生徒が通っている学校を廃校にするということは、暴挙と言わざるを得ない。(二十世紀の平和論者水野広徳海軍大佐：BCCWJ)
- ・彼の心境は、五十を過ぎた男ならば納得できる。小野はまだ三十にもなっていない。要するに小野は人生の未来の可能性を失ったのだ。(青春の蹉跎)

3. 1 (ア)〈増減〉

＜N[事(数量的側面)]-ヲ V[増減]>

《変容》の下位の一類として、数や量の増減に関わるものをたてる。ヲ格名詞が数量を表わすもの(「～量」「～員」等)で動詞が増減を表わすものである場合には、数量の増減を表わす連語となる。ヲ格名詞が人や物を表わすものであっても、増減を表わす動詞と組み合わせるときには、その数的・量的な側面に変化を生じさせることを表わしている(「人を増やす(=人の数を増やす)」「砂糖を減らす(=砂糖の量を減らす)」)。

【Vi 使役連語】「出鉱量を／被害を 激増させる」

【他動詞連語】「人数を／予算を ふやす」

《動詞例(自動詞派生の使役動詞)》

(3) {サ変動詞(複合動詞のうち後項が「する」であるもの)}

(3-1) {名詞相当+サセル}

(税金を) 軽減させる、(収穫量を) 激減させる、(出鉱量を／兵卒を／被害を) 激増させる、(出荷量を) 減少させる、(幼稚園を／負担を) 増加させる、倍加させる、倍増させる、半減させる

《動詞例（他動詞）》

(1) {単純動詞}

ふやす（：ふえる）、へらす（：へる）

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+スル}

減額する、削減する、増員する、増額する、増刷する、増資する、増税する、増発する

(3-2) {副詞相当+スル}

- ・多くする、少なくする、乏しくする
- ・豊富にする、豊かにする、わずかにする@

〔文例（自動詞使役）〕

ヲ格名詞が数量を表わすものである例として次のものがある（「数」「（残業）代」）。ただし後で述べる他動詞の文例に比べると、あまり多くはないようである。

- ・つまり日清戦争による賠償金などを財源としつつ、文部省は海外留学生の数を倍増させるとともに、留学の目的を、いわゆる実学から、人文諸学、文学、芸術などにまで拡大させたのである。（近代日本における知識人と宗教：BCCWJ）
- ・事前に夜6時から会議や説明会があると分かっている職場では、半数の職員が通常通りに出勤し、半数の職員が午後から勤務すれば、日中の市民対応をしながら、残業代を半減させることができる。（asa2006.txt(58793)）

多くは、次のようにヲ格名詞が具体物を表わしていて、しかもその物の数・量的側面が問題にされているものである。

- ・たとえば公営ギャンブルの開始は、博徒の賭場から客を奪い、平日（常設露店）の禁止は、露店が本業のてきやの収入を激減させた。（世界を操るヤクザ・裏社会：BCCWJ）
- ・空き巣は、短時間で物色しようとするので、なるべく手の込んだ工夫をすることが、被害を軽減させる方法といえます。（わが家の防犯マニュアル：BCCWJ）
- ・現実に原油高が招くルーブル高は輸入を激増させ、資源関連以外の輸出分野を中心に産業の空洞化が進む。（asa2006.txt(1303819)）
- ・見えないことは、それによる不便さばかりでなく、患者を不安にさせ、危険を増加させ、行動範囲を狭めるなど、それまでとはまったく違った生活を患者には求められることになる。（看護学入門：BCCWJ）
- ・企業の存続のために多くの従業員が職を失い、更に生産業の海外シフトでダウンサイジングが進み、いっそう雇用の機会を減少させている。（「成功への方程式」、解は「失敗しないこと」：BCCWJ）
- ・出演者はあまり馴染（なじ）みのない俳優を選んだという。また、本物の管制官や軍関係者が出演しており、この映画の場合、それらがリアリティーを倍加させている。（asa2006.txt(1589357)）

〔文例（他動詞）〕

ヲ格名詞が数量を表わすものである例として次のものがある。まずは数量を表わすものがある。

- ・なお、裁判所も、当事者の予定した賠償額を増額・減額することはできない。（口語民

法：BCCWJ)

- ・したがって、どうしても店舗を追い立てられるというときに、たとえ敷金などを増額したり、あるいは賃料などを先払いしてでも、その店舗を確保したいという利害関係を持っている。(債権なにがなんでも回収法：BCCWJ)
- ・発行部数は、第1号を5,000部印刷してさらに増刷したといわれ、1、2号合わせて12,000部で、さらに3,000部を増刷したといひます。(はじめて学ぶ日本近代史：BCCWJ)
- ・五十八年五月に一億株、五十八年十月に一億四千万株を増資し、五明海運は五百六十二億円という巨額の資金を入手したのである、(悠々たる打算：BCCWJ)
- ・消費税を増税すると、低所得者ほど税負担感が強まる。このため、最高税率の引き上げで納税者の不公平感を少なくする狙いがある。(asa2006.txt(1289926))
- ・「…それならあなた、取組まえに支度部屋へ行って、ケー・エヌ丸を蔵王山に飲まして下さい。普通よりずっと量を多くしなくちゃならないわ。なにしろあの身体ですからね。…」(楡家の人びと)

次の例は時間数である。

- ・トレーニングは午後一時から始められる。早目にトレーニングを終え、それだけ休養の時間を増やそう、という心づもりのようだった。(一瞬の夏)

次のヲ格名詞は具体物を表わすもので、それぞれの文においては数量的な側面が問題になっている。

- ・富士吉田市は4月から、市独自に中学校の先生を採用して教員を増員する方針を固めた。(asa2006.txt(221851))
- ・仕事の減少と共に従業員を減らし、ついにはひとりもいなくなった。(父からの手紙：BCCWJ)
- ・作品や評論のレベルは保ちながらも、読者を増やし、大衆化を図ることが試みられていると見るべきであろう。(写真に帰れ：BCCWJ)
- ・J R東日本は、秋の行楽シーズンに合わせ、J R日光や東武日光と新宿、新習志野、いわきのJ R各駅を結ぶ列車を増発する。(asa2006.txt(1690595))

次のヲ格名詞は抽象名詞である。

- ・「…この無意味な損失を少なくするためにも、私の採集したコカ葉の内地輸入を、早くお許し願いたいのです」(人民は弱し官吏は強し)

3. 1 (イ)〈事態の展開〉

<N[事(動作性)]-ヲ V[展開]>

この類は、物への働きかけにおける〈稼働・停止〉に相当する。ヲ格名詞は、進展過程を含んだ動作や事態(事象)を表わす動作性の名詞である。《変容》の場合と同じく漢語サ変動詞が多くやはり自動詞か他動詞かがはっきりしないものが多い。

【Vi 使役連語】「支払いを 滞らせる」「生産を スタートさせる」

「戦争を 終わらせる」「訓練を 終了させる」

【他動詞連語】「工事を 進める」「交渉を 慎重に 運ぶ」「生産を 開始する」

「仕事を 終える」「混乱した事態を 收拾する」

《動詞例（自動詞派生の使役動詞）》

(1) {単純動詞}

遅らせる、(戦争を)終わらせる、(計画を)進ませる、(用事を／食事を)済ませる、(支払いを)滞らせる、(事を)運ばせる、(努力を)実らせる

(2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}

- ・(騒ぎを／動揺を)落ちつかせる、(経営を／調和を)成り立たせる
- ・(交渉を)長引かせる

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+サセル}

- ・開始させる、(計画を)完結させる、(仕事を／草稿を)完成させる、(改革を)逆行させる、(学力を)後退させる、(戦争を)終結させる、(敗戦後の混乱を)終息させる、(訓練を)終了させる、(権力との戦いを／学問を／図書館事業を)出発させる、(西欧化を)進行させる、(社会を／学問を)進歩させる、(差別撤廃を)推進させる、(事業を／商売を／調査を)成功させる、(話を)前後させる、(拡充を)前進させる、漸進させる、遅滞させる、(操業を)停止させる、(事業を／思索を／民族運動を)展開させる、(工場を／支店を)独立させる、(会議を)閉会する、(大会を)閉幕する
- ・(点字図書館を／貸出業務を)スタートさせる、(送電を／調査を)ストップさせる

(3-2) {副詞相当+サセル}

- ・いっつもどいつさせる@、いったりきたりさせる

《動詞例（他動詞）》

(1) {単純動詞}

(完成を)急ぐ、(仕事を)終える（：終わる）、(出発を)遅らす（：遅れる）、(工事を)すすめる（：すすむ）、(仕事を)続ける（：続く）、(価格の暴落を)とめる（：とまる）、(授業を)始める（：始まる）、(開始を)早める（：早まる）、(作業を)やめる

(2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}

(援助を)打ち切る、(計画を)押し進める、なし遂げる

【一あげる】 (会議を早めに)切り上げる、(作業を)しあげる

【一おえる】 なしおえる、やりおえる

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+スル}

(生活を)維持する、延期する、開始する、(工事を)完了する、(審議を)継続する、(会を)散会する、(事態を)収拾する、(営業を)終了する、(課程を)修了する、順延する、遂行する、推進する、促進する、続行する、(調査を)中止する、(送電を)停止する

(3-2) {副詞相当+スル}

- ・遅くする（*遅める）、早くする（≒早める）
- ・(宴会を)お開きにする

【文例（自動詞使役）】

- ・「どう、このごろは？」(中略)「どうもないです」チュウさんは答える。それが一番早く診察を終わらせる秘訣だ。(閉鎖病棟)

- ・ボクシングという独特の世界の、しかもマッチメークなどということに明かるい人が、そう簡単に見つかるはずがなかった。柳との交渉を成功させるためには、ソウルのどこを訪ね、誰に頼めばよいのか。(一瞬の夏)
- ・無口で人付き合いの悪いことが病気の発見を遅らせた。(半落ち)
- ・このままでは折角入った好寿院も中途退学の憂目にあってしまう。考えあぐねた末、吟子は女子師範の荻江を訪ね、家庭教師の口を探して貰うことにした。{家庭教師の仕事} 好寿院の学業と両立させることに不安はあったが、もはやそんなことは言っていられない。(花埋み)
- ・僕より前に成功した二人の先輩は、線路に降りる時、わざと一万円札を落とし、それを取りに行くというシチュエーションを度胸づけにして『肝試し』をスタートさせらしい。(GO)

次の例のヲ格名詞は動作性の名詞とはいえないが、ここではたとえば「入院料の支払い」「経済の活動」などに相当すると考えられる。

- ・市の委託患者のほかは自費患者である。そしてかなり多数の者が入院料を滞らせたり全く払っていなかったりしたもののだが、以前にはそんなことに院長はあまり関心を抱かなかつたはずだった。(楡家の人びと)
- ・ただし中国の勸農政策は商品経済を推進させて税収の増加を図るための政策ではなく、むしろ貨幣経済の浸透を抑止して自己完結的な小農経済を維持する(換言すれば農民層分解を予防する)ための政策であった。(清代社会経済史：BCCWJ)
- ・しかし、肝腎の立役者がこの壇上には欠けていた。誇らしげに胸をそらし、一々カイゼル髭をひねりあげ、能うかぎり賞与式を長びかせようと努めているかのように得意満面となって賞品を授与した前代の院長、基一郎が……。 (楡家の人びと)
- ・「私たち行政の仕事は、事前に組まれた予算の範囲内で、事業を成り立たせなければなりません。(後略)」(となり町戦争)
- ・こうした数種類の計画を進行させながら、庄九郎は稲葉山城で沈黙していた。(国盗り物語・斎藤道三)

〔文例（他動詞）〕

- ・こんどはそんなことのないようにと、水際を十尺以上も掘り、杉丸太の杭を深く打ち込んで、地固めから頑丈に工事を進めた。(さぶ)
- ・花井弁護士は、すべて大局的な見地と関連させながら弁論を進めた。(人民は弱し官吏は強し)
- ・道場解散を押しとどめようとする門人もかなりいたが、三冬は断固、承知をしなかった。(剣客商売・井関道場・四天王)
- ・変わったばかりということもあり、収入が歩合ということもあって、練習のために早目に仕事を切り上げるということができなくなったのだという。(一瞬の夏)
- ・ネクタイにスーツ姿が公式な場に出る時のスタイル。気が引き締まるからというのが理由。行動的な会長で、その原動力は「行事をやり終えた時の達成感」という。「体が続く限り、自治会活動を続けたい」(asa2006.txt(549083))
- ・そんな些細なことでも、当時の中学生にとって、なかならず周二にとっては途方もない大事業をなしとげた感がするのだ。(楡家の人びと)
- ・「被弾しましたが、異状ありません。このまま任務を続行します。」(驢馬)

- ・そう言っているうちに監獄の一方の端にある酒場にやって来た。連中が夜の団欒の集いをいましてたお開きにしたところだった。(リトル・ドリット：BCCWJ)
- ・「本心はぼくとの結婚を延期したいんじゃないの」(赤い法廷：BCCWJ)
- ・英国の新聞はこれを報道し、日本の代表者に阿片密売容疑がかかっていると記している。東洋における日本の動きを抑制する企図もあるのだろうが、これでは対外的信用を傷つけたままということになる。(人民は弱し官吏は強し)

ところで、〈事態の展開〉と同じく動作性の事名詞が、事態間に序列や順序をつけることを表わす動詞と組み合わせたり、さらに、もうひとつの動作性の事名詞のヨリ格で広げられると、事態間に序列や優先順位をつけるという働きかけを表わす連語となる。

<N[事(動作性)]-ヲ N[事(動作性)]-ヨリ V[序列づけ]>

次のような自動詞使役連語・他動詞連語である。

【Vi 使役連語】「住環境を 通勤時間より 優先させる」

【他動詞連語】「仕事を 後回しにする」

そして、文例としては次のようなものがある。

〔文例(自動詞使役)〕

- ・南郷は考えあぐねた挙げ句、自分の真情に背いて辞職を思い止まった。それは死刑囚の命よりも、家庭の生活を優先させるという決断だった。(13 階段)
- ・しかし、今回の消費税は、増税を大幅に上回る減税を先行させるというわけである。(消費税こうやればいい：BCCWJ)

〔文例(他動詞)〕

- ・子の養育については、できるだけ双方が協力して、親の感情よりも子どもの幸せを優先して考えてやるのが、なによりも大切です。(離婚問題これで安心：BCCWJ)
- ・ここまで清書すると、台所の方からシゲ子が「あんた、もう何時だと思うんですか。よい加減にして夕飯をすまして遣わされ」と呼んだので、「よし来た」と重松は台所へ立って行った。今まで自家製の塩豆を齧りながら、夕飯を後まわしにして「被爆日記」を清書していたのであった。(黒い雨)

しかし、こういった連語をつくる動詞はごく限られており、自動詞派生の使役動詞としては、「(水利事業を) 先行させる」、他動詞としては「(仕事を) (先に／あとに／後回しに／順送りに／第一に／二の次に) する」、また、「(利益を安全性より) 優先する」と「(受験を／住環境を／役員の都合を) 優先させる」などぐらいである。したがって、これらを〈序列づけ〉という連語グループとしてたてることはできないと思われ、〈事態の展開〉のなかで簡単に述べるにとどめる。

3. 1 (ウ)〈顕在化〉

<N[事]-ヲ (N[場所]-二) V[顕在化]>

【Vi 使役連語】「静けさを きわだたせる」「合わせ目に 狂いを 生じさせる」

【他動詞連語】「実力を 発揮する」「不正を あばく」

この類は、物への働きかけにおける〈目立たせ〉に相当する。なにかの内面にもともとあった、あるいは目立たなかった性質や側面が表面に現れてくることを表現する。他動詞はそれほど多くなく、自動詞派生の使役動詞が多い。これも〈目立たせ〉と類似する点である。

《動詞例（自動詞派生の使役動詞）》

(1) {単純動詞}

（思い出を）浮かばせる、（横顔に哀感を）漂わせる、（横顔に疲労を）にじませる、（不安を／不信感を）のぞかせる、（諸器官を）働かせる

(2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}

- ・（人間像を／存在を／存在意義を／ある側面を）浮かび上がらせる、（気品を／美しさを）輝きださせる、（静けさを／強さを／性格を／差異を／没落過程を）きわだたせる、（情趣を絵に）しみださせる、（老いを／自然の静寂を）引き立たせる、（活気を／記憶を）よみがえらせる
- ・（損失／不在を）目立たせる

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+サセル}

（意識を）覚醒させる、（思いを短歌に／渦巻く想念を）結晶させる、（怒りを）爆発させる、（才能を）発現させる

《動詞例（他動詞）》

(1) {単純動詞}

あばく

(2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}

あばきだす、さらけだす

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+スル}

（経験を文章に）体現する、（旧悪を）暴露する、（実力を）発揮する、（教養のなさを）露呈する

〔文例（自動詞使役）〕

- ・この火事は高齢社会で急増するグループホームのもろい一面も浮かび上がらせた。（asa2006.txt(49867)）
- ・眼前の薄い雲のベールが消えると、濃紺色の青空の中に巨大な白い尖峰が姿を見せた。白い尖塔はまぶしく輝いていた。ただ一様に白く輝く物体ではなく、氷の被膜におおわれながらも、岩峰としての特色を、ところどころに露呈する岩にとどめながら、やはり、北アルプスの象徴としての、非情と絶美との交錯した荒々しい冷たい肌に、光と死のように暗い翳を浮ばせていた。（孤高の人）
- ・「そんなことあらへん」。彼女は強い語調で言って、下唇を噛みしめると、長い間私を睨みつけていました。その目はどこことなく悲しげで、いっそう彼女の持つ美しさをきわだたせてくるのでした。（錦繡）
- ・その絵は決して、本物そっくりではなかった。構図はゆがんでいたし、遠近法も狂っ

- ている。そのひしゃげ具合が、台風の不穏な気配を際立たせた。(重力ピエロ)
- ・アメリカの男たちは、白人の女の入浴を盗み見た黒人に、激しい怒りを暴発させるだろう。(風に吹かれて)
 - ・ラジオから伝わってくる興奮は、私たちに六月二日の野球観戦の日をよみがえらせ、7-14 に座っていた博士が今はもう遠くに行ってしまった事実を思い起こさせた。(博士の恋した数式)
 - ・「どの国も G 8 内の対立を ことさら 目立たせたいとは思っていない」(asa2006.txt(1368367))

〔文例（他動詞）〕

- ・しかし総理や外務大臣が政治上の必要からどうしても白鳥を次官にされるというならば、いやしくも帝国海軍としてはそれに対して邪魔をするとか悪口を言うとか、白鳥の欠点をあばくとかいうようなことは絶対にしない。(山本五十六)
- ・いっそこでいやがる相手に動物学を講義して真相をすっかりさらけだしてしまうか、それともその場かぎりのいいかげんな同意でお茶をにごすか、あるいはこれを機会に相手の歓心を買うべくはじしらずに媚びるか。いろいろと手はあると思ったが、事件ははじまったばかりなので、いままでどおり俊介はどっちつかずに黙っていることにした。(パニック)
- ・プロに転向してからも、内藤は非凡さを発揮し、四回戦、六回戦、八回戦と無敗のまま通過して、七戦七勝で十回戦ボクサーとなった。(一瞬の夏)
- ・しかし一月七日「ニュースステーション発言」こそは、当時の加藤の政権戦略の限界を露呈した形になった。(さよなら円高：BCCWJ)

3. 1 (エ)〈保持〉

<N[事]-ヲ V[保持]>

変化を引き起こす働きかけとはいえないが、変化をくいとめるための何らかの働きかけがなされ続けることを表わす連語があり、それを《変容》の下位の一類としてたてることにする。この〈保持〉は、「物への働きかけ」における〈保存〉に相当し、〈保存〉と同様、この類の連語も豊かではない。使役動詞は漢語サ変動詞だけである。

【Vi 使役連語】「家族制度を 永続させる」

【他動詞連語】「平和を 保つ」「推薦枠を 維持する」

《動詞例（自動詞派生の使役動詞）》

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+サセル}

- ・(家族制度を) 永続させる、(固体維持と種族維持を) 均衡させる、(二つの可能性を心に) 現前させる、(伝統主義を) 残存させる、(感情を) 持久させる、(健康を／研究の枠組みを) 持続させる、(独裁政治を) 存続させる
- ・長続きさせる

《動詞例（他動詞）》

(1) {単純動詞}

保つ、とどめる（：とどまる）

(2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}

おしとどめる、持ちこたえる

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+スル}

維持する、温存する、保持する、（国土を）保全する

〔文例（自動詞使役）〕

- ・週に一度京橋家を訪れるあたしが、おとなしく家庭教師を務めるだけで、問題を起こす気配がまったくないと知るやいなや、またそろそろと近寄ってきて関係を持続させようといじましい努力をする。（空中庭園）
- ・報酬は毎回与えるよりも、ランダムに与える方が、相手の行動を長続きさせる効果がある。（対人力：BCCWJ）

〔文例（他動詞）〕

- ・また次男は、常に父親とは一定の距離を保ち、冷静に父親と自分との関係を眺めることができたとも言える。（バツハの息子たち：BCCWJ）
- ・結果は、三本のうち二本が、所定通りの深度を保って十二メートルの海中を無事走り抜け、技倆の一番劣る一人の落した魚雷だけが、海底に突っこんで、ブクブク泡を吹き出した。（山本五十六）

3. 1（オ）〈事柄間の相互〉

＜N[事]・ヲ N[事]・ト V[包括・対立]>

（＜N[複数の事]・ヲ V[包括・対立]>）

この類の連語が表わすのは、事柄の状態に変化が生じるわけではなく、二つまたはそれ以上の事柄がまとまるようにしたり、対立するようにしたりするという対象相互的な働きかけである。物への働きかけにおける〈相互〉に相当する。構造の特徴として、＜N[事]・ヲ V[包括・対立]> における「N[事]・ヲ」は、複数の物を表わす名詞であるか（「両案をまとめる」）、「N[事]・トN[事]・ト」というまとまりであることである（「A案とB案をまとめる」）。また、ト格名詞で広げた <N[事]・ヲ N[事]・ト V[相互]> という構造をとることもできる（「A案をB案とまとめる」）。

【Vi 使役連語】「国家を 個人と 対立させる」「両様式を 折衷させる」

【他動詞連語】「二つの思い出を 重ね合わせる」

「組合の意見を 会社側の意見と まとめる」

《動詞例（自動詞派生の使役動詞）》

(1) {単純動詞}

代わらせる@

(3) {サ変動詞 (複合動詞のうち後項が「する」であるもの)}

(3-1) {名詞相当+サセル}

合致させる、(風土を歴史に) 関係させる、(理念を意識に) 関連させる、結合させる、
(両様式を) 折衷させる、(目標と現実を) 対応させる、(科学と精神文明を／国家と個人を) 対立させる、(二つの世界を) 調和させる、適合させる、(ノルウェー語をデンマーク語に) 同調させる、(二つのテーマを) 平行させる、(社会科学の理論を現実に) 密着させる、(伝統を近代化に) 融和させる、(執筆と学業を) 両立させる、(二つの問題を) 連結させる

《動詞例 (他動詞)》

(1) {単純動詞}

からめる (：からまる・からむ)、比べる、まとめる (：まとまる)

(2) {複合動詞 (複合動詞のうち後項が「する」以外のもの)}

・とりかえる、(二つの事件を) 結びつける (：結びつく)

【一あわせる】 (二つの思い出を) 重ねあわせる、(諸制度を) 組みあわせる、(いくつかの案を) つなぎあわせる

・関係づける、関連づける

(3) {サ変動詞 (複合動詞のうち後項が「する」であるもの)}

(3-1) {名詞相当+スル}

集約する、統一する、比較する、包括する

(3-2) {副詞相当+スル}

ごたまぜにする

〔文例 (自動詞使役)〕

下の初めの例は、ヲ格名詞が「N ト N ト」という複数対象であり、二番目の例は、ヲ格の名詞と動詞との組み合わせがト格の名詞で広げられたものである。

- ・じつは法皇は、これよりまえにも、清盛が関係を深めている延暦寺と清盛とを対立させようとして、陰険とも思えるような手を打っていたが、その手は次第にあらわになる。(人物日本の女性史：BCCWJ)
- ・平壤宣言に続く日朝正常化交渉の挫折後も、日本は中国が仲介する6者協議に積極的に参加し、それを日朝直接交渉と連結させようと努力した。(asa2006.txt(1827983))

〔文例 (他動詞)〕

- ・新聞協会賞をめぐるこの二つの事柄を重ね合わせてみると、ネガとポジの関係にあることが分かる。(新聞記者という仕事：BCCWJ)
- ・なるほど精神感应能力者である自分には、他の人間たちほどは、たとえば元型的イヌーヰを太古的で神秘的なものと結びつけて不合理な怖れかたをしたり感動したりすることは少ないかもしれない。(エディプスの恋人)
- ・中国の夢判断には世界に類例のない視点がある。夢と内臓の状態を関連づけたもので、五行に対応する五臓の状態によって、特定の夢が現れるとする。(占いの宇宙誌：BCCWJ)
- ・「不思議なものですな」と僕は言った。「僕はまだ心を持っていますが、それでもとき

どき自分の心を見失ってしまうことがあるんです。いや、見失わない時の方が少ないかもしれない。それでもそれがいつか戻ってくるという確信のようなものがあって、その確信が僕という存在をひとつにまとめて支えているんです。だから心を失うというのがどういふことなのかうまく想像できないんです」(世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド)

- ・阿片系薬品は、人類の医療のために神が与えた貴重な財産である。したがって、世界における流通機構を合理的に統一し、弊害を防止するため、各国はもっと積極的にならなければならない。(人民は弱し官吏は強し)

3. 2 《転移》

＜N[抽象]-ヲ N[抽象]-ニ V[転移]>

何らかの抽象的な性質を他のものに帯びさせたり移らせたりすることを表わす連語がある。ある事を他の事に接するようにしたり、他の事の一部分にしたりする働きかけを表わす動詞があり、ヲ格の事名詞、ニ格の事名詞と組み合わせさせて《転移》の連語をつくる。「物への働きかけ」のうち《付着》の連語をつくる動詞も、ヲ格の事名詞と組み合わせたりそれがニ格の事名詞で広げられるとこの類の連語をつくる。

【Vi 使役連語】「湿っぽい余韻を 私の耳に まつわらせる」「判断に 私情を 介入させる」

【Vt 使役連語】「時間に余裕をもたせる」

【他動詞連語】「遊びに 運動の要素を くみいれる」

《動詞例（自動詞派生の使役動詞）》

(1) {単純動詞}

(二人の間にぎこちなさを) ひそませる、(異国の匂いを心に) 触れさせる、(湿っぽい余韻を私の耳に) まつわらせる、(心の底に怒りを) 淀ませる@

(2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}

- ・入りこませる、(古いものを暮らしに) とけ込ませる

【一こませる】 (聖なるものに俗なるものを／人々の心に不思議な哀れみを) 忍びこませる、(先輩の言葉を胸の中に) しみこませる

- ・(芸術を暮らしに) 根づかせる

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+サセル}

(判断に差別感を) 介入させる、(悲しみを歌に) 沈殿させる、(使命感を生き方に) 反映させる

《動詞例（他動詞派生の使役動詞）》

(1) {単純動詞}

(言葉に気持ちを) 響かせる、(メッセージに暗号を) 含ませる、(言葉に含みを／生活に余裕を／時間にゆとりを) もたせる²⁷、(題名に風雅を) よそおわせる

²⁷ 早津恵美子 (2000a) には「もたせる」の使役動詞性と他動詞性の連続について考察がある。

- (2) {複合動詞 (複合動詞のうち後項が「する」以外のもの)}
 (現在の教育に明日への挑戦を) 含み込ませる@

《動詞例 (他動詞)》

- (1) {単純動詞}
 与える、(新製品に名前を) つける (：つく)、(料金に税金を) 含める
- (2) {複合動詞 (複合動詞のうち後項が「する」以外のもの)}
 (遊びに運動の要素を) くみいれる、付け加える (：付け加わる)、付け足す
 【一こむ】 織りこむ、くみこむ、盛りこむ
- (3) {サ変動詞 (複合動詞のうち後項が「する」であるもの)}
 (3-1) {名詞相当+スル}
 加味する、追加する、付加する、(行為に意義を) 付与する

〔文例 (自動詞使役)〕

- ・「君はたしかにあの時に私がいったことを理解し、実生活に反映させようとしたよ うだね。(後略)」(手紙)
- ・かけがえのない思い出を今の暮らしに触れさせると、なにかすべてが色あせてしまい そうな気がした。(ビタミン F)

〔文例 (他動詞使役)〕

- ・父と母がどういふつもりで私たちの名前をつけたのか、正式には聞いたことがなかった。けれど、おそらくは、私と弟の間に何らかの連続性を持たせたかったのではない か、とは推測できる。(重力ピエロ)
- ・高橋区長は、6日から水面下での交渉が動き出したことを含ませ、「早く決めないと都 も区も財政に影響する。とりまとめる機運が生まれてきた」と話した。
 (asa2006.txt(245052))

〔文例 (他動詞)〕

- ・鮎太にとって新聞社の仕事は面白かった。戦争は、結局鮎太の信子に対する感情を微塵も変らせることはできなかったが、彼の引込み思案の性格には多少の変化を与えた。(あすなる物語)
- ・ただ、その際に「共産主義」という語に否定的な意味を付与するような見解は、私の知る限りでは、ドイツでは見られない。(ドイツ・アナーキズムの成立：BCCWJ)

ところで、《転移》の類の連語のうち、ニ格名詞、ヲ格名詞が特定のカテゴリカルな意味をもつものである場合、それぞれに特有な意味が表現されることがある。そこで、そのうち二つの類を下位類としてとりだして、以下に述べる。

3. 2 (ア) 〈心情の付与〉

＜N[表情・言葉-ニ] N[心情]-ヲ V[付着]＞

《付着》動詞に準ずる動詞が、心情や伝えるべき思いなどを表わすヲ格名詞と組み合わせ

り、言葉や表情を表わす二格名詞で広げられると、その表情や言葉のある心情を帯びたものにする働きかけを表わす。

【Vi 使役連語】「言葉に 気持ちを 響かせる」「抵抗の気持を 行間に 漂わせる」

【Vt 使役連語】「メッセージに 暗号を 含ませる」

【他動詞連語】「挨拶に祈りをこめる」

《動詞例（自動詞派生の使役動詞）》

(1) {単純動詞}

（うなずきに同感の意を）通わせる、（表情に優しいニュアンスを）漂わせる、（行間に抵抗の気持を）にじませる、（言葉に気持ちを）響かせる

(2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}

（笑いに懷疑を）溶け込ませる

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

（短詩に叙情を）流露させる

《動詞例（他動詞派生の使役動詞）》

(1) {単純動詞}

（メッセージに暗号を／声にとげを）含ませる、（声に上品さ）よそおわせる

《動詞例（他動詞）》

(1) {単純動詞}

（言葉に思いを／挨拶に祈りを／表情に威厳を）こめる

〔文例（自動詞使役）〕

- ・木下は腹立たしい気持ちを言葉に響かせてこう言った。—結局僕が Genußmensch で、君がそうでない、ということに帰着するんだな。（和辻哲郎随筆集）
- ・根岸が、愛想笑いに懷疑を溶け込ませた。（4000 年のアリバイ回廊：BCCWJ）
- ・智子の言葉は穏やかだったが、言外に、嘘をつくとかタダじゃおかない、というニュアンスを、たつぷりと漂わせていた。（女社長に乾杯！）

〔文例（他動詞使役）〕

- ・千代子は多分の冷笑を声に含ませて訊いた。（楡家の人びと）

〔文例（他動詞）〕

- ・簡潔な言葉に思いを込めるなどより、多くの言葉ではっきりと書いてくれたほうが余程、納得できる。（静寂 [しじま] の声：BCCWJ）
- ・お医者さんは、その都度、心を鬼にして、奥さまもうすこしのご辛抱ですよ、と言外に意味を含めて叱咤するのださうである」（養生のお手本：BCCWJ）
- ・万年はやさしさを込めた眼差しを床の上でかしこまっているぎんに向けた。（花埋み）

3. 2 (イ)〈属性の付与〉

<N[事] -ニ N[属性]-ヲ V[付着]>

同じく《付着》動詞に準ずるものが、事柄の属性を表わすヲ格名詞と組み合わせたり、広く事を表わすニ格名詞で広げられると、その事のある属性を帯びたものにする働きかけを表わす。

【Vt 使役連語】「生活に 潤いを もたせる」

【他動詞連語】「音に 野性味を こめる」

《動詞例（他動詞派生の使役動詞）》

(1) {単純動詞}

（生活に潤いを）含ませる、（計画にゆとりを／体力に余裕を／取り調べに客観性を）もたせる

《動詞例（他動詞）》

(1) {単純動詞}

（布地に光沢を）与える、（サイレンの音に野性味を）加える、（デザインに平和の祈りを）こめる

〔文例（他動詞使役）〕

- ・香西さんは事務的な中にも潤いを含ませたいつもの声で時折黒板に貼った地図などを示しながら、戦域と戦闘時間についての説明をした。（となり町戦争）
- ・（体力に）十分な余裕を持たせた状態で野宿に入るならば、たとえ眠っても、寒さに負けて死ぬことはあり得ない（孤高の人）

〔文例（他動詞）〕

- ・鮎太にとって新聞社の仕事は面白かった。戦争は、結局鮎太の信子に対する感情を微塵も変らせることはできなかったが、彼の引込み思案の性格には多少の変化を与えた。（あすなろ物語）
- ・女性ボーカルの The Sound of Feeling などあのときのサイレンの音に自由奔放な野生味を加えた好もしい音楽であった。（二十歳の原点）
- ・一時間後、公用車に乗った中森が、もう一人の男を伴って現れた。中森が同行させたのは検察事務官だった。証拠品の押収作業に客観性を持たせようという配慮らしかった。（13 階段）

3. 3 《排除》

<(N[事]-カラ／ノ) N[事]-ヲ V[排除]>

ヲ格の事名詞が事柄をとりのぞくことを表わす動詞と組み合わせたり、ときにカラ格やノ格の事名詞で広げられると、ある事を、カラ格やノ格の名詞で表わされる元の事からとりのぞく・なくなるようにする働きかけを表わす。「物への働きかけ」における《除去》に相当する。

自動詞使役よりも他動詞のほうが多いようであり、先の《転移》ではむしろ使役（自動詞使役と他動詞使役）のほうが多かったのと対照的である。

【Vi 使役連語】「文学科を 文理学部から 独立させる」

【他動詞連語】「調査内容から 矛盾を とりのぞく」「政界の旧習を 排除する」

《動詞例（自動詞派生の使役動詞）》

(2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}

（日本社会を旧習から）歩みださせる@

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+サセル}

（子供服部門を営業から）独立させる、（日本社会を旧弊から）脱却させる、脱皮させる

《動詞例（他動詞）》

(1) {単純動詞}

のぞく

(2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}

（危険性を）さしひく、（誤解を）とり去る、とりのぞく、ぬぐい去る、（弾圧を）はねのける、（援助を）払いのける、（不安を）振り払う

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+スル}

（疑惑を）一掃する、控除する、除去する、撤収する、撤廃する、淘汰する、排除する、（旧弊を）払拭する

〔文例（自動詞使役）〕

- ・戦後、教育委員会は地方分権にして、一般行政から独立させたほうがよいということで、教育委員の選出は公選制で行なわれた。（抵抗勢力は誰か：BCCWJ）
- ・日立製作所は、この時の山本五十六との約束にしたがって、千葉に工場用地を準備し、のちにその航空機関連部門を、別会社の「日立航空機」として独立させ、……（山本五十六（本文）5.txt）

〔文例（他動詞）〕

- ・光秀は、丹波入部いらい、この国の百姓を愛した。この男の行政好きはほとんど淫するほどで、従来の弊政を一掃し、かれらの暮らしをあかるくすることにつとめた。（国盗り物語・織田信長）
- ・一九七九年の女性差別撤廃条約採択までは、女性に男性と同等の権利を保障することによって性差別を撤廃するという、いわば平等論のアプローチが中心であった。（岩波講座現代の法：BCCWJ）
- ・狼少年が「嘘つき」の烙印を押され、一度失った信頼を回復できなかったように、感情的な人だとか、乱暴な人、暴力的な人だと周囲に思われてしまった人は、そのイメージを払拭することは難しい。（「なぜか人に思われる人」の共通点：BCCWJ）
- ・僕は様々な込みいった思いを頭から振り払い、眠りの中に意識を沈めた。（世界の終

わりとハードボイルド・ワンダーランド)

次の例では二格が人名詞ではあるが、抽象化されたものである。

- ・それに、痛みは病気や病人とはっきり区別できず、その一方だけ排除することはできない以上、医者が患者から、麻酔によって痛みを耐える必要性を取り除くことは、つまりは患者との関係を断つことさえも意味している、と言えるのだ。(臨床の知とは何か：BCCWJ)

3. 4 《移行》

＜N[事]-ヲ N[場所]-カラ N[場所]-ニ／ヘ V[移行]>

事柄の移動を表わす動詞と思想・慣習・制度などを表わすヲ格の事名詞とが組み合わさり、場所を表わす二格の名詞やカラ格の名詞で広げられると、思想・慣習・制度などが元々それらがみられた場所から別の場所へ移るようにする働きかけを表わす連語となる。

「物への働きかけ」における《移動》に相当するが、この類の連語をつくる他動詞はほとんどなく自動詞使役連語（ほとんどが漢語動詞）が担っている。

【Vi 使役連語】「思想を 世の中に ゆきわたらせる」

【他動詞連語】「思想を 世間に 広める」

《動詞例（自動詞派生の使役動詞）》

- (2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}
(解放思想を社会に) しみ通らせる@、(調べを隅々まですぐれた思想を世の中に) ゆきわたらせる
- (3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}
(3-1) {名詞相当+サセル}
(民主主義を国民の間に) 浸潤させる@、(環境保護を世間に) 浸透させる、(思想を村人に) 伝染させる、(キリスト教を広く世に) 伝播させる@、(経済効果を一般に) 波及させる、(思いを天空に) 発散させる、(パン食を日本に) 普及させる、(伝染病を各地に) 蔓延させる、(教えを世間に) 流布させる

《動詞例（他動詞）》

- (1) {単純動詞}
伝える、広める（：広まる）
- (3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}
伝承する

【文例（自動詞使役）】

二格名詞は、場所を表わす名詞だが、ときに、そこにいる人々を含んだ場所である。

- ・吉本興業の先代、吉本せいさんがこの地に演芸場を設けたことから始まり、「天満で芸を認められたら一人前」といわれていた。「そうや、天満にもう一遍、芸能文化を根付かせよう」。こう思った私は、まず大道芸に目をつけた。(天神さんの商店街：BCCWJ)

- ・そして、エグゼクティブが講演で指摘するほどだから、こんな日本の実態をブランドは百も承知なはず。それなのに手厚いサービスをするどころか、日本国中に品薄感を蔓延させている。(それでもブランド品を買いますか？：BCCWJ)
 - ・彼らは、朝鮮原産の鉄をもっとも入手しやすい立場にあり、交易や抗争の中から弥生文化を日本各地に普及させた「先進倭人」というべき存在だっただろう。(海と周辺国に向き合う日本人の歴史：BCCWJ)
 - ・経済ナショナリズムは、かえって、ナショナル・アイデンティティを社会の隅々にまでゆきわたらせたのではないか？(ナショナリズムの克服：BCCWJ)
 - ・たしかに竹やぶに潜んだ武装農民に脇腹を突かれたのは事実である。が、光秀ともあろう武将の着けている鎧を、竹槍ごとき百姓の武器が突き通すはずはない。従って、この話は、秀吉側が脚色、捏造して世間に流布させた宣伝と思われる。(猿飛佐助：BCCWJ)
 - ・ヒトラーは、ドイツ人と外国人が結婚する場合の写真付き申請書を、わざわざ自分で仔細(しさい)にチェックしていた。劣等人種の血をドイツに入り込ませぬためである。(asa2006.txt(474030))
 - ・この音楽環境の中、ヘンデルは持ち前の構成力に富んだ作曲技術で、イタリアオペラの形式を合理的に取り入れ、徐々にイギリスに彼の音楽を浸透させていった。(音楽を福祉に：BCCWJ)
 - ・どうやら彼は拠点を移動させながら調査を続けているらしい。(さまよう刃)
- 次の二格名詞は組織を表わす名詞であるがここでは場所と捉えることができる。
- ・伍井会長は「ベアを取りに行った第一歩としては成功」としながらも、「好調な中央・大手企業の動きをさらにどう地方・中小企業に波及させていくかがこれからの課題だ」と話している。(asa2006.txt(659437))
- 次の例では、二格名詞が時間を表わすが、これも空間の移行に準ずるものとする。
- ・源氏の歌は、栄えある今日の行幸にひとしお色まさるわが家の菊も折にふれてあの袖うちかけて舞いおさめた昔の秋を恋しく思っているのだろう、と思いを遠い過去にさかのぼらせ、深々とした感慨をたたえている。(源氏物語の女性たち：BCCWJ)
 - ・下院は昨年末、不法滞在を刑事犯の重罪とする厳罰主義の法案を通過させた。(asa2006.txt(693691))

【文例（他動詞）】

- ・全国的に布教を行なう神社もあったが、限られた地方だけに信仰を広めた神社もあった。(知っておきたい日本の神様：BCCWJ)
- ・あのときは先進国を真似る努力、いや、実際には先進国のゴミ捨て場だった暮らしをやめて、城の生活を国中に広めればよかった。(最後の王様：BCCWJ)
- ・古代日本人は文字を持たなかった。日本に漢字を伝えたのは漢人王仁で、王仁は応神天皇に『千字文』と『論語』を献上したことになるが、史実としてはあいまいで、また時代もはっきりしない。(三国志と日本人：BCCWJ)
- ・たとえば塾を経営するといってもそこから収入を得ようという意識は薄く、自分の得た蘭学をひろく世間に伝えたいという情熱だけで生涯終始した。(胡蝶の夢：BCCWJ)

次の例では、二格名詞が時間を表わすが、これも空間の移行に準ずるものとする。

- ・この乗員たちの偉功だけは後世に永く伝承すべきものだと思う」(零戦の誕生：BCCWJ)

3. 5 《現出》

<N[事]-ヲ (N[場所]-二) V[現出]>

物への働きかけにおける《生産》に相当する。二格名詞は基本的には場所名詞であり、その現象が出現する場所を表現する。

【Vi 使役連語】「歪みを 生じさせる」「民主主義体制を 確立させる」

「相隣る土地に 反対の風土を 現出させる」

【他動詞連語】「社内に 調査委員会を 設ける」「関係を 確立する」

この類の漢語サ変動詞にも、自動詞か他動詞かがはっきりしないものがあり、「～サセル」と「～スル」とがほぼ同じ意味で使われることがある。

民主主義を実現させる＝実現する

《動詞例（自動詞派生の使役動詞）》

(1) {単純動詞}

(言葉を社会に) あふれさせる、(民間学がサークルを) 生まれさせる、(理想の社会を) きたらせる、(歪みを／無から有を／合わせ目に狂いを) 生じさせる、(現実に亀裂を) 走らせる、(不正を／悪を) はびこらせる

(2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}

- ・(政党政治を) 生き返らせる、(色を) 浮き出させる
- ・(民主主義を) 芽生えさせる

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+サセル}

(女流文学を) 開花させる、(平和を) 回復させる、(民主主義体制を) 確立させる、完成させる、(政治形態を) 結実させる、(相隣る土地に反対の風土を) 現出させる、(平和な世界を／新制度を) 実現させる²⁸、(奇跡を) 成就させる、(法案を／近代的都市を／共感関係を) 成立させる、(被害を) 続出させる、(前提条件を) 誕生させる、(新製品を) 登場させる、(逸材を) 輩出させる [≒する]、(幻覚を) 派生させる、(症候を) 発現させる、(運動を) 発生させる、(自治体制を／大アジア主義を) 復活させる、(新仏教運動を／会を) 発足させる

《動詞例（他動詞）》

(1) {単純動詞}

あらわす(：あらわれる)、(顔に笑みを) 浮かべる(：浮かぶ)、うむ、(事故を) おこす(：おこる／おきる)、かます、きざく、(二人の関係に変化を) きたす、(火事を／死傷者を)

²⁸ 「実現させる」という使役動詞は、次のような連語の場合には《変容》である。

「(願望を／夢を／企画を／工事を) 実現させる」

だす(：でる)、つくる、なす、設ける、もたらす、(不快感を／さむ気を)もよおす

(2) {複合動詞 (複合動詞のうち後項が「する」以外のもの)}

・うちたてる

【一だす】 あみだす、(新戦略を)うちだす、(新機軸を)うみだす、かもしだす、つくりだす

【一おこす】 ひきおこす、まきおこす、よびおこす

【一あげる】 築きあげる、つくりあげる、でっちあげる

・かたちづくる

(3) {サ変動詞 (複合動詞のうち後項が「する」であるもの)}

(3-1) {名詞相当+スル}

開催する、確立する、喚起する、形成する、(自由社会を)建設する、構成する、再建する、再現する、再興する、(平等を／民主国家を)実現する、惹起する、(政権を)樹立する、招来する、設定する、設立する、(美を)創造する、(中小企業を)組織する、抽出する、展開する、導出する、(底力を／威力を)発揮する、発散する、復興する、(余病を)併発する、誘発する

【VNする】 建国する、立国する

(3-3) {その他}

生ずる(生じる)、発する

【文例 (自動詞使役)】

出現場所を表わす二格の名詞が現れているものがかなりある。抽象的になっているものもある。

- ・ボタン色のはなおが、ぱっと目に飛びこんだ。もうだいぶ、はき古されたものらしいが、でも、それが暗い土間にあたたかい色を浮き出させていた。『路傍の石』
- ・フェアリー・ランドの丘は、今日は紺碧の空に、女の脇腹のような線を、一しおくつきりと浮き出させて、美しい雲が、丘の高い部分に小さく聳えて末広に茂った木の梢のところから、いとも軽々と浮いてでる。『田園の憂鬱』
- ・「ありがとう……、ありがとうね健くん……」色のついた光を浴びながら、お母さんは健くんにありがとうを繰り返す。瞳には感謝の気持ちを溢れさせながら。(夏と花火と私の死体)
- ・「ぼくだって死ねるもんっ！」その声は、冬の乾いた大気に亀裂を生じさせるかのように、悲痛であった。(となり町戦争)
- ・そのためもあって、星は「三十年後」と題する未来を舞台にした小説めいたものを書き、大正七年の春に出版した。そのなかにばかにつける薬をはじめ、感情を健全に保つ薬、筋肉を強める薬、長寿薬などを登場させ、日本が税金のない理想郷になる空想を展開したりした。(人民は弱し官吏は強し)
- ・というよりも、むしろ、それはパロディであるがゆえに、一瞬、現実には亀裂を走らせ、その空虚さを露出せしめたのである。(戦後 60 年：BCCWJ)
- ・そうした守旧派たちが、スポーツ組織の中心を成していたのも、マネジメントの発想を芽生えさせなかった一因である。(スポーツマネジメントの時代を迎えて：BCCWJ)

次のような例では、出現場所をそもそも問題にしない。

- ・しかし、朴との試合を成立させることは、想像以上に困難なことだった。(一瞬の夏)
- ・彼は母の期待に添わなくてはならないし、伯父の期待にもこたえなくてはならない。その事が同時に康子との結婚を実現させる条件でもある。(青春の蹉跌)
- ・失われた祝祭を復活させようとするのは、空しいことだ。(風に吹かれて)
- ・「(前略) どう見ても、博士の研究はいよいよ大詰をむかえていて、それを完成させるためにあんたを呼びよせたってことになる」(世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド)

〔文例（他動詞）〕

出現場所を表す二格の名詞が現れているものに次のような文例がある。

- ・課長はすろどい眼にいつもの傲慢な薄笑いの表情を浮かべ、うまそうにこのわたを吸った。(パニック)
- ・自分は、あくまでも神妙に、そのお巡りこそ取調べの主任であって、刑罰の軽重の決定もそのお巡りの思召し一つに在るのだ、という事を固く信じて疑わないような所謂誠意をおもてにあらわし、彼の助平の好奇心を、やや満足させる程度のいい加減な「陳述」をするのでした。(人間失格)
- ・会社においても、彼は設計面で次々と新しいアイディアを生かした。完全霧化促進を狙って彼が設計した新しいノズル方式は、小型ディーゼルエンジンに一種の革命をもたらした。(孤高の人)
- ・政子の訴えは深く武士たちの胸に食い入り最大の効果を発揮した。(武蔵武士：BCCWJ)

次のような例では、出現場所が問題にならない。

- ・入社から工務局長になるまでの二十年間、一貫して整理部で見出しの文句を考えたり記事のレイアウトを工場に指示したりと紙面をつくる仕事にタッチしてきたキャリアが、彼一流の現場至上主義を形づくっていた。(メディアの興亡：BCCWJ)
- ・「ひとつお願いがあるんです。実は、明日家内を貰うことになりましたね。今日初めて会ったんですが、私と同様に宿なしで、性質はいいようです。話がすらすらとまとまっていますね。戦争も終わったからひとつ共同で幸福な家庭を築き上げようってわけですか、不可ませんか」(あすなろ物語)
- ・その日から、私は内藤と朴との王座決定戦を実現するために動きはじめた。(一瞬の夏)
- ・幅広い層の市民が自主的に選挙事務所に集まり、選挙資金はすべて市民のカンパで賄い、選挙活動も市民のまったくのボランティアという、まさに「市民型選挙運動を展開した」。(デモクラシー・リフレクション：BCCWJ)

3. 5 (ア) 〈現象おこし〉

〈N[自然現象]-ヲ V[現象おこし]>

「雨、風、波、煙、泡、振動、ゆれ、音、共鳴、香り、匂い、味、火」など自然現象を表わす名詞のヲ格と、現象を引き起こすことを表わす動詞が組み合わせると、その現象を生じさせることを表わす連語をつくる。「物への働きかけ」のうちの〈現象おこしへの働きかけ〉とは、表現する現象は似ているが、連語の構造は異なっていて、この〈現象おこし〉におけるヲ格名詞は働きかけの結果として生じる現象である。その点で、「物への働きかけ」の〈生

産》に似ている。

他動詞は、それぞれの名詞の表わす自然現象ごとにきまった動詞があつて慣用的になっているものもあり、それ以外には「たてる、だす、おこす」にほぼ限られる。自動詞使役もそれほどバラエティーはない。その現象が生じる場所を表わす二格の名詞で広げられることがある。使役動詞が豊かである。

【Vi 使役連語】「音を させる」「轟音を ひびかせる」

【他動詞連語】「音を たてる」「香りを だす」「火を おこす」

《動詞例（自動詞派生の使役動詞）》

(1) {単純動詞}

(波を) 打たせる、(音を／足音を／地響きを) させる、(匂いを／香りを) させる (匂い／香気を) 立たせる、(香りを) 漂わせる、(雷鳴を) 轟かせる、(音を) 響かせる、(雨を) 降らせる

(2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}

鳴り響かせる、響きわたらせる、(茸雲を) 湧き立たせる

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+サセル}

共鳴させる、反響させる // (香りを) 発散させる

《動詞例（他動詞）》

(1) {単純動詞}

(火を／波を／風を／揺れを／共鳴を) おこす (：おこる)、(音を／匂いを／甘味を／火を／煙を) だす (：でる)、(音を／香りを／波を／煙を／ほこりを／泡を) たてる (：たつ)

【文例（自動詞使役）】

ヲ格名詞が「雨」であるものがある。はじめの例は場所を表わす二格の名詞で広げられている。

- ・台風10号は19日午前5時ごろ、北九州市沖に抜けた。宮崎市付近に上陸してから約28時間かけて九州を縦断し、各地に激しい雨を降らせた。
(asa2006.txt(1637882))
- ・麻美は「やったあ」と声をはずませて、午前中まで雨を降らせていた重い色の雲を見上げた。(ビタミンF)

次の例はヲ格名詞が「音」や「声」であり、最初の例は、その現象が生じる場所を表わす二格の名詞が使われている。

- ・「この議案を承認することに、ご異議、ございませんかあ！」株主総会の議長が、大きな声を会場に響き渡らせると、それまでシーンとしていた株主席のあちこちから、まるで合図をかわしたかのように、「異議なし!」「異議なし!」「異議なし」と、ほろいといと賛意の声がわきあがってくる。(即戦力の心理話術：BCCWJ)
- ・春さんも清香も、たまの都会からの来客が嬉しいらしく、二人とも台所で絶えず喋りながら、忙しそうに食器の音を響かせていた。(あすなる物語)

- ・孤峯庵には、山門のわきに鉄鎖のつい耳門があった。里子が草履の音をさせて入ってくると、この鉄鎖はキリキリと音をたててあたりの静寂を破った。(雁の寺)
- ・金属の棒を指ではじいて演奏する「カリンパ」は、音を反響させる役目のヒョウタンを取り付けると、音色の変化と広がりを実感できる。(asa2006.txt(1911827))
- ・艦長が私財を投じて楽器を購入して軍楽隊を作っている艦では、緊張を少しでもほぐそうと、心を奮い立たせる愛国的な曲をわんわんと鳴り響かせている。(トラファルガル海戦物語：BCCWJ)

次の文例ではヲ格名詞が「におい」や「臭気」の例もある。

- ・吉田長官と反対に参謀長の高橋少将は大酒飲みで、葱の白いのが好物で、コックに命じて生葱に味噌を出させて始終酒を飲んでいる。出港時のブリッジでもぷんぷん酒の匂いをさせていた。(山本五十六)
- ・この練兵場の砂原は、熱気を持った風を送って烟くさい臭気を漂わせ、山の方へ向けて歩いて行った数条の足跡を見せていた。(黒い雨)
- ・担架の上に臥ている仲三さんは、むんむんする生ぐさいような臭気を発散させていた。(黒い雨)

【文例（他動詞）】

- ・女の姿がないと知った時、鮎太は自分が先刻レールを横切った時蹴飛ばした石ころが、からからとどこまでも音を立てて転げて行ったのを思い出した。(あすなる物語)
- ・「薪、柴、わらを持ってきて火をおこしてくれた者に、一人百文くれてやるぞ」(国盗り物語・斎藤道三)

3. 5 (イ)〈生理現象の現出〉

＜N[生理現象]-ヲ N[身体部位]-ニ V[生理現象]>

【Vi 使役連語】「傷口に 蛆を わかせる」

【Vt 使役連語】「身体に 熱を もたせる」「後頭部に 発疹を ふき出させる」
「足に 怪我を 負わせる」

【他動詞連語】「背中に 寒けを もよおす」「後頭部に 発疹を だす」
「肝臓に ガンを 再発する」

この類の連語、とくに動詞が使役動詞である場合には、生理的なある状態が発露・現出する箇所としての身体部位を表わすニ格名詞で広げられることが多い。生じてくる変化は身体内部からわき起こってくるように捉えられている²⁹。

《動詞例（自動詞派生の使役動詞）》

(1) {単純動詞}

(背中に痛みを) 走らせる、(全身に力を／険しい色を口元に) みなぎらせる

²⁹ 奥田(1960[1983b:203]) は、「身体に変調をきたす」「田中教師のうえに変化をもたらす」の「きたす」「もたらす」を、「状態生産動詞」としている。奥田(1968-72[1983a:67]、1962[1983c:290]) も参照。

≪動詞例（他動詞派生の使役動詞）≫

(1) {単純動詞}

(口に微笑を) 浮かべさせる、(身体に波を) 打たせる、(怪我を／傷を) 負わせる、(口元に笑いを) 含ませる、(身体に熱を) もたせる

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+サセル}

再発させる、発生させる、(肺炎を) 併発させる

≪動詞例（他動詞）≫

(1) {単純動詞}

(頬に赤みを) 帯びる、(身体に変調を) きたす、(熱を) だす（：でる）

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+スル}

再発する

〔文例（自動詞使役）〕

- ・雌シヤチが小さな唸りをあげ、背や腹をしなわせて、肩に歯を立ててくる。歯や爪は皮膚の至るところに、痛みを走らせる。(仮装：BCCWJ)
- ・志乃は、私をまっすぐ見つめたまま、顔に或るちからをみなぎらせて微笑した。(忍ぶ川)
- ・彼は古タクシーをやとい、エンジンをかけっぱなしにして、体じゅうに悪魔じみた精力をみなぎらせて俊介の家の前にがんばっていた。(パニック)

〔文例（他動詞使役）〕

- ・「お前、五人のうちの四人を、いずれも足に傷を負わせたというのかえ？」(剣客商売・雨の鈴鹿川)
- ・アシュレイが自分の体をぬぐったあとわたしてくれた幅ひろのハンカチーフでかれは首筋をぬぐったが、それはアシュレイの力強くしつこい外国人の体臭をこびりつかせていて、かれの首筋の皮膚に嫌悪の小さい身ぶるいをおこさせ反撥させるのだ。(戦いの今日)
- ・加齢による筋力の低下は、膝や腰の痛み、首や肩のこりなど、身体の各所に痛みを発生させる。(ドクター・ショッピング：BCCWJ)
- ・にきびを顔いっぱいに吹き出させた若い出前もちは気さくに答えた。(人間の証明：BCCWJ)

〔文例（他動詞）〕

- ・母は、以前から寝泊まりしてくれていた付添婦さんと一緒に、札幌にある古い家に住んでいたのだが、昨年の暮れ、風邪をひいて熱を出し、痰もからむというので、内科医をしている義兄に頼んで、近くの病院に入院させてもらった。(風のように・返事のない電話：BCCWJ)
- ・京子の顔と、セーラー服との不均衡が烈しすぎた。不均衡が、歪んだ欲情を投げかけ

てくるのだが、烈し過ぎると滑稽に近づく。明子の場合は、赤い口紅が妖しい雰囲気をつくり出したが、京子には邪魔になる。(砂の上の植物群)

3. 5 (ウ)〈心理現象の現出〉

＜N[心理現象]-ヲ N[精神部位]-ニ V[心理現象]>

【Vi 使役連語】「目元に 悲しみを 漂わせる」「愛情を 芽生えさせる」

「勇猛心を 心に 沸き立たせる」

【Vt 使役連語】「女の顔に 微笑を 浮かべさせる」「人々の胸に 悔しさを 起こさせる」

【他動詞連語】「人々の胸に 感動を よびおこす」「子供の心に 自信を もたらす」

「意識に 変調を きたす」

この類の連語でも、心理的なある状態が発露・現出する箇所としての精神部位を表わす二格名詞で広げられることがある。生じてくる変化は意識の内部からわき起こってくるように捉えられている。

＜動詞例（自動詞派生の使役動詞）＞

(1) {単純動詞}

(表情に悲しみを) うかがわせる、(心中に不満を) くすぶらせる、(容貌に憂鬱さを) 漂わせる、(横顔に絶望を) 匂わせる、(心に亀裂を) 走らせる、(心の底に怒りを) 淀ませる@

(2) {複合動詞 (複合動詞のうち後項が「する」以外のもの)}

(聴衆の心に感動を) 沸き上がらせる、(心に勇猛心を) 沸き立たせる

(3) {サ変動詞 (複合動詞のうち後項が「する」であるもの)}

(3-1) {名詞相当+サセル}

(意識に封建的な思想と現代的な生活欲を) 存在させる

＜動詞例（他動詞派生の使役動詞）＞

(1) {単純動詞}

(体調に変化を／胸に悲しい気持ちを) 起こさせる、感じさせる、生じさせる

(2) {複合動詞 (複合動詞のうち後項が「する」以外のもの)}

(発疹を) ふきださせる

(3) {サ変動詞 (複合動詞のうち後項が「する」であるもの)}

(3-1) {名詞相当+サセル}

再発させる、発生させる、併発させる

＜動詞例（他動詞）＞

(1) {単純動詞}

(頬に赤みを) 帯びる、(心に不安を) かかえる、きたす、(熱を) だす(:でる)、保つ、(内に暗い情熱を) 秘める、もたらす、もつ、もよおす

(2) {複合動詞 (複合動詞のうち後項が「する」以外のもの)}

(人々の胸に悲しみを) よびおこす

(3) {サ変動詞 (複合動詞のうち後項が「する」であるもの)}

(3-1) {名詞相当+スル}

再発する

(3-3) {その他}

有する

〔文例 (自動詞使役)〕

- ・イスラム世界のみならず、アメリカ主導のグローバリゼーションによって負の衝撃を受け、密かな反米感情を胸にくすぶらせる人々は、世界中に数多い。(日本の「覚悟」：BCCWJ)
- ・{伊予警務部長は}浮腫んだ顔に、あからさまな嫌悪感を漂わせていた。(半落ち)
- ・博士はルートに覆いかぶさっていた。首と両手を精一杯にのばし、絶対にこのか弱き者を傷つけてはならぬという決意をみなぎらせながら、全身でルートを包み込んでいた。(博士の恋した数式)
- ・道三は自分の生涯に別れをつけるための挽歌をうたっている。が、この挽歌は咆哮をつづけているうちに道三の心をゆさぶり、震盪させ、泡立たせ、ついにはふつふつと闘志をわきたたせた。(国盗り物語・織田信長)
- ・それは、決して祖国を愛さない「非国民」的な心象風景ではなく、むしろ「身捨つるほどの祖国」への希求を潜在させた熱い想(おも)いを象徴しているとさえいえる。
(asa2006.txt(1947944))

〔文例 (他動詞使役)〕

- ・(チーフのプレゼンの手法は、) 聞く者の心にあえて小さな疑問を生じさせ、なぜそれが疑問となるかを明確化し、絶妙のタイミングで解答を与える。(となり町戦争)

〔文例 (他動詞)〕

- ・幼い日、朝な夕な、いや間断なく眺めて暮した山影である。そのときといささかも変らぬ山を見上げながら、いまこうして自分が、年老いて、抑えがたい心痛を心に抱いて立っているということ自体が、ふしぎな信じられぬような気もした。(楡家の人びと)
- ・表面は優しく、内には沈んだ殺意を秘めている能登人の気質を言うのだという。人間だけでなく、能登の自然もまたそのような優しさの中に、日本海の怖ろしさを隠しているというのだ。(風に吹かれて)
- ・最後にモップで掃除した後で、今日は仕事のやり甲斐があったと思った。与えられたものでなく、自分で見つけて仕事をやること、これが充実感をもたらす。(二十歳の原点)
- ・そのことによって、画集の上で燃えている夕焼が、彼に異様な充実をもたらしている。(砂の上の植物群)
- ・共同湯という言葉といっしょに、鮎太の眼には、自分にカステラを紙に包んでくれた都会の、伶俐そうな少女と、その兄の、どこかにきびしい感じを持っている大学生の面影が映った。(あすなろ物語)
- ・「(日米) 両国が極東における国際の平和及び安全の維持に共通の関心を有することを

考慮し、相互協力及び安全保障条約を締結することを決意し、よって、次のとおり協定する」(最高裁物語：BCCWJ)

- ・だからそんな真に謙虚な人間が、ただつましく聖書を読み、神を信じて、その信仰をただ彼の心の中にだけそっと保っていたと、そのような場合だってあり得ないだろうか、心の貧しいが故に、その信仰が喜びとなって表にあらわれず、心の中に死ぬまで秘められていたというようなね。(草の花・第二の手帳)
- ・良いテキストというのは、個々の読者の中にある物語を喚起するように書かれているもののことです。(ミステリを書く！：BCCWJ)

上の文例は、自動詞使役、他動詞使役の文例も含め、ヲ格名詞が感情や思いを表わすものであったが、次の例では、ある心理状態のもとに生じる反応を表わしている。

- ・僕は退屈しないで、黒人兵の桃色の掌が毘の刃に圧されて柔かに窪むのを見たり、黒人兵の汗にまみれて太い首に脂肪質の垢がよれて筋になるのを見たりした。それらは僕の心に、不快ではない嘔気、欲望と結びついたかすかな反撥をよびおこすのだった。(飼育)
- ・結果は大成功のようだった。序の部分では、東洋の神秘に魅せられていたようだったし、破の部分では、目眩を起こしていたように見えたし、急では、酔ったような溜息が聞こえたような気もした。ただし、用意しておいた冗談はどれも、いかなる反応をも引き起こさなかった。(若き数学者のアメリカ)

4 物・事と人への働きかけ

この章でとりあげる「物・事と人への働きかけ」は、奥田（1968-72[1983]）の連語のタイプのうち、「第二章 所有のむすびつき」のうちの「(a) やりもらい」、および「第三章 心理的なかわり」のうちの「第二節 通達のむすびつき」に概ね相当する。それぞれ次のような連語である。これも本報告の著者の責任で簡略にまとめた。

●奥田（1968-72[1983]）における「やりもらい」と「通達のむすびつき」のタイプ

《やりもらい》 N[人]-ニ N[物]-ヲ Vt[やり]

〈物を与える相手〉 〈対象(物)〉 〈物（の所有権）を相手に与える〉

N[人]-カラ／ニ N[物]-ヲ Vt[もらい]

〈物を受けとる相手〉 〈対象(物)〉 〈物（の所有権）を相手からうけとる〉

知人に 金を 貸す

息子に 家督を ゆずる

友達に ノートを 借りる

呉服屋から 手数料を とる

《通達のむすびつき》 N[人]-ニ N[抽象]-ヲ Vt[言語活動]

〈情報を与える相手〉 〈対象(情報)〉 〈情報を相手に与える〉

N[人]-カラ／ニ N[抽象]-ヲ Vt[言語活動]

〈情報を受けとる相手〉 〈対象(情報)〉 〈情報を相手からうけとる〉

係員に 住所を 知らせる

娘に 父親の気持ちを 伝える

監督から 話を きく

母に 父の病状を たずねる

この2類は、上で述べたように奥田（1968-72[1983]）では大きく異なる連語グループとされているのだが、《やりもらい》は人と人との間で物の所有権のやりとりをすることによって人にも物にも影響が及ぶことになり、《通達のむすびつき》は人と人との間で情報のやりとりをすることによって人にも情報にも影響が及ぶことになるという点で、両者には一定の共通性があると考えることができ、本報告では「物・事と人への働きかけ」（人と人との間での物や情報のやりとりの引き起こしを表わすもの）としてまとめ次の4類に分けて考えることにする。他動詞派生の使役動詞といわゆる三項他動詞とが構文的・意味的に類似するグループである。

●本報告における「物・事と人への働きかけ」を表わす連語のタイプ

《授与》<N[人]-ニ N[物]-ヲ V[授与]> : 警官に 金を 握らせる // 与える

《取得》<N[物]-ヲ N[人]-カラ／ニ V[取得]>

: 兄に ラケットを 譲らせる // もらう

《抽象物の与え》<N[抽象]-ヲ N[人]-ニ V[伝達]>

: 相手に 気持ちを 通じさせる // 話す

《情報のひきだし》<N[認識内容]-ヲ N[人]-カラ（／ニ） V[獲得]>

: 友達に 感想を 言わせる // きく

4. 1 《授与》

<N[人]-ニ N[物]-ヲ V[授与]>

【Vt 使役連語】「娘に 嫁入り道具を もたせる」「警官に 金を 握らせる」(所有)、

「赤ん坊に 母乳を 飲ませる」(摂食)

【他動詞連語】「妹に 本を わたす／与える」「孫に お年玉を やる」「客に 商品を 売る」

使役動詞は、物を取得することを表わす他動詞から派生したものがほとんどである。その原動詞は意志動詞ではあるが、使役文のなかでは、動作主体の意志性は必ずしも強くないことがあり、ここで連語としてとりあげるのはそのような例である。

相手に食物を与える働きかけもこの類にまとめる。動詞例の列挙のうち「//」の後の動詞がその類である。

《動詞例（他動詞派生の使役動詞）》

(1) {単純動詞}

得させる³⁰、(役員に金を)つかませる、(武將に褒美を)とらせる、(警官に金を)握らせる、もうけさせる、(娘に嫁入り道具を)もたせる // (救出者に新鮮な空気を)吸わせる、(餌を)食べさせる、(母乳を)のませる、(病人の口に水を)含ませる

(2) {複合動詞 (複合動詞のうち後項が「する」以外のもの)}

受けとらせる // すいこませる、のみこませる

(3) {サ変動詞 (複合動詞のうち後項が「する」であるもの)}

(3-1) {名詞相当+サセル}

所有させる // 吸入させる

《動詞例（他動詞）》

(1) {単純動詞}

あげる、預ける、与える、あてがう、売る、おくる[送・贈]、おごる、かえす、貸す、くださる、くれる、ことづける、さしあげる、授ける、支払う、(食事を)出す(:出る)、払う、(酒を/料理を)ふるまう、施す、貢ぐ、恵む、やる@、譲る、(得点を)許す、よこす、わけ、渡す

(2) {複合動詞 (複合動詞のうち後項が「する」以外のもの)}

- ・売りつける、売りわたす、送り返す、送りつける、送り届ける、買い与える、書き送る、貸し付ける、差し入れる、ひきつぐ、ひきわたす、譲り渡す、分け与える
- ・手渡す

(3) {サ変動詞 (複合動詞のうち後項が「する」であるもの)}

(3-1) {名詞相当+スル}

- ・寄進する、寄付する、献血する、献上する、献本する、譲渡する、譲与する、贈与する、貸与する、伝授する、売却する、配分する、販売する、プレゼントする、分譲する

³⁰ 奥津敬一郎(1983:22)に琉球方言の語彙の次のような特徴が述べられている。「沖縄では、「ヤル」「クレル」にあたる単一の語がなく、「イイラスン」(得サセル)のように「得ル」の使役形を使うところさえある。」

る、分配する

- ・おすそ分けする、御馳走する、差し入れする、つけとどける
- ・[VN (を) する⇐NをV] (贈り物をする⇐物を贈る) 贈り物をする、届け物をする、貢ぎ物をする

(3-3) {その他}

献ずる

(4) {複合動詞に準ずるもの}

くれてやる、恵んでやる、わけてやる (cf. やりもらいのテヤルとの境界)

〔文例 (他動詞使役)〕

- ・平家の子孫は、男子は一人残らずとらえよ、訴人したものには、莫大な恩賞をとらせ
るという幕府のお触れに、平家の公達は次々に探しだされ、召し捕られ、そうして、
惨殺されたのだった。(うろこの家：BCCWJ)
- ・庄九郎は、美濃の小守護斎藤秀竜でなく、京の油商人山崎屋庄九郎としての名を杉板
に書きしたため、「松永様におめにかかりたいので」と、門番に銀を少々つかませた。
(国盗り物語・斎藤道三)
- ・男の子の母親である若い嫁は、たんすの中から、白粉と脱脂綿をとり出して {それを}
雪子に無理に受けとらせた。(青い山脈)
- ・しかし、もし世話をしなかった場合でも、そのまま秋人に家を所有させたままにする
というのも、祖母としては嫌でしょう。(これで納得！契約の基本：BCCWJ)

次の例は、二格名詞が人の身体部位であり、カテゴリカルな意味としては[物]という面もある
ので、「物への働きかけ」のうちの《付着》に近いといえる。

- ・飛田は、俺はひと足おくれるといい、パンののこりを袋に入れて私の手に持たせよう
とした。(驢馬)

次の例は、ヲ格名詞が食べ物や飲み物を表す名詞、他動詞は摂食を表す動詞であり、
人に物を食べさせたり飲ませたりするという働きかけである。次の例では、相手に直接的に
働きかけて物を摂取させることを表わしている。

- ・十日もたったころだろうか、祖母に夕飯を食べさせているとき、私は唐突に思った。
いっそ死んでくれればいいと。(きっと君は泣く)
- ・Mのはいった大学の仏文科の老教授が、歓迎パーティの席である女子学生にワインを
ろうつしに飲ませたこと(あたしはうれしくなってげらげら笑いました)、…… (聖
少女)
- ・あるものは、子に乳を含ませる母の姿に聖母像を重ね、またあるものは、そこに牝牛
のイメージを抱く。(世界一ぜいたくな子育て：BCCWJ)
- ・「もう、さっき飲ませた薬は効き目が切れてますから。さあ、コレをどうぞ」男はそう
言い、留乃の口をこじ開け、快楽薬を飲み込ませた。(エスケープ！：BCCWJ)

一方次の例では、直接的な働きかけではなく、「(酒を) 飲ませる」は「(酒を) ふるまう、
ご馳走する、提供する」といった意味合いになっている。

- ・「どうだ、今晚でもわしの家に来ぬか」と和久正辰は、授業がおわって休息室にひきあ
げてきた好古にいった。「酒を飲ませる」その言葉におもわずのどが動いたのを、好古
は愧じた。(坂の上の雲 (一))

〔文例（他動詞）〕

- ・外山は賞品の大スイカを加藤に与えながら、彼の卓抜した泳技を誉めた。（孤高の人）
- ・病院では食事ができないだろうと、ひとまず駅ビルで朝食をすませ、昨夜のお礼にと看護婦さんにさしあげるつもりでチョコレートの箱詰めを買い求めて病院へ入っていた。（愛、見つけた：BCCWJ）
- ・私も、港々からは必ず社に手紙を送った。（マンボウ交友録：BCCWJ）
- ・島村は昼前に改めて金を持って、須崎を訪ねた。十万円、封筒に入れて、須崎に渡した。（犬バカものがたり：BCCWJ）
- ・この店は「売り専」という。飲み代一万三〇〇〇円、女性の連れだし料五〇〇〇円を店に払い、時間三万円、泊まり四万円程度を女性に払う。（チャイナマフィア：BCCWJ）
- ・言いながら、太郎は慌てて、銀行で下ろした、一万円札とハンコと通帳を、左右それぞれのズボンのポケットに、ふり分けにして入れてあるのを確かめた。そうだ、通帳は、焼き捨てるか、お袋に送り返してしまおう、と太郎は思った。（太郎物語・大学編）
- ・神奈川県警の捜査員が協力者から呼び出しを受けたのは、九月末のことだ。協力者は何枚かの写真を捜査員に手渡した。（捜査一課秘録：BCCWJ）
- ・「…しかし、今日、こうしてきてくれたことにたいしては、有難う、と礼を言いたい。花は仲間にもわけてやり、部屋に飾っておくよ」（冬の旅）
- ・「面白いわ。どうもありがとう」と彼女は言った。「でもあなたはよく女の子に爪切りなんかをプレゼントするの？」（世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド）
- ・だまされてるとも知らず、みんなにクリスマスの贈り物をしていたことを思い出すと、自分が世界でいちばん愚かな人間に感じられた。（カナンの果て：BCCWJ）
- ・「ところがその人は貧乏で、生活保護を受けているのよね。そういう人がテレビをつけると、聴視料を払わなきゃならないでしょう。そのお金もないから、その人は機械を養老院に寄付したい、って言ったんだって」（極北の光：BCCWJ）

次の例は具体物の移動は伴わず、所有権の変更である。

- ・領主は支配下の村落を領主直営地と農民保有地に分割し、農民家族の自活に必要な耕地を農民保有地として村落民に貸し付ける一方、その代償として封建地代を課していた。（富、権力、そして神：BCCWJ）
- ・一八四八年、彼の子のカメハメハ三世は、マヘレと呼ばれる土地改革を開始した。そして王と首長の土地を分け、王の土地も王領と国有地に分けて、平民にも土地を分配した。（太平洋：BCCWJ）
- ・ご両親は、一週間後には新しいベンツを、彼女に買い与えていました。（お手伝いで子どもの心を鍛えなさい：BCCWJ）

売却を表わす連語もこの類である。

- ・長は川でフナやエビ、雑魚を捕ってきては周五郎に売りつけた。（行徳歴史街道）

また次の例は、ヲ格名詞が食べ物や飲み物を表わす名詞であり、人に物を食べさせたり飲ませたりするという働きかけを表わすが、他動詞使役連語の場合に比べて、働きかけそのものは間接的なものが多い。

- ・私は医局と呼ばれる一室で、まず二人に紅茶をふるまった。（どくとりマンボウ医局記：BCCWJ）
- ・織田信長が、……その料理人の拵えたものを食ってみると頗る不味かったんで、大変

小言を云ったそうだ。料理人の方では最上の料理を食わして、叱られたものだから、その次からは二流もしくは三流の料理を主人にあてがって、始終褒められたそうだ。

(それから)

・それまで、父から月々、きまった額の小遣いを手渡され、それはもう、二、三日で無くなっても、しかし、煙草も、酒も、チイズも、くだものも、いつでも家にあったし、本や文房具やその他、服装に関するものなど一切、いつでも、近所の店から所謂「ツケ」で求められたし、堀木におそばか天井などをごちそうしても、父のひいきの町内の店だったら、自分は黙ってその店を出てもかまわなかったのです。 (人間失格)

ただし、授与される物が飲食物であっても次の例のように直接的な働きかけを表現しているものも少なくはない。

- ・子供のねむたい時に眠らせ、空腹の時に乳をやり、活動を欲する時に活動させて、少しも自然の指示にそむかないならば、……(おさなごを発見せよ)

4. 2 《取得》

<N[物]-ヲ N[人]-カラ／ニ V[取得]>

【Vt 使役連語】「会社に／から 補償金を 出させる」「兄に ラケットを 譲らせる」

【他動詞連語】「姉から／に 本を もらう」「花子から／に 本を 借りる」

「老人から 金を 盗む」

他動詞には、相手の側の提供または手離しの意志の存在を前提とした働きかけを表わすもの（「もらう、借りる」等）とそうでないもの（「奪う、盗む」など）とがある。前者の働きかけはその点で消極的な動作を表わしているのだが、相手の提供行為の実現を当然のこととして含みこんでいるともいえる。

この類の連語をつくる使役動詞はごく少なく、それも専らこの類の連語をつくるものはない。上の「会社に／から 補償金を 出させる」「兄に ラケットを 譲らせる」も、これらが文の中で使われたときに「補償金を出す」相手、「ラケットを譲る」相手が、文の主語である場合に限る。つまり、「太郎は会社から（自分に）補償金を出させた。」というときに、「太郎は会社から補償金をもらった／受け取った。」という他動詞連語と類似の事態を表現するということである。

《動詞例（他動詞派生の使役動詞）》

(1) {単純動詞}

送らせる、返させる、支払わせる、戻させる、ゆずらせる

(2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}

送り返させる、送り届けさせる

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+サセル}

還付させる@、償還させる@

《動詞例（他動詞）》

(1) {単純動詞}

預かる、いただく、奪う、買う、借りる、くすねる、さずかる（：さずける）、せしめる、たまる、とる、ぬすむ、もらう

(2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}

受けとる、奪い返す、奪い取る、買い上げる、買い入れる、買い受ける、買い取る、買い戻す、借り上げる、借り受ける、仕入れる、とりあげる、とりかえす、とりたてる、とりもどす、とりよせる、盗み取る、まきあげる、申し受ける、もらい受ける、譲り受ける

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+スル}

強奪する、擄取する、失敬する、借用する、受領する、寸借する、相続する、奪取する、頂戴する、入手する、拝受する、拝領する、輸入する、落手する、掠奪する

〔文例（他動詞使役）〕

- ・人身事故の被害者は、その損害賠償を加害者に請求して支払わせるわけだが、被害者が掛けている保険一、生命保険や傷害保険、交通事故傷害保険、団体保険などで、交通事故による死亡やケガなどの補償が受けられることがある。（交通事故に負けない被害者の本：BCCWJ）
 - ・稚魚は三人の共同出資で、取敢えず三千尾ほど送り届けさせることにする。（黒い雨）
- この2つの例が表現しているのはそれぞれ、「加害者が被害者に損害補償を支払う→被害者が加害者から損害補償を受け取る」「（業者が）我々三人に稚魚を送り届ける→我々三人が（業者から）稚魚をうけとる」という事態である。

次の例では、それぞれ、カラ格とニ格とで、動作の主体が表わされている。

- ・デパートから品物を送らせるのは、まだ形式ばっている。かしこまっている。心理的距離がある。（恋愛の心理：BCCWJ）
- ・春が財布と取り出して、立ち上がった。弟に金を払わせるわけにもいなくて、私は先に伝票をつかんで席を立った。（重力ピエロ）
- ・国土交通省は7日、航空機を利用した職員の出張旅費の精算で、04年度に340件、計443万円の過払いがあった、と発表した。職員に過払い分を返させ、故意の不正請求は処分を検討する。（asa2006.txt(1346964)）

〔文例（他動詞）〕

- ・二代目葵小僧の第一の目的は大金を強奪することであり、そのために金持ちの商家を襲うものと、誰もが思い込んでいる。（大江戸龍虎伝：BCCWJ）
 - ・外史の次女、京子がスキー競技会の日に燃えるような緋色のロング・ドレスを着用して注目を集めたというが、これは姉、朝吹磯子の結婚衣裳を借用してきたのだそうで、これは異例中の異例であろう。（日本スキー事始め：BCCWJ）
- この類では、うけとる相手はカラ格で示されることが多い。
- ・澄江からあずかった金は銀行の定期に入れてあった。（冬の旅）
 - ・パリから東へ一三〇キロのランスで日曜日の朝、アルキの若者五人がパン屋から菓子パンやクロワッサンを盗んだ。（フランスの憂鬱：BCCWJ）

- ・彼の容疑は、一緒に逮捕された全性の樋口信一専務理事の口利きで、鈴木理事長から
ら百万円を受け取った、というものであった。(本田靖春集：BCCWJ)
- ・藤吉郎は光秀からできるだけの兵要地誌を仕入れておき、自分の功名の場所をあらかじめ予定しておこうとしているらしい。(国盗り物語・織田信長)
- ・冴子が、女学校で下級生から万年筆と時計を取り上げた事件をひき起し、そのために一年停学になり、郷里の町にいにくくて、……………(あすなろ物語)
- ・源信は、無事に御八講の講師の重責を果たし、天皇から数々の貴重な品を頂戴します。(法華経と宗祖・高僧たち：BCCWJ)
- ・箱は葬儀屋さんから取り寄せたもので、ドライアイスが十キロほど詰めてある。(犬と歩けば：BCCWJ)

次の例ではうけとる相手が二格で表わされている。

- ・梅ヶ丘の駅前で関口玲子に自転車を借りたのも、亜紀の方から持ちかけたことでしょう。(ザ・ベストミステリーズ：BCCWJ)

4. 3 《抽象物の与え》

<N[抽象]-ヲ N[人]-ニ V[伝達]>

この類の連語は、主として伝達活動あるいは広い意味での授与活動を表わす動詞とヲ格の抽象名詞とが組み合わさるものであるが、そのヲ格名詞の意味的なタイプによっていくつかの下位分類できる。

4. 3 (ア)〈認識内容の与え〉

<N[認識内容]-ヲ N[人]-ニ V[伝達]>

まず、ヲ格名詞が、人の「言語活動で表現される現実のできごと」(奥田 1968-72[1983:108])を表わすものである類をとりだすことができる。言語活動で表現される現実のできごとを表わすヲ格名詞にはカテゴリーカルな意味をみいだしにくい、ここではかりに[認識内容]としておく。

【Vt 使役連語】「相手に 悲しい気持ちを 抱かせる」「工員たちに 手順を 熟知させる」

「係官に 状況を 把握させる」

【Vi 使役連語】「相手に 気持ちを 通じさせる」「情報を 全員に いきわたらせる」

【他動詞連語】「後輩に テニスを 教える」「選手に 作戦を 話す」

「住民に 計画を 説明する」「雇人たちに 真相を 知らせる」

この類の連語では、発話の相手は意志的な人であり、潜在的・可能的には認識主体なので、<N[認識内容]-ヲ N[人]-ニ V[伝達]>という連語の表わす事態がなりたつと、それは相手の人の認識の変化を惹起することができる。

“相手への情報の送り出し” ⇒ “相手への情報の到達” ⇒ “相手による情報の受けとり” ⇒ “情報の与えによる発話相手の認識変化”

ただし、他動詞の場合には、どの段階までを含意しているかは、必ずしも明確でない。「子供に事情を話す」ことが子供の認識変化を含意しているかどうか必ずしもはっきりしない。一

方、使役動詞「子供に事情をのみこませる」の場合には、子供の認識変化を含意している。こういった点に、使役動詞と他動詞の違いがある。

なおこの類の他動詞は、従属節述語となって「人に Vして、Vt+サセル」という複文をつくり、従属節で相手に知識や情報を与える働きかけを表現し、それによって生じる相手の変化を主節で明確に表現することがある。

「子供に 話して 理解させる」「住民に 計画を 説明して 納得させる」

《動詞例（他動詞派生の使役動詞）》

(1) {単純動詞}

（仕事を）覚えさせる、さとらせる、（辞職を）ちらつかせる、（引退を）匂わせる、（事情を）含ませる

(2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}

（勝利を）信じ込ませる、のみこませる

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+サセル}

感得させる、熟知させる、承知させる、想像させる、納得させる、認識させる、認知させる、把握させる、理解させる、了解させる、（見る人に東欧の城を）連想させる

(3-2) {副詞相当+サセル}

鵜呑みにさせる@

《動詞例（自動詞派生の使役動詞）》

(1) {単純動詞}

うなづかせる、（秘密を）通わせる、（相手に気持ち）通じさせる、（不気味な思いを彼女の心に）伝わらせる、（平和思想を民衆に）届かせる、（甘い言葉を私の耳に）響かせる、わからせる

(2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}

（情報を全員に）いきわたらせる、（悲しさを）食い入らせる、（国民に憲法を）しみとおらせる

《動詞例（他動詞）》

他動詞には複合動詞が多く、とくに、後要素が「きかせる」「しらせる」³¹である複合動詞（「言い聞かせる、告げ知らせる」）および「V-て V」の合成的な動詞（「言って聞かせる、話してきかせる」）が豊富である。これらの動詞は、単に「言う」「話す」「告げる」よりも相手への伝わりが明瞭になる。

(1) {単純動詞}

言う、訴える、教える³²、語る、（話を）聞かす/聞かせる、愚痴る、（愚痴を）こぼす、ささやく、さとす（：さとる）、（芸を）しこむ、しゃべる、知らす/知らせる、告げる、伝

³¹ 「きかせる／きかす」「しらせる／知らす」は、他動詞とみなすことにした。詳しくは早津（1989b）参照。

³² 奥津敬一郎（1983:23）に、「沖縄方言でも「教エル」は「ナラ-スン」、つまり「習ワセル」である」とある。

える(：伝わる)、説く、述べる、話す、ほのめかす(：ほのめく)、詫びる

(2) {複合動詞 (複合動詞のうち後項が「する」以外のもの)}

- ・言いおく、言い含める、(知識を) うえつける、うちあける、教えこむ、教えさとす、ぶちまける、ふれまわる、申しあげる、申しいれる、申しおく、申し伝える、申し述べる

【一きかせる】 言いきかせる (*言いきく)、語りかかせる (*語りきく)、説きかかせる (*説ききく)、述べきかせる (*述べきく)

【一知らせる】 思い知らせる (他動詞使役とすべきか?)、告げ知らせる (*告げ知る)

【一かける】 うったえかける、語りかける、(疑問を) 投げかける、話しかける

- ・ものがたる

(3) {サ変動詞 (複合動詞のうち後項が「する」であるもの)}

(3-1) {名詞相当+スル}

警告する、告白する、紹介する、説明する、注意する、通知する、白状する、報告する、密告する、連絡する

(4) {複合動詞に準ずるもの}

言っけかせる、歌っけかせる、語っけかせる、説いてかかせる、話してかかせる、読んでかかせる

【文例 (他動詞使役)】

- ・家族教育は、子供たちに自分の立場をよく理解させ、必要以上の欲をかかせないようにするために必要な手段です。(知ってトクするあなたの税金：BCCWJ)
- ・……特にお使いさんに含ませなければならないのは、三畳じゃ狭いということだ。(流れる)
- ・然し自惚れなく、私たちはそのことをみんなに納得させること、つまりみんなの毎日の日常生活に即して説明してやることでは、まだまだ拙いのだ。(党生活者)
- ・{親が} 子供の心に自然にその大切な意義をのみこませる (おきなごを発見せよ)
- ・加恵は部屋の中の灯油の瞬きの中で当惑している良平に、どうやって自分が最前の花嫁であることを分らせたらしいかと迷った。(華岡青洲の妻)
- ・彼奴等は今まで何べんも党は壊滅したとか、根こそぎになったとか云ってきた。それを自分たちの持っている大きな新聞にデカデカと取り上げて、何も知らない労働者にそのことを信じこませ、大衆から党の影響を切り離すことにムキになってきた。(党生活者)
- ・アメリカやフランスの女に見られない、素朴な人柄と姿態は、私に原生のすくすくとのびた白樺の木を連想させた。(風に吹かれて)
- ・筵に当る足の裏の感覚は、私に子供の頃、ゴザの上で遊んだ時のことを思い出させた。(素足の娘)

次の例のヲ格名詞は「自分の意思」であり、次節の〈感情の与え〉に近くなる。

- ・光秀にしては、拙すぎるほどの歌である。が、光秀にすれば自分の意思をかれらにさとらせれば事は足りる。(国盗り物語・織田信長)

【文例 (自動詞使役)】

- ・円高が急激に進んだのも、アメリカが保護主義をちらつかせるのも、もとはといえば

日米間の貿易不均衡があまりに大きいからである。(第三の経済危機：BCCWJ)

- ・庄九郎は軽くわらい、別に加担しようがしまいが当方関心なし、という大きな態度をにおわせている。(国盗り物語・斎藤道三)

〔文例（他動詞）〕

- ・戸無瀬が大星宅の女中に来訪を告げ、「乗物これへと申しや」と共に言いつけて初めて、花道から小浪を乗せた駕籠が出てきます。(歌舞伎通：BCCWJ)
 - ・私は両親に事情を話し、立命館大学への進学を承認してもらいました。(心に残るとっておきの話：BCCWJ)
 - ・彼は、単に「彼女」からのメッセージを七瀬に伝えるのではなく、自ら進んで七瀬を慰めようとしていた。(エディプスの恋人)
 - ・光秀は、そういう紹巴を気の毒だと思ったが、しかし光秀にも理由はあった。この紹巴に自分の内心をうちあけることによって自分自身を決心へ踏みきりたかったのである。(国盗り物語・織田信長)
 - ・取り敢えず、浅草の荒井さんや、世話になった隣人達に、お礼を申し述べ、それから、部屋の青年達にキャンプ旅行取りやめのことを申し伝えた。(火宅の人：BCCWJ)
 - ・心配そうに話しかけてきた彼女に、若林は心を許して事故と妻の容態を説明し、どうしてそんなところに買い物に行っていたのかと疑問とも愚痴ともつかないことをこぼした。(鎮火報：BCCWJ)
 - ・われわれの任務は、これで終わったわけではない。結果を皇帝に報告する任務が、まだ残っている。(コンスタンティノーブルの陥落)
 - ・火災その他非常災害の発生を発見し、またはその危険があることを知ったときは、臨機の処置をとるとともに直ちにその旨を居合わせた者に連絡し、その被害を最小限に止めるよう努めなければならない。(就業規則の決め方モデル例：BCCWJ)
 - ・アメリカ側にも、日本の真珠湾奇襲があり得ることを警告した人は、何人もいた。(山本五十六)
 - ・(医師は) 検査方法や治療方法など、さまざまな選択があることも患者さんに紹介し、それらが、病気に対してどのような効果をもたらすのかを説明する必要もあります。(危ない！子どものいびき：BCCWJ)
 - ・父は五つになった美雪に小太刀の使い方を教えた。(朱印！：BCCWJ)
 - ・守将朝倉景恒は、一乗谷の本軍の救援のないことにたまりかね、信長に開城降伏を申し入れてきたのである。(国盗り物語・織田信長)
 - ・滋野井は断腸の思いで、すがりつく我が子に絶縁を言い聞かせた。(ぶらり東海道五十三次芸能ばなし：BCCWJ)
 - ・日本には陸軍のほか、無敵海軍があることを敵に思い知らせなくてはいけないのだ。(黒い雨)
 - ・三枝は、さっき伸子へ話した真鍋のことを純子へ話して聞かせた。(女社長に乾杯！)
- 次の例には、子供に対するほぼ同じような関わりが、使役動詞と他動詞で述べられている。
- ・……2000もの漢字を覚えさせる幼稚園や、おむつをしている子をコンピュータの前にすわらせて、無理やり何かを教え込もうなんて幼稚園がはやる時代に……(「待ち」の子育て)

次のようにヲ格名詞が動作性の名詞の場合、相手への要求的な態度を表わすことになる。

- ・山本はある時、南条三井、小倉住友、小平日立の三社長に集まってもらい、海軍航空の現況を説明し、協力を訴える決心をした。(山本五十六)

4. 3 (イ)〈感情の与え〉

<N[感情]-ヲ N[人]-ニ V[伝播]>

次に、ヲ格名詞が人の感情や思いを表わすものであるときには、ニ格の人名詞が表わす相手にある感情を伝えることを表わす連語となる。使役動詞は感情を受けとったり感じたりすること表わす他動詞から派生した使役動詞がこの類の連語をつくる。

【Vt 使役連語】「相手に 気持ちを 通じさせる」「読む人に やさしい気持ちを 抱かせる」
「皆に ほのかな初々しさを 感じさせる」

【他動詞連語】「相手に 気持ちを 伝える」「親に 心配を かける」
「観客に 好印象を 与える」

この類の連語をつくる他動詞には、「あたえる」「かける」のように動詞そのものが感情変化の引き起こしを表わすわけではなく、ヲ格の感情名詞と組み合わせさせて「～ヲ あたえる」「～ヲ かける」という形で感情の与えを表わすものが多い。慣用句となっているものもあり、そうでなくても、いわゆる機能動詞的な使われ方である。

ヲ格名詞は、人をとりまくものがその人に与える印象を表わす名詞であることもある(「新しさを感じさせる」)。また、ニ格の人名詞は、人を感情の発露する箇所ととらえている面もあり、その点で、3.5 節《現出》のうちの〈心理現象の現出〉の類と関わりがある。

《動詞例(他動詞派生の使役動詞)》

(1) {単純動詞}

(苦しみを) 味わわせる、(喜びを／危惧を) いだかせる、(やる気を) 起こさせる、(悲しみを) 覚えさせる、感じさせる、(悲しい思いを) させる、(自信を) もたせる

(2) {複合動詞(複合動詞のうち後項が「する」以外のもの)}

- ・(孤独感を) 思い知らせる、(つらさを) 思い出させる³³
- ・気づかせる

(3) {サ変動詞(複合動詞のうち後項が「する」であるもの)}

(3-1) {名詞相当+サセル}

(疎外感を) 意識させる

《動詞例(他動詞)》

(1) {単純動詞}

(満足を／喜びを／心労を／安心を／好印象を) 与える、(迷惑を／心配を) かける

³³ これらの動詞も、組み合わせるヲ格名詞が感情を表わすもののときに他動詞表現と近くなるのであり、次のような例では〈感情の与え〉ではない。

・沢田の話は、卒業ということをちょっと重苦しく安吉に思い込ませた。『むらぎも』

(2) {複合動詞 (複合動詞のうち後項が「する」以外のもの)}

(動揺を) 引き起こす、(不安を) よびおこす

〔文例 (他動詞使役)〕

- ・「君がいうとおり、京都はすばらしい。ほとんど私に絶望感をいだかせるくらいだ。」
(寿岳文章集)
- ・老人に自分でも役に立つことがあるという喜びを抱かせたい。(重い歳月)
- ・ところが、腹を立てると、顔色が変わり、その場の雰囲気を入れ、いやな感情を人にまで伝染させてしまう。(老春謳歌：BCCWJ)
- ・この室内の空気は若い正太に何の興味も起させなかった。(家)
- ・これまで家族にはいろいろと辛い思いをさせてきた。(福耳：BCCWJ)
- ・親は自分達の不安を、娘に気づかせまいと必死になっていたが、娘はどうだったのか。(極楽とんぼの飛んだ道：BCCWJ)
- ・競争社会の苛烈さを全身に漂わせる麻子は、僕に疎外感を意識させた。(メガネをかけた犬：BCCWJ)

〔文例 (他動詞)〕

- ・一方、通信技術の発達によってテロの様相が同時中継で世界中に放映され、イスラエル機ハイジャック事件当時とは比較にならないくらい数多くの人々にショックを与え、世界中に恐怖と動揺を引き起こしたのである。(テロ：BCCWJ)
- ・実際、ガブリエレ・トレヴィザンは、そこに彼がいるだけで周囲に安心感を与えるような肉体の持主であった。(コンスタンティノーブルの陥落)
- ・「そんなことから、きみたちにも心配をかけてすまなかった。(ビルマの堅琴)
- ・「ジューコフスキーは国家主義を楯に浪漫主義の旗をひるがえして青年に力強い共鳴を呼び起こし安価な感傷主義をロシア社会から掃討することに努めた… (二十世紀の復習ノート：BCCWJ)

次の例文では、他動詞使役「持たせる」と三項他動詞「与える」が、ほぼ同記事態を表現するものとして使われている。

- ・このビッグイベントの成功は経済的な効果をもたらすと同時に、ブルキナファソの国民に国に対する誇りや自信を持たせることにもなりました。……ワールドカップの開催は……彼らに自信と誇りを与え、それがアフリカの未来を支えていくパワーになっていくに違いありません。(With Your Love)

4. 3 (ウ) 〈任務の与え〉

＜N[任務・仕事]-ヲ N[人]-ニ V[課す]>

ヲ格名詞が責任や任務を表わすものであるときには、ニ格の人名詞が表わす相手にその責任なり任務なりを課すことを表わす連語となる。これも動詞の種類はあまり多くない。

〔Vt 使役連語〕「部下に 責任を 負わせる」「新人に書記を担当させる」

「秘書に 仕事を 担わせる」「部下に 調査を 受け持たせる」

〔他動詞連語〕「部下に 責任を おしつける」「新人に 仕事を まかせる」

《動詞例（他動詞派生の使役動詞）》

- (1) {単純動詞}
(義務を) 負わせる、(責任を／調査を) 担わせる
- (2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}
(役割を／仕事を) 受け持たせる、(任務を) 分けもたせる
- (3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}
- (3-1) {名詞相当+サセル}
(書記を／研究を) 担当させる、(司会役を) 分担させる

《動詞例（他動詞）》

- (1) {単純動詞}
(責任を) かぶせる、(人に罪を) 着せる
- (2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}
(人に責任を) おしつける、(他人に責任を) おっかぶせる、(人に罪を) なすりつける、
(生徒に役割を) ふりわけ、(全員に係を) わりあてる
- (3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}
- (3-1) {名詞相当+スル}
(権限を部下に) 委譲する、(後輩に責任を) 転嫁する
- (3-3) {その他}
(責任を／仕事を) 課す

〔文例（他動詞使役）〕

- ・登美子は二人の関係について男に責任を負わせようとしているらしかった。(青春の蹉跎)
- ・つまり大きな政府でいくのか小さな政府でいくのかとか、中央政府にどのくらいの役割を担わせるのかとか、根本的な理念の問題が政治に問われているわけである。(増税無用論：BCCWJ)

〔文例（他動詞）〕

- ・世界の軍隊は、「徴兵制」と「志願兵制」とに区分される。国民に兵役の義務を課し、一定の年齢に達した青年を国家が強制的に軍隊に徴集するのが「徴兵制」である。(経済国防論：BCCWJ)
- ・若菜は、胸の熱くなるのを覚えた。同時に、僚子に嫉妬し、責任をかぶせようとしていた自分が、恥ずかしくなった。(駆け込み団地の黄昏：BCCWJ)
- ・「俺がその責任の半分を背負うことはもちろんだけど、たとえそれがどんな結果に終わろうとも、決して他人に責任を転嫁しないでほしいんだ。エディさんや金子さんや、それ以外のどんな他人にもね」(一瞬の夏)

4. 3 (エ)〈影響の与え〉

＜N[影響]-ヲ N[人]-ニ V[波及]>

人のうける何らかの影響や人の経験する何らかの事態などを表わす名詞が、人に何かが波及することを表わす動詞と組み合わせ、二格の人名詞で広げられると、その連語は、二格の人名詞が表わす相手にその影響を及ぼしたり経験を与えたりすることを表わす。これも動詞の種類はあまり多くない。

【Vt 使役連語】「相手に 拳骨を 食らわせる」

【他動詞連語】「子供に 注意を 与える」「相手に 攻撃を 加える」

＜動詞例（他動詞派生の使役動詞）＞

(1) {単純動詞}

(勝利を) おさめさせる、(拳骨を) 食らわせる、(被害を) こうむらせる

＜動詞例（他動詞）＞

(1) {単純動詞}

(刺激を／注意を／損害を) 与える、(影響を／害を) およぼす（：およぶ）、(危害を／打撃を／一撃を) 加える（：加わる）、(治療を) ほどこす、(敵に得点を) 許す

〔文例（他動詞使役）〕

- ・鬼政は、……労働者側について経営陣を威嚇し、大勝利を収めさせたが、(鬼龍院花子の生涯)
- ・北朝鮮の朝鮮労働党機関紙・労働新聞など3紙は1日、06年の施政方針を示す共同社説を発表した。「自らの対朝鮮戦略を実現するためには、わが同胞に核の惨禍を被らせることもためらわない。それが米国の本心だ」などと指摘したが対米非難のトーンは昨年に続いて抑制気味で、…… (asa2006.txt(8328))

〔文例（他動詞）〕

- ・木谷は「彼」を追い、愛する彼女にかわって「彼」の無礼を咎め、愛する彼女にかわって「彼」に制裁を加えようとした。(エディプスの恋人)
- ・学校は、軍隊がそうするように、あたしに制服を着せ、汗臭い規則をおしつけました。(聖少女)
- ・夫婦の間に既に何人かの子供があり、夫婦の合意がある場合にのみ、女性か男性かのどちらかに不妊手術を施すためのものである。(現し世の深い音：BCCWJ)

次の例のヲ格名詞は、影響を表わすものである。

- ・彼らは危険だ。おそらく彼らは君に何らかの悪い影響を及ぼすだろう。(世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド)
- ・母を利用すること。伯父を利用すること。それから彼女の姉の豊子を利用すること。……これは一つの打算である。打算ではあるが、他人に被害を与えるような行爲ではない。(青春の蹉跎)

4. 4 《情報のひきだし》

＜N[認識内容]-ヲ N[人]-カラ（／ニ） V[獲得]>

この類の連語が表わすのは、相手に発話を促すようにもちかけて相手の発話をひきだすことである。基本的には相手に積極的に関わって情報を聞きだすことを表わすが、「漏れきく」のような消極的な動きを表わす動詞もある。使役動詞の場合、相手の発話が先にあってそれをいわゆる放任というかたちでうけとるということもある。

【Vt 使役連語】「会長から／に 方針を 語らせる」「友達から／に 感想を 言わせる」

「犯人から／に 一部始終を 白状させる」

【他動詞連語】「友達から／に 感想を きく」「先生から／に 使い方を 教わる」

「関係者から 事情を 聴取する」「係員に 捜査状況を たずねる」

使役文における動作主の格表示は、他動詞使役文の場合ふつう二格で表わす（「太郎に荷物を運ばせる」）が、この《情報のひきだし》の類ではカラ格もみられる³⁴。

「会長から／に 方針を 語らせる」「犯人から／に 一部始終を 白状させる」など。一方、他動詞のほうには、情報を聞きだす相手をカラ格・二格いずれでも表わしうるものとカラ格でしか表わせないものと二格でしか表わせないものがあるが、同じこの類とした。下の動詞例ではそれぞれを「//」で区切って示した。

《動詞例（他動詞派生の使役動詞）》

(1) {単純動詞}

言わせる、うちあけさせる@、語らせる、しゃべらせる、伝えさせる、述べさせる、話させる

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+サセル}

告白させる、説明させる、白状させる、報告させる、連絡させる

《動詞例（他動詞）》

(1) {単純動詞}

（～カラ／ニ）うかがう、教わる、きく、習う // （～ニ）たずねる、ただす、問う

(2) {複合動詞（複合動詞のうち後項が「する」以外のもの）}

（～カラ／ニ）うけたまわる // （～カラ）聞き出す、聞き取る、伝え聞く // （～ニ）問いただす、漏れ聞く

(3) {サ変動詞（複合動詞のうち後項が「する」であるもの）}

(3-1) {名詞相当+スル}

（～カラ）聴取する、入手する

〔文例（他動詞使役）〕

・内藤は言い淀んだ。だが、私はそれ以上訊ねなかった。喋りたくないことを無理に喋

³⁴ 詳しくは、早津恵美子（1995）参照。

らせるつもりはなかった。(一瞬の夏)

- ・「油断すな」大久保忠世は、この言葉を諸隊へ伝えさせた。(真田太平記：BCCWJ)

次の例は、発話を引き起こす相手がカラ格で表わされている。

- ・できることならば女の方から愛情を告白させるように仕向けて行くことだ。(青春の蹉跎)
- ・いくらいらついてもげんは実際としては碧郎から何を白状させたというのでもなくて、自分の推測だけなのだ。(おとうと)
- ・「もしも父が希望したら、あなたは承諾するっていうわけね。つまり父の方から先に言わせるということね。(青春の蹉跎)

一方、次の例は二格で表わされている。

- ・それだけに、ときおり無性に少年小説を読み返したくなるのである。岩間君に真実を白状させた瞬間に、掌中からポロリと落としてしまった「悪」への郷愁からであろうか。(日本文芸鑑賞事典：BCCWJ)
- ・尾上に言いたい放題のことを言わせた方がよかったのだ。(エディプスの恋人)
- ・こんなことをしていても仕方がない。とにかく、女に言って、もっと詳しい事情を説明させるとしよう。(砂の女)

【文例（他動詞）】

- ・「ご用件を承って、当人に連絡いたしましょうか」(象牙色のクローゼット：BCCWJ)
- ・話がおわると合田は彼女の勤めている会社の名前と電話番号を聞きだし、手帳に書きとめた。(巨人と玩具)

次の例は、発話を引き起こす相手がカラ格で表わされている。

- ・会社は、事務所において必要と認めた場合には、当事者、関係者から、事情を聴取するとともに、必要と判断される調査を行う。(就業規則の決め方モデル例：BCCWJ)
- ・亀山藩では、藩士を小市の故郷若松村に派遣し、藩士は庄屋から事情を聴取し、けんの身边を調査して、その結果を書面で江戸屋敷につたえた。(大黒屋光太夫：BCCWJ)
- ・「たとえば、こんな道具にしても、正しい使い方はやはり指導者から教わった方がいい。独学は危険だ」(孤高の人)

一方次の例では二格で表わされている。

- ・王子の姿が見当たらないことをいぶかしく思ったハーンは、側近の者たちに事情を問いただした。(歴史を旅する：BCCWJ)
- ・日野元彦が父の日野敏にタップを習い始めたのは、六歳の頃だった。(東京 Jazz：BCCWJ)
- ・『紀州』という落語があるが、江戸で七代将軍家継が夭折し、城中で八代将軍を定める会議が開かれたとき、老中の大久保加賀守が諸侯に就任の意志を尋ねた。(金田一春彦著作集：BCCWJ)

5 使役動詞連語と他動詞連語との分布

以上、1章から4章において、ヲ格の名詞と使役動詞・他動詞から成る連語のうち「物への働きかけ」「人への働きかけ」「事への働きかけ」「物・事と人への働きかけ」を表わす連語について考察してきた。物や人や事に何らかの変化を生じさせる働きかけを表わす連語を、その構文的・意味的な性質、すなわち、動詞（使役動詞と他動詞）のカテゴリカルな意味、それをもつ動詞類と組み合わせるヲ格の名詞のカテゴリカルな意味、両者のむすびつき方の違い、それらを反映するものとしての構造的な性質を考えることによって、いくつかのグループに分けることができた。1章から4章では、そのようにしてとりだした連語のグループについて、各類の連語の要素となる使役動詞・他動詞の語例をあげ、いくつかの使役動詞・他動詞について、それが使われている実際の文例を、バラエティーに留意しながら多く示した。これらの過程は、奥田（1968-72[1983]）を参考にしつつ考察するとともに、いくつかのコーパスや紙媒体の書籍における実際の使用例を観察することによって本報告で独自のグループもたてながらおこなってきた。

この章では、これらについて次のふたつの観点からあらためて見直し整理することにする。ひとつは、「物への働きかけ」「人への働きかけ」「事への働きかけ」の各類においてとりだした下位の連語グループの間の相関関係、いまひとつは、とりだしたそれぞれの連語グループごとにみられる使役動詞連語と他動詞連語と張り合い関係である。

5. 1 三つの働きかけの相互関係

—「物への働きかけ」「人への働きかけ」「事への働きかけ」—

まずこの節では、「物への働きかけ」「人への働きかけ」「事への働きかけ」における下位の連語グループの間にみられる相互関係をみてみる。この3つの働きかけを表わす連語グループは、第1章から第3章において、それぞれ6類、9類、5類に下位分類され、ある類についてはさらに下位の類をもうけた。6類、9類、5類はそれぞれ次のようなものであった。

●「物への働きかけ」を表わす連語のタイプ

- 《変化》<N[物]・ヲ V[変化]> : 湯を 沸騰させる // わかす
《付着》<N[物]・ヲ N[物]・ニ V[付着]> : 刀を 懷に 忍ばせる // 隠す
《除去》<(N[物]・カラ／ノ) N[物]・ヲ V[除去]> : 管から 水を あふれさせる // こぼす
《移動》<N[物]・ヲ N[場所]・カラ N[場所]・ニ／へ／マデ V[移動]> : 気球を 空に あがらせる // あげる
《接触》<N[物]・ヲ V[接触]> : ドアを たたく // 叩く
《生産》<N[物]・ヲ (N[場所]・ニ) V[生産]> : 家のまわりに 柵を めぐらせる // つくる

●「人への働きかけ」を表わす連語のタイプ

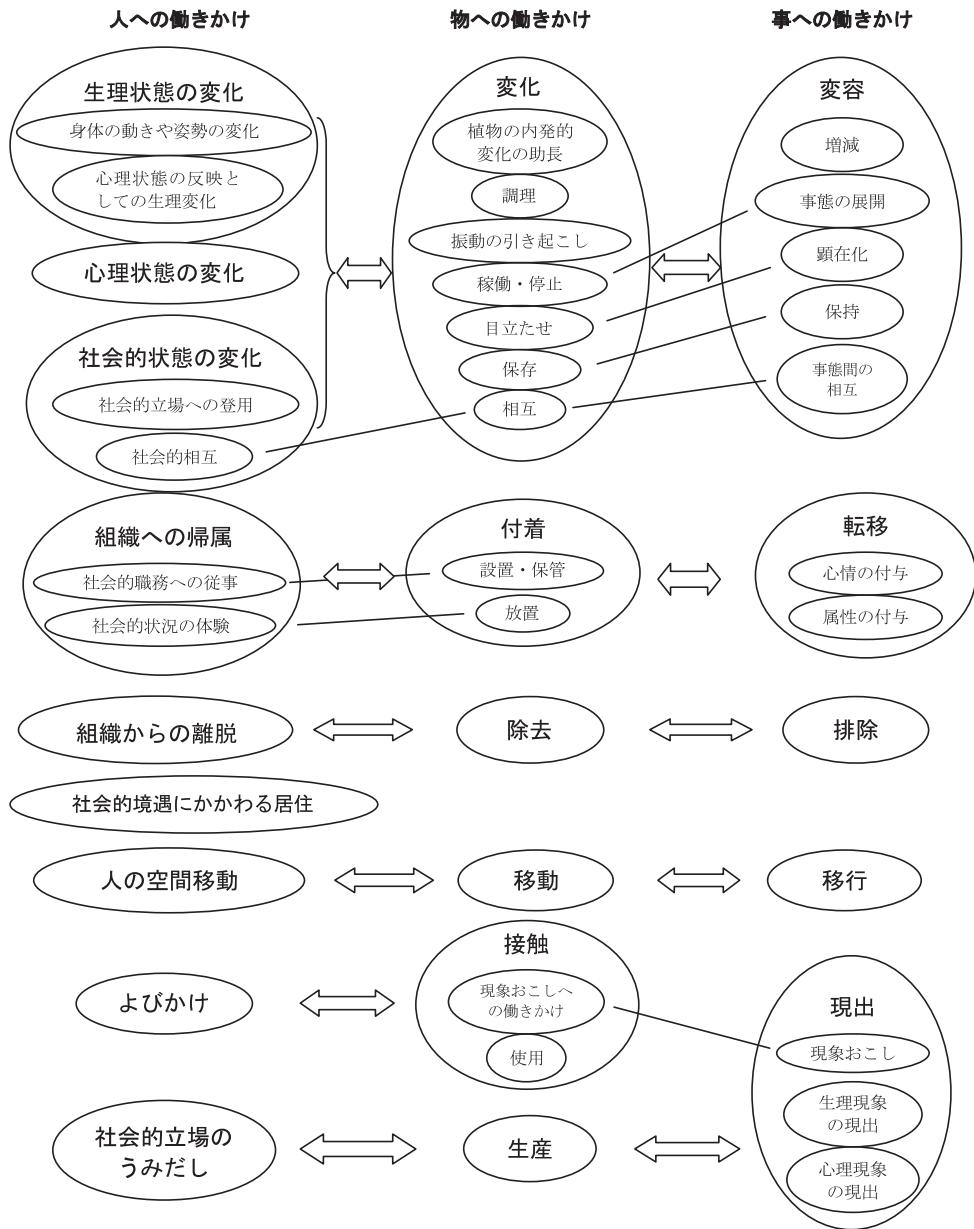
- 《生理状態の変化》<N[人]・ヲ V[生理変化]> : 幼児を 眠らせる // 寝かす
《心理状態の変化》<N[人]・ヲ V[心理変化]> : 先生を おこらせる // おどろかす
《社会的状態の変化》<N[人]・ヲ V[社会的状態変化]> : 子供を 働かせる // 育てる
《組織への所属》<N[人]・ヲ N[組織]・ニ V[社会的所属]> : 息子を 大学に 通わせる // やる

《組織からの離脱》<N[人]・ヲ N[組織・職務]・カラ V[離脱]>
 : 彼を 仲間から 孤立させる // ひきはなす
 《社会的境遇とかかわる居住》<N[人]・ヲ N[場所]・ニ V[居住]>
 : 人を屋敷にこもらせる // 幽閉する
 《人の空間移動》<N[人]・ヲ N[場所]・カラ N[場所]・ニ／へ／マデ V[移動]>
 : こどもを 安全な場所に逃げさせる // 移す
 《よびかけ》<N[人]・ヲ V[動作誘導的態度]> : 部下を ϕ // いましめる
 《社会的立場のうみだし》<N[人(社会的立場)]・ヲ V[登用]> : 秘書を ϕ // やとう

●「事への働きかけ」を表わす連語のタイプ

《変容》<N[事]・ヲ V[変容]> : 国家を安定させる // 速度を早める
 《転移》<N[抽象]・ヲ (N[抽象]・ニ) V[転移]>
 : 判断に 私情を 介入させる // 思想を 世間に 広める
 《排除》<(N[事]・カラ／ノ) N[事]・ヲ V[排除]>
 : 文学科を 文理学部から 独立させる // 調査内容から 矛盾を とりのぞく
 《移行》<N[事]・ヲ N[場所]・カラ N[場所]・ニ／へ V[移行]>
 : 日本社会を 旧弊から 脱却させる // 審理を 総会の場に うつつ
 《現出》<N[事]・ヲ (N[場所]・ニ) V[現出]>
 : 歪みを 生じさせる // 社内に 調査委員会を 設ける

これらの各類の間には、「物への働きかけ」にみられる下位類を基本として、「物への働きかけ」の下位類と「人への働きかけ」の下位類との間に、また、「物への働きかけ」の下位類と「事への働きかけ」の下位類との間に、それぞれ構文的な類似性を見出すことができる。そのことについては、1章から3章における説明の中でもおりに触れて述べてきたが、ここでそれを簡単な図のかたちで示すと次ページのようになる。



図：「物への働きかけ」「人への働きかけ」「事への働きかけ」の相関

この図に示されるように、「物への働きかけ」「人への働きかけ」「事への働きかけ」における連語グループの間には、相互につながりを見出すことはできそうである。ただ、本報告では、「構文的な類似性」とは具体的にどのようなことなのか、またその本質的な性質はどのようなものかについては十分に考察することができなかった。さらに時間をかけて考えていきたい。

5. 2 使役動詞連語と他動詞連語

次にこの節では、本報告でとりだした下位のそれぞれの連語グループにおいて、使役動詞連語と他動詞連語との間に質的量的にどのような張り合い関係があるかについて、簡単にではあるが考えてみる。まず、両者の張り合い関係について1章から4章までの各類の説明で個々に述べてきたことを、簡単に表にまとめてみる。

p.139 以降の表1～表4は、「物への働きかけ」「人への働きかけ」「事への働きかけ」「物・事と人への働きかけ」をなす連語の各下位類について、使役動詞連語と他動詞連語の代表例を挙げ、両者の量的な分布を記号で示し、その連語類における両者の張り合い関係の特徴を簡単に述べたものである。

ここでの記号は、それぞれの連語類毎に、使役動詞連語と他動詞連語の量的な分布を示すものである。次のようなことを示している。

- 「◎」：その類の動詞（使役動詞または他動詞）が非常に多くある。
- 「○」：その類の動詞（使役動詞または他動詞）がかなりある。
- 「△」：その類の動詞（使役動詞または他動詞）が非常に少ない。
- 「○'」：その類の使役動詞と他動詞はいずれも「○」で示しうるが、両者を比べると「○'」のほうが他方より多い。
- 「×」：その類の動詞（使役動詞または他動詞）がない。

量的な分布を記号で示すといっても、上の説明にあるように明瞭に数値を示すことはできず、「多く」とか「かなり」のように曖昧な言い方でしか表わせていない。しかし、各類の語数を数字で示すことは原理的にむづかしく、またあまり重要ではないように思われる。このような示し方によっておおまかな傾向がうかがえることには一定の意味があると考える。

表1～表4にうかがえるように、連語グループによって、使役動詞と他動詞との量的分布に偏りが無いもの（両者ともに非常に多いものと両方とも少ないものとがあるが）、いずれか一方にのみ動詞があるもの、両者に動詞がみられるが一方に大きく偏っているもの、両者にいくらかの偏りがあるもの等がある。そして、両者の動詞があるものについては、質的な違いがうかがえるものもある。

これらの分布の全体の傾向について、それが何によってもたらされているのか、使役動詞連語と他動詞連語との本質的な性質がどのように反映されているのかといったことについて考察することは、本報告ではできなかった。いくつか気づかれることを列挙することで、今後の考察の足がかりとしたい。

- 他動詞だけがみられ、使役動詞がみられないのは、「物への働きかけ」の《接触》、「人への働きかけ」の《よびかけ》《社会的立場のうみだし》である。このうち《接触》と《よびかけ》は、対象に働きかけるもののその変化を必ずしも含意しない働きかけである。また、《社会的立場のうみだし》は、すでにある対象への働きかけというよりは、マクロ

名詞の表わすものをつくりだす働きかけである。使役動詞は、基本的に働きかけによる変化の実現を含意するものであるから、その点で、《接触》《よびかけ》《社会的立場のうみだし》の性質に合わないのだと思われる。また、《社会的立場のうみだし》と同じくつくりだしの働きかけである《生産》（「物への働きかけ」）においても、使役動詞はごくわずかである。

- 使役動詞のみがみられ他動詞がみられないという連語グループはなさそうだが、使役動詞のほうが優勢であるのは、まず、「人への働きかけ」における《生理状態の変化》と《心理状態の変化》であり、とくに前者の下位類としてとりだした〈身体の動きや姿勢の変化〉と〈心理状態の反映としての生理変化〉ではそれが顕著である。このことは、奥田（1968-72 [1983]）でも述べられていることであるが、人の生理状態や心理状態の変化は、人へのいわば間接的な刺激によってしか引き起こせないものであることが反映されているのだと思われる。
- 「人への働きかけ」のうちでは、《組織への所属》《社会的境遇とかかわる居住》も使役動詞のほうが優勢である。これらによって生じさせる変化（たとえば、ある組織に所属するようになること、社会的な境遇の変化と関わるような住まい方の変化が生じること）は、個人の意志のみによって実現させられる変化ではないのだが、変化の実現にあたっては、ある程度はその相手の意志を媒介にせざるを得ないものであり、そのことが他動詞よりも使役動詞のほうが多いことに関係しているのではないかと思われる。
- 使役動詞のほうが優勢なものとして、ほかに《変化》のうちの〈目立たせ〉と、《変容》のうちの〈顕在化〉がある。これらの連語をつくっている使役動詞は、目立つようになる状態を明瞭に表わす自動詞から派生したものである、そういった、目立つ状態を分析的に（透明に）表わすことのできる「Vi-(#)el」 という形を用いることが有効に働くのではないだろうか。

これら以外のことも含め、使役動詞連語と他動詞連語との分布についての考察は今後の課題であるが、早津（1998b,1999,2000a,2010）では、それぞれいくつかの使役動詞について個々に、使役動詞による表現と他動詞による表現との意味的・構文的な異同が考察されている。使役動詞連語と他動詞連語とを、対立しつつも共通性をもつ全体とみなして相互の張り合い関係を探ることには、まだまだ可能性があるように思われる。

表1. 物への働きかけ

連語のタイプ	使役動詞連語・他動詞連語の例	使役連語	他動詞連語	特徴
1. 1 《変化》	「ビーチボールを ふくらませる」	◎	◎	使役動詞も他動詞も多くある。
	「犬小屋を こわす」			
	1. 1. (ア) 《植物の内発的 変化の助長》	○	△	使役動詞は豊かであるが他動詞はきわめて少ない。また、働きかけ といっても、植物の内発的な変化や内在力の発揮を促すしたり助長 したりというものである。
	「甘柿を 木で 色づかせる」			
	「花を 枯らす」			
	1. 1 (イ) 《調理》	△	◎	使役動詞によるものは「オノマトベ+させる」の形のものしかない。
	「ほうれん草を パリッとさせる」			
	「野菜を 炒める」			
	1. 1 (ウ) 《振動の 引き起こし》	○	△	使役動詞のほうが豊かである。振動の様子を詳しく表わす自動詞や オノマトベから派生した使役動詞によって表現することにより、振 動のありさまを生き生きと描くことができる。
	「紙を ひらひらさせる」			
	「コマを まわす」			
	1. 1 (エ) 《稼働・停止》	○	△	他動詞には、もっぱら《稼働・停止》の連語をつくるというものが ほとんどなく、「かける、つける」(《附着》)「動かす」(《移 動》)が転用によってこの類の連語となっている。
	「機械を 稼働させる」			
	「機械を 動かす」			
	1. 1 (オ) 《目立たせ》	◎	△	使役動詞は、目立つようになる状態を明瞭に表わす自動詞から派生 したものである。一方、他動詞連語は「～ようにする」という合成 的な形のみである。
	「衣装を 目立たせる」			
	「衣装を 目立つようにする」			
	1. 1 (カ) 《保存》	△	○	いずれの連語もごくわずかである。
	「机を 長持ちさせる」			
	「茶道具を 保存する」			
	1. 1 (キ) 《相互》	○	◎	他動詞のほうが豊かである。
	「二本の旗を 交叉させる」			
	「両手を あわせる」			
1. 2 《附着》	「ビニールを バックに 附着させ る」	◎	◎	使役動詞連語には、自動詞派生のものだけでなく、他動詞派生のもの もある。それらには、「子供にくつをはかせる」のように意志動 詞からの派生であっても、使役文のなかではその意志性が希薄にな るものが少なくない。
	「壁に 銃を もたせる」			
	「杯に 酒を 満たす」			
	1. 2 (ア) 《設置・収容》	○	○	使役動詞連語には、自動詞派生のものだけでなく、他動詞派生のもの もある。
	「島全体に 樹木を 密生させる」			
	「施設に 病人を 収容させる」			
1. 2 (イ) 《放置》	「図書館に 本を 備えつける」	○	△	使役動詞連語には、自動詞派生のものだけでなく、他動詞派生のもの もある。どちらかというと、使役連語のほうが豊かである。
	「幅広い葉を 風に そよがせる」			
	「雨に 全身を うたせる」			
1. 3 《除去》	「風呂桶から 水を あふれさせる」	△	◎	使役動詞連語は少なく他動詞連語のほうが豊かである。
	「壁から 賞状を はずす」			
1. 4 《移動》	「砂箱を 玄関から 勝手口に 移動 させる」	△	◎	使役動詞連語はごく少なく、他動詞連語はとても豊かである。
	「野菜を 千葉から 東京まで 運 ぶ」			
1. 5 《接触》	—	×	○	使役動詞連語はなく、もっぱら他動詞連語で表わされる。
	「ドアを たたく」			
	1. 5 (ア) 《現象おこしへ の働きかけ》	×	○	使役動詞連語はなく、もっぱら他動詞連語で表わされる。
	—			
	「ブザーを おす」			
	1. 5 (イ) 《使用》	×	○	使役動詞連語はなく、もっぱら他動詞連語で表わされる。
	—			
1. 6 《生産》	「家のまわりに 柵を めぐらせる」	△	○	使役動詞連語はごくわずかである。
	「雑炊を つくる」			

(表中の「◎」「○」などの記号についてはp.137参照)

表2. 人への働きかけ

連語のタイプ	使役動詞連語・他動詞連語の例	使役連語	他動詞連語	特徴
2. 1 《生理状態の変化》	「選手を 疲れさせる」	○	△	使役動詞連語が豊かである。他動詞には「殺す」のバリエーション（「絞め殺す」「毒殺する」など）がいくつかある。
	「子供を 寝かす」			
	2. 1(ア) 《身体の動きや姿勢の変化》	◎	△	他動詞はごくわずかで、使役動詞が豊かである。意志動作を表わず自動詞からの使役動詞でも、無意志動作の引き起こしに近くなっている。
	「幼児を 歩かせる」 「病人を ベッドに 横たえる」			
2. 1(イ) 《心理状態の反映としての生理変化》	「客を 笑わせる」	◎	×	他動詞はないと思われる。
	—			
2. 2 《心理状態の変化》	「先生を おこらせる」	◎	△	使役動詞がたいへん豊かである。他動詞には、感情面の変化だけでなく認識面での変化を伴う（あるいはそちらに重きがある）動詞も多い（「励ます、あざむく」）。
	「子供を 苦しめる」			
2. 3 《社会的状態の変化》	「国民を 富ませる」	○	○	使役動詞連語も他動詞連語もそれほど多くないが、一方に偏っているわけではない。
	「敵を やっつける」			
	2. 3(ア) 《社会的な立場への登用》	△	○	使役動詞はごくわずかである。
	「身内を 後釜に すわらせる」 「女性を 大使に 任命する」			
2. 3(イ) 《社会的相互》	「二人を 別れさせる」	○	△	使役動詞連語の方が多い。これは、「物への働きかけ」における〈相互〉とは異なる傾向である。
	「二人を ひきはなす」			
2. 4 《組織への所属》	「息子を 大学に 通わせる」	○	△	いずれもそれほど多いわけではないが、使役動詞のほうがいくらか多い。漢語動詞が中心である。
	「部下を ライバル会社に 送りこむ」			
	2. 4(ア) 《社会的職務への従事》	○	△	いずれもそれほど多いわけではないが、使役動詞は漢語動詞を中心にバリエーションがある。他動詞はきわめて少ない。
	「部下を 新しい仕事に 従事させる」 「新人を 危険な任務に つける」			
2. 4(イ) 《社会的状況の体験》	「子供を 新しい環境に 慣れさせる」	○	△	いずれもそれほど多いわけではないが、他動詞はきわめて少ない。
	「新入社員を 職場に 慣らす」			
2. 5 《組織からの離脱》	「推進派を まわりから 孤立させる」	△	△	いずれもそれほど多いわけではないが、使役動詞は漢語動詞派生のものが中心であり、他動詞は和語動詞がある。
	「反対派を グループから 追放する」			
2. 6 《社会的境遇とかかわる居住》	「子供を 部屋に こもらせる」	○	△	いずれもそれほど多いわけではなく、他動詞はごくわずかである。
	「儒者を 屋敷に 幽閉する」			
2. 7 《人の空間移動》	「生徒を 家に 帰らせる」	◎	◎	使役動詞にも他動詞にもバラエティーがある。
	「生徒を 家に 帰す」			
2. 8 《よびかけ》	—	×	○	使役動詞にはない。
	「友達を パーティーに さそう」			
2. 9 《社会的立場のうみだし》	—	×	○	使役動詞にはない。
	「公設秘書を やとう」			

（表中の「◎」「○」などの記号についてはp.137参照）

表3. 事への働きかけ

連語のタイプ	使役動詞連語・他動詞連語の例	使役連語	他動詞連語	特徴
3. 1 《変容》	「雰囲気 を しらせる」	◎	◎	使役動詞は漢語動詞が多くを占めるが、他動詞のほうは、和語動詞、漢語動詞、さらには〔形容詞／形容動詞連用形＋スル〕も多く用いられる。
	「速度 を はやめる」			
	3. 1(ア) 《増減》	△	△	使役動詞連語も他動詞連語もそれほど多くないが、一方に偏っているわけではない。ただし、数量名詞と組み合わせる用例は他動詞の方が多そうである。
	「出鉱量を／被害を 激増させる」			
	「物を／情報を／知識を ふやす」			
	3. 1(イ) 《事態の展開》	○	○	使役動詞のほうは漢語動詞が多くを占めている。
	「支払いを 滞らせる」			
	「工事を 進める」			
	3. 1(ウ) 《顕在化》	○	△	他動詞はあまりなく、使役動詞が多い。使役動詞は、目立つようになる状態を明瞭に表わす自動詞から派生したものである。
	「静けさを きわたらせる」			
	「実力を 発揮する」			
	3. 1(エ) 《保持》	△	△	使役動詞も他動詞も多くない。そして、使役動詞は漢語動詞がほとんどである。
	「家族制度を 永続させる」			
	「平和を 保つ」			
	3. 1(オ) 《事柄間の相互》	○	○	使役動詞は漢語動詞がほとんどであり、他動詞のほうは漢語動詞はあまりない。
	「国家を 個人と 対立させる」			
	「二つの思い出を 重ね合わせる」			
3. 2 《転移》	「湿っぽい余韻を 私の耳に まつわらせる」 「時間に余裕をもたせる」	○'	○	使役動詞連語には、自動詞派生のものだけでなく、他動詞派生のものもある。この両者があることで、使役動詞連語は他動詞連語よりもやや豊かである。
	「遊びに 運動の要素を くみいれる」			
	3. 2(ア) 《心情の付与》			
	「言葉に 気持ちを 響かせる」 「メッセージに 暗号を 含ませる」	○	△	使役動詞連語には、自動詞派生のものだけでなく、他動詞派生のものもある。一方、他動詞はほとんどない。
	「挨拶に祈りをこめる」			
	3. 2(イ) 《属性の付与》	△	△	どちらもごくわずかである。
	「生活に 潤いを もたせる」 「音に 野性味を こめる」			
3. 3 《排除》	「文学科を 文理学部から 独立させる」	△	○	使役動詞のほうは漢語動詞が多くを占めている。
	「調査内容から 矛盾を とりのぞく」			
3. 4 《移行》	「思想を 世の中に ゆきわたらせる」	○	○	他動詞はほとんどない。使役動詞は漢語動詞が中心で、和語の単純動詞はない。
	「思想を 世間に ひろめる」			
3. 5 《現出》	「歪みを 生じさせる」	○	○	使役動詞も他動詞もかなりある。語種もそれほど偏りがない。
	「社内に 調査委員会を 設ける」			
	3. 5(ア) 《現象おこし》	○	△	使役動詞のほうが多い。ただ、「させる」が自然現象を表わす種々のヲ格名詞と組み合わせることで、多様な表現を可能にしている。
	「音を させる」 「音を たてる」			
	3. 5(イ) 《生理現象の現出》	○	△	使役動詞連語には、自動詞派生のものだけでなく、他動詞派生のものもある。
	「傷口に 蛆を わかせる」 「身体に 熱を もたせる」			
	「背中に 寒けを もよおす」			
	3. 5(ウ) 《心現現象の現出》	○'	○	使役動詞連語には、自動詞派生のものだけでなく、他動詞派生のものもある。この両者があることで、使役動詞連語は他動詞連語よりもやや豊かである。
	「目元に 悲しみを 漂わせる」 「女の顔に 微笑を 浮かべさせる」			
	「人々の胸に 感動を よびおこす」			

(表中の「◎」「○」などの記号についてはp.137参照)

表4. 物・事と人への働きかけ

連語のタイプ	使役動詞連語・他動詞連語の例	使役連語	他動詞連語	特徴
4. 1 《授与》	「娘に 嫁入り道具を もたせる」	△	○	他動詞（三項他動詞）のほうが多い。使役動詞は物を取得することを表わす他動詞から派生したものがほとんどである。その他動詞は意志動作を表わすものだが、使役文の中では動作主体の意志性は希薄になる。
	「妹に 本を わたす／与える」			
4. 2 《取得》	「会社に／から 補償金を 出させる」	△	○	他動詞（三項他動詞）のほうがかかり多い。
	「姉から／に 本を もらう」			
4. 3 《抽象物の与え》	4. 3(ア) 〈認識内容の与え〉	○	○	使役動詞連語には、他動詞派生のものだけでなく、自動詞派生のものもある。使役動詞連語（「子供に事情をのみこませる」）は、相手の認識変化を含意しているが、他動詞連語（住民に 計画を 説明する）では必ずしもそうではない。
	「みんなに 事情を のみこませる」 「相手に 気持ちを 通じさせる」			
	4. 3(イ) 〈感情の与え〉	○	△	いずれも動詞のパラエティーはそれほど多くない。使役動詞は感情を受けとったり感じたりすること表わす他動詞から派生したものが多。
	「先輩に テニスを 教える」			
	4. 3(ウ) 〈任務の与え〉	○	○	どちらもそれほど多くはない。
	「相手に 悲しい気持ちを 抱かせ る」			
	4. 3(エ) 〈影響の与え〉	△	△	どちらもわずかである。
	「部下に 責任を 負わせる」 「部下に 責任を おしつける」			
4. 4 《情報のひきだし》	「相手に 拳骨を くらわせる」	○	○	どちらもそれほど多くはないが、パラエティーはある。
	「子供に 注意を 与える」			

(表中の「◎」「○」などの記号についてはp.137参照)

6 おわりに

本報告では、ヲ格の名詞とある種の使役動詞（主として無意志動作の引き起こしを表わす使役動詞）との組み合わせからなる連語は、奥田（1968-72[1983]）でいうヲ格の名詞と他動詞との組み合わせから成る連語といわば同レベルの構文的な単位とみなせるのではないかという立場にたって考察してきた。「連語」をひろくとらえ、ヲ格の名詞と他動詞から成る連語とヲ格の名詞と使役動詞から成る連語とについて、その共通性・統一性を求めつつ相違性・対立性にも注目して、それらにみられる体系性をみいだそうと試みたことになる。十分な成果をあげたとはいえないが、さらなる考察へのひとつの資料としたい。

参考文献

(掲載雑誌が大学の紀要などであって雑誌名から発行機関が明らかな場合は発行機関名を省略したところがある。)

- 青木伶子(1995)「使役自動詞・他動詞との関わりにおいて」『成蹊国文』10, pp.26-39, 成蹊大学文学部日本文学科研究室 [再録: 須賀一好・早津恵美子編(1995)『日本語研究資料集 動詞の自他』, pp.108-121, ひつじ書房.]
- 浅山佳郎(1996)「自動詞使役と他動詞に関する中間言語について」『神奈川大学言語研究』18, pp.83-96, 神奈川大学言語研究センター.
- 池上嘉彦(1981)『「する」と「なる」の言語学』大修館書店.
- 井島正博(1988)「動詞の自他と使役との意味分析」『防衛大学校紀要人文科学分冊』56, pp.105-135.
- 井上和子(1976)『変形文法と日本語 上・統語構造を中心に』大修館書店.
- 伊東光浩(1985)「使役表現の意味構造」『中央大学国文』28, pp.100-120.
- 江頭由美(1997)「もの対象語のサセル動詞文について」『日本研究教育年報(1996年版)』, pp.27-47, 東京外国語大学外国語学部日本課程.
- 大鹿薫久(1986-1987)「使役と受動 (一) (二)」『山邊道』30: pp.89-98, 31: pp.33-42, 天理大学国語国文学会.
- 大鹿薫久(1987)「文法概念としての「意志」」『ことばとことのは』4, pp.42-49, 和泉書院.
- 奥田靖雄(1960) [未刊]「を格のかたちをとる名詞と動詞とのくみあわせ」 [再録: 言語学研究会編 (1983)『日本語文法・連語論 (資料編)』, pp.151-279, むぎ書房.]
- 奥田靖雄(1962) [未刊]「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」 [再録: 言語学研究会編(1983)『日本語文法・連語論 (資料編)』, pp.281-323, むぎ書房.]
- 奥田靖雄(1968-72)「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」『教育国語』12, 13, 15, 20, 21, 23, 25, 26, 28 [再録: 言語学研究会編(1983)『日本語文法・連語論 (資料編)』, pp.21-149, むぎ書房.]
- 影山太郎(1996)『動詞意味論 — 言語と認知の接点 — 』くろしお出版.
- 川端善明(1959)「動詞文・格」『国語国文』28-3, pp.16-39.
- 高京美(2009)「「V-サセテ」が表わす使役の意味について—使役主体と使役対象がヒトである場合を中心に—」『日本研究教育年報』13, pp.83-95, 東京外国語大学日本課程.
- 高京美(2010)「連用の形の「V-サセル」が表わす使役の意味—使役主体と使役対象がヒトである場合—」『日本研究教育年報』14, pp.21-38, 東京外国語大学日本課程.
- 高京美(2012)「V-サセテオク」に関する一考察—使役性ともくろみ性の観点から—」『コーパスに基づく言語学教育研究拠点研究報告集 8』東京外国語大学大学院総合国際学研究院グローバルCOEプログラム「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」.
- 定延利之(1991)「SASEと間接性」仁田義雄(編)『日本語のヴォイスと他動性』, pp.123-147, くろしお出版.
- 佐藤里美(1986)「使役構造の文—人間の人間にたいするはたらきかけを表現するばあい—」言語学研究会 (編)『ことばの科学 1』, pp.89-179, むぎ書房.
- 佐藤里美(1990)「使役構造の文(2)—因果関係を表現するばあい—」言語学研究会 (編)

- 『ことばの科学4』, pp.103-157, むぎ書房.
- 時枝誠記(1950a)『日本文法 口語篇』岩波書店.
- 時枝誠記(述)(1950b)『中等国文法別記 口語編』中教出版.
- 中西宇一(1975)「自動詞と他動詞—格助詞「に」と「を」の対立を通して—」『女子大國文』76, pp.1-30, 京都女子大学国文学会.
- 中村明(国立国語研究所)(1977)『比喩表現の理論と分類』秀英出版
- 西村義樹(1998)「行為者と使役構文」中右実(編)『日英語比較選書5 構文と事象構造』, pp.108-203, 研究社出版.
- 野村剛史(1982)「自動・他動・受身動詞について」『日本語・日本文化』11, pp.161-179, 大阪外国語大学留学生別科・日本語学科.
- 早津恵美子(1995)「使役表現における使役対象の表され方と動詞の自他」『日本語の研究と教育—窪田富男教授退官記念論文集』, pp.138-176, 専門教育出版.
- 早津恵美子(1997)「使役動詞の認定をめぐる(1)—形態面の問題—」『環北太平洋の言語』3, pp.163-182, 京都大学大学院文学研究科.
- 早津恵美子(1998a)「複文構造の使役文についてのおぼえがき—従属節と主節との関係—」『言語学研究Ⅷ』, pp.57-96(東京外国語大学1997年度教育改善推進経費による刊行).
- 早津恵美子(1998b)「「知らせる」「きかせる」の他動詞性・使役動詞性」『語学研究所論集』3, pp.45-65, 東京外国語大学語学研究所.
- 早津恵美子(1999)「使役対象が人ではない他動詞使役をめぐる—使役動詞文と他動詞文—」『言語学研究Ⅸ』, pp.109-150(東京外国語大学1998年度教育改善推進経費による刊行).
- 早津恵美子(2000a)「「もたせる」における使役動詞性のあり方」『国広哲弥教授古稀記念論文集 日本語の風景—意味と文法をめぐる—』, pp.97-114, ひつじ書房.
- 早津恵美子(2000b)「【資料】使役動詞と他動詞との意味的な分布—動詞リスト(初案)—」『言語研究Ⅹ』, pp.191-281, 東京外国語大学(1999年度教育改善推進経費による刊行).
- 早津恵美子(2008)「人名詞と動詞とのくみあわせ(試論)—連語のタイプとその体系」『語学研究所論集』13, pp.43-76, 東京外国語大学語学研究所.
- 早津恵美子(2009)「語彙と文法との関わり—カテゴリーカルな意味—」『政大日本研究』6, pp.1-70, 台湾政治大学.
- 早津恵美子(2010)「「V」との対応をなさない「V・(サ)セル」—語彙の意味の—単位性—」須田淳一・新居田純野編『日本語形態の諸問題—鈴木泰先生東京大学ご退官記念論集—』, pp.51-67, ひつじ書房.
- 早津恵美子・中山健一(2010)「「語彙化 (lexicalization)」について—事典類の記述の調査と日本語での言語現象—」『コーパスに基づく言語学教育研究報告 5 フィールド調査、言語コーパス、言語情報Ⅱ』, pp.67-85, 東京外国語大学大学院総合国際学研究院.
- 早津恵美子(2011)「心理変化の惹起を表現する日本語の使役文—「人ノ側面ヲ Vi・(サ)セル」型の使役文について」『ユーラシア諸言語の動態(Ⅱ)—多重言語使用域の言語— (Dynamics in Eurasian languages II -- Studies on Languages in Multi-lingual Areas --)』(ユーラシア言語研究シリーズ (Contribution to the Studies of Eurasian Languages series)), 17巻. pp. 19-51. ユーラシア言語研究コンソーシアム
- 藤井正(1971)「「広げる」と「広がらせる」」『山口大学教育学部研究紀要』20, pp.15-22.
- 宮島達夫(国立国語研究所)(1972)『動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版.

- 村木新次郎(1991)『日本語動詞の諸相』ひつじ書房.
- 楊凱榮(1986)「「XガYヲZニスル」構文と「XガYヲZニサセル」構文との異同についてーZが形容詞の場合」『言語学論叢』5, pp.17-30, 筑波大学一般・応用言語学研究室.
- ライズィ, エルンスト(鈴木孝夫訳)(1960)『意味と構造』研究社出版(講談社学術文庫 1994)
- 鷺尾龍一(1997)「他動性とヴォイスの体系」鷺尾龍一・三原健一(著)・中右実(編)『日英語比較選書7 ヴォイスとアスペクト』pp.1-106, 研究社出版.
- Comrie, Bernard & Maria Polinsky eds. (1993) *Causatives and transitivity*. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Levin, Beth (1993) *English verb classes and alternations: a preliminary investigation*. The University of Chicago Press.
- Lyons, John (1968) *Introduction to theoretical linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press. (国広哲弥監訳(1973)『理論言語学』大修館書店)
- Moreno, Juan Carlos (1993) 'Make' and the semantic origins of causativity : a typological study. In: B. Comrie & M. Polinsky (eds.) (1993) *Causatives and transitivity*. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Palmer, F.R. (1965) *A linguistic study of the English verb*. London/ Mew York: Longman (安藤貞雄訳注(1972)『英語動詞の言語学的研究』大修館書店)

辞典など

- 国立国語研究所(1964)『分類語彙表』秀英出版
- 国立国語研究所(2004)『分類語彙表一増補改訂版一』大日本図書
- 大野晋・浜西正人(2002)『類語国語辞典 第15版』角川書店.(初版 1985年)

東京外国語大学大学院総合国際学研究院

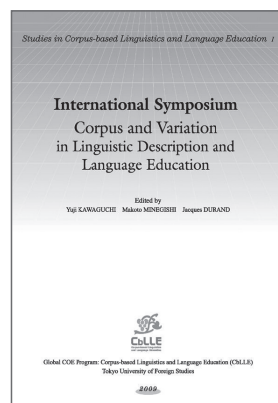
グローバルCOE「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」出版物 研究論文集

コーパスに基づく言語学教育研究論集 I

International Symposium: Corpus and Variation in Linguistic Description and Language Education

Edited by Yuji KAWAGUCHI, Makoto MINEGISHI and
Jacques DURAND

2009年 3 月 発行

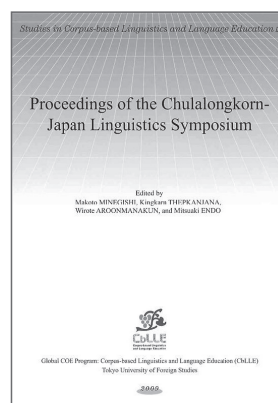


コーパスに基づく言語学教育研究論集 II

Proceedings of the Chulalongkorn- Japan Linguistics Symposium

Edited by Makoto MINEGISHI, Kingkarn
THEPKANJANA, Wirote AROONMANAKUN and
Mitsuaki ENDO

2009年 3 月 発行

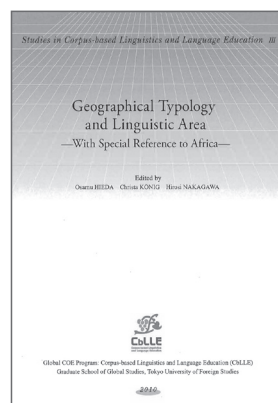


コーパスに基づく言語学教育研究論集 III

Geographical Typology and Linguistic Area —With Special Reference to Africa—

Edited by
Osamu HIEDA,
Christa KÖNIG and Hiroshi NAKAGAWA

2010年 10 月 発行



コーパスに基づく言語学教育研究論集 IV

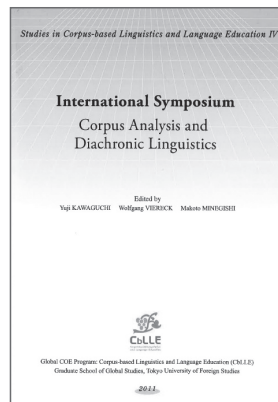
International Symposium Corpus Analysis and Diachronic Linguistics

Edited by

Yuji KAWAGUCHI, Wolfgang VIERECK,

And Makoto MINEGISHI

2011年 7 月 発行



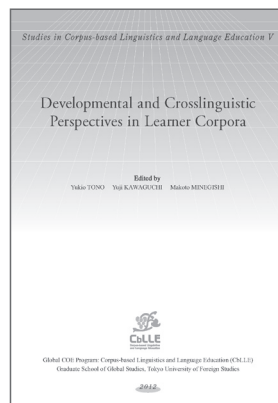
コーパスに基づく言語学教育研究論集 V

Developmental and Crosslinguistic Perspectives in Learner Corpora

Edited by

Yukio TONO, Yuji KAWAGUCHI, Makoto MINEGISHI

2012年 1 月 発行



研究報告集

コーパスに基づく言語学教育研究報告 1

コーパスを用いた言語研究の可能性

富盛 伸夫, 峰岸 真琴, 川口 裕司 (編)

2009年 3 月 発行



言語記述から言語分析の応用へ

稗田 乃, 峰岸 真琴, 川口 裕司 (編)

2009年 3 月 発行



フィールド調査, 言語コーパス, 言語情報学

峰岸 真琴, 川口 裕司 (編)

2009年 5 月 発行



コーパスを用いた言語研究の可能性Ⅱ

峰岸 真琴, 稗田 乃, 早津 恵美子, 川口 裕司 (編)

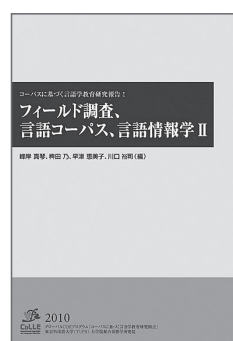
2010年 3 月 発行



フィールド調査, 言語コーパス, 言語情報学Ⅱ

峰岸 真琴, 稗田 乃, 早津 恵美子, 川口 裕司 (編)

2010年 6 月 発行



コーパスを用いた言語研究の可能性Ⅲ

峰岸 真琴, 稗田 乃, 早津 恵美子, 川口 裕司 (編)
2011年 3 月 発行



フィールド調査, 言語コーパス, 言語情報学Ⅲ

峰岸 真琴, 稗田 乃, 早津 恵美子, 川口 裕司 (編)
2011年 6 月 発行



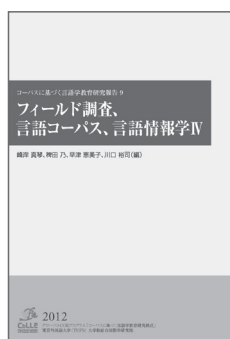
コーパスを用いた言語研究の可能性Ⅳ

峰岸 真琴, 稗田 乃, 早津 恵美子, 川口 裕司 (編)
2012年 3 月 発行



フィールド調査, 言語コーパス, 言語情報学Ⅳ

峰岸 真琴, 稗田 乃, 早津 恵美子, 川口 裕司 (編)
2012年 3 月 発行



論文執筆支援集

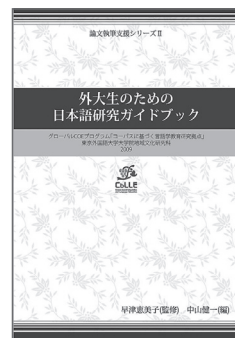
論文執筆支援シリーズ II

外大生のための日本語研究ガイドブック

早津 恵美子（監修）

中山 健一（編）

2009年3月 発行



論文執筆支援シリーズ III

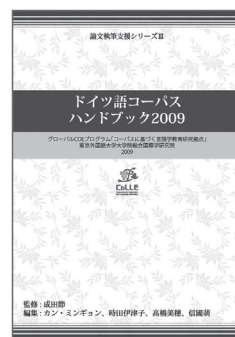
ドイツ語コーパスハンドブック 2009

成田 節（監修）

カン・ミンギョン, 時田 伊津子,

高橋 美穂, 信國 萌（編）

2009年5月 発行



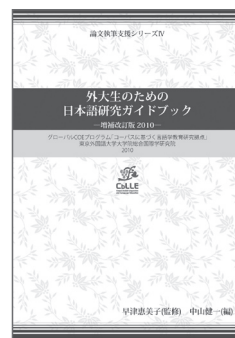
論文執筆支援シリーズ IV

外大生のための日本語研究ガイドブック —増補改訂版 2010—

早津 恵美子（監修）

中山 健一（編）

2009年3月 発行



論文執筆支援シリーズ V

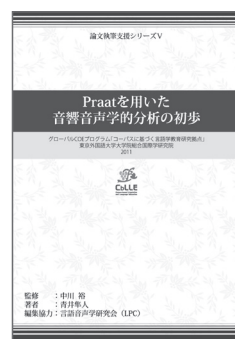
Praat を用いた音響音声学的分析の初歩

中川 裕（監修）

青井 隼人（著者）

言語音声学研究会（LPC）（編集協力）

2011年2月 発行



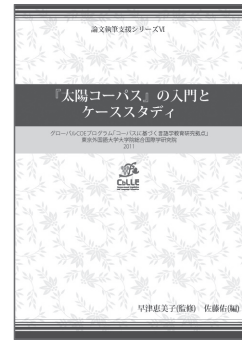
論文執筆支援シリーズ VI

『太陽コーパス』の入門とケーススタディ

早津 恵美子（監修）

佐藤 佑 （編）

2011年 3 月 発行



論文執筆支援シリーズ VII

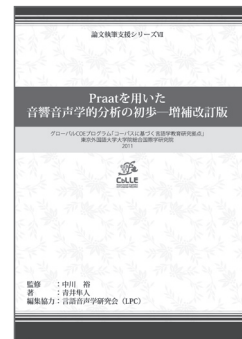
Praat を用いた音響音声学的分析の初歩 —増補改訂版

中川 裕 （監修）

青井 隼人（著）

言語音声学研究会（LPC）（編集協力）

2011年 9 月 発行



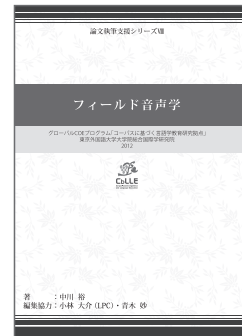
論文執筆支援シリーズ VIII

フィールド音声学

中川 裕 （著）

小林 大介（LPC）, 青木 妙（編集協力）

2012年 3 月 発行



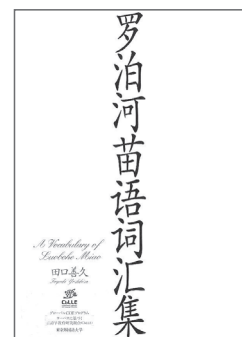
研究資料集

コーパスに基づく言語学教育研究資料 1

罗泊河苗语词汇集 A Vocabulary of Luobohe Miao

著者 田口 善久

2008年 3 月 発行

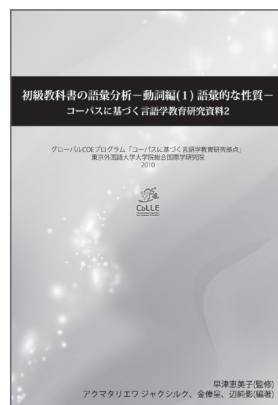


初級教科書の語彙分析 — 動詞編(1) 語彙的な性質 —

早津 恵美子 (監修)

アクマタリエワ ジャクシルク, 金 俸呈, 辺 純影 (編著)

2010年 2 月 発行

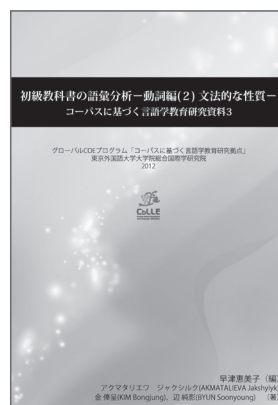


初級教科書の語彙分析 — 動詞編(2) 文法的な性質 —

早津 恵美子 (編)

アクマタリエワ ジャクシルク (AKMATALIEVA Jakshylyk),
金 俸呈(KIM Bongjung), 辺 純影(BYUN Soonyoung) (著)

2012年 1 月 発行



大学生のための語彙論入門

早津 恵美子, 佐藤 佑, 茶谷 恭代, 中山 健一,
福原 聡美 (著)

2012年 1 月 発行



コーパスに基づく日本語受動文の実態

早津 恵美子（監修）

志波 彩子（著）

2012年3月 発行



コーパスに基づく日本語使役文・他動詞文の実態

早津 恵美子，高 京美（著）

2012年3月 発行





コーパスに基づく言語学教育研究資料 6 2012 年 3 月 26 日発行
コーパスに基づく日本語使役文・他動詞文の実態

発 行：東京外国語大学 大学院総合国際学研究院
グローバルCOEプログラム
「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」
〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1

著 者：早津恵美子・高京美

印 刷：日本ルート印刷出版株式会社
